

けひく月見はうすひく鼠引ちりくちんばも引かない
 「隣さしきは大きくぜつ」▲そりやマア何の事じやいな何腹
 立て今頃にはどいた帯をしめ直し▶「かへる心かにくら
 しいコレ一見の其夜からなじみの客がいやになり●「き
 つしりさんのけないかいのおきせんじやのとなぶられて
 いふてもおくれなきよあらし▲「つらいかほしてうれし
 さはよそに知られぬ床の内●「エ、其手はくはぬとつ
 きのけて行かんとするを引とむる争ひ聞付け花車仲居し
 かたばなしの時しもあれ俄に聞ゆる鬨の聲■「アノ遠寄
 せは兩人「サア夫は■「上「色とたつ名にナ誠があらば眞實
 それを楽しみにつらいつとめも何くがいは知らず思は
 でねんあけのはるすへは女夫の縁結ほんにへ■「がてん
 の行かない二人の女うぬらは只の仲居ぢやア有るまいが
 な■「イヤわれくが身の上より■「そなたの本名すみや
 かに兩人「名を名乗りや■「名乗れと有るに何に恐れてつゝ
 みかくさんや我こそ惟任光秀が股肱耳目と呼ばれたる武
 智左馬之助光俊なるは兩人「さてこそな■「サア我本名を名
 乗りし上はうぬらが俗姓此場に於て此光俊に明すまいか

▲鼓歌「夫れ執着のふかき事人間よりも鳥類の「かなしきつ
 もる其うらみ報はん爲に來りたり■「なんと▲「雌雄にあ
 らねど姉妹おろのかゞみと互の姿見せつ見やりつなきあ
 かし尾上へだつぞこがれてよりに父鳥ゆかし母鳥と木々
 の木の間やしだり尾のながきよすがもねざはらたつね
 慕へど其甲斐もあらなさけなやといかり毛をふり亂して
 ぞ立惑ふ■「ム、扱こそ二人は失望のたよりにせんと血
 汐をとり焼刃にわたせし山鳥の子鳥共われに恨みをなさ
 んとやシヤ鳥類の分際で小癩な事をきりくそを立去
 るまいか兩人「いやうらまいで置べきか■「何をこしやくな
 ■「はつたとにらむ勢に恐れてとびさり又むらく光俊
 ひらりと切りかくれば翼を立て虚空をかけはらへば飛か
 ふはかせにつれ雪風どうくさらくく追へどはらへ
 ど去りやらぬ念慮の程ぞおそろしき■「めぐみにさかふ
 千代八千代ばんくぜいとぞ祝しける。

四三 玉匣二葉栴

常磐津文字大夫直傳 作者 二代櫻田治助

●「こゝに下總の國岡田郡 ■「はにふに事跡有難きちしき
 の功力きくならく今も御寺の法會ぞとかへりもふしの雁

つばめそらもやよひの花道を■「十郎出■「人の山川●「白酒白
 酒ちよつとこゝらで取あへず●「エヘンく■「そもそも
 ふじのしろ酒はとつらねもふるし歌でなし●「ハテどふ
 したへ■「ヤレよい／＼よいと評判うけ賣のふりかたけ
 てぞ絹川のほとりに近く休らひぬ■「なるほど佛法の世
 の中とは云ながら此法藏寺で祐念様のお十ねんが出るに
 つけおびたゞしい参りの衆へかさねが追善供養にもと思
 ひ付たる白酒せつたい又高尾殿のほだいのため頼兼公よ
 り上人へ布施物の此お羽織あへなき最期に高尾殿むざん
 のやいばに女房かさね出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛南
 無阿彌陀佛回向の聲もおのづからさつと吹しく川風の身
 にしみわたり與右衛門はたゞほうぜんたるばかりなり■
 「かけらふのそれか有ぬか立迷ふ姿もかりのつまからけ
 衆三郎出■「三下り「まめを刈りやらば月夜にかりやれ月夜はづ
 かしこちややみがよいコノしよんがいな「今ははるとて
 かりしばをたばねてせなにひつちよなき在所に仇なおし
 やらく娘色にはまだなふり袖にもみぢながしのそめもや
 うイヨ大和屋とほめられて顔もあかねの二布さへびらし

やら物に似もつかぬおも荷ぞしんき氣のどくの山もどり
 とぞ見へにける與右衛門ふつと心付あたり見まわし■
 「ム、ついぞこゝらで見かけないおむすだがおぬしはど
 この村の者だ ■「アイわたしやツイあちらむらものものじ
 やわいな■「何あちら村の者だハア、そんならちいさい
 時からして江戸へでも出てるたのか ■「三郎「アイそふじや
 わいな■「そふだらふおれも此ごろ成田様のかいてう参
 りに江戸へいつたが田舎とちがつてにぎやかな所 ■「三郎
 「サアわたしもざいしよへもどりがけアノ深川のかいて
 うへも■「なんとそんなら社内のやうすそのあらましを
 今こゝで ■「三郎「二人いつしよに兩人「はなそふか■「ながき
 世にさかへましますとみがおかまづ御山から見わたせば
 けしきのつけにそりはしやならぶちやみせの花くらべは
 なけよまれて見せ物も丹波の國ではどうしやでもモウ水
 がらくりさいく物まだもすたらぬのぞき迎 ▲「コレく
 申な吉三さんわたしやほんごへ行わないひかわしたる
 中々をこりやかならずわすれて下んすな ■「さんなすむ
 ゆにろまちゑさいけいしやがうかすつればきに「月の八

日はおやくしさまよトコセイくやくし参りの戻りの道
 でトコセイくちらと見そめたふりそで様よ「さわぐと
 なりはから紙の五分でもすかぬきやく人とやつたやうで
 はなりふりもそれしや程なをやきたまごひざらをちよつ
 と●「オ、アツ、エ、よしやアがれなんのつきおれ
 が事よりまあうぬは■「きのふも送りをかこつけにどこ
 へかきれてとんびだこおつなところへひつかりお、か
 たかわい、しん色とさぞ楽しんで板がしら●「コレなん
 とちがひは仲町か▶「オヤ新色とはおかたじけマアお禮
 からさきおと、しの山開き●「あじな一座のつきあいに
 思はれそめておもひそめ花ぐもりからほんとうの雨にう
 れしきぶんながししをつくだのもんくにも■「ついで
 くりやるな八まんがねよほんにどんすの夜着の内からん
 だ縁じやないかいなうまいはなしのおもてには團十郎お
 こし岩井すしさて其次のかるわざにきよくもちきよくづ
 きあわもちや▲「コリヤくコリヤくしてこいなすと
 とんまかせてきたくきた何餅にことく金もちにこと
 く■「おやの代からからうすはコリヤつきませぬ■「あ

れはさのよいこれはさのよいやつとことつちやうんとこ
 な▲生玉屋でござい名代々々■ハ、ドレ一ぶくと
 すり火打ち娘は有り合ふいぜんの羽織■「ヤアコリヤコ
 レ頼兼様のエ、おなつかしやと身にそへて抱きしめたる
 其ふぜい■「ム、よりかね公をおなつかしいとはシテマ
 アおぬしは「高尾じやわいなふ■「ヤなんと▲つとめの
 うそを打こして二世とかはせしかねごとと女子心は淺草
 のくわんおんさんへちやだちしていつさいけんの苦をの
 がれ松葉も入すけふし共▶「文にもかゝるかぶろをもぢ
 れつたがらぬ身とならば有がたからふぢやないかいなだ
 てなねびきの舟の内▶「水にもみぢのからくれないちし
 ほそめなすかなしさと又戀しさに玉のをのきれてもきれ
 ぬしうぢやくにひかれこれへとふししづむ■「扱は高尾
 殿のこんばくここへ此おはおりにしうじやく引れ是なる
 娘にハテふしぎなコレくおむす氣を付よといだきおこ
 して娘の顔見るよりびつくり■「ヤア、おぬしは累■三郎
 「與右衛門殿▲もみぢに置ばしら露もくれなるそむる鎌
 の刃にはかなくきへて此世から■「しゆらのちまたにお

ちつばき見上れば劔の山ぶきわれと身をきり島つづちな
 さけなや■「或はむけんのおびせうねつほのふの火ざく
 らゑんくんと飛花落葉のかしやくのせめかたるもきくも
 おそろしき■「すりや累には今もつて■三郎「イ、エ祐念様
 のおかけにてかしくの責はのがれしがおまへの持てる
 やしやんす其名號をもらひ請ぶつくわにいたらんそのた
 めに■「スリヤ夫ゆへこれまで来りしよな何がさて名號
 は望みにまかせととり出せば累はとつておしいたゞき■
 三郎「此の名號のくりきにてゑんにつれたる高尾さん俱に
 蓮華へ法の道もはやおさらば■「ヤレ待て暫しといひつ
 つも■「立ちよるかたに風あれてみだれ亂るゝ玉柳むす
 べど追へど此世あの世とへだてのくものたちおほひ姿は
 きへてうせにけり跡にうつとと與右衛門がたゝすむうし
 ろへ馬方共おつとりこめて口々に四人ハテよい所で出つ
 くわした鬼貫様（おにつら）にたのまれてわが持つてゐる雨龍（あまりゅう）の鏡も
 らひにきたのだおいらにくりやれ■「イヤ此の與右衛門
 はそんな物神々かけて覺はない四人「そふしてちかいの神
 神とは■「サア其神々はオ、それよ▲うやまつて申奉る

■「上はほん天有頂天いせは天照太神も浮れて北野の天
 まん宮なら夜ぐのむしんものみ込む大はらそこで白髭し
 らがのおおやも金山彦ではちんくかもにてひらにひら
 のととめてくぜつをいわし水からそれで内には伊豆箱根
 まつしや引つれあつたでかよふ「神おろし「めざましや
 四人「イヤ間に合せの神おろし其手は喰ないマアふところ
 ドレ改めて立ちかゝるを見せじとあらそふ其の折から
 ふしぎやしうたなびきわたりそらにはなふりじやうぶ
 つのすがたをこゝにけんぜんたり■三郎「のふうれしや名
 號のくりきにひかれ高尾かさねももろともに■「すりや
 彌陀のじやうどへふたりとも「今ぞ成佛とくだつせり「ア
 ラ有がたやナアけにや一念あみだ佛せうめつ無量ざいが
 うのちかいの海や絹川に残るけだつの物がたり。

四四 花三樹楓盛（はなさんじゆふう） 作者 瀬川如阜

■「咲きまさる花のちぐさにおきわけていろくそむる
 野邊のつゆ秋こそ物のあはれそふ安部の童子が母上のも
 とより此身は畜生の苦みふかき身の上を門之助出「かたり
 あかしてつまにさへ添ふに添はれず住み馴れしわがふる

さとへかへろやれわが住み馴れし一村のかりのやどりは
あきぎりに立まぎれたる色々々も「此身しるかとはづ
かしく足つまだて、ちよ／＼／＼とつまだて、しよて
い亂る、萩すゝきはつと思ひてとりなりをつくりつくろ
ふ笠の内もしやそれぞと水かゞみかたむく日影まばゆく
て」「しのぶ身のさわりはこの人ざとかしこのゆきき
それにいやなは犬の聲ぞつとしたぞつとそけたつ露しぐ
れこゝはいづくとしらつゆもちぐさにすだく蟲の聲そよ
そよそよぐ」野分につれてわれは古栖へ歸る身を嫁入
嫁入と里の子のあのいたいけを見るにつけ ▲「あとにま
します父母にあづけ置いたる幼子の乳房たづねてさぞや
なげかんふびんやと涙に道も見えわかぬ ■「あはやおく
手にかんらからとひかぬ鳴子の音すればもし狩人のある
やらんと草がくれしてぞ失せにける。

四五 思ひ指扇盃 おも ざしめふきかづき 作者 増山 金八

■「林間に紅葉をたいて酒あたゝむる色上戸ぬれたどう
しの袖がさや恵みの露を酒としてめぐる扇の盃は御ひる
き仰ぐ花の顔見世 紫若、かほよ 田 關之助 勘彌 久秋公は父上の武運を祈

いこ末社が百八十 ●「みせは外宮で内宮はお部屋にたと
へて女神なり ▲「客をふるのは雨の宮てらすは風の身上
りしすぎ十日勘定にそろばんの玉帳さへもくらやみの ■
「晦はもうそを月よみの尊小言の棚押しはたですゝめて
其氣のこんびら大権現 ■「内證おだやか海上もおだやか
なれとぞいのりける ▲「思ひ染木の朽もせで取あけられ
し嬉しさに又引かへて戀しさの今わかれてはいつか又た
よりを松浦さよ姫の石より堅い約束をかならず忘れあだ
人に心をよせて給はるなと ■「すいな様でもどこやらに
ぐちぞ女子のまことにて離れ難なく見えにける ■「ちと
あちらへとすゝめられ下地は好きなり御意の袖引ば引る
る妻乞や鹿も寄來る下紅葉しぐれのちんにてぬれ給ふ ■
「さすがぐるわのませがきに太夫の根分禿菊のちの花こ
そかんばしき宮居をさして急ぎ行く ■「ふりやれおふり
やれ大鳥毛の伊達槍行列そろへてふれ／＼／＼槍はやれ
扱見事な大ふりそでの花槍ばんにござらばつま戸に立て
くる／＼／＼／＼車槍さす手ひく手につん／＼／＼つま鳥友
どりやほな雪めがふるもいとほ道ひぢはなみ大抵の事

る神詣けふ九重も今やうに高良の神の宮人に烏帽子をし
ばかりに着て男なりけり女舞禿たよりも御隨身名を改
てめされたりめしにおうじて罷出たこひの奴と若い者二
人三人の御重負をねがふなじみのかほ世花若紫の太夫ま
でゆかりの色ぞたのもしき ■「ふりきるたもとに取すが
り ▶「それ覺てか初の夜にかはるまいとの睦言を知て居
るのは枕とわたしそれに今更どうよくなたしなましやん
せお殿様 ●「なんじやいなこれがいつもの顔見世で十二
一重の上薦や廣振袖に襦のお姫様なら有ふれたくどき文
句もあろけれど深いは知れた中々で ▲「ぐちな女子とさ
けしまれあいそづかしのたねまいて結ばぬ實ともなるな
らばくやしかりではないかいな ■「異國退治の勅を受け
父大領の後陣に備へ大明國より加勢の兵とうま竹章と寄
せ來るとも陸にあつては八陣遁甲又ある時は渺々たる青
海原に船軍我神國の神風にカノ赤壁の塵 ■「イヤ／＼イ
ヤあぶない軍は御めんかの孔明のうぬほれが神を祈りし
ためしにならひ八百や萬の神おろし ●「さんけ／＼六根
清淨伊勢は神明しんじつの ■「とこは岩戸の内ごもりた

かいな「降るは時雨か木のはの風にちり／＼／＼ばつと逃て
行く ■「三上り「こんどしだしじやなつけんけれど色と名酒
のにない賣めしませ／＼買なら今じや御ひるき町へふれ
賣の商ひ物もちよつぴりと口づ／＼はなる目元しどろもど
ろの千鳥足うきにうかれて來りける ■「あじな所で引合
せ御大將も打解て話すは酒の徳ぞかし ●「まづ ■「正月は
名にしあふとそのふくろの帝より下民草に至る迄いはふ
てあしき病をさる彌生は雛の桃の酒「みのくさもち白
酒は「ヤレヨイ／＼ ●「ふじの白雪朝日で解る ▶「とけた
がどふしたへ ●「白ひくたびに思ひ出す ■「オ、五月はわ
れらも知てるる下戸も一口菖蒲酒過せばくだを巻筆にあ
ふせもさゝの一夜酒のろけ文句の出たらめに 三下り「草の
枕も君ゆるゑならばエ ▲「北風吹くともなんとしよかへ雨
にも露にもまきやせまい「石のお地藏と思てもねよがへ
紫石しつけへからだはかなごほり ▲「つめてへさむいは
紫若何の事だへ ▲「どふぞ女房になりたいと願ひの絲のも
つれ縁 ■「綾織るはたのおさよりも日ははや立て菊の酒
其戀草の取もちはだてな奴のあけ屋入 ■「やつこが槍ふ

るお手をふるふつてふり込む大盡のすかぬ客ならふれさ
 ふれさ花の宿入揚屋入泊りじやないか泊らんせ ▲「是な
 是な ■「おくとびれでも有るならお足さすつて其上おね
 まのお伽も ▲「がつてんじやもてこいするひくべい ■「岡
 崎女郎衆女郎衆にとんとはまつた親のいけんくでもぬ
 るぬるぬつとも夜のまに通ふてくぜつしまふて明がらす
 「そこをたいこがひつとつて「ぬれにぬる夜は天から黒
 雲雨がふるともかつばばんかつはおいてうかふたらうつ
 ちぬべいといふたら大事かやつかんく物すきまじきへ
 ▲「ホ、酒になりましたとさめめけば ■「若い女子
 と大将を残して置ばさし詰にこゝを切との梅ならばすい
 を通して入にける ●「香の煙に亡魂のいとこがれて夜
 の霜 ▶「のふうらめしや我こそは邪見の刃に世を去りし
 小通姫が靈魂なり ■「すかさず切込刀の稻妻それかあら
 ぬかかけらうの手にもとられぬ亡靈の業通自在に信胤が
 ひめ置く勘合の印璽はおのれと飛去て再び元へかへり咲
 きひらくや花のゑみのまゆ寒紅梅やかたばみの櫓の榮え
 ぞ久しけれ。

四六

蝶と衛の名に
しおふ虎少將
が今やう姿

寄 毘 娼 釣 髭 (釣狐)

常磐津小文字太夫直傳
作者 二代櫻田 治助

■「既に今様。始りと告るや春の興そへて合そのして入方は
 名にし負ふ虎少將がふり入事に引色じやなければ小林が
 イロ手管の良に釣狐 菊之丞 三津五郎 兼太夫「われは化た入とコハリ
 思へども ▲「中地」それしやとどこが三重の帯ギン結ぶゆかり
 の蝶千鳥 合姿も花の塗笠に杖突の道二人づれあさけの風
 のそよ吹ば犬の聲ぞつとしたそつとそけ立つ霜柱 合齊ま
 じりの若芝にかけるふまだき水鏡照日の雨にぬれてぬる
 嫁入ざかりのかはゆらし 合爰に手業も狩人の畦や合田の
 畔 合ひよつくりくくくとそこか 合こゝらかどこらがよ
 かる 合取なりかろき鳴子良鼠にあらぬ痴話文をかけて忍
 んで 合道ばたに 合道酒太夫「アレ又たれかいたづらな手管
 の良にかけうでのとは 合思へども筆の綾 ▶「もしやと心
 ひかされて捨も行かれず足爪立てちよくくくと夜の
 殿 カマどつこい此文ちよつかいに掛て取とは大木の合切
 口ふといの根ときたせんさく合しかしかのからまるらせ

候と合おもやこそやれほしかろけれどそこをじらして釣
 狐 ■「つられよる身のしどもなきはこんくわいの風情か
 や三津ヤンヤくけふ大姫君此館へお入に付召寄せられ
 た虎少將マアこれで釣狐は済だといふ物はから跡が望月
 だ菊ム、そんならまだ何ぞせにやならぬのかいな三津オ
 オヨいやだといふとかんじんの祐經にやアあはれないぞ
 よ ■「そふしてその 兩人望月とはへ三津サアそれにも子
 方が一人なけりやアならぬがハテどうした物であんべい
 な ■「思案なかばへ揚幕を 玉三郎出「おいらんの合跡大磯を
 合うかノと禿千鳥は稚な氣になんの遠慮も無い玄關お
 くめんなしにつかノと座敷舞臺の合橋が、りそれと見
 付て走り寄り玉申しおいらんこゝにかいなア菊ヤアそ
 なたは千鳥どうしてマア玉「サアわたしやお二人さんの
 合ござんしたお屋敷といふ物はどんな所じやとそれで跡
 から来たのじやはいな 菊「モシ朝さんコリアどうしたら
 よからふといふに小林三津幸ひくこの千鳥を花若役の
 子方にして鞆鼓を打せおぬしたちが獅子舞だが合點か 菊
 「その獅子舞とはいつもアノ 磬 格子でまはす太神樂の事

かいな 三津マアあんなものよ兩人「そうしてあの太神樂は
 へ三津サアノ太神樂はオ、それよ ■「野暮な神代の其昔高ま
 が原や吉原で合天照無性大盡の合屏風の岩戸常闇に合細女
 といひしとんてきの 合女藝者が立上り神にあらぬ酒きけ
 ん太鼓が神樂はやし立て合カエ「やんもしろや爰も茶釜が
 原なれや合はらといつても腹が立つ 合オヤノまげがだ
 いなしになりやアしないか見ておくれアレサそんなにお
 いじりでないねぶきになるよアノねわつちがおつかあさ
 んがね 合お龜やくお、かめ女郎やおかめ女郎 合エ、い
 やだよアレサおよしなおはなしそんな事をおしでない
 よ合きのふ北風けふ南風あすは浮名の異風オヤすかねへ
 よ ■「あごでしらせて目でうけてかんならずやいのと 合
 約束したも今において今もつて首尾もまあひもない事か
 エエ、エま、ならぬま、ならぬこそ浮世よの中じやしや
 ば世界じや 合次はお何と合ゆふだすき傳へて今に太神樂
 ミキ「その神の代の神樂歌ながれるわの晝見世にまだ身
 じまひもはてやらぬおはぐる獅子の 合付きかねて 合禿に
 じれていくたびか合むかふの人へやり手衆や ■「かよいお

針は子持獅子金じしつかふお客ほどまはずつとめのいき
 とはり ▶「いやな其夜はまくら元文ながく」と角兵衛獅
 子すいたお方にやなんのそのうき名とり草まゝにして
 「となりさしきのはやり唄三下」袖頭中うは氣も今はほん
 になり土手をしつほりゆきの驚たゞ一人通ひ來るどこや
 らの女郎衆は「ミキ」かはい男をまつかないすかぬこちらが
 しこなしはもはや御しんにすめぬやらさらばわれらは歸
 りませうエ、ならんぞへさりとは ■「うちかけのした
 にくるふや獅子まひの三下」オット其獅子舞はあとでの事
 マアはなわかに鞆鼓をうたすが望月の本行だ 玉「そんな
 らわたしが鞆鼓を打つのかへコリヤ面白いはいなア ■
 「よしの龍田の花紅葉 合更級越路の月雪も里の櫻に及ば
 りよものかよそはちり行く 合二上」一つとさアのヤアの
 やひと夜あけほの春がすみ二つ二日はいちやうに三つ見
 事な禮小袖四つ夜見世もにぎやかに 合五ついつものかひ
 てのしゆともせうかないいろじやもの 合六つとさアのや
 あはやむすぶるにしのうれしうて七つ名に立つ振の袖八
 つ約束九つこゝへ合とまらんせ いらあひに合ゑもんざく

らのつま取そろへあだにひざくら合夜ざくらおくる 合あ
 さ黄ざくらのきぬぐに 合人丸ざくら 合やくそくの手ま
 りざくらをたのしみに 合一イ二ウ三イ四テいつもうれし
 き合いろの仲の町はなくし ■「すでに時節もときしるや
 合花を見よ連二つの獅子のさそひつれたる牡丹花たぐわに合蝶
 も小蝶もひらくくゝわれもくるふや一連「獅子とらで
 んの舞樂のみぎん牡丹の花の盛り賑ふ俳優わきまを合爰に移し
 てかなでける寫して爰に奏でける。

四七 汐見瀧松常磬津 (忠臣藏八段目道行)

■「見上ぐれば。江戸ア富士の高根も雪消えてこゝろ。う
 きたつ若葉時。女儀のお供と氣もたゆみ。見渡す木々も
 花やかな心關助いそけどもしどろもどろは酒の科 男女露出
 ●「エイおくれればせなる詞やつことんび。とろゝのぬ
 らくらと。あとをしとふてとんでくる絲目をつけし女馬
 士 伊三郎出「辰馬じやがのらんせんかいなア、のらん
 せんかいな。長堀 ほんにおまへのびつこ引を見ればわし
 らがせうばいの。詞のらにやなるまい。のせにやならぬ
 と。いふたらあじに。思はんせうが。わたしや馬かたほ

うばいの。殿たちならば宿引のあしもと見るが。つけ目
 とやらこはい仕事にかゝるふよりぞうやく馬の。わたし
 じや故。荷物があつても 詞負ませう馬やろかいと。附來
 り 男女「ヤレくゝくたびれた伊三それじやによつてのらん
 せんかいな 男女「ナニ女の馬にのれ女の馬ならさぞうま
 かるふ ■「酒がいはするわざくれもはやお腹も晝下り
 いつばいくはせておくれんかと抱付かゝれば。つきのけ
 て馬士の事なりや。ひんくゝとはねたお方と笑出し ●「わ
 しは東のおてんばものと。水道の水に染上し江戸紫のゆ
 かりある ▶「おぎの帽子はむかしから舞臺帽子の縁につ
 れほんに未熟な女馬士 ▲おれも男のはしくれと。男女と
 いふ名は御存じの江戸市川のまじりなし ■地「世にあふ
 坂のせき介が。ゆづりうけたるありがたき御ひるき。ね
 がひ。あけまきの助六どうして。なりふりも ●詞「せめて
 蛇の目の傘はるなか女郎にやつよすぎるたゞ。ばんがさ
 のかけながしくり毛の馬の横づけを見そめりくゝしそれ
 を誠にするやうなのろい男じやないはいやい ▲「コレ。
 またそのやうにうたがふてむりを上手にいひまはしくぜ

つするのぐくせかいな。ほんに眞實さまゆるならばどこ
 の。いづくのうきつとめ ■「いとやせんどう衆にあけられ
 てところならひのおどり唄 二上「くるはくるはと濱へ出
 て見れば。ノウコレノウ。濱の松風音やまさるへ。いか
 さかさつと。のりだす船はいんなり丸船頭はきつねずつ
 とこせあせかいてしよんなぐれ。若い時や二度はない。
 その氣でなければなまものはくはねぬさつさとやらかせ
 ほんにうき世はいろじやものおもしろや ナホル「もはや
 れまへおとまりの御用がかけてはなるまいにあまいおか
 たとつきたをしあとをも見ずして走り行く。

四八 和事色世話 (新高尾) 増補

作者 三樹屋二三治

■「流れは常に洋々とつきぬ詠の隅田川。憂を悟りし左金
 吾が以前の姿引かへて。高尾が菩提の關伽の水。身も住
 わびし墨染の袖のかほりぞ奥ゆかし 合 團十郎出詞「あふ事な
 きを浮田の森に住む呼子鳥こそ我身なりけり思ひ出せば
 二世と誓ひし高尾がくけん助んための筐の小袖ア、不便
 な最後であつたなア 合 磬音出詞「すいな浮世のいとなみぞ、

仇にくらせし。戀風の眞夫に扇と。なぞかけて浮氣な風に招かれて。廻りくるく。舞扇男扇も。迷ふなる女扇と御影堂合幸四郎出「これも跡から月にゑをさすがにかろき。團扇賣」心もうてう。天地金かの。文さへも今ははや反古團扇とも深草の靡きやすさよ風とかぜなんと岩井の久しぶりわり花菱とはどごんす「モシお前もチト嗜みなさんせ跡になり先になりかんじんの團扇は賣らしやんせいでお前もこりやなまくらものと見ゆるはいなア幸「なまくらものとは情ないわしも精を出して賣り歩く所へ美しい姉さんお前はマアどこから出なさる扇賣だへ「とはれてなんと庵崎の邊に一人角田川賤といふ扇賣でござんす 幸「シタリしづ心なくとは有難いわしは箕輪の四季の庄兵衛といふ團扇賣うちはおめしなされませ「イエく扇をおめしなされませ 幸「イヤ團扇をめしませ「イエく扇をめしませ 幸「イヤ扇を「團扇を「幸「アコレくあんまりどぢぐちして賣物が間違つたハ、ハ「これはしたりしかし團扇も扇ものがれぬ中是从から二人一緒に商ひしよふじやないかへ 幸「それく是から

荷を一つにして坊主持にしよふ扇やく。團扇やく。こいつはよつほどまぬけだはへ「心も合し荷ひ賣打かたけでぞあゆみ來る商人庵の内を見て 幸「サアくかはりませく。庵の内に坊主があるからこなたの番じや「イエく行違ぬ内は坊主持じやござんせぬソリヤお前のが無理でござんす」と争ふ二人が其の中へ道哲それと見て取て「四十郎コレく最前から聞てるれば坊主々と愚僧に當つた二人の商人何を争ふのじや「ホ、ホ、サアあなたに扇を召させませうと存じまして「成程扇も團扇も時分のものなれば買ふてやらふ「こちへくといふ間も待す 幸「團扇を先へお召なされませ「イエ扇から先へ召て下さりませ「コレくそのやうに争ふよりまつ此世で扇が先へ始つたか團扇が先かなんでも先へ始つた方から買ふてやらふ 幸「コレお賤とやら何が先か知るまいがの「サア夫は 幸「知つてゐるならサア聞たいく「扇のはじめくはしくは女扇に白地なる中カン末廣の名も久かたの日本目出度。禮扇△戀の重荷は。吉原へ。ながれて。今は隅田川。やほな。此身はいつ迄も。水にまか

せた杜若。エ、エ、エ、、、仇の噂を三つ扇様もすいな染浴衣ぬれてぬる夜の陸言も ●詞「イヤくくくおしやますなそも團扇は天竺に白月といふ美人あり ■「唐土にては舜の利佛日の本にては信濃なる。小柴の翁がしはくちやに濼い顔して張たゆる濼團扇と申すなり「戀によそへて扇賣しばしと袖を道哲が側へよりそひ手をとればがてんの行ずと振放す「コリヤく女よるまいぞとはいへ見れば見る程ハテよ似たは「エソリヤ誰に似ましたへ ■二世と誓ひし高尾太夫に生寫しじや 幸「似たこそ幸ひアノ女中を相手にして高尾太夫のそのなれ染を ■「なる程懺悔に罪も消る道理篋に残る打かけを見るにつけても思ひの種 幸「シテそのなれ初は ●「受給ふしもはしだいの天王なり。イデ其頃は正月二日の事なりしが。廓の跡着のきそ初め。船乗初と纜をとき柳橋から押出して北へくと急がる。實にも賑ふ色の里 幸「その大寄はくるわの名取 ■むかしの名よせ其儘に 幸「數も千山引つれて 幸「誰を鶴町 ■まぶを雛町 ■江戸「松山に若紫を染山の。打かけ九重綾越が合 ナゲブシ袖にかほりを。瀧姫や。

渡りにてうど瀧橋わたしてんと玉菊。たをやぎ姿 ■その鶴の尾つられぬ内さらばお暇いたそうか 幸「まつた▲「わしが心を。歌川さんすかおわるかる此陸奥は戀ゆへに細くやつれし絲瀧や「深くぞ思ひ染川のおふたその夜は磯山。瀬山。たんと咄も在原なれどアレ。みさ山のあけ渡り ■廊下をつたふ瀧川の流れば深き山谷船 ■おせやれおのこ。二丁立三丁立。椎の木じやがつてんじや。拍子とりく下り船。見れば見渡す棹さしや届くなぜにとゝかぬ我思ひほんにサアさす手も汐にぬれ初て君の心を取楫や。氣のおも楫を詞わつさりとマアくくくこへと。無理やりばなしの取持がほ二枚屏風の風凌ぎいかなる夢をや結ぶらん ■「冥土の道を教鳥死出の田長と聞く時は實にあじきなき。短夜や別れの鶏は里ばかり啼てぞ人に告渡るさりし高尾が立姿 幸「消つ消えずみ水の月合 幸「モウシく左金吾さん ■ヤアそなたは 幸「高尾じやはいなア ■まだそなたは迷ふてゐるか 幸「迷ふてゐるとはアおまへはなア▲あはれ此身は。うき川竹の。しづみもやらす浮きもせすきのふけふ迄肌と肌鴛鴦の衾

の羽を竝べねぐらはなれぬ一つ夜着。かさねばうとし二人寝て。未來は蓮の臺ぞと筐に残るから衣。きつゝなれにしかひもなく此荒川の藻屑とは添ぬ心か。情なや氣強いお方と身をそむけ恨みかこつもしんいのほむらけに淺ましき次第なり「兼て忍びし嘉藤次はすき間をうかひ後より左金吾やらぬと氷の双ひらりと見せし電光石火折から吹來る秋の風冥土の使の責鼓悶え苦む有様は恐ろしなんどもおろかなり 紫「左金吾さんのお身の上にきよじ有る時は此高尾が附添ふて冥土へ連行く覺悟じや 幸「事おかしや罪人め山鳥の印を渡せばよし妨けなさば目に物見せるぞ 紫「こしやくな來れ 兩人「どつこい 〓煩惱業果呵責の杖。劍の山も今眼前。ありと見ゆれば水の月雲を色どる稻妻の手にもとられず。うてば飛のきはらへばひらき。くるりくくるりとまとひ付たる輪廻の紐はなれがたなき妄執の冥土の罪障西方寺しるしに一樹ぞ残りける。

四九 鴛鴦容姿正夢 (をし鳥)

常磐津小文字太夫直傳

にうきてぬるをしの霜のつるぎにあらねども邪見の矢さきにつらぬかれ終に此世をはかなくも 〓鼓舞「去りし契りの忘れず血汐に加被して祐安の 〓「五體をかりの諸羽がひ 〓芝蔭出「かはす言の葉睦じくありし添寝の妹春川浮世を渡る花筏 〓「はなれぬゝになるとてもふかき契りのおもひ羽は 〓「いかでか夫をかさゝぎの橋のおく霜更る夜毎のひとり寝も 〓カ「途たや見たや戀しやと思ひ亂るる身すがらを何疑ふてつれなやと 〓「恨みかへすも恨るも啼音はなくて哀れなり此身元より植木にあらねば臺にかゝやく鏡もなし煩惱菩提は法のみちづれ 〓「ア、ラ樂しの契りながらも ッタヒ是までなりや花は根に 〓鳥は古巢へかへれどもかへらぬ此身此世をさりし 〓「曠志のほむらこがれ行胸は我とても 〓「其仇人をうらみの劍羽比翼のおもひ羽中を隔つる罪障の雲霧起つて庭の面冥々朦朧々たる 幸四郎出「とくよりうしろに景久が夫れと見るよりつつ立ち上りア、ラあやしき女がふるまひ又祐安があの姿扱は血しほをもつて河津が五體へをしどりの精魂のりうつり女鳥と契りかはすよなア血氣の景久こたへか

〓鏡影水波月の雲我に業界の念慮あり 〓「實にや拙き浮世ぞと思ひしれども捨やらぬ妄執の縁こそ恥しけれ 菊之丞田「二上「獨り伏す蘆の假寝のものうさを誰かは問はん哀なる鴛鴦の禽のいたづらにあれにし床やちる涙露とこたへて諸共に消ぬ此身ぞ恨なる 〓「黄昏なを時をしる鴛鴦獨りいねす情なや夫鳥をじやけんの矢先に射とめられあまつさへその血汐生をへだつる人界の祐安殿を迷はさんと彼の仇人の股野がたくみつけ知らせたく二つには我夫どりのちしほの酒五體にうけし祐やす様こそしたはしく思ひを述べんと夫鳥をこがれて爰にまよふはいなア 〓「水鳥のはかなき跡に年を経て通ふばかりの江にこそ有けれ 〓「其言の葉も身に白雪の積りくし愛執輪廻情かはすも戀の柵色の淵瀬と水のかしはの浮沈 〓「身は 萍の根をたへて カ「さそひしものを阿曾沼の眞菰かくれの獨寢ぞ憂き身ながらに夫鳥のこれ迄來りさむらふぞや 〓「ありし契りの變らずば今血汐のかびなせし祐安殿の五體をかりまみへてたべよ我夫鳥逢ひたい見たいなつかしいおなつかしうござんすはいのふ 〓「眞菰刈るほり江

ねひらりとぬいて切かくれば「ぬけつくより祐安が五體苦しめのふらんしかつばとばかり伏しまらぶ「景久聲をあらゝけ此股野に恨みをなさんとほこしやくな化性め立さるまいか「目も紅ひに染わたる紅葉の橋かかさゝぎか聲もあけ得ぬ鴛鴦の翅羽たゝきとびあがり蘆邊をさして水煙形は見えず中絶し夢の浮橋夢ぞともしらぬ遠寺の鐘の音にさめて跡なくなりけり。

五〇 登庸の御恵みに御負に縋りて 拙筆力七以呂波

常磐津小文字太夫直傳 作者 瀬川 如 卓

〓ごみ太夫 (七變化の中) 〓「久かたの光り長閑き花の山塵は厭へどしづ心風きてそよく春風に吹あつめたるごみ太夫 〓芝蔭出「てれゝんてんてん天とうまかせ昔は花もやるせなき 〓「浮世にあきも飽れはせねど見捨られたる親の罰杓子を撥に味噌漉を胴より膽の太棹に 〓「かけし三筋の絲より細き露の命も何のその 〓「面目砂にまぶな錢貫ひ溜たる一盃機嫌浮立足の節なし文句語りうなりて來りける 〓「お門へ始めてこや太夫 〓「通れくゝと番頭さんお久しぶりだ四海浪な

もに道はか行す思はずも日を暮したりどうぞ情に此關を
 「ヤアそうぬかす程猶怪しいサア女めと立上れば「ヤレ
 待て兩人聞けば子供を連れた女とな源氏の餘類に似合の
 注文身が直々に糺してくれう ■「何か思案の宗清が氷る
 足駄に善悪の邪正の道を踏分て關のとほその庭傳ひ「賤
 しからざる上藤の供をも連す只一人見れば幼い子供をつ
 れハテあでやかな ■「きつと詠て居たりしが「コリヤ〜
 女よく聞けよ今四海漸く穩かなるも先達て亡びたる左馬
 の頭義朝大勢の子供あつて所々方々に漂泊なし殊に五條
 の雜仕常磬が腹には三人の男子あるよし生け置ては後日
 のため見付次第に首打てと新にたてし此關所此宗清が眼
 力に一目見たれば遁れはない常磬なりと白狀いたせ「様
 子問れて塞がる胸「エ、そんならアノ三人の子供が有る
 故サア其疑ひも子供故子のある女ごは何國にも「ア、言
 れなその言拔子供は事は扱置ていはずと知れた芙蓉のま
 なじり國色の聞へある常磬御前外にあらふ管がない身が
 引立て福原殿へ「アノすりやわたしをどふ有てもほんに
 思へば此身のぬれ衣せひもなき世の有様ぢやなア「コリ

ヤ者共大事の落人關所の庭へ 兩人「サア女め立たう ■「是
 非なく〜もあらしこに引つ立られて常磬御前 ▲「すき
 間もあらば遠近のたつきもしらぬ關の庭巢を離れたる鶯
 の ■「ふゞきに迷ふ風情なり「もふかふ成ては籠中の鳥
 にぐるると逃しはせぬ然し一人ならず三四人思へばふび
 んな事でもありオ、幸ひノ、 ■「うしろに立し高札の雪
 打拂ひ文字のあや「コレ是を見よ此高札に松を手折りて
 松を助く「操にかけし詞づめ返事をまつの高札に手折る
 共又助くる共「此宗清へ仰せなれど「生ては置ぬ落人の
 「素性を明して助かるかイヤサもし常磬なら手にかける
 又松ならば助くるとも思案極めて返答いたせ「サアそれ
 は「サア〜」なる程委こそ其常磬とても叶はぬ此
 身の行末サア潔ふ手にかけて「オ、よい覺悟觀念なせ
 「拔放したる氷の双峯の吹雪に照さそふ光は夜半の月代
 と見紛ふ中にこはいかに双物はそれで谷蔭の岩のはさま
 に雪散つたり「ヤアすりや自らを助んとて「松を助る制
 札の掟厳しき清盛殿松の操を破れといふ謎がとくれば其
 松の雪も解よと君の嚴命「スリア其松に松の操を「いろ

かへぬ松いろかへる松「シテ三人の此子供は「小枝も共
 に「雪を拂ふて「すぐ様是よりサ、參らう「イヤ御供と
 宗清に助けられたる稚子の其源は谷の音峯のこだまと音
 づれて南柯の夢とさめにける。

五二 道成寺戀曲者(忠文道成寺)

作者 松本幸治

常磐津 ■「月は程なく入相の雨と名に呼ぶ花ふゞき 常本「ぬ
 れなばぬれよ若芝の野にも山にも色盛り情ざかりに 常
 「むかふ梅芝飯田 常「造りしつみのいたづらも迷ふが中の色
 ごろも 常「きつゝなれそめ言出しかねてよする男浪の名
 にたつばかり 常「逢ふてはなしのはかどらぬおほこ娘の
 一筋に 常「鐘もくだけよ 常「しゆ木も折れよ 常「さり迎
 はア胸のほむらの身をこがす 常「手もちないのがかはゆ
 らし 常「二上り「戀をする身は濱邊の千鳥夜毎々々に袖し
 ほるしよんがへ 常「君に逢ふ夜は梢のからすかはい〜
 と引しめてしよんがへ 常「人目はづかし 常「なまめかし
 常「ちぐさ結びもおびならでかすみも花の振袖の眞卵の
 花かほる時鳥螢の火かけ夏たけてさら〜さつと初あら

し 常▲「時雨も雪とふりかはりひとりうき寝のきたへ
 の枕のうへになるかねの 常「いく夜の恨きへなんと櫻を
 三井の法の庭 常「供養の御寺につきにけり〜 常「うれし
 やさらば舞んとて烏帽子をしばしかりにきて既に拍子を
 すゝめけり 常▲「さくらを三井の花盛り御法の庭に一奏
 で石山寺と名付たり山寺の 長唄「かねに恨はかず〜ご
 ざる初夜の鐘をつく時は諸行無常とひゞくなり後夜の鐘
 をつく時は是生滅法とひゞくなりじんじやうのひゞきに
 は生滅々已入相は寂滅爲樂とひゞくなり聞ておどろく人
 もなし我は後生の雲はれて眞如の月を詠め明さん 唄「い
 はすかたらぬ我心 常「みだれし髪もよひのまゝ 常「かへる
 を送るさらばがき 常「昔々其むかしぢさまとばさまのほ
 んそまご唄、ひとり娘に二人 常「ほうろくわりのあぢし
 らす二人ばかまのほころびて尻ををちらとみつかかなわ 唄
 「ついににはな子にひざられて 常「とんとあたまをうき山伏
 常「一寸先はどんかつちり唄、やみのつぶてのさるざと〜
 常「氣儘居ぐひの居候煮やきぐりはやき清水くみ給仕致
 すも太郎冠者 常「夫婦けんくわの宗論に、ひよつとおふ

家と釣狐はやふこんくわいはや迎ひ ■「るけんも親の稻
光り眞がらがらびしやツ 雷の ▲驚くわばらくゆる
させ給へと手をついて 唄「身のうへばなしまつこふこ 眞
「よねん聞きるる計りなる ■常和らぎし都は歌のてには
さへすこしはむりも ●「一ツ盃きけんエヘシ／＼罷出た
る者はすんど行きとゞかぬ萬事ふらちなだら大盡にて
候サエイア、酔た／＼しんぞ命をあけまきの助六サへ、
いかいわけハ、だれも居ぬかこいよいよ 眞「これは且
那待ちかね山ぶしほら穴へかくれ家でもできましたか太
夫さんがさつきにから待て／＼お待兼ソレかね／＼へ、
へ ●「エ、やかましいはい太夫がなんのおれをまたふ
外にしつかりふかまのふちへはまつたであらふさらば歸
らふ／＼さらば／＼／＼ 眞「コレまたしやんせ 常▲
「イヤ歸る眞ソリヤまあなんのことぢや常●「これはなん
じやい 眞「いなアほんにおまへの悪性で女子さへ見りや
ふきりやうもかまわすいとわすめつたほれエ、エ、あん
まりすきさんはいつでもまん丸こい／＼ヤレコリヤさり
とは戀しいさんではあるぞいなア 常●「こりや太夫さん

御尤もふ／＼くぜつをとりほうきはいてお歸りなされま
せと座敷上手に引三味の 唄「戀は心の外とはいへどくど
くはせうたいなくどくはしやうたいなけれ共色と情を
君はなぜにかなへて下さんせぬぞいな一夜さ二夜コレナ
アどうぞなるまいかないなびかんせ 眞「おまへのごしんが
あるやらないやら品玉男のこの／＼よいこのゆすつてり
つばにめかしてお出でもちごくのさたもしやおかへりな
んせとすけないことばに 常▲「コヤ／＼／＼／＼ふんば
り女郎のくたばりめあなじよりにあなじよるなおら共を
なんと見た金ふんだんもつてるねの高いうぬめさをみ
やけに國サへかつて行こやさせものめよつくきけ竹のか
わサにぶつつ／＼みはだでぬくめてさめたならまたも國サ
でせいろうにかけて一口くつて見るコヤ／＼／＼／＼う
せさられ 眞「オ、つらやオ、なめや 常▲い、や千年なめ
萬年とふどうさつてうつせんかい 眞「こちやいやじやま
あべかこ 常▲エ、てれだ／＼ 眞「よいきみな花のお江戸
でおはやりなさる立つた姿が一寸八分のくわんおんさん
奈良に名高きすわつて五丈の大佛さん東海道に中仙道馬

にもかごにも入らずして廻りくらをなさるとはさつても
かはつたこんくらべわけもなや 眞「過してこなの櫻時三
年こがれて娘氣はつくらぬ顔の花見まくふつと見かはす
戀ごろも常▲とゞかぬながら幾度か筆にいはいせん玉づさ
もよそ目を忍ぶおほこ氣に 眞「ふつつりりんきせまいぞ
とたしなんでみてもなさけなや女子には何がなる常●エ
エなんじやいな 眞「二人そい寝のねやの戸の 常■心に残
るおもひ草身のかくれ家にとよりそへば 眞「コリヤきこ
えませぬ我君さまいらい月日をまたせておいて 眞「神々
さんのあだむすびいつほどけての恨わび 常■「わたしや
誠とせいもんかけてかたいちかひじやないかいな 眞「色
も替らぬひよくの松葉 眞「落ちてちるともはなりやせぬ
眞「じつそふじやいな眞「じつそふじやいな眞「浮名たつ眞
「もれてやものを岩つゝじけしきほうたるしうじやくの
常■「姿はづかしおそろしや 眞「けにや流轉のかりの世に
眞「鬼畜となりて忠文が常▲しゆらのくけんにまよふらん
眞「雲はれて三保の高根や三國一のふじの山雪かと思れ
ば花の吹雪か吉野山散り来る／＼嵐山朝日山々を見わた

せば歌の中山石山のすへの松山いつか大江山いくの、道
はとをけれど戀ぢにかよふ淺間山一夜のなさけ有馬山い
なせのことは我みかみ山いのり北山いなりやまるんを
結びしいもせやま二人が中のこがね山花咲きゑいこのこ
の／＼おばすて山峯の松風音羽山入相鐘をつくば山東叡
山の月のかほばせ三笠山 常■「すわ／＼うごくぞ鬼畜の
念力こりかたまつてつきがねこそはねんのふ鐘樓に引あ
けたり 眞「今のうらみは有しむくいしんるのめうくわは
身をこがす 常「おもひしらすや思ひしれてつぢやうふり
上げ其いきほひ 眞「花もちり／＼嵐につれ飛か／＼らんと
する所へ 常「さしもにたけた仲光がそれと見るよりはせ
來り 眞「勇士のるせいにあくりやうも 常「たちまちきへ
てゆたかなる 眞「さかへいてうの源氏の御代 眞「めでた
かりける次第なり。

五三

此あたり目だや
に見ゆるも片大和路
皆紅葉 轡關扉(宗盛)
作者 三軒屋 二三治

「顔見世や木々の梢を染なせばなにし小倉の楓さへ色で
葺なる大將はよい相肩に三大と三階松の戻駕 眞「助世、見

立さへけふおめ見へに有りふれた「おしかり受けて言譯もあらぬ姿宗盛公時にはうつるやつし事 二上」花が入よぶ時雨の花が山も色増浮氣な風に浮て浮る、人心「チリコ、、シヤ」合點じや「片山里の花見鳥 ナホル」氣も氣さんじな摺火打石にはあらで棒組もしやれて浮世を息杖とさすがはうぶの六波羅風どこやら御所の育ち逆位有て猛き武士ならん「はづかしと顔に照葉の色見草おもはゆけなるそのそぶり」戀には胸も宗盛公心の内のやるせなく難波の室の梅樺手活の花の詠にも一枝ほしき武士の弓取の身に有ながら引手あまたの振袖も「したふて來たを夫なりに行をしばしと物いはぬ「花のゑにしも有ものを姫はかこちて愛らしく戀の淵瀬と身もしづむ「エ、もどかしいコリヤどうじや色にや夜も日も差向ひ一つものさへなべ長やうなぎと出かけのらくらとうまい仕事のさい中をやほな口説の文句はやめてサアもしちやつとそれそこでと「つきやりばなしの取持顔「かゝる山路の向ふより 磐若世二上」ついかんばんお仕着もけふをはれ着の花楓枝に吸つゝく、し付辨當箱も二人まへ奴のこのく

とさへどふいふてよかるやら心見らるゝけさのゆき「つもる思ひのはづかしきゆる恨も打附に誠にあかしのあまをぶねぬれによりたき風情なり「夫と二人の仲立が手に手を取てやうく」と戀にしがらむ軒のつた「心は時雨の身にかゝる紅葉をのこして入にける「色もかはらぬ紫に任せり」初心らしくも暮の内樂屋へこそは入給ふ「品玉のくゝいがき明ればそりやこそく」かはつたり隣りのばさまがかみさまおふくろお孫さま是よりつぎの藝道はこれは太平むさう箱五色のきれはたちまちに瀧の白絲櫻の吹雪ちらく」と仇に吹ちるはなの風「観念ひろけと鋭き刃はひらくく」雷光稻妻水の月かけさへ名さへ星影が強氣の太刀先季兼がからめとらんづ勢ひはすさまじかりける次第なり「時めくや平家の代とて紅葉さへ小ぐらの奥にてりわたる梢も橋とにしきなる通天橋もこれならん「爰に平内則光が強勇力士の仁王立めざましくも又いさましや「實に顔見せの大名題源平歌舞伎の年代記今も譽を橘の舞臺に花をぞかざるらん。

此頃は氣もおもしろくなりひさご日も夕ばへの花道を浮きにかれて來りける「まづよし原の里通ひ雪のよすがら常の日も名も馬道の召たる殿御こちは戀故かちはだし土手の合傘一人はぬるゝ姿隠して大小をさすが昔の六法や 三下」こちは元來お草履取よ戀の取持御機嫌とりに端出なお供にさゝれた取なり輕き奴のこのく「アリヤンリヤどつこい君にや命もやりの手にすねてひざりて品やりて「わつちや手くだでむちやくちやにこんたんくぜつは無理呑らうかとんびの茶碗酒「後でまぎらす間夫の闇性わる男の浮氣者そこらが癩のたねとなる「つい手拭のほうかむりひやかす宵の前わたりせかれされてのろくなるこゝがしらしの暮ならば「今日はくるわも春めきてうかががらすのまいく」と 三下」夜櫻や花の木蔭に誰やら居るはいなとほけさんすな目ふき柳が風にもまれてふはりふはりとそふかいなそふじやいなく、二上」山で赤いのはみかんかゆすかたゞしや狸々がお稻荷さんの鳥居あじやばつたので、れつは粹とあまいを氣に持て出べそか出臍か違ひねへの真中だ譯もなや ナホル」よすがも泣てたも

五四

くり言なが願 糸 縁 芋 環 (お三輪)
 ら御最負を

常磐津小文字太夫直傳
 實 田 壽 助 補綴

「言初て心かはらば中々に契らぬ先ぞ戀すてふかはるまいぞの睦言に誰が水させし愛き思ひ 升露出」つゝめど薫り橘姫佛かくす薄衣は薄い縁かと氣にかゝる其戀人を道もせの心も心ならの里 助露出 升「求馬様か 助「コレ ▲「ヤア戀人か何故に爰迄跡を追鳥はもしや塙の契りをも叶へてやろとのお心かと胸にはいへど詞にはおもはゆけなる草の露暫しとこそは休らひぬ 助「こゝ迄は來れども館の手前何とやらそなたは是より早ふ館へ歸つて下され橘姫殿 升「ソリヤお胸慾でござりまするはいナ、姫は思ひにたへ兼ねて館を出し其日より君故ならば露と消え花とちりなん我命おしからぬとは思へども ▲「とけぬあなたの心はあんまり結ぶの神さんを祈り過した咎かと恨つ泣つもつれ寄る姿やさしき姫薦の放れがたなき風情なり
 ■「おりも向ふへ急ぎ足名十津川の黒木賣 多門出 黒木めせめせ黒木めせ御所や町々お得意様へ押賣ながら御最負

を真砂のかすの濱村屋いつく迄もかはら崎詞の花や花道のちぐさ尋ねてうかれ来る多「此マアくらい所に美しい男と女の二人連ハ、ア聞へたこりやお前方は色じやの色じやの 勅「どふして滅相な私は三輪の里の烏帽子折の様な者ではござりませぬ 升「そふしてそなたはどこへ行くのじやへ多「サア聞ておくれなされませ十津川の村さとから丹波市へ朝商ひに行く黒木賣でござんすがまだ夜の明るかあけぬ内此黒木を持っていて市へ賣るのでござんすはいナ 勅「そりやマア大ていの事ではあるまいが其せはしい中にも定て戀は仕やるであらふの多「サアそれはな ▶「そのあひ初は恥しの森川村にかけられたかへし踊の稽古迎夜さりく、の寄合にふつとせなあを相惚は ●「踊の品がよいとやらわたしもどふか乙聲の音頭のふしが氣に入てぞつとしんから戻りがけ ▲「身にしみくと村雨はほんに結ぶのかみ細工あじなるにと思はんせ ■「逢ひにゆこやれおきせんさまにヨウしのぶたよりはヤレうやつらや表くぐり戸でぐわらくくびつしやり南無三寶背戸はいばらの垣つゞき顔も手足もちくくと

ねの許せし中でもないからは戀は仕がちよ我とのご ▲「イヤわたしが ▶「イヤわしがと ■「こなたへ引ばあなたがとゞめ互に顔も朱奪ふこれも戀路のならひかや 二上り「月雪花を名所になぞらへ言ばうれしかろ何れの月が氣に入らしやんす何れの花が氣に入らしやんす雪に戀路を鳴立澤の夕の文をまきたつ山にのほるも戀のならひじやものを浦の苦屋と思はんせ「名におふ三つの名所かや「戀のしがらみ蔦かづら縁の苧環いとしさにあまるお三輪がりんきの針男の裾に付るともしらすしるしの絲すじをし たひ慕ふて尋ね行く。

五五 一ツ家に遊女も 忍夜戀曲者(將門)

(後改忍寄孝事寄)

常磬津小文字大夫直傳 作者 寶田壽助

■「夫五行子にありといふ彼相興の十四年樂平縣なる湧泉の昔を爰に湖の水氣さかんに浩々と清るは昇る天津空あめもしきりと古御所に鮮語の花の立姿 九藏田 ●「戀は曲者世の人の迷ひの淵瀬きのどくの山より落る流れの身うき音の琴のそれならで ■「つま呼びかはす鴈がねの其

こいつはたまらぬどしよぞいなしどもなや「とかふいふ間に明近き遠寺の鐘にそこはかと會釋こほして走り行く 無三郎出 ●「お三輪はあとにおくれざき花野に蝶のせかれゆく姿愛らしかあゆらし ▶「うれしき中にくりごといとしくを おだまきに ●「たへぬ思ひを亂れ合ひ露おく野邊をうかくと ■「道もせ氣もせ心さへおのが羽風におどさる、雀の森か宮が辻尋ねさまよひ來りける 無「ヤア求馬様こゝにお出なさんしたかサアわたしと一緒三輪の里へ 升「イエくそふはならぬサア求馬様みづからと御いつしよにお出なされませいなア「とる手もゆらぐ胸の火のお三輪は中をおし隔て 無「エ、聞へませぬ求馬さまそりや氣の多い ●「悪性なそもやわたしが初戀は思はで三輪のすぎし夜に葉ごしの月の佛はお公家さんやら侍さんやら知れぬなりふりすつきりと水際の立つよい殿御 ▲「外の女子は禁制としてかためしるんむすび ●「主ある殿御を大膽なことはりなしに惚るとはどんな本にもありやせまい ▲「女庭訓しつけ方よふ見やしやんせエ、たしなみなされ女中さん ▶「イヤそもじとてたらち

たまづさをかくばかり色に手だれの契情もこがる、人に逢見ての後の思ひにくらぶ山しのぶ涙の春雨を傘に凌いで來りける 羽左衛門「大宅の太郎は目をさまし將門山の古御所に妖怪變化すみかをもとめ人倫のなやますよし頼信公の仰を受け光國がしばしまどろむ其内に見なれぬ座敷の此體は正しく變化の所爲なるか「申し、光國さま 羽「扱こそ變化ござんなれイデ正體をと立よる光國女はあはて押止め 九「ア、もふし様子言はねばお前の疑ひわたしや都の島原できさらぎといふ傾城でござんすはいなア 羽「ヤア心得難き其一言波濤を隔てし此國へ傾城遊女の身をもつて來り住べきいはれなしよし又都の遊女にせよついに見もせぬ其方が何故我をと不審の言葉 九「サアお尋ねなくともお前の胸はらすは過し春のころ 羽「何んと九「申し ●「蝶蛾やおむろの花ざかりうは氣な蝶も色かせぐ曲輪の者に連れられて外めづらしき嵐山 ▲「それ覺へてか君さまのはかまも春のおほろ染おほろけならぬ殿ぶりを ▶「見初めてそめて恥しの森の下露思ひは胸に ▲「光國様といふ事は其折知つて明くれに女子の念がけふ

の今届いて嬉しい此あふせ疑はらして下さんせやいのやいのと取継り ■「赤らむ顔の袖屏風光國態と打とけて「いかさませつなるおことが心底さほどに思ふ愛情を捨るはかへつて本意ならず疑念はさつぱりはれたれども武邊修行の我身の上望を果さば兎も角も夫に付けてもいにしへの東内裡の壯嚴を思ひ出せばオ、夫よ ●「扱も相馬の將門は ■「威勢のあまり謀叛と共企て竝べし大内裡驕奢の振舞都に聞え朝敵討手の三大將頃は二月の百千鳥眞先かけて押寄る數度の軍も辛島に集り勢の悲しさは風にのこんの雪なだれむらくはつと吹散つたり平親王が最後の一戦見よやくと夕月の鹿毛なる駒に打乗つて向ふ者をば拜み打ち立制ほろ付車切かくと見るより上平太が放つ矢先に將門は米嚙のぶかに射通され馬よりどふとあへなき落命寄手は勇む勝鬨と今見る如く物語る 九「思へば無念ときさらぎが齒をくひしばる忍び泣きさこそと光國詰寄つて 羽「がてんの行ぬ女が振舞今かつせんの様子を聞きしきりに催す落涙はと見咎められてそらさぬ顔 九「ホ、ホ、、何のわたしが泣もので泣たといふはオ、

エ、殘念や口惜しやくなる上は何をか包まん誠われこそ平親王將門が娘瀧夜叉なるは 羽「扱こそナ 九「ひと器量ある汝故命を助け味方にと思ふ心が仇となり見顯はされし上からは習覺へし妖術にて光國そちが命をたつ覺悟なせ 羽「何をこしやくな ■「怒れる面色たちまちに柳眉逆立ちつく息は炎となつてゑんくたる妖術魔術業通に流石の勇者もたちくくく梢木の葉のさらくくく魔風と共に光國が襟髪つかんで中有の争ひ怪しおそろし世にうとふ時をゑはんの忠義傳歌舞伎に残す物語り拙き筆に書きおさむ。

五六

奴島田の八幡諸侯 花舞臺霞猿曳(新うつば)
奴容形の太郎冠者
常磐津文字太夫直傳
作者 中村 重助

■「あら玉の春ぞと告て人來鳥むつまし月の名にしあふ是も歌舞伎の周の春姿も花のかへり咲 羽左衛門出 ■「時も一陽來復の當りを願ふ弓始め弓矢八幡大名のたのふだ人の代參にむかい町から又ことしかへりもふしの願ごとの戀といふ字が花靱背中にしよつた太郎冠者傘をさそなら春

それくかはい男に別れの鶏鐘後朝つぐる朝雀雀がないたといふ事いなア ●「ほのくくと雀囀る奥座敷灯しめす男ども ▲「屏風ひとへのそなたにはまだむつごとの聞ゆれど ▲「我は見足らぬ夢をさき早きぬくと引しめる ●「帯かくさるゝ戯れも ▲「憎ふはあらぬ移香に又盃の數ふれて三の切れたる三味線も弾かるゝ程は弾て見ん仇し心の仇枕 ●「かはさぬ先もある物をいなばいなんせよしやたゞ獨りうき身をかぞへ唄さとの手くだに紛らかすはづみに落せし錦の御旗 羽「コリア是儘に 九「イヤ夫は「夫とは「それ 兩人「それそれくそつこでせい 二上「ひとつ一夜の契りさへ二つ枕のゆるしなき三つ三重四重まはり氣はいつまでとかぬひたち帯六つむごいと思ひはせいで七つのかねの恨めしやなまめかし 羽「扱こそくゝ相馬錦の此旗を所持なすからは問に及ばず將門が忘れがたみ瀧夜叉姫で有ふがな 九「イ、ヤ知らぬ覺へはないぞ 羽「ヤア覺えないとは卑怯の一言肉芝仙より傳はりしがまの妖術習ひ覺へ此古御所にかくれ住む事散聞に達せし上は最早やのがれぬおことが身の上本名乗つて降參なせ 九「チ

日山霞を分て梅笑ふ春の野づらの色ふくむこゝ鳴瀧の花の顔見世 九「立かへり今を春邊とこの花の色香争ふ源平の夫は隔し播磨湯都の中はおだやかに袋に弓の八まん大名 羽左衛門「たのふだお人は北面の更科主水經春様けふ例年の弓始め猶太平を祈りのため此鳴瀧の八幡宮へ御名代の三よし野殿お役目御苦勞に存じます 九「イエその御苦勞は橋平殿も互の事願ひ叶ふて又今年おまへと二人物語こんな嬉しい事はござんせぬもふ御代參の役目仕舞ふたからは春の野もせを詠めながらサアくゝ一緒と手を取るを振拂ひ 羽「ア、是はしたり寄りやりますなくゝ狂言詞もかたくなに ●「烏帽子素袍を假初ならぬたのふだ人の御名代御用であらばおふへいに太郎冠者あるかい やい ▲「ハアお前にとうづくまる ■「こちは元より遣はれものよ色戀の道白川や人目の關の袖棲ならで網引ゑさひく四つ手引く山じやエくゝ木をひく麥の白まばらば廻れ伊勢同者昔は車今は錢投さんせくゝしまさん紺さん花色さんコロコロくゝ小紋さんやてかんせと引戻されたア、なが繩手心もゆうな太郎冠者 羽「ハ、もふ道草の

を押へて ●「やるまいぞく／＼花ぬすびとをやるまいぞ
 「おのれにぎよとてついおいそれとやつちやしてこいね
 ずの番「棒と手拭枕もつかれにたわいうた／＼ねの寝い
 き伺ひよるぬすみそろく／＼はい出しちよつかいにはし箱
 膳だなを踏あらしたるちく生め是もくらはすかしの棒す
 ぢつてもぢつてかぎやりや ●「エイ／＼」トウ／＼
 「やつとふの納め太刀ゆたかの御代の一踊り二上」一のへ
 いたて二のへいたて三に黒ごましなのを通る船頭どのこ
 そゆうけんなれ泊り／＼をながめつ／＼千秋や萬歳とたは
 らを重てめん／＼に樂しうなるこそめでたけれ「立舞ふ
 内にいぜんの小猿あたりの梅へかけ上れば見るより悔り
 羽「アレ／＼猿が梅の梢へコレ太夫おりてくれ」そふに
 三人立かゝり届かぬ梢の綱渡り三筋の霞猿引や橘かほる
 花糺臺笑ひ興じて祝しける。

五七

一時の夢とはしら雲の上人 邯鄲
 となる文作にもとづきて

常磐津文字太夫直傳
 作者 狂言堂左交

■「あすもこむ野路の玉川はぎこへて色有る浪とうたか

姓のわしをアノきんていさまにイヤとひやうもないイヤ
 イヤ又いやだといふたらどんなめにあはふも知れぬ然し
 大内とやらはいかいむづかしい事計りじやそふなおまへ
 しらぬか しうかサア此身はいやしい賤の女なれど父は故
 ある雲の上人仔細有つて此國にさすらへなし寐物語に大
 内のはなしは聞覺へて居るはいな 羽「それは幸ひ及ばず
 ながら拙者も共に 歌「ドレ御指南に預らふか」いにし
 へ天武の御時にいと賢き異國より名珠をさへけ奉る玉
 の光りはおのづから龍車の數を照らせばとて豊の明りと
 名付らる ●「其後おなじ御帝」▲「吉野に御幸まし／＼て
 夜遊の曲も聲すみて ●「調床しき爪琴にひかれみ空の
 天乙女 ▲「桂姿と戀すてふ雲の浮氣じやなけれど實に君
 が色香のいとしさに ▶「こがれて爰へ清見原天皇さんは
 情しり ●「すぐにお寐間へ手を取かはしあの／＼ものゝと
 さゝめごと嬉しかろふであろぞいな ▶「二葉の松の千代
 かけて君にさゝぐる壽をおつとまつたりオ、それよ ●
 「こちら在所でいはふなら中よい友と打連れてくはへぎ
 せるの大根引 ●ウタヒ「青陽の春のあしたには ■「白馬を

たの姿けしきのうつろひて爰にもやどりすむ月の 歌右衛門橋
 出 ■「夜晝となき樂しみの榮花にも景色にしばしかんたん
 の枕川にぞ着にける 羽「ハ一先此の所に御下乗有て晴渡
 つたる風景を御覧有て然るべう存じ奉りまするト「進
 めに譯もわかごまの手綱かいやりおり立て 歌「ア、モシ
 若いのいつたいわしに此の様なるほし裝束着せてどこへ
 つれてござるのじや 羽「ハ君しろしめさずや此の所は江
 州野路の玉川に續く枕川にて候くわしくは里人をまつて
 オ、幸ひ向ふへオ、イ／＼ 二上り 出「豆をかりやらば月夜
 にかりやれ月夜はづかしこちややみがよいコノしよんが
 へたらいか／＼へてきり／＼としやんとからけたつまの染も
 よふイヨ大和屋とほめられて顔もあかねの二布さへびら
 しやらもので歩み來る しうか「所見なれぬおかたがたいづ
 れへおこしなされますエ 羽「ホ、しづに似合ぬやさし
 くも申たり是に渡らせ給ふは此度人皇八十九代の帝龜山
 の院崩御なさしめ春宮いまだ御よふちゆへ帝位そなわる
 此御方を九十代の帝に進め參らせんとむかへ參らせ來り
 しと「語れば善吉打おどろき 歌「何じや何にもしらぬ百

ひいて一歳の邪氣をさくるのためしかや ●「時はちがへ
 ど出來秋に年貢つみだすかざり馬 ▲「桃花の節會とりど
 りに歌のてにはの曲水は「思ひ出した ■「振舞のくるり
 廻りの盃 ●「もしちよと ▶「合のおさへの御手元を ▲「ひ
 ねり上戸とそしられてはら立て見つないて見つ ■「笑ひ
 壽くあやめぐさ六つのつかさもふき祝ふ しうか「誰文月の
 歌びらききつこふでんや月見の御遊ふけては蟲の音もさ
 へて ■「ちぐさにすだく秋蟲を浮れて思ひ月かけに誰を
 松むしこがれていとこゝにはたおりきりはつたりてふ
 てふも風に狂ふや 合方「馬追蟲やくらべ馬合くつはりんり
 ん合鈴蟲の合聲もゆかし合く面白や 羽「もはや夜あけに間
 もあらじ ■「いざ還幸とすむにぞかなたの龍馬引よせ
 てさんごの鞍にのりの道供奉なしてこそ三重行空のふし
 ぎや一天はれわたりあらはれ出し二つの日輪昇ると見れ
 ば忽ちに落て氷とくだんの人馬ともに行衛は白鷺の羽音
 に夢はさめにけりかり寐のゆめはさめにけり。

五八

笑門俄 七福(とつる拳)

常磐津文字太夫直傳
 作者 三代櫻田治助

「梅は殿たちさん櫻は女子いつも色ある盛の花にくんくん廊の五町まち舟よ四つ手よはやめてくきぬたうつや真紅の鼓のしらべ顔にもみぢのたく火なき四季の俄の舞を見さいな其次の大盡セリフ鐘升「ヤレくよくみんながはやく仕度が出来たいつもの秋の俄とちがつて和田様のおさしづで新宅びらきへ持こんだ秋葉まつりサ福「なんほ御大名の御趣向でも三日三夜香つとけとはちつとつら山さまだよ九「夫さかふつと今に一番がはいるとねりこまにやアならねへから今の内にさらつて置ちやアどふだらふ新「ほんにそれがよふござんせうモシ三藏さんお前が相方のアノお人はアリヤしん藝者さんかへ長「イエイエ此人は四ッイ湯の風呂ばんどんだよ梅「ほんに子供衆は目角がつよいモシ三藏さんお前あんな人を相手にどふせふと思ひなさんす九「何サ才藏にはあんなとんなな者がよからふと思つてよ歌「コレくさつきから聞て居ればとんな人だくとアイわしはとんなだからモウよしにして歸りませうよ九「ア、コレサ今歸られてはこまゐるはな了簡さつせへく歌「イヤ歸りますく梅「ア、

モシ今のはわたしが言ひ様が悪かつた程に堪忍して下さんせ歌「夫だとしてあんまりな人さんたちだ九「マア了簡さつせへ時に春の趣向から一寸けいこを歌「そんならきけん直しにやりませうか九「そふよエヘンく」さらばお祝ひ申そふと「鼓おつとり聲つくろひ」ヤンリヤ目出度やナア鶴は千年のめい鳥なり龜は萬年のヨ御壽命たもつ今日此御家をば長者のしんを九歌「遊所にたとへてはしらだて」一ッ本の柱は伊勢の古市よふだの踊「ヨイくくくく」ヨイヤサ「チンヤ二本の柱は」端手をするがの二丁まちヨ三ほの柱は堺のちんもり「四本の柱がしんもの關「五本の柱はこんどのはり箱六本のはしらは「むつくりくくくく」むつくりしやんとむろの湊へ入舟「七本のはしらは奈良の都に通ひ木辻に居續「八本のはしらは「花のお江戸の五てう町九本の柱は九條の君たち打かけさばきの裾もさらりさるりく」「オヤさらりくくく」さつと才藏ひらいたハ、ハ、ハ「ひらるたりはだけエたり「ホ、ヤア十本の柱はじつをつくしの柳町「品よくなびくやヨウこち風

にこちらへ向いては萬歳「オヤ萬歳へ萬さいくくく萬歳へ萬歳らくでお目出度いめでたく榮ふやぐらまくセリフ新「サア長作さんの冬の趣向を早ふく」長「そんならわたしが 錦、やつたりく」セリフ「舍人の姿白張の見えも昔にかはら崎ちよつと

お邪魔に淨瑠璃へ冬の趣向を紅葉の賀カノ林間にあたゝめたさゝの一夜を根笹のあられとめどないのでツイころび合降ると濡れるの譚二つ「沖でみねみりや三かみの櫻とサ枝をこんきりことどうらに造り忍び殿さまにぶらら

んと提させうかの花によふにたさも風俗のヨウそろちよつとせ「京で一條柳やが娘とサ緩の四つわりを襷にかけて腰も姿もほそりとぢよなめきやるの絲によふにた



さも風俗のヨウそろちよつとせなびかんせ「時に四ッイ湯の番衆さまたいこ持になる氣なら何ぞけいがあるだらふネ歌「イヤモウ有るだんか藝はいろく有る一寸した所がけんだね錦「何にけんだハアどんな事をやる見てへものだ九「サアサア早くく」歌「さらば見せよふヨイヨイく」二上り「酒はけんざけ色品はかいる一トひよこ三ひよこひよこ蛇ぬら／＼なめくで参りやしよソレじやんジャカジャカくじやんけんなばさまに和藤内がし

かられた虎がはうくとつるてん狐でサアきなせ錦「ヤなるほどこいつは面白い九何とまけたものをあたまをはるのはどふだ歌「よふござんすその時に腹を立つ事は

ならぬぞ九「よし／＼そんなら三人一緒にヨイヨイ／＼
 ■「酒はけんざけ色品はかいる一トひよこ三ひよこ／＼
 へびぬら／＼なめくで参りやしよソレじやんジャカ／＼
 ジャカじやんけんなば様に和藤内がしかられた虎がはう
 はうとてつるてん狐でサアきなせ セリ「サアきなせ「サ
 アきなせ「サアきなせ 歌「ア、コレ／＼またんせ／＼お
 前がたはわしが負けても勝つてもむせうにあたまをくら
 せるでモウ／＼拳はいやだ／＼歸ります／＼ 梅「アコレ
 待たしやんせ ●「そりやむごいぞへ何じやいなお前の世
 話でぬしさんを連れて来つれてかりたくの ▲「しかも初
 會はさはりの夜初名代をがてんしてあがらしやんした心
 いき癖ずばんどんに聞たとき ▶「もしや誠のこゝろかと
 しんに嬉しい床の内またあすの夜も錦升と ●「いふたを
 うそとしら梅の幸といふ字の入ほくろやほらしいではな
 いかいな 九「サア是からは夏の趣向を竹重やつたり／＼
 舞「そんならちよつと仕度をしてくるから跡をたのむよ
 ■「跡をたのむと言捨て、樂屋をさしていそぎ行く 梅「モ
 シ三藏さんのまれたふせうおまへ跡をやらしやんせ

九「そんならおれかこいつはめいわく「こいつはめいわ
 く穴うめの 二上「是は臺どご唐人のちやかやく「どん
 ちやくと。めうかんどんちん。ちやく／＼ちやくうきう
 りん。ほこりんめう。てこまアかてうくひ／＼ばんにし
 ゆりきんにやくほう。ちゆくしがきうしんきう。だアラ
 いめうらいほう。けん／＼まつきやアきうらいきうのき
 う。ほこ／＼めエ／＼なかく／＼さかりにきうらいしゆら
 う／＼／＼そへゑそそんりよけんぶこつちこ。きんにや
 アもつ／＼けんぶこちこばア／＼あんびんかつたら
 けどらんせ。わけもなや 三下「めづらしうかわいと鳴た
 はつ鳥常きく鶏もにくうなふぬしの便りか春風がそよと
 れんじへおとづれば絲の柳のあらひ髪それでもよふにた
 うつり香のこちらふりむきや床の梅アレ笑ふてゐるはい
 な人ぢらしではないかいな 二上「お前山伏する氣ならわ
 たしは御祈禱の札くばりもらい集たたくせんをおつかい
 なされてエ、下さんせ「御所のお庭に右近の橋左こんの
 サ、ク、ク、ク、ラ、ラ、ラ、右大臣左大臣サ、ひの袴
 はいた官女々々々、チ、姿うつくし紅白の水引かけてお

とし玉面白や「萬夫ぶどうの英名にきくぞおそれてい
 高き初夢富士を三保が崎目出度き春をや迎ふらん。

五九 山姥が松枝の葛葛 薪荷雪間の市川(新山姥)
 怪童が照葉の紅葉 常磐津文字太夫直傳

●「四面我々たる足柄山 ■「麓にかよふ椎が本巖に染る葛
 かづら君命うけてますら男が 三郎出 ●「まけたるひぢの
 高枕けに一瓢のたのしみの眠を覺す山おろし 齋「山高う
 して雲行客の跡をうづむ君命うけて此日頃かく山賤と
 様をかへ深山幽谷きらひなくゆきなり次第の氣儘酒ねむ
 たざましにドリヤ一盃やるべいか「さけはかりなき盃
 につけばうつらふ星の影 齋「ア、ラあやしやナア客星爰
 にたんたくなし我が盃中に影さすは扱は一定人傑の此山
 中に有りといふ天の知らせか何にもせよ奇異なる事を見
 る物じやナ ●「ハハア是でよめた心當りは山住の女が
 けるいつもの小僧ドリヤ一服のんで待べいか 四郎出「錦
 の袂引替て木の葉衣を露霜に染てあけろの山姥と人や岩
 間の苔清水心細道たど／＼と杖を力に歩みくる 齋「オ、
 おふくろ今日は未だ逢ひませぬの 四郎出「オ、山賤のよき

藏殿またたき火の御馳走しませふかいのう 齋「夫は黍ね
 へ時に小僧はどふしましたな 四郎出「さればいの跡の麓
 迄連立て来ましたが大方し、さるを相手に相撲がな取て
 るましやうはいな 齋「それはあぶない早く爰へよばつせ
 へ／＼ 四「ほんにマアおとましい事では有るぞいのう ●
 「ア、おとましとかこち事夫と見附て 四「あれ／＼御ろふ
 じませあのよふな大きな石を持遊んで怪俄でもしたらど
 うせうと思やるぞ道ぐさも程があるコリヤ怪童丸々々々
 ヤイ小四郎「オ、イ ● 倉神樂月とて片山里を笛や太鼓で面
 白や足のつめたいに草履買ふてたもれ子をとり／＼どの
 子が目つきあとの子が目つき籠め／＼かごの中の鳥はい
 つ／＼出やる夜あけのばんにつる／＼／＼つっぱいた木
 の根さ、原く／＼りく／＼つてひよいと出たみどり子 四「コ
 レ／＼怪童早ふおじやいのふ小「アイ ● 母を慕ふて山道
 を尋ね木咲の梅の花よき「か、おらこんな花折て来たよ
 「花うちせふとふりたて、いたづら盛ぞ愛らしき 三郎出
 レ小僧よく歸つて来たな 四「オ、よふ戻つておじやつ
 たのふサア／＼いつもの通りおぢ様へおじぎや／＼ 齋

「オ、おじぎがよく出来ましたな」か、さま何ぞ下されや
 四「おとなしう遊んでおじやつた其褒美に此間から赤つかのべへ織つて着せふと思ふてな山路めぐらぬそのひまに五百機立る窓の内 五「枝の鶯繰り綿くり織て着せたる母のほんそ子里へさがればさとの土産はでんでん太鼓にふり鼓合うつや空蟬のから衣千せい萬せいはんせいのきぬたに合す鼓の拍子 合「面白や 小「サア是から馬ごとじや〜」 彦「ドレ〜おれがい、物をかしてやらふ此まさかりを馬にして 四「母がはやしてやりませふ 五「月毛つきげにあらぬ斧の駒合とるや手綱のり、しげに 小「先のけ〜先のける 四「お月様いくつ 小「十三七ツ 四「御供は幾つ 彦「八十八ツ 五「ほんにそりや若いなア 合方「母のたい内けやぶつて 五「産所もうぶゆも山なれば取上げおば、に事をかき産湯の替りに四方よもの赤あびせられたかどつこもかもまつかくなつて北嵯峨の踊りくどきは「何と言た二上り」おらが在所はな奥山のと、うちのでんぐり〜栗の木の木の根を枕にござれだいてころび寐 小「か、さま乳のまふ」乳のみたいと足ずりは頑ぐんせはなき子のならひ

かや 四「コレハしたりどふした物サア〜是から又いつもの山めぐりの話をして聞せませふぞや 五「彦なに山めぐりのはなし「コイツハ面白かるふはへ 四「何のいなア昔語もはづかしい有し姿もどこへやらむめうの瀧に髪洗ひ若葉を見ては春を知りつまこふ鹿の音を聞て秋と思ふて深山路をあした〜の山めぐり 五「よし足曳の山廻り 四「四季の詠もいろ〜に 二上り「浮き立つ空の彌生山合桃が笑へば櫻がひざる柳は風のおほよふに」誰を待やら小手まねく 四「霞の帯のしんきらしめて手と手の盆踊 合「ななこの池にうつりぎのうらみ過しの梶の葉は合露の玉章おちそめて 合「こがれてぬらす袖の梅ついだまされて室咲の 四「梅の唇もいち早く合 四「門に松たちやナンナ途雖も出るかと思へばほと、ぎすあやめふく間に盆の月待宵過て菊の宴はや祝月里神樂ほんに〜世話敷せわしき浮世も我も白雪つもる山廻り〜 彦「ホ、ウ此程より心を付て伺ふ處扱は柔弱非力をくやみ横死をとけし坂田の藏人が妻悴此山中に籠ると聞しが若しや二人は 四「いかに其坂田の家を起さんと山神へ祈誓をかけ則ちもうけし此怪童

彦「扱こそわが推量に違はず時行が妻悴よなざるにても女に稀なる心ざしその丹誠に山神の加護悴が勇力嘸あらん力の程が見度い〜 小「おもちれ〜 四「コレ〜怪童大事の所じや負まいぞ 小「オ、がつてんだ 四「神變不思議の怪童丸こなたはあしらふ勇力士怪童いらつて傍なる松を根こぎに引抜きにつこと笑つて立たりしは人も恐る、ばかりなり 彦「松の根こぎおもしろいサア打てこい怪童丸 小「がつてんだ 四「打てか、れば身をかはしすかさず強氣がうきの力瘤幹より腕のふしくれてしつかとつかめばめり〜 四「エンヤ〜とねぢ合しが中よりやつ、とねぢ切て左右へ分れて立つたりしは目覺しかりける次第なり 彦「ホオ力の程は見へた〜今よりしては頼光公の家臣となし父が家名を其儘に坂田の金時と名乗らせん喜べ〜 四「ハ、ア有難や忝なやコリヤ怪童けふから坂田の金時といふ侍に成るのじやが嬉しいかや 小「そんならおれは侍になるのかうれしい〜 四「さりながら今別れば此母はもふ逢ふ事はならぬぞやコレ怪童爰へおじや 五「夫のかたみと見るにつけそなたの大事さ大切さ今日

別れば今宵より母一人寐のねやの内さぞ面影のなつかしかる頼光公へ御奉公つとむるひまの明暮に 四「武術をはけみ立身せよ合かならず〜人様に 五「山姥が子と笑はれな今別る、共此母が 四「そなたのかげ身に附添ふてなほ行末を守るべしとは言ふ者の是がマア 五「名残おしやいとおしやといだきあけ抱き付き思はずわつと一聲がこだまにひびきてあはれなり 四「かくてははてじ怪童丸お頼み申すは仕さまなごりは盡じはやおさらば 五「いとま申して歸る山の 四「峯も木すゑも白妙は源氏の榮え盡しなき守る神がきはもうしうの雲のちり積つて山姥となれり山又山に山めぐりして行衛もしれずなりにけり「かゝる所へ猪の熊入道手勢引連れはせ來り怪童丸を見るよりも 善「正盛公の上意をうけ汝を味方にか、へんと出かけて見れば三田の仕扱は源氏へ引とつたな 彦三郎「しれた事だは怪童丸はたつた今頼光公へ推舉したは奉公始にこいつらを引く、つて君へのお土産怪童ぬかるな 小「サアよわ蟲めらみんな一度にこい〜 善「何ちよこぜへな者どもそれ 四「やらぬと組付手の者を一度につかんで

つぶてなけかついろ見する金時がまつ先かける冬至梅一陽ひらく智勇の花歌舞伎の榮ぞめでたけれ。

六〇 乗合船惠方萬歳 (乗合船)

常磐津豊後大椽直傳

「賑ひは花のお江戸の隅田川月の都も及びなき景色を爰に都鳥いざこざなしの乗合と浮た同士の渡守「筑波根のこも彼面と口眞似にとはすがたりを五百崎の横に素顔の富士びたひはずは者でも悪性は観音さんへ願こめて▲「はだか参りの子飼から背中にひゞの出任事をたゝき大工の友持「そんなお方と添ふならほんに嬉しかん酒白酒とその御最負を山川に■「くらべよふなき有難さむつみ咄しの向ふより■「海上遙に見渡せば「五色いろどる寶船よい乗合とわせられてものり後れたは不審な「色にやかしこいそれさまなれどなじよさつしやれたエ戀しらす「イ、ヤ悔むなそこへ氣の附ぬエ、太夫じやなつけれど何れも様へ改めて御祝儀申し入りのある「芝居をちよつと立見してツイ遅はる御無禮と足をはやめて來りけるオ■「ヤレく嬉しやくわしはまた向ふへこへる船じや

と思つたヤア美しい姉へ達が是は有難いく、萬歳「アコレく其様に女さへ見るとらちもない事を女のなない國から参つたやうに無性に有難がる事はないはさ第一外聞が悪いはさオ■「アコレく太夫様遙々三河の國から斯して來るもお江戸サアの美しい姉へ達を見物がてらじやてマア一服吸ふべいかな 通人「ホ、ウ扱は足下達もすこぶる好色家と見へるネ極うれたのハ、、、、ヤ頼母頼母 大工「しかしながら袖ふり合ふも他生の縁だ何ぞ面白い咄しをみんなやつつけねへ 女「ほんに夫がよふござんせう 大工「マヅ初春の事だから白酒屋さんおめへ先へやつつけねへ 白酒屋女「左やうならばお望に任せ抑々白酒の始りは「富士の白雪は朝日で解る」とけたがどふしたへ「娘島田はサ口舌の半でサねて解る「ヤレヨイくよい評判でうりかける 通人「是は白酒の先生妙々ハ、、、ハ 大工「サアくこれから番匠どのお手前の番じやくろけばなしをやつ付けべい「そも「番匠の始りはたゝき大工のこちとらが聞てもうはのそら仕事嘘を突鑿差曲尺

を遣ひなれたる友達と「すぐにうら釘かへして後はほんに辛氣な溝鉋「互に二世と墨さして誓文構放れぬなかを「此ごろは聞けばお前はしん手斧また新店に廻し挽にくや節木の性わると「サアく是から宗匠先生玉句をうけたまはりたうござる 大工「發句とやらほつくとやら早く聞てへねへサアく早くくくくく通人「ア、さな宣そ諸事風雅の狂道は士農工商の業までも穿たねばならぬてエ、こつては思案にあたはずと申せば各々騒がせ給ふなくエ、コナツト春風エ、春風や■「春風や黒い羽織に小脇差さしてゆらりくと船場へおりやる「エイヤ甚だ酩酊エ時に景色は未明の事に限りやすネ白晝は埃りまんくとして野暮ものたつぷコレ恐るべだネ■「あとを慕ふてなまめてこへくサアサヤツトヤ「イヨくうつらかくエ今のアノ茶を賣買する翁はアリヤ只者じやアござへせぬネ淺黄の頭巾引ぬきギツク本名有べだネハハ、、、、サア向ふへおし出しやせう「船ばりしつかと召された空には歸る雁の聲「先月の月末か今月の月初めか木へ往の茶飯の田樂で朝飯とこてへやしたすると

未明だから豆腐が一夜水中に御逗留や眞平とこたへてどろんとけし棒てふものにてオイ「はやたゝなかへ出にける「希は船衆急ぐべだヨ■「こちらも急ぐ送船程なく着岸サア一つ聞し召せところを重ねて「かほりつんく花に風輕く來てふけ酒の泡「ハ、、、、ハ、、、、アハハ、、、、オイ笑ひこうじて腹立てエ、エ、すぢをいふべや泣上戸▲「サアく太夫さんはからお前の番じや番じや 萬歳「是は又迷惑才藏仕方がないはマヅ初春の事じやからお目出度う壽をさらばお祝ひ申さうと■「鼓おつとり聲つくろひ●「やんりや目出度やナア鶴は千年の名鳥なり龜は萬歳のヨ御壽命保つ鶴にも勝れ龜にも増今日此お家をば長者のしんと「祝ひ榮へましんまする「建初の柱をばヨ綾と錦で包まして「弓と箭をばつけんさせて是は火ぶせの柱とて「鬼門を守らせ候へば「一本の柱が一の宮ヨ二本の柱がにせんだか三本の柱が神の明神四本の柱がしろくや天のう五本の柱が牛頭天王「六本の柱が「六八幡とや「七本の柱が七尾の天神八本の柱が正八幡九本の柱が「くま野三社の大権現とヨ十本の柱が十

羅刹十一本の柱をばヨ十一面觀世音十二本の柱オンハヤ
 藥師の十二神とよ千本あまりの柱オンハヤおつ取立て歡
 ばれたり「誠に目出度う候へける「みろく十年たつての
 後諸神のたてたる御家は「雨が降れども雨落せず「風が
 吹どもたからかぜ「ちと吹てはヨウ春風よこちらへ吹て
 は御萬歲萬歲樂まで祝ふて千秋繁昌參り榮へたんまうは
 「誠にめでたふ「候へけるとは是からそろく萬歲「オヤ
 萬歲「エ萬歲「オヤ萬歲エ萬歲々々々々々々萬歲樂でお
 歡びだハ、、、、「さん度なく三度づるが舞にて「あ
 だな舞に候はず「昔又後白河の法皇様の御時に「コレ
 ワイ「熊野山へ御參だいの折柄に「コレハイ「諸太夫の
 装束で「左折の烏帽子にて「コレハイ「その時京都まで
 のほりてはコレ大内の御門かや「コレワイ「お江戸サア
 へ下りてはコレ將軍様の御門かや「コレワイ且那様の御
 門と三幅は一對にて「コレワイ「元日にいさぎよく開か
 アヤレきり、やきり、やく「オヤさらり「エ、さらり
 オヤさらりさらりくく「さらりさつと才藏開いたハ
 ハ、、、、「開いた「コレ開いたりはだけたり是様の御

身代は大きな者だてつかいものだに「コレワイ「又も取
 てはめでたきものが參る「何がく參る「お歡びの大判
 や小判が「コレワイ「佐渡でわいた金かや「お江戸で出
 來た金かや「旦那さんへわくはヤレざつくく「にやアざ
 くら「オヤざくら「エざくら「オヤざくらエざくらざつ
 くらざつとわいて來たハ、、、、「太夫さんあらけ
 ねエ「コレ錢や金のわきよふたに「コレワイ是さまのお
 座敷につかみどりがはじまる「子供等もゆだんするな「も
 つこウ持たらしよこないこめだに「コレワイ「木鉢をも
 つたらすつくいこめ「枡を持たら計りこめ「美しい姉さ
 んにやア才藏なんぞは内證づくなら五兩や三兩はさつく
 れべいに「コレワイ「そこらの姉様のほうくく「のまはり
 お鼻のまはりおでらてんでべその近所のへ、、、
 、くべつちやりこ「まつちやらこ「べつちやらこや「ま
 つちやらこヨイホ、ヤレくまんじやらこにまんざらこ
 まんざら野暮ではどふした才藏ありやせまい「代々さか
 へて「御萬の長者よなを萬歲樂までもやら「エおめでた
 う三下り「サアく是からはそうおどりく三下り「初

みぞら霞色どる春の山鶉や駒どり歌よみ鳥のさへづり
 さへづり梅の梢のした清水姿うつして我影法師と舞ひく
 るふ聲もしほらし百千鳥「ともに嬉しき乗合に聲春雨
 となりひやく初雷に人々は我家をさして急ぎ行く。

常 磬 種 終

第七
櫻
草
集

(富本節正本)



前豐本富目代二筆里榮

櫻草集 (富本節正本集)

目次

- 一 年朝嘉例壽(長生)
- 二 笹結渡涉船(お花半七) (寶曆二年秋)
- 三 鈴曙戀關札(せき札)
- 四 文月笹一夜(笹の一夜) (明和三年七月)
- 五 都見物彩色紅葉(彦總) (明和八年秋)
- 六 雪催閨巢籠(片桐彌七) (安永元年十一月)
- 七 卯華姿雪曙 (安永二年春)
- 八 四十八手戀所譯(相撲をし鳥) (安永四年十一月)
- 九 百夜菊色の世中(關寺又は檜垣) (安永五年十一月)
- 一〇 反魂香名殘錦畫(反魂香) (安永六年九月)
- 一一 夫婦酒替ぬ中仲(鞍馬獅子) (安永六年十一月)
- 一二 其儼淺間獄(あさま) (安永八年三月)
- 一三 歌枕戀初旅(薄雪) (安永八年八月)
- 一四 操返廓文月(玉菊) (安永九年七月)
- 一五 道行戀飛脚(梅川忠兵衛) (同上)

- 一六 道行比翼の菊蝶(おなつ清十郎) (天明元年四月)
- 一七 道行垣根の結綿(おちよ半兵衛) (同上)
- 一八 道行瀬川の仇浪(おはん道行) (同上)
- 一九 連理橘(蟲賣) (天明元年七月)
- 二〇 新曲高尾懺悔(高尾懺悔) (天明二年八月)
- 二一 睦月戀手取(春駒) (天明二年十一月)
- 二二 柳絲戀苧環(お三輪) (天明三年春)
- 二三 花川戸身替の段(身替お俊) (天明三年春)
- 二四 春夜障子梅(夕霧) (天明四年春)
- 二五 道行野邊の書置(野邊の書置) (天明四年春)
- 二六 坂町宵四辻(坂町おつま) (天明五年三月)
- 二七 一節草齋宮が船(齋宮が船) (天明八年二月)
- 二八 在姿淨瑠璃世界(新高尾) (寛政二年春)
- 二九 袿褰跣振袖(慈賣) (寛政三年二月)
- 三〇 新曲かぐら獅子(神樂獅子) (寛政五年二月)
- 三一 名酒盛色中汲(お菊幸助) (寛政五年二月)
- 三二 狹容形近江八景(小いな半兵衛) (寛政六年二月)
- 三三 達模様吾妻八景(小ぎく半兵衛) (同上)

- 三四 徒 髮戀 曲物(松風) (寛政八年十一月)
- 三五 咲初花 振袖(道成寺道行) (寛政九年五月)
- 三六 道行茶種袋(新夕霧) (寛政十年三月)
- 三七 茂織 悔睦言(扇賣高尾) (享和元年四月)
- 三八 三重霞嬉敷顔鳥(三重霞の傀儡師) (享和三年正月)
- 三九 全盛 操花車(木やり) (文化元年九月)
- 四〇 道行念 玉蔓(長作) (文化二年四月)
- 四一 母育 雪間鶯(山姥) (文化二年十一月)
- 四二 夕粧 星逢夜(夕化粧) (文化四年五月)
- 四三 櫻草對の 謎(小女郎新兵衛) (文化五年三月)
- 四四 幾菊蝶初音道行(忠信) (文化五年五月)
- 四五 艷容 錦畫姿(新お七) (文化六年三月)
- 四六 四季詠寄三文字 (文化十年三月)
- 四七 寄三津再十二支 (文化十一年三月)
- 四八 魏鬼 宿直嘯(宿直嘯) (文政元年十一月)
- 四九 拙筆力七以呂波(乙姫) (文政十一年三月)
- 五〇 染織 菖蒲の彩色(菖蒲の彩色) (天保三年五月)
- 五一 浪館准 朝妻(朝妻) (天保八年四月)

- 五二 八重九重花姿繪(漁師) (天保十二年七月)
- 五三 松梅 櫻草(木琴) (弘化元年三月)
- 五四 雪解 松操織(常磐御前) (弘化二年正月)
- 五五 眞似三升姿八景(節季候) (弘化三年七月)
- 五六 草枕露の玉歌和(玉川)
- 五七 殺生石十三怪(鳥羽繪大津繪)
- 五八 奈須野
- 五九 御代榮益穂富種(豊の前)
- 六〇 家櫻三番叟
- 六一 高砂女夫

櫻 草 集 (富本節正本集)

一 年朝嘉例壽(長生) 富本豊前太夫直傳

ハシル「あら玉のとしのスフシはじめに筆とりて ギンよろづ
 のたから地かきぞあつむるやまと歌ハルフシふでこゝろ
 むる。千代 合がみに。長地 すみいろ實にも。下うづだ
 かく。ウくものそらいろ雲上がみの。色紙。合短冊よみぞ
 めのウ三つものれん歌俳諧もつきせぬことばまさごな
 り。合ウタ、キはまのまさごはよみつくすともレイゼイツキせ
 めや。中わが國と。ウ君が代の ウタヒ」長生の家こそ▼▲
 おいせぬかどのわか〜と。中地わか水汲みの朝若き。
 おゆ殿はじめ庭かまど。煙ぞウ今日の初霞。長地たな引
 にけり合一とはけにゑのかきぞめののし寶珠 ●ウ「たま
 のくしけにかみかウざるウしろくれない入と繪元結 ▲カン
 「結ぶゑにしのもとせも。いのちながかけもろ白髪
 まで。長地かはらぬなかとむつまし月のきそ。はじめはや
 り模様のだて小そで 合●ウ「あだと色とをこいむらさき
 の十九やはたはいろざかり ●ウ「なまめくふうを姿見

に●ウ「うつせば戀のますかゞみ月のまゆすみ花のかほ。

合地雪のはだへの。ゑもん付 ▼▲長地「かいどりしとどふ
 るたもとゆらな手元につまギン琴の 合二上り「ふきといふ
 も合くさの名合若荷といふもくさの名。合ふきじざい。
 ウクとくありてめうがあらせ給へや 合春の入花のきんぎよ
 く。ウ花風樂に柳花苑 合柳花苑の鶯は。おなじ曲をさ
 へづるカホル「ひきぞめうたふつれうたや」そのいろいろとの
 音にかよふ。ウみねの松風松ばやし。ウ中四海波風しづか
 にて〜。上ルくにも治る代のためしギンるぞめのどかに
 つるの音あづちもすみれつゝみ草。ウ春の姿も山笑ふ笑
 ふ家には引トル合ふくびきのウ手にいとあそぶつなで繩し
 んくのいろいろのあつぶさや合ギンかざりたてたるくろのこま
 合ウタルたれいはねどもノルおめしごと 合道真屋「ついのくち
 とりさめざやをかゝとうたせておとしざし。中そろふや
 つこのこゑそろへ 二上りウ「ふたりつん〜つれ立さあさ
 あゆくべいさあゆくべいうれしめだの日の出まばゆ
 き金ぶくりんの。くらはなし地のあぶみにあをり。合下
 手づなかひくりしつとん〜。合ウりうぐ。ちきりをのり

まわしくるり。くるりくるり。と。合くるまにあらぬわりのひやうしと。合ソノくつわの音がらんくがらくりんがらく。合はいどうくはいくく。下さてさて見事な御馬乗りぞめ勇ましき。カホルいさむ春駒あしはらの。ウ國に羽をのす鶴の丸鶴のよはひの千代八千代久しき御代こそ目出たけれ。

二 お花 お花さへむすむとわたるふね 半七 笹結渡涉船 富本豊前太夫直傳

二上り「夏と秋とに垣根がなさに。ギン夏のほたるが秋へかへるウ秋へながる、螢のしよては合上なつのはじめに火ともしそめて思ひこがれてこがれて思ひ。こがれてくギンガハリ死のとおもひ。ウははじめのうそは誠にて合あはせくして人の上心のやみのナホル最中かや。中地五町の灯かけににぎはしく。ハル月にはそれと明くれて。ウ水にかづかくかりがねの姿ちらくふき送る。長地雲のはたてのそのはらの其玉章もよみ安きウかなるづ、やのお花とてしか入も其入名をうたか入たの。あはれぬ首尾に氣をつくし。心をつくす夜半の道。引合ナゲ「ひるの姿の日傘さして引合さ入、れてさしもぐさ地淺草よりのみちもせに。

あいさつに。深い心の中々を女心のはかなふてきづよふ思へど口ばかり。ウそなたにカン一度文つけた筆の手前もはづかしく。ウ鏡に向いても言譯なし。合中ギンもとよりこはあだしの浦うそうつせがひみなし貝きのふの事はけふの夢。長カ、リ引手あまたの大ぬさにおもしろそふなつき合を。り入んきするではなけれども合こちのそのわけ立た上どんな色でもしたもれ。エ、あんまりむごい男氣と。袖さしいる、胸のうちギンヌエル思ひに戀のギンセきのほるカ、リそれをふりきる口舌の風ウはぎやウすききや秋の野に合もつれてくるる男べし。互につねの仇口にくいよふ戀のむさし野のはらが立身の聲あらく「ア、その長々しい事聞き度うもござりませぬ。家來の身には何がなるやら。ハルハアま、ならぬ世の中や。カンお主の心に従へば親の難儀や世のそしり。エ、勿體なや情なしと振切船のツキユリ綱手なはカ、リ縁の碇を引下て引。つゞくやかたのひとふしに「音オンド「いつつけそめしひよく紋それに唇もいらばこそ。ゆかりは高き戀の山一ざのはしはと忍び合ウクヨイくくく「ヨイヤサ合、月に誘はれ馬

ハル夜もはや六つ半七が。ウ人目隠れてかくす裾すそにつまづく合むかい石地それよりたどる供の道 合文セうはきの船のかぢをたへ枕ゆるさぬ主従のくるわへ歸るあしもとの。あれく、人が立秋に。ウ思ひの露の忍ぶ山家路見かけてカハリオトシ立とまり「申しお花さま。お前もちとおたしなみななされませ此やうに毎日々々観音参りにお出なされまするに。私ばかり供におつれなされまするによつて。世間の人があのお花はお、きなどら娘じやと申しませる。もはや明日から外のこし元衆をおつれなされませい「コレ半七。なぜに其やふな事いやる。わしが思ふよふにもない。それじやによつてさきの事が思ひやられる。そんならそなたはほかになんぞ面白い事が出来たの「イエそれは「いやくあるく。其譯きかふ。いやきかふクドキカ、リ「是そのよふにひぞるなら始いやつた言の葉はみな偽りのあだ事か。カン氣づよふいふて言はなしあいそつかせる心で中あろふ合ウ惚られるのが合うるさいならしよてにあ入いそをさつぱりとつくしてくりやれば思ひきる。いやともいはす合おうともいはすうはばばかりの

道の 合ウみやもとがめぬ宮戸川の、め告るくだかけに合ハこゑの仇名なぞかけてギン又のおふせみめぐりの夕べのかねやあすの鐘 ウクヨイくくく「ヨイヤサ合ウ秋の秋葉秋風にささむ口舌の庵崎やさし向たる船宿のうかれたゆとふからころり「ヨイヤサ合ウ「あふせは今戸花川戸サイナく合上別れくの朝嵐そらの姿の淺黄無垢サウシヤカサイナく「ウ「おのく見ゆる白無垢に上「雲は緋無垢の日にしほむ合朝顔姫と名に立て引袖つまのうつり香はあすの思ひの種やらん「思ひ切てこふり切はあいてもなくヌエフシ又立寄り「お花は男にとりついてウこれうるさくとも是を見やしんきしんきのこのつかへ合長癩と氣癩と疳癩のうつらくとおもひねのウそなたにちよつと夢の内あふ入て咄してしつほりと抱かれて寝たとありく。ウ見て其跡のはづかしさ。女子の口からはがまあどふして言れう事ぞいの。カンハシルたつた一言女房といふてたもれば本望と。た、いつ泣つすがりつきわつスとばかりにかきくどくウわけのなみだの露時雨梢の雨とオスフシあらそへり引ウレ「半七

とかふの挨拶なく合詞そふおつしやればお前が道理ッさはさりながら思案すりやお主のはぢや朋輩の。中手前のぎりにもかへられず。ウ今日入と暮して明日を待ちそのハシル朝顔のヒロヒ晝よりも悲しさつらさ情なき引。うきが中にも樂みはお前の事を月花とも。ウ思ふてゐたにお前はそれに引かへて。だましたのイヤウそじやのとよふそな顔してまあッ、、、それがいはれた義理かいな。ウかはりやすさよ秋來ぬと。ウ空を眺めて涙ぐむカハリヌエ心に露や浮ぬらん。カ、リ「五の姿今更に。忘れもやらぬ身の上はまつや待乳の鳥が鳴く合あづまからけの袖たもと引うらみもはれてあけわたるそのかさぎのかし小袖そろふ心のつまごひも。つがいの鷹の山わかれ」のうのかんとすれば「取付て」ウ「やらじ」「はなさじ」「かはらじとお入もひかさねし身の行衛引。たちまち暮色蒼然と上ルけい中しかもあいさつすウクこれ城南の柳髪ふいてふかれてふきよするあらしはけしき。あきながら引合うきねのとりのはたらきにさそはれさそ夜半のこゑいもせのはし入のうきちぎりのちのかたみとなりぬらん。

山風さそふ。恨の瀧とむねの火とウ「おもひくらべて身を。かこちてももりて浮名も世の譏をも」ウ「つみも」ウ「むくいも」▲「未來の責も」●「だんない」大じない何なかなかに。いとほじと▲「おもひみだれし黒髪をたがゆふなぎにもしほやく」●▲「和歌の浦船」上「しほがまの浦」片葉の蘆の短夜の夢にも忘れぬ入佛をはるくしたひ。紀三井寺。せめてひと夜はあはしまのあふせをまつに入藤井寺。ウ花のゆかりや暮そむる。七つの鐘にこしかたの。上あはで。別れし悲しさを。思へばにくや世の中の鐘もくだけよしゆもくもおれよ▲「カンアハフシ」さりとはく戀をしらざる鐘つきの情ないぞやつらいぞや●「人にうらみのあらばこそ。おもひきられぬ身の因果。カン戀しうて。戀しうて。カン袂の乾くひまとは一日片時もなはいいな。そもまあおもひ染しより。わたしが殿御と見る人は。ウ三千世界を尋ねてもほかにまひとり。たがあらふ。いとしいと。かはゆいとなみたいていな事かいな。「命も。なみのうつせがい。戀に此身も。片男浪。蘆邊をさして濡衣。お前のお顔を。見る度にまよふはい

三 鈴曙戀關札(せき札) 富本豊前太夫直傳

二上「くわんすれば夢の世や。蝶に成りたるから人の。上うつゝに通ふ玉の緒を。上結びとめたる心の絲のともに染るや小紫。ナホル中地しうは胡蝶を白露に。やどかる。月のかごとなる。ウタベくの草枕結び捨てたる若かいで。長色をふくめる女馬子。男とみせて頬被りやつす姿も。戀草の戀の重荷のつゝら馬人目を忍ぶ笠の内。夜目か遠目かうつくしく今をさかりの兒櫻。カンしやんとめさせて口とりて仕合よ入しの戀の首尾。中地情をうつすながしめに。思ひの色をこむろぶし二上「關の。お地藏は。親より。ギンましじや。親も。定ぬ。妻を持ち。ナホル地親もゆるさぬ妻こひてハル身も世もあらぬ浮わざにならぬ名所。舊跡を。中かたるも戀の綱手繩三下「たづなをむちにしどけなりふり目に立つ娘。紀の路の旅にかくれない娘。むすめ入くと澤山そうにたが。よぶ子鳥おちこち人の。あだし言葉の。朝露にカハリぬれて姿のかほよ鳥●「見れば」みかはし▲「こゑかはし。見忘れてか」とすがる手をふりはなしたる袖しが浦あれ▲「カン」いもせ

の。迷入はにやならぬい入ろざかり。にくらしいほどかはゆふてないてゐるはいなと▼▲「よりそふ中を吹別くる。花のあらしや月の雲恨の葛のはひまとふ。はてはいつしか日高川さして行道「行水と。我身の末とちる花とあれ。あれく。あれも峯白き。ふだんざくらや花の雲道行く人の袂までさくらに匂ふ。ふり袖の花の合姿をひととせに春と秋とのひなまつり神の。おしへの妹脊」とそのみなかみのかけすめるかだの宿にぞ着にける。

四 文月篋一夜(篋の一夜) 富本豊前太夫直傳

中「五色の外に名にしおふ。ウク江戸紫 オタルと名に高き。ウ戀の手本の數々を。カン上羽の蝶のおりかたもいもせをむすぶしつけがた下。ギンみづし。くろ。だな。あまがつや。中地いかうにかけし。色直し。地地あかにぬひし鶴と龜。ハル千代。萬代の悦びは九こんのかはらけ引わたし。長扱島臺はことぶきのはじめをいはふまちもうけ。ハル榮華の花のつくり物。ウ蓬萊。ほうじゆ瀛洲の三つの島をぞつくりたり行末。かけて替らじと。鳴の羽もりにのしこんぶ皆それくヌエのかざり物。クドキカ、リ心のだけは

いはねども互に入嬉しい顔付は色にぞ出づる紅葉ばの。
 時雨にそぐ龍田山夜半のむつごとかねごと夜の明ぬ
 まにそれくと。取かはしたる三々九度。そのかはらけ
 は三つ重ね上花嫁君へ二度つぎて左へ二足立つときは。
 上くわゑは三足歩みよる「雌雄のてうしの口とく」「口
 よせくわえしやくとりは左ツキユリ左と立まはる。ウカ、リ是
 は契りを結び鬨斗。祝儀高砂住の江の。ウタガ、リ 松の二
 葉の千代かけて替るギンまいぞや替らじと。クドキ指をお
 り日をかぞへしに。けふよりはほんの夫婦と新枕。は、
 でね、するうれしさを。ウおもへばほんにもつたない。
 カンかなしい程はよろこびがなぜにすくない事じややら。
 ウ是につけてもかゝさんのアハツン御恩の程が有難い。長縁
 はいなもの過しころおまへをちよつと見染しより。カン
 あんな殿御に。そふならば。死ぬる命は入露ほども。お
 しのおもひ羽つるぎばの。ウ中をのがれし二世の御縁が
 おまへもわしも。ふところ。乳のみながらの妹脊の道。
 いひかはしたる數々をわたしや忘れはせぬけれど。お前
 の方に眞實が有とは見えて箒木の氣にそむいてもなんの

ぞぬれしいもせ中末しらぬこそ。はかなけれ。

○下の巻

三下り「倭言葉の合一の筆 合ッ命いのちとスカ捨の合鹿の
 夏毛よ其名さへ。上ハルあはれなる入かなお七こそ。戀慕の
 やみの。くらがりに。よしなき事を仕出して。ウ戀の罪科
 我ひとりスエフシ繩目のはちのおそろしきオン「駒の足なみ。
 ギンしどろにて。地あゆみもやらぬ其風情。ハルツ物の哀は
 畜類も。心入オンの内の悲しさを。見る人毎に立よりて。
 中地いとま乞には題目の。聲をばかりにはなむけと。合下地
 よそめにあまる涙川南無妙法蓮華經々々々々々々々々。合
 わたりかねたるふかみ草。ウ二八の花のあだにちる南無
 妙法蓮華經々々々々々々々々。ウ「ちりてもウ春にハツミあふ
 事も。長地かたみに引残るウ松竹梅。ウ湯島に掛し筆の跡。
 ウ引十一の書初に戀といふ字を書ならひ。ウ十二の暮は友
 達の仲間はずれとウ浮名たつ。はや十三の正月はハツミは
 じめて月の障りとなりこしやく入娘と浮名たつ。●「うき
 名なたつはい入とはねど。カン惚た殿御を一夜ささも入抱
 てね、せぬハツミ身の因果。合起請を書て取かはし小指を

その。いちどは女房にもたれうぞとこれほどおもふわし
 が身を。かならず見捨て、下んすなとスエ 縫り寄れば吉
 三郎 詞コレお杉女子の心と秋の空。コレ吉三さんそりや
 マアおまへ何いはんす。コリヤおかしはいの男の心と
 秋の空ナ秋の空 二上「嬉しくもつらくもあらぬ人なら
 で。來ては戸ほそを叩く。秋風。お前の心に秋風ふかば
 わしやなんとしよく。つやなとめ木のとめ木のまくら。
 そんな事よりわしやわしがすいた殿御とふたりねて。ね
 やもる月が見たいもの。そんなではないはいな。そんな
 じやないく、そんなじやないはいな。上女子の心と秋の
 空。あかれぬさきに思ひ切ろ。きるにきられぬその時は
 わしやなんとしよく。ナホル「互に若木の戀風やすれつ
 もつれつはてしなれば杉はそばからもどかしがり。
 扱てく、まだるやべんく」と。夫は昔の忍びの段今此粹
 な世の中に。なにかはいらぬさあく、ごんせと手をとれ
 ば。仲人取持立掛り 詞これく「お七殿もはや我等も開き
 ましよ。そんな口舌やむつ言はちつとは残しておかしや
 れと。ざれごとまじり押やればクリ上二つ枕の床の内濡に

切て血をしほり▼▲ツレ「互に語る睦言に「仇にはなさじ我
 思ひ二世も三世もわがつまと。ウ手に手を取りて蓮華の
 り。法の友綱きればはてし。われと火に入る夏の蟲こがれ
 死とは此事故カ、リ「あれからさきを見渡せば。よしわら
 ず、め口々にとがのよしあし夕しぐれ。ウ戀の邪魔する
 男こそ入色の命をせたし、み。あすはうはさにきえてゆ
 くこの世の。ゑんこそはかなけれ。

五彦總頭巾都見物彩色紅葉 (彦總)

富本豊前大夫直傳

二上「千種の中に戀草は月の桂の男ぶり。こちの思ひは。
 戀のやみ。戀の黒木のくらがりにナホル上引出す牛の角文
 字や。色を。野がいの花薄まねけばそれとおもひギン草。
 草刈。笛にあらねども君が。色音に誘はれて上妻こふ鹿の
 よるとだにギン菊の下露下心。いひよるかたもなら柴や。
 ウ薪に花をおりそへて。おもふよふにはいはれざりけり
 その言の葉もはぢ紅葉スエル色に出たる其風情 詞「秋の野
 にみだれてさける花の色の。千種にものおもふころか
 など。此歌の心。千種や千種ある中にほんにいろよき男

郎花。野飼綱も縁の綱太綱牛にひかれてぜん綱三國傳
 來のそのお姿のみやがはらぢう禱寺でふつとあふたが
 ても扱も白いはだへで黒木賣そのむつちりとしたおはら
 女を下まですつとなで下ろしてやりたいものとはうちつ
 けに ▲「なぶらしやんすとしりながらこつちも思ひのあ
 ればこそ頼み申して此野飼にめさせ申したわたしが心
 さつきにからは往き來の人め言ひたい事も言はずに來た
 是からはまたわたしがいふ事きいてもらはにやならぬわ
 けがつてんかいニヤア ■「にやアにやあらあやしい言葉
 つき八瀬や小原や芹生の里嵯峨のおしやかのれいほうの
 第一是なる牛のけまん娘そこで所なれたる今のにやアに
 やアでござんすかいにやア ▲「いゝへいなわたしや小原
 の黒木賣ではござんせぬ此いの岡に奉公してお主をみつ
 ぐ薪商人でござんすはいなア ■「オ、なる程おれもその
 薪にひかれて「牛の背にて遊ばした笛の音色イヤもふお
 もしろい事でござんしたがあの笛もたゞならぬかんちく
 御祕藏の笛でござんすかへ ■「はて扱こしやくなことを
 とふ人かな成程これはかん竹なるが身にも命にもかへぬ

大切な一管ゆるふだん肌身を離さず所持なせども今ふい
 たのは牛に乗せてたまはつたるあたへの爲にしらべたの
 じやはいの ▲「古の用明天皇様はまの、長者の獨り姫に
 あこがれたまひ草刈さんろと御姿をやつされて笛の音色
 も戀の中立「われらが拙き此音色はよもや中立にはなる
 まいのふ「なる段かいなアなれゝしい事ながらお前の
 お名は何といふへ「わしはじたい江戸もので吾妻からは
 るゝと都を見物に來た者オ、それゝわしが名も幸ひ
 都見物左衛門といふ大きなのら者じや幸ひの黒木賣所な
 れたる都の名所が聞たいゝ「そんならあの見物左衛門
 さんとかへ「サア見物左衛門ともいふ又羽左衛門ともい
 ふはいの ▲「そんなら都の町々を ■「牛から下りて聞こか
 いの ▲「カ、リイザこなたへと夕顔の。扇ッで招く手ま
 ねく。まねくに來る幸ひの。色様方のせうぎをばツキユリ
 假の御縁も何をたねカ、リ身は浮草のうきおもひ。よる
 べなければオ、ソレヨ。長都あないによそへていはゞ。
 よるべは島の。千ざいがやぐら太鼓のとうからゝ。上
 からもあるかそのとのぶりに戀の戀の「市人おほかる

中に。小原女かはいかはい小原木かはい。合ぢんやじや
 こうはもたねども匂ふてくるは炷物。移香深きうつり氣
 の其仇つきは隠れなきニ上「日本一の好色者。ついなり
 そふでなら坂や此手の手の男から文の數が三萬三千三
 百三通なりナホルナント嘘は有るまいがナわしやそふ思ふ
 て居るはいな。そふだんべいゝ。●「それその徒らしい
 お言葉は女子たらしが。お上手でうれしがらすの夜ひス
 と夜もなぶらしやんすが癖かいな ▲中「其戀なれしお方
 に縁の手綱の角文字や。カン命かけてと打つけに。いはれ
 ふ入物か恥入かしのもりて。立つ名もいとねど。ウじた
 いお前が悪性から濁らぬわしが心をも疑はしやんすどふ
 よくな ▼▲ツレ「さこそ濁らで清水寺地主の櫻や音羽の瀧 ●
 「心八坂の當世風で ▲「はで、初心でよい御器量でうつ。
 くしのはにふきあけの鬢さし横櫛枕ぐし。かどのとれた
 る丸山や ■上「良かけられてかふばしき祇園香煎合へ、
 へ、つゝもたせ。こはやのゝのせられて 船舟の宮居
 やかぢをとり。我と我身にいけん茶屋。よしずのうちも
 かんばりてけん酒にこへ。からす丸、烏帽子の紐のくれ

なひは園生に植し花の露 ▼▲ツレ「梅花にきなく鶯のそら
 ねなしとは嘘のかは切りきう代の。膏藥はらふ大黒舞。
 節季候うはら鳥追の老も若きも戀すてふ。我名はまだき
 橘のカハリ替らぬスエラフ中こそわりなけれ ●カ、リ「折から
 來かゝる近江のおかねそれと見るより彦總が胸ぐら取て
 引わくれば ▼▲ツレ「びつくり驚く顔と顔 ■「ヤアおかねか
 と逃げんとするを ●イコ「引止め 詞「マア下に居やしやんせ
 お前はゝほんにゝ憎らしい女子の身の恥しいよくよ
 く惚れたればこそ千度百度やうゝとどふなとしやう
 とのお返事をまでと暮せどよすがもなふ尋ね迷ふて歩い
 たはいなア彦總さんそりやあんまりどふよくじや聞へま
 せぬと計りにて恨みなみだにスエルくれるたる ■「彦總も
 證方なく成る程それは尤じやがおれは此頃ちと願望が有
 ておはやりなさるお伊勢様へぬけたはいのオ ●「おかし
 やんせぬけ参りは嘘じや大かたあの小金とふたりどござ
 だたのしんでいやしやんしたで有ふがの「いやいや其様
 な未熟な事ではないはいの ●「よふござんす扱参りさん
 したがじやうならば伊勢の咄を聞やんしよ ▲「こりや面

白かろわいなそんなら私も道連に。●「我身がなつたか▲
 「サアなりはせねども今一度三人連で行たいなア三人な
 らば三寶荒神おれは中乗り▲「わたしはひだり●「わた
 しは右の掛やぐら▲「其力では結綱切れて●「落たらど
 ふしよ■「それこそ南無三寶荒神馬のしやんぐくの乗
 掛の鈴▲「鈴鹿は曇る坂は照る●「あいの土山■「こむ
 ろぶし▲「扱も見事なソソレハ。馬子衆の振や。手綱染
 帯真紅のふさの。むちや打連れすけがさの。つゞく長野
 やとよく野や稚心に染湯衣裾に若松千代の松坂越たへ
 エイくくくく足かろけなるぬけ参り。笠におは
 らいしやうの笛おみやめせく二見膳所貝伊勢わかめ。
 若い女中のたて参り三下り「戀のくしだのまん。中々で深
 き思ひを。ヤレ紫帽子ぬめの帽子入のいせ比丘尼チトク
 ワン●「今のめもとは成るめもと合エ、ソリヤ▲ツレ「宮
 川に身を清めアラ有難や。天地と。中ともにあれます御神
 體。みをやのしんとくましまして。夫婦いもせのちわは
 じめ。だきつき夜着の内外の神も。もたれあはせし蘆原
 國の戀の世界に生れ出たる。合けふの我等が親なり君な

ひぢり上ハル姿もふりもハル様 スカス参るカンリくとたが書そ
 めて合文のむかいじふきすさむ。長地竹も一夜のあだほれ
 に合させ入かるゝものをウラス此みのわゑんのはし入ばも庵
 崎もたよりまつちをタこへて。けふはくるわの江戸ぬし
 スエゆかし詞のりの月ひろくすまして武蔵野に。おきい
 るほろのくさのとこかな。尺八のそうにたはんのしよも
 ふ。申し太夫さん又虚無僧がきやんしたはいなア「オ、
 辛氣「おもしろや。上ル實相無漏と悟りても心にかゝる
 キン色のよく引。ウはきな浪のたゝぬひにこがれそめた
 る雪のふね合ハル月にうつろふ白妙が。ねがひかなやのか
 なぶみに今宵よとの約束をハルれんほなすがしの名も
 れし「よそに名のたゝばいかにとするすみの。音さへし
 のぶ夜半の玉章。文ほど便りになるものはないいな。
 ゆかしいお方を待身にも筆のすさみの力草。けふはどふ
 して居さんすかはよふすがききたいなア。折も折と
 てあの尺八物思へのあのいろね。文かいてるて邪魔に
 なるとほらしやんせ「申し太夫さん。とほれくといは
 んしたらまた虚無僧が腹立てざしきの上を通ろぞへオ、

りふたりそひねの床やみも。あくれば戀の闇はれて。面
 白じろの睦言を。契は千木のかたそぎや。直な心で相の
 山お杉お玉が引く三味線の●「鳥さん▲「おくさん■「中
 のりさん▼「お江戸さんはちまきさんおかけ参りのつ
 ぎぎせる。上いつあはふともまゝな中竹になりたやしの
 竹の竹はさゝらにもまるゝヤレソレくでん中。頭巾に
 袖なし羽織「拍子揃へて合▲「でん中じや■「張ひぢじや
 ▼▲「ヤレソレく。振るや神樂の五十鈴川。神代の浪
 の。合ハルオトシしき波寄する伊勢の國。そも御祭のさいじ
 やうはしほにかやく夕照のはなのうてなのさくらがひ
 これもかぜをぞいとうなる。

六 雪催閨巢籠 (片桐彌七)

富本豊前太夫直傳

「帯よおびッ雪も入あふ夜は心せよ引。地おもひにつもるも
 のなれば。ハルとけぬもつらしとくもうしッ入うきはうき
 よのすがた スカスぞと。長地アレ三日月の梅にすね宵にま
 がきへおとづれて。ウふけてまゝにもならのはや。まき
 の葉白きくれの ギンヌエ露 中ギンハシル 出「かよふウ心の馬ウウ

せうし「アノ若菜のいやる事はいの見れば見る程かはい
 らしい虚無僧さん通らしやんすがよいはいの「何をひよ
 つと清さんがござんしたならばどふせふと思ふていのふ
 かまふ事はないすて、おきやく「しやうじのかみがあ
 ついとて聞えまいものでもござんせぬぞや「そんなら今
 のは「雪のおと「悟の道も「戀無當「柳は縁「花は紅「思
 へばほんに「そふじやナア「イロ「白妙は走り出で詞オ、よ
 ふお出なさんしたな雪につけても戀しさに人あけふとて
 これ此文わたしが心はこれほどに思ひそめたる眞實をせ
 めてお前のお顔なと見度いがぐがいの力じやはいなア
 「ア、それいやんな片桐彌七といふ人に思ひ思はれ深い
 ととき見らるゝ通り世になき身殊に此世は假の契りとき
 くからは今更みだるゝ黒髪なしおもひきらぬは未練々々
 「これどふじやいな。クドキわけもなやまつ身につらきひぞ
 り事氣をもまそとの事かいなア。ウ中心にそまぬあけづ
 めもつとめのつらさはかなさと ウスさをすごしておす
 つかへそれを入ふびんとおもひはせいでにくい合おかた
 の心やと。ウとり付すがりかこつにぞウクカン「みやはわき

めもふりたまはず笠なる雪ともろ共に。うちはらひく、
 そも座主たりしこしかたを思ひ出づれば有難や。ウ中か
 の天台にとくときは。カン色香にそまる心までみな法性
 をいでずとかや。ウ佛のみちのうとき身をスはづかしと
 おもふ心より。ウかけたる袈裟のわれながらハア、まよ
 いたるこそスエルあさましき詞「そのやうにいはいしやんす
 るからはこりや聞へた清さんの事をきかしやんしてわた
 しにあいそがつきたかへこれいなこれほどまでにおもふ
 のにおどうよくでござりまするはいな文セカ、リ「およばぬ
 花の梢さへ。かけばたもとにとめもする 地カ、リ」とめて
 いくよのものあんじ。クドキウ申「人目しのびて大塔の宮び
 やかなるお姿を。ッだいてね、してしたひももうちとけ
 すぎた床の内おはだあらした入其上に。た、いつないつ
 つめられつ思ひきらぬ有じやうはカンハシルさりとは
 さりとてはッ。罰と思はぬ身の因果。ウハシル私が胸のこ
 れこゝを思ひやつてとばかりにてクドキスエあとは涙にふ
 ししづむカ、リ二人が中のこいさかい。ウ見合す顔の目の
 うちに戀も合心もこもりくの。はつせのみみぢ色にてて

はうろたへ立出るを。二人が帯をしつかととり 詞白妙此
 帯は「サア此帯は「何と上」とけばとかる、謎の帯ねぬ
 ふりしたるはんじもの上り櫻は入梅の香を知らず合長ちど
 りをきかぬ時鳥合さかず知られぬ中ならば心の合蝶のい
 たづらにくるふまいものさりとては 詞「いかさま口と筆
 とは重寶な物だ此文には一目あはねば癪が起る二日あは
 ねばつかへがさしこむと書いてあるが白妙お主が顔を見
 れば何やらいそくくとしていつもよりは機嫌がよい
 が。それでもきあいがあしう候まゝか「サ夫れは「コレ
 あのお客衆はどこから來た「サあれはナオ、それくア
 リヤ按摩さんじやはいな「ナニあの客しゆがあんまとり
 か「アイあんまさんじやはいなサアくあんまじやとは
 やういはしやんせいなア「ハイくなる程私はあんまじ
 やそふにござりまする「したりても見事なあんまのあん
 まにしておくはア、あんまりだときにあんまどの貴
 様ははりがなりますか「サアはりは「しらないか「ハイ
 「そんならわしがけんびきをひねつてもらはうかたゞし
 は足をひねらすべいか「エ、モ何のこつちやぞいな無理

ッ床にしぐれやぬれぎぬの心ハルトシづくしぞわりなけれ
 外記「かゝる所へむかふより。片桐彌七宗清は長地カ、リ「雨
 の降る夜も雪の日も通ひなれにし仲の町 ギンさまに焦れ
 て焦る、お舟合ッこがれてくこがる、お舟 合長カ、リと
 まのしづくも何なかくにかはくひよりも色上戸。忍ふ
 たとさく合ちどり足してスエル來りしが外記びやうぶ引た
 る戀のやみ。なにものかあやしやと。からかさかざして
 見てあれば。詞さても降つたる雪かなそれきやくは鵝毛
 に似てとんでさんらんしまぶはふとんを着て見世にはい
 くわいすといへり大かなやの白妙は此片桐があけづめな
 るによもやくと思つたが向ふを見れば新造も居すがき
 ちとでざアなるまい立寄りらんとは思ひしがいやましてし
 しが心ウツ粹になりたやくるわの粹に。イロやほなふ
 きはよもふかじ。ウなれもなさけによるの道てらさじも
 のとスエル立止り詞「たれも居ぬかいやい。彌の字た々今わ
 せられたと。からかさの雪ぐわつたぐわた。下駄の音さ
 へたからかにカハリオトシきこへよがしとふみならず。「二人

な事ばかりどこの國にかあんまに針をうての足をひねれ
 のといふやうなそんな無理な事があるものかいな此あん
 まさんは針ももむ事もきらいなあんまさんじやはいな
 「はりとひねる事のならぬあんまとりとはハテてうほう
 なあんまだの「ちつとそふもござんすまい「りくつにつ
 められて一句もないオ、肩がはつて來たせいかふうもん
 のあたりがぞうぞつと寒くなつて來たこんな時には得て
 かぜをひくものだどれくこたつにあたりませふく、長
 カ、リ「したの心はあこがれて上はつれなき埋火に羽織を
 きせて置炬燵けにちわ箱のならひとて ギンあたりがほな
 る我まゝをそばで見かねて立寄てさしでのいそとよりそ
 へばさつと蹴立てッたつちどりあんまちどりの下りやう
 じばはまぶよぶこゑのちゑやちゑ合ッやはほはふみがけは
 んかは起請粹はとこがけなみだがけ。其手でふかみへは
 めうとかイヤア、ア、そこまではまいるまい。ウそこの
 つめたい女郎衆にあきはてまいらせそろくと。ウわき
 へこかして立のけばイロすそをひかえてこれ申しクドキス
 「いかに堅いが武士じやててカン合心づよいといふ事を知

らしやんせぬかなんじやいな。ウ中そもなれそめを忘れ
てかすぎし初會はさはりの夜。ウ初名代をがてんしてあ
入がらんしたおころを新造衆にきいたときも合ッしやま
ことの心かと合おもふたわしがウギンこれほどにのほりつ
めたるじつくらべ。ウモウ〜おいてたも〜おいても
らいましよ。そのあやなしはへ、ホ、ホ、門違ひで
あらふがな二玉男たらしに前髪ざかり似合ふた〜二
世かけて。上かはるまいとの約束はずつと昔の色のしよ
て合いまはまことであひそめ川よふかうなるほどあふせ
はとをいマトシ〜マハイヤシバガキこれでうきよのこひ
はますはへうき世なりけりよなりけり。ナホル雪にもみ
ぢを蒸がくなる。ウハシルそれかあらぬか片桐が。ウ宮と
見るよりのがさじとさ、ゆるうちに鈴の音はや二丁目に
つれトリ引の見せのすが、き合方ウ行くをやらじと〜む
るたもとちわか合りんきか合しやうかふみか合ウル取ら
んとすればちらく〜さつ〜さつと横ふ〜き。おり
吉原の夕ぐれに片桐彌七白妙が。ゑにしを結ぶ雪のきや
ウウッ上げに太平記のみつぎぞと代々を。しゆくしておさ

して。にツくいつれない捨言葉いはしやんしたを覺へて
か。合中たとへしは別れても。ギン末は女夫と引よせ
て。しめた手と手に千代こめし。カン其嬉しさは此間セ「あ
ひたさのすつもるとかいてしやくとよむ。筆にか、れぬ
胸の内合牛王に起請かくたびに。三つのお山で三羽づ、
鳥が死ぬるといふことは。いつはりならず。おそろしや。
おもひきらんとすね言葉身をそむけてぞゐたりしが「い
ふかはつれ〜うちまもり。今さらそれは。何いはんす。
上々さんには十二人御大名には八人の色はゆるしじや。
ないかいなあふにははれぬ辛抱は。はだか人形のもんど
ころ。よふにた目もと口もとに。ほんとはよぶのがうれし
うて出もせぬ乳のはだにそへ。しんきで。あかす曉はと
りがなくてもかね合カハついてもにくうないのがうらめ
しい。ウお前と一緒に暮すなら。深山の奥の一つ家でま
まもたこうし布織つてしんくしんほうするとでもかはい
男と添ふ氣では枕に榮華はあるはいな。合ま〜にならぬ
がうき世とは。りやうけんつよい人さんが言初めさんし
た事であるよしない義理にからまれてきつとたてぬくわ

めける。

七 卯華姿雪曙

富本やまと太夫直傳

「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ。かぎりしられ
ぬ。物思ひ。妻ゆる。迷ふ。小車のめぐりあひたさなつ
かしきふたりが中のかねごとあだにならばやあだ枕心
にすてぬ契りとは我身にならで白玉の露の命と消えて行
くその佛のあり〜とおうしうが立姿 富十郎出恨も戀もの
こりねの合もしや心のかはりやせんと合思ふ疑ひ思はぬ
人のむごやつらやなく涙身にもおほへぬなき名を付てな
げに。煙となし給ふうらめしや合恨みながらもいとしき
中の上むかし忘れぬ其とりなりはかけろふ姿もろ共に小
妻とり〜打つれて ナゲッ「さ〜の。一はの。すてをぶ
ね。カ、リよるかたわかぬも、千鳥。霞がぐれに合ねをと
めし。すねた目もとにまねかれてうは氣鳥がかはゆらし。
縁のもつれにつながれて。わしが心のたけくまの。ギン松
がれんりをむすびそめ。ぞつと身にしむ戀風に。つとめ
のうちのひるさへも。ウねられぬ程に思ひ詰。合こちや千
入年も萬年も離れともないわかれしなかはいらしい顔を

たしをばまだ。疑ふてかいな何じややらほんに命を捨て
るかはいやと思ふてくれる氣もなふて。むごいつれない
どふよくと粹ほどぐちにかきどく。詞巴之丞もてあつ
かいオ、どをり〜こらへてたもと。手を取りすぐに中
二階はしごのたつなみばた〜とをりてはかこちはなさ
じとひかふる袂振きる袖取亂れ〜しぬしやたれたそ
がれ時の。夕嵐ぞつとこはほも身にしみて姿も見えぬ一
聲の。手にもとられずちらく〜。花壇の蝶の白粉も
ウウッ上草にのこしてきえ〜と見失ふてぞふしまろぶ。

八 四十八手戀所譯(相撲)

富本豊前太夫直傳
作者 金井 三笑

「逢ひ見ては戀こそまされみな瀬川水のながれのせかれ
はせねど淀むもつらき其人をうらみながらもうちつけに
何といひよるかたさまへ〜のみづぐきや筆の仲人はな
をさらに命毛かけて二世三世とは伊勢の海ちひろの濱に
拾ふともよみつくされぬ我おもひ 田「花の顔見せばや木
木の雪のくれ月の光りの寒ければ水に浪なきあつ氷解ぬ
おもひを慰むる祐安が雙六のさいはつ顔に鬼王が盤の相

手とおしなをり戀目々々の筒の音やそのあらそひぞたのしけれ祐安はすぐろくの石に氣くばる其ひまも勇氣撓まぬ嚴重の侍に似付かぬ喜瀬川が思ひを文に戀すてふ祐安心に濟まねども景久よりの心ざしむけにもならずとしばし胸をぞいためしが「コレ喜瀬川學行の妨とつとといんでもらをふよと又見臺にさしかり物をも得言ず目もふらず一心不亂の軍學はとりつく島もなま中にいはでぞ忍ぶ喜瀬川が耳に口寄せ何かさゝやき吹込む鬼王呑込む喜瀬川うれしけにそんならお前を相手にして心のたけをいをかいと袂にすがりこれ殿御今さらいふもまだなれどもも思ひに伏しばのこるばかりなるむねのうち言ひたい事も岩本の神さんかけてと其文に心のたけをあかしても濟ぬお顔の合にくてらし女子あたりのすけなきはかはいお方へいひわけか其氣づよひの身をせめていととおもひが増はいなとすがりくどけば鬼王はとかふあいさつもちあぐみしばし小首をかたむけて「調モシ且那此喜瀬川殿はすご六が上手じやけにござりますちとお相手になされませぬかといへば祐安「コレハ幸ひ〜と互に盤にさし

向ふ喜瀬川筒を取上て是申し祐安さん此雙六の争ひは見ぬ唐土の昔貴妃虞氏君の戀争ひ思ひは同じ思ひぞと綻ぶ笑顔冬のでつく重六あてやかにちわを戀めや流し目の仇に筒ふる雙六と河津は更に氣もつかず「コレ喜瀬川それそなた身にしまぬから其様にまきやるわいのそなた達は相手にたらぬ最早相手はこれきりか「調「股野の五郎景久雙六のお相手になるべいか「出「武士の八十氏川を行水のはや瀬の風のおとふて色の一座ぞござんなれたがあつらへの雪の夜やきみは素顔かおしろいか色でまろめし雪こかし「調ころけやすさよ仇つきむすめ娘々とたくさんそふにいふて袂のふきさへはらいもあへぬ袖ならでかたにかたけし一枝に雪をふせぎのひさご酒合土産ながら一口は我もなる口切戸口いそ〜としておとなへり「調河津殿御在宿か股野の五郎景久はつ雪の御見舞申すといふ聲聞て祐安は出迎ひ「調これは〜珍しい御來臨まづお通りなされませ然らば御免と景久はずつと通つて座になほりイヤ「調申し祐安殿此ひやうたんは貴殿のお口に合はふ様にも存じて飲よい初霜みぞれ酒けふ初雪の御見舞に

參上致した印迄と差出す祐安は押戴き拙者が心を慰めんとさきだつてはあの如くの美女を送られまた御持參のおもてなし重々以て忝ない何鬼王股野殿へ御酒一つ肴の用意早ふ〜はつと答へて鬼王は勝手をさして走りゆく。

○下の巻

景久は會釋して。詞いやもふ其許のお心づかいはとんとめいわく千萬。何河津殿。關八州にたれ有つて肩を並ぶる者もなき貴殿。敵になしてはならぬと存するから。源平二つの虚か實か。御心底を密に承りたい。調ハ、は、是は扱數ならぬ某を。御稱美のお詞何しに敵に成り申さん。拙者が心底の御返事は。此雙六で御目にかかせふ。調へ、コリヤ面白い。此股野がお相手にまかりならうか「拙者は白石。源氏の白旗「黒は平家になぞらへて勝たる方へ河津はお味方カ、リ「さらば雙六はじめんと。また、きもせず黒白の石の勝負の善悪さかい。喜瀬川そばで女氣のあんじくらし居たりしが。「あはや景久まけ色と。見るより石をつきくづし。兩手を組んでさあらぬ

同じ平家でありながら。源氏の白石勝となつたも本意ならず。是非一番と雙六盤。色引寄せんとする所。其手を景久むづととる。調「ハテ心得ぬ股野殿。河津がき腕ナ、なぜ止めなかつたな「サア。是は「是は「オ、それよ。あの梅が枝にくりし軍配。ひよつと相撲を思ひ出してさ。何んと雙六止めてこれからは。相撲で勝負をわけまいか。「此喜瀬川が行司して四十八手の戀の譯。相撲によそへて「はなそかへ「さらば聽聞致そふか「抑相撲の。らんじやうを。▼▲地かたるも聞くもとをつ國。ウ天竺にては佛在世唐土にては晉の御代。扱日の本にて始りしは。調「しかも人皇十一代。垂仁帝はすいなきみ。だきつかせたり手をしめさせ。觀覽あるのがおすきにて ▲御たはむれが誠となり。諸國の力者に命ぜられ。すまいの勝負ぞ ▼▲ウ「はじまりオトシける。■調大和に。たへまのけばやとて。毛だらけ男の毛だくさん。毛ぶかい。髭地のけんまくにて。けんべきはつてぞ ▼▲ウ「控へたる其骨柄こそゆゝしけれ。合▲調相手に罷り出雲の國。のみの宿禰と申せども酒は少しもならの京●「九重匂ふ花角力▼▲地大

内山の春の色 長其立合も百敷や桃に櫻にたを入柳 合●「色
 香争ふ▲其風情 合「前代未聞の合「はれわざは▼▲「花々
 しくぞ見えにける合「けばやは。人びやうほさつなり
 合いろあさぐろくさしかたにて 合●「意地のわるそなお顔
 つき■「何を合▲「すくねは人びやう力士なり。かしら小
 く合すそぶくら 合●「しかも色白よい男。心だてなら器量
 なら。ほんに女子のすくねさん。戀の手取じや●ウ「ある
 まいか。長いつかお前と取組んで手くだくだいて末かけ
 て。ウふかく大關ゑんあらばうれしかろうじやないかい
 な。合●「いもせによせし言の葉は。土俵のかたち圓にし
 て則ち天をひやうしたり合▲「柱に四方の共かたち。地に
 なぞらへし地てんだい合■「暮は北より引はじめ。北へ廻
 して引おはる 合▲「もとより「北は。陰にして■「水にもと
 づく陰陽の ●「妹脊の中も末かけて。 ▲「結ぶといふも合
 ▼▲三人「すまうの名●ウ「戀のとりもち取くみに。忍び大關
 逢夜を便。人目關脇いとふても。二人が中に小結の合約
 東かたきいわた帯はやかぞいろの合まへがしら。あらは
 れ月の。恥かしや●カ、リ「喜瀬川はかいふしく。すそひ

きあけて土俵真中軍配もつて歩み出で。詞ひがしのかた
 やは股野さん。にしのかたやは河津さん。▲源平勝負の
 ■「はなすまふ●「イザたち合ふて▲「イザ■「イザ▼▲「イザ
 く 三下「ひきすて合おいなけ合かいなぞり。詞ノルアリ
 ヤくくくくヨイヤサ 合方上ル「やがら四つがいひざや
 ぐら。コリヤくくくくヤツトセ 合方イロノル「ひねり。
 つまどり合大ごしやアリヤ。く。アリヤくくくく
 ヨイヤサ合ウ「かものいれくびこしぐるまコリヤ。く。
 コリヤくくくくヤツトセ 合方ウ「しぎの羽がへしむ
 かふづけアリヤくくくくヨイヤサ ノル「かくればは
 づし。合いればあます合とくくわのせちゑのとりあは
 せいさむ心は合はるごまのウノルたちあがらぬがふぜいに
 て四十八手もなをたらで百手をくだいてとつたりける
 合ウ「萬夫不當と呼ばれたる。股野河津が取組は。めざま
 し。かりける次第なり。

○四十八手戀所譯

富本豊前太夫直傳

をし鳥の段

●上ノル「鏡影水波。月の雲。ウギン我にきやうがいの念慮あ
 り▼▲「實や拙なきうき世ぞと思ひ知れども捨やらぬ。ウ安
 執の縁こそキン恥かしけれニ上リ「一人伏す蘆のかりねの物
 うさを。誰かはとはん哀れしる。合上ルおしの衾のいたづ
 らに。合あれにし床や散る涙露とこたへてもろ共にきえ
 ぬ此身ぞ恨なる合方●「黄昏なを時をしる。鴛鴦ひとりい
 ねず。情なや夫鳥をじやけんの矢先に射止められ。あま
 つさへ其血汐生を隔つる人界の。祐安殿を迷はさんと彼。
 仇人の股野が企み。告知せたく二つには。我夫鳥の血
 汐の酒。五體にうけし祐安様こそしたはしく。思ひをの
 べんと夫鳥を。こがれてこゝに。迷ふはいの●色水鳥の下
 タ、キ「はかなきあとに年をへて。歌ガ、リ「かよふばかりのゑ
 にこそありけれ。ウレヒ中其言の葉も身に白雪の。ウつもり
 積りしあいしうりんる情かはすも戀のしがらみ。長色の
 ふちせと水の 合かしわのうきしづみ。申身はうきくさの
 根をたへて。ウさそひし物を神沼の「アハフシまこもがくれ
 のひとりねぞ。ウうき身ながらに夫鳥のこれまできたり。
 ウ色さむらふぞや●詞「ありし契りのかはらずば。今血汐の

かびなせし。祐安殿の五體をかり。まみへてたべよ我夫
 鳥。逢たい。見たい。なつかしい。おなつかしうござん
 すはいのふ▼▲「歌ガ、リ「まこもかる。文七堀江に。うきてぬ
 るをしの霜の劔に。あらねども。ウじやけん矢さきに
 つらぬかれついに此世をはかなくも。合さりし契りの忘
 られず血汐にかびして祐安の 長五體をかりのもろはがひ
 ▲タ、キ「かはす言の葉。むつまじく有りしそひねのいもせ
 川。ウうき世をわたる花いかだ。カンはなれくくにウなる
 ととも。ふかきちぎりの思ひ羽。は。長かさまじとこそち
 ぎりしにウ今は蘆間の水すじもたがよひぢとヌエフシな
 りたるぞや●ギン「ねたまし小夜のとも鳥やいかでか夫を
 かさゝぎの。ウはしのおくしもふくる夜毎のひとりねも
 合上ルカンあひたや見たやこひしやと下思ひ亂る、身すがら
 を。ウなにうたがふてつれなやと。恨かへすもうらむる
 もなくねはカハリハルオトシなくてあはれなり。▼▲下ハシル「こ
 の身もとよりうへ木にあらねば合うてなにかやくギンか
 がみもなし。ウ煩惱菩提は法の道づれ合ウア、ラたのしの
 契りながらも合●ウタヒ「これ迄なりやはなは根に▼▲三下、

「鳥は古巢へかへれども。かへらぬこの身合此世をさりししんのほむら▲ナホルウ」こがる、胸はわれとても其あだ人をうらみのつるぎ羽比翼の思ひ羽▲ウ中をへだつる罪障のウノルくもきり起つて庭のおもめい。もうく。ろうく、スエルたり▲イロ」とくよりうしろに景久が。夫と見るよりつゝ立上り●合ア、ラあやしき女が振舞。又祐安がああ姿扱は血汐をもつて。河津が五體へ鴛鴦の精魂乗移り女鳥と契りかはすよなア。血氣の景久こたへ兼ね。ひらりと抜いて切りかくれば●ツシぬけつくつつ祐安が五體をくるしめ惱亂しかつばと計りに伏轉ぶ色「景久聲をあらゝけて。詞此股野にうらみをなさんとたくみしけしやうめ。夫こそは思ひも寄らず。尋常にそこ、立去るまいか。●ツシミ歌のふうらめしのあだ人や。ウわが夫鳥を射とめられうきねの夢のさゝ入めぐとかりのあふせの今もなを。ウさまたけられしうきわかれア、ラ思へばはかなやなア。ツシミツタ「水に住み。雲井にかける心にも。▼▲下ノル「うきよのあみははなれ得ず契りの合末かけて残る心も有明の。ウ月は五障の雲はれて。空も緑の柳にて。

どりかはゆらしおろしあゆみや八文字 ナゲツシ「松の位にナ。ときはの色は入ア、シナ。千代もヤン。かは入らぬ仲の町。取地戀の暗路に提灯の。紋日入はたれを待合の。ウ辻たらみごとかこちごと。ウきかぬ顔してそれなりにカツキユリふりゆくものは傘に。顔つゝましき忍び路や。長地夜も深草にひきかへて淺草寺の名に残る。小町櫻のギンスエ返り花詞シタリア、見事々々。こちらを見れば。奇麗な羽織衣裳も當世出立。またこちらを見れば可愛らしい。情盛の傾城姿。ア、月ならば十三夜花ならば初櫻。物に譬へて申さうなら。吉原の春。龍田の秋。月といはふか。花といはふか。てんとたまらぬ命々。ヤ、よくよく見ますれば。あなたさまは深草の里にかくれなき四位少將さまでござりませぬか「オ、それがしが身の上を。よふ知つて居る其方は。何者じや「ハイわたくしは御覽なされます通り。傘賣でござりまするが。小野小町さまのお歌のお陰で。百日餘りの旱魃が。忽ち雨と降りかはつて。民百姓は言ふに及ばず。合羽傘下駄足駄。賣れると申す事は大抵有難い事ではござりませぬ。それ故何がな小町さまへ御奉

ウ花は紅とへだてなき。ノルフシ草木國土みな佛體と聞く物を●カン「情なくも夫鳥を矢先にかけてし其恨。思ひ知らさん思ひ知れと。▼▲ウ「しんのの劔羽とぎたてく合つばさ羽うつて立かゝれば。ウ猛勇烈士の景久が劔におそれてたぢく。双は忽ち玉あられ。なをふりかゝる血の涙の目も紅にそめ渡るはノルもみぢの橋のかさゝぎか合聲を上げ得ぬおしどりののがれ刀の威徳におそれかけり羽たゝきとび上り。蘆邊をさして水煙形は見えずなりにける。

九 通路小町も、よきいろの世中(關寺又は檜垣)

去既に勅命。中蒙りて。ギン古今集をぞ撰まる。地戀をかな序の其入中々に。長地小町が歌は古への衣通入姫の流れの身。春の花より秋の月。カンつい初雪に移氣もギン徒ら盛り色盛りウ情盛りもおのづから小野照崎のそこちかき。ウ名も吉原の文のつて菊も百夜ぞ。江戸かよふ神江、理や初戀ならば恥かしのもりの紅葉とてりもせめ。おふ戀の部を繰返し。たる九十九夜。タ、キ通ひ車のしぢならで長地傘のろくろの。工合よき名を橘の香に入匂ふ長姿とり

公いたしませふと存じまして。此廓へ参りましたものでござりますが。どふも合點が参りませぬは。四位の少將様ともあるべきお方が。そのお姿マアどふいふ事でござりまする「成程合點が行くまい。某事は文徳天皇より太政官の御正印を預り奉りし所に。何者とも知れず。寶藏へ忍び込み奪ひ取て立退く。此少將が落度とあつて。既に還流にも行はるべきを。聊かの手掛あつて。御正印を尋ね出し。再び大内へ納め奉るまでは。官位も召上られ地下人の身の上故此姿。此廓へ入込みしも。奪取られし御正印のありか詮議なすべきその爲ばかり。必ず世間へ沙汰ばししてたもるなや「また承りませふは小町さまの此お姿はナ「成程これまでも疑やるは尤も。此度惟喬親王の御即位あるにつき。小町御前をきさきに立てんとある故に世を忍ぶための此傾城姿。何と合點がいたかや「ハア、段々様子を承りまして。驚入りまして御座りまするが。とてもこの事に此廓へお通ひなされましたお咄を承り度ふ御座ります「オ、成程々々この小野照崎の廓へ百夜が間通ふた其嘶を「さらば承りませふか「さればにや少將

は百夜通へど夕月の。笠にふる雪つもる雪。長地通ふみの
 わのはてしなきさまをまつちを夕江戸へ合てけふも廓に
 立盡し。ゑゝたちかへもなき神社。ウみたらし川にせし御
 祓。神もつけずとなりふりも。かさしのばしきフシその風
 情カン「それ其お姿を。つれえづれと眺めせしまにひと、
 せの。ウあはぬつらさもい、おくれ。ウ積る恨もどこへや
 ら、フルついと出雲の手間の關。カ、リあきがこよとは先ぐ
 りにたよりをしぎのも、羽がき。ウ中文に姿のかくれね
 ば。見たさ逢たさ懐かしさアハフンよふ顔見せて下さんせ。
 やいのくくと引寄せて羽織の袖へいる、手は嬉しくも。
 オトシまた有がたしカ、リ「少將はすけもなくそしらぬ顔の
 煙草盆。煙管さわりもあらせうしりきみ。オドシちらしてお
 はします」始終をじろく、六郎兵衛傘屋と。ぞオトシ笑ひ出
 し詞さつてもさても扱も。扱もさつても。合どちらを見て
 もギン戀の唯中合浮氣の最中。詞うまい盛りへの、口
 舌の段それ女郎買は四ツ手駕に乗て飛でさんらんし 中地
 猪牙は蒲團を着てこいで徘徊すといへり。ウされば今す
 る口舌も合元せしちわにかはらねど。ギンじたいわれらも

戀路はゑもの。様が姿に絆されて。ウ木幡の里が馬道を。
 君をおもへばかはだしのほり詰めたる氣も上調子たい
 こ末社が騒ぎ唄 二上「さんちやはんゑいゑそゑんめい
 合ぎんぐる見ちやううがんきよ。ウあいもせふすいもせ
 ふサアすみのてのきうはつたらきうしやのきうせんし
 よ合いとしゆてならぬく、詞るゝるつてんそつこでせい合
 よそじやはやらぬかご島ではやるとさサア三十振袖四十
 島田ちやんろく。舟はせんぞいろは萬ぞいろとま、よ
 サアからつさざへむどの、たでの船ちやんろく、合舟は
 せんぞいろは萬ぞいろと合ま、よサアからつさざへむど
 の、たでの船ちやんろく、「エ、なんのことじやいなア
 少將さんわたしがこゝろにみちんも悪い心はござんせぬ
 かんになんして機嫌直して下さんせ」ナニ下さんせコレ百
 夜がうちといふもの人に手足をはこばせてアノしらじら
 しい顔はいのこれまでの心づかひといふものはほんに船
 にも車にもつまれる事ではないはいやい 詞「おんにはか
 けぬカドキ今宵百夜の數のそのうちに月にはゆくもくら
 からず。ウ雪には袖を打拂ひ合扱雨の夜は目に見えぬ。

鬼とやいはん恐ろしきやりてがカハリつけるカ、リ蛇の目
 傘見つけられじと軒の棲白く明ッキユリたる衣々も。もの
 スエフシありけなる打急ぎ下ウレト「小町は涙に聲うるみ。ウ中
 又かんしやくを起してかウ常の心をよふしつて。カンすま
 ぬお顔をそれなりにかへさりよものかさり入てはウ「せ
 けば逢たし逢ば又末の末入まで案じられ。カンよくく、因
 果な中々に親のゆるさぬ下紐はとくもとかれぬあつごほ
 り。ウ中百夜の數の三つならば此身委せて打解けて。ウつも
 る恨がき、たいとそのあすをまつ朝がほも小春へ残るう
 き命。ウなまじながらへ身のつらさお前にひぞられ恨ら
 れ。おもはぬことにいひわけをなんと詮方なく涙、ウ袖よ
 り膝へさそふカハリ水いなせともなく見えにける、ウ「そ
 の眞實な心とは。ウおもへど常の戀のふし。ウ隔てはせじ
 といひかねてもじく、四位の少將は。手持無沙汰に見え
 けるを「イロ」かくては果てじと傘屋アレ、ギン曉の時鳥すつ
 てんべんから口舌とは合チ、く、ちつとつ。よ。す
 ぎ山のしやく合のつけにほりの船宿に。爰は任せて機嫌
 よふ。ランドよい中おどりの顔見たや「イロサアくく」と

すゝめられ色で扇の末廣やかきはかはいの眞實が戀の要
 の地紙よき。對の模様を三笠山 二上「傘をさそならほん
 に春日の神かけてそれへく、合相合傘の末とけてつまお
 りがさとせいもんをきつと立傘時雨がさ合いつ年明の日
 がらかさ月のおかさを指折りてかぞへ手傘の嬉しさはた
 れしら張りの其中もそれも春日の神かけて、カ、リ「そばか
 らせわを八雲立出雲やえがきつまごめに小びやうぶ立て
 しきぞめのよぎよまくらよ三つぶとんあるもえにしのは
 じめごと。むりにふたりをおしやりてさて。仲人はよい
 のくち。ねさせてこゝにおきごたつ。つもるおもひぞは
 らさるるこゝろうれしきふせいなり。

○下の巻

●平家五繼かりに形をなし。中ゑんぶに通ふ。ギン關寺や
 ▼▲下人もとがめぬ老の身のウク戀にまよひし。コハルたまよ
 ばひ、ウタヒ「あしたに一體を得ざれども求むるにあたは
 ず▼▲ウ色にかまけて此年月を。合ウ入戀しくと殿御を戀
 て遂に一入夜の契りさへ▲▲ウ歌ゆるさぬ中の情入なや、ウ
 タヒ遂には老の鶯の▼▲フシ古枝にかへる ●ウタヒ道もなきと

よ鉢ヲ、キわれと我身を白川の三つわぐむ ●ウ姿はづかし
 かけぞなつかし下戀せしギン人をねとられて枕一つの物う
 さに。よろほひながら來りしぞや。ウうらめしや。ウう
 らみながらもいとしさはなを深草の花薄ッ露もおきる
 にわすられずこれまで参り詞さむらふぞや ●詞もいとせ
 にひとせたらぬ九十九髪。「われを戀ふらし佛にたつ
 ■「百年に。ひとせ足らぬ九十九髪 ▲われも戀ふらし
 佛にたつ。ハテがてんの行かぬ。此歌を口ずさみしは何
 者じゃ。ヤ、それにイみおはするはそれがし若冠の砌
 先帝仁明天皇御惱平癒の祈願のため。兄與風殿につき参
 らせ。近江の國多賀明神へ参詣なす。ころは嘉祥三年文
 月七日。いまだ残れるあつさ強く。ろじの砂をもほうず
 るばかり。其暑さを避けんがため。所は江洲關寺の門前
 にて。水やあると乞ひしかば。とある内より老女立出で。
 われに水をあたへし其時の老女。最早や年経て十年あま
 り。よもやとは思へども生死のそんほうはかり難なし。
 夫かあらぬか身の上を此與則へあかしめされい ●「そ
 んならそれをお忘れなふ ▲「いかにも少將覺へておる ●

「ア、嬉しやく、夫れを覺へてゐさしやりますからは何
 しに身の上をつゝみませう其時關の清水を汲でまいらせ
 し檜垣の老女は妾じゃはいのふ ▲「それく思ひ出すも
 一昔其時の檜垣の老女であつたかいはのふ ●「まだその時
 は侍從之助與則様とてかはいらしいおちご様 ▲「今は官
 位も四位の少將 ●「あの藤原の與則様 ▲「そもじは今に
 年ふれど ●「其折柄の檜垣の老女 ▲「ふしぎにめぐり逢
 坂の ●「關の清水をむすびしも ▲「ふかいるにいで ●「あ
 つたよのふ ▲「時に老女。尋ねたいは。あの江洲の關寺
 から。はるく、遠い此廓へは。どふいふ事でごさつた
 ぞ。その譯は ●「サアそれは ▲「どうじや ●「文士」とはれてい
 ふもはづかしや其文月に逢坂のギン關の清水に影とめし。
 合ッ月の雲井の御方を ●「クドキ」ふつと見初めて戀がれ。此
 年月の物思ひ。あすをも知らぬウク老の身の佛三昧とり
 置て。ウ結ぶの神に手を合せ後生の爲の念佛も珠數には
 あらでぐちをくり。カンせめて一夜さしつほりと抱てだか
 れてね、するならば。ウそれが未來のみやけぞや情じや。
 慈悲じや善根じや我戀かなへて給はれと。水に皺寄る涙

川白髪のとれオトシ雪や解ぬらん ▲敷ならぬ身の此少將殊
 に當時は世を忍ぶ身の上。あるに甲斐無き某を。さまで
 執心との志はうれしけれど。年にも應ぜぬ老女の願ひ。
 假初に言葉をかはし。手に手を取りし。此首尾を初音の
 けふの思出に。サアくはやう關寺へ。歸つて下されい。
 あれくあれはたしか。こしかたにて聞なれし ▼「ギンカ、
 一浅草寺の鐘の聲八聲も告る山かづらツキユリ淺間になら
 ばはづかしの森の木隠れよもスエあらじ ●詞「イヤくど
 のやうにあらふとも枕かはさにやおかぬく。ヤナニ小
 町どの。少將さまは此檜垣のおぼが男にせにやならぬそ
 なたはどつちへなりといて下され。そのいにしへはわれ
 とても逢坂山の關寺へつらくも人に捨られしが。今また
 人を捨つるも戀。せめてはおぼがかたみをやらふ。コレ
 コレ是はわしが手なれし杖と笠。少將様じやと思つて大
 事にかけてもつて行きや ●「こりやまたあんまりじやは
 いな。身は關寺にありながら年甲斐もなき横戀慕。いひ
 かはした自らを戀の山路へすてるのか ●「いかにも山は
 老女が住家 ■「昔にかへる秋もなく ▲「月のとも人まどひ

して ●「今宵はそなたもひとりねしや ■「女夫の中を更科
 や ●「時にとつてのおぼすて山ゆかぬかくゆきおらぬ
 か ▲「正リ」さかりふけたる女郎花露の袂をしほたれて合上
 ルはれてあはれぬ因果同士いつか雲井に住む月の合都の
 むかししたはしくそなたの空とながめしが ●「ウタヒ」然る
 に月の名所。いづくはあれど更科や ■「取地」わけてそひね
 のあかしがた。長地心も須磨のうらみさへかたい石山うち
 とけてウくもらぬ中とちかひしを今宵の雲にへだて。ら
 れまたも涙の雨もよいかさスエ傾けてふししづむ ▲「コ
 レ小町御前思ひもよらず胸をいためてくるしうてどうも
 ならぬ水を一つたも ■「あいく、ヤこれく、我身には
 くまさぬく。今も昔のかけとめし關の清水をうきひと
 にいざくくんでまいらせう ▼「三下リ」置手拭に前垂た
 すき小桶か、へて合しやならしやならと。合腰は柳かお
 いその森か 合帯木がありとはみへのか、へ帯そこすむ水
 を汲ふよく ●「ウタヒ」向ふつるべの水鏡 ▲「カン」のふ淺間し
 やわれとわが身をくるしむる ●「ハル」苛責のつみ ▲「水は忽
 ちほのふとなり。猛火のつるべにねつてつの桶もさなが

ら三つ瀬川。冥土のせめをまのあたり。ふるひわなゝきくるくく合上[●]「あらたへがたやと身をもだへかつばと伏すと見えけるが此苦しきも誰故ぞや。ウ思ひも深き深草のそのあだ人を戀こがれ[▼]枕かはさぬ執着心[■]きづなにつながれまとはれて[▲]ウやいばにかゝりしなきがらの[●]上[●]こんばくこれまで[●]ハル來りしぞや[●]詞[●]うらめしやなあ。おこを深く思ひそめ爰やかしことさまよふ内。立烏帽子とやらんがじやけん[●]の刃[●]にかゝりしも。是皆汝がゆるなるぞや。小野の小町ともそはさぬくくともにならへ連て行き。思ひ知らせんおもひ知れ[▼]▲上[●]「おもひは山のかせぎにて。まねけど更にとまるまじ。さらば煩惱の犬となつて七重のくさりは切れるとも。未來永々生々[●]入世々つきまとい行く玉かづら梢を。引取し[●]のぐ風や雨か木の葉かばらくく[●]合[●]さらく[●]さつと戀風[●]合山風はやち風[●]上昔を今に吹返す小野照崎や小町塚江戸の名所と上榮えける。

一〇 反魂^{ほんこん}香名^{かうな}殘錦^{ざんしん}畫^え (反魂香)

富本豊前太夫直傳

らきの神ならぬ身は男氣にかねて互にとりかはす「守袋のせいしのからす神のとがめもいとぬは色より疑ふ心のくもり。牛王に起請書く度に。ウ三つのお山で三羽づ、鳥が死ぬるといふ事も。偽ならじ恐ろしや思切らんと元信は顔をスエルそむけて泣き居たる「遠山涙の露ちり程も今更に。惚れられたり恨んだり言譯するよな中かいな。馴そめから濃い紫の江戸鹿子言ひ交したは千代八千代萬年迄と結びしに。いかに男の癖じやとてあんまりむごいと夕顔の花さかせとはどふよくな。身は空蟬のうつゝなき。いはす語らず我心。ギン亂れし髪も亂るゝもつれないはただうつり氣の。もみぢも今に。葉をそめぬまだ白菊のうらわかく[●]合[●]ウ「あふたときはの二つぐし色といきぢをたてぬいた。氣だてが粹でおちついて。ハシル花色柄[●]をさしづめに惚れねばならぬとのぶりが。ウ宵の口舌をあしたまでもちこし髪[●]のつやぬいて。あふて見たならおもしろそふな男じやと。わしや見てほれた。それがいやなら其様に生れつかぬがよいはいなと。とんとひれ伏し正體も涙[●]オトシ[●]つきせぬ恨なき「四郎次郎ももてあつかい

ウ地春日野の若紫の摺衣。忍ぶの亂れ上かぎり知られぬ物思ひ[●]ハル地妻ゆる迷ふ小車の。長[●]地めぐり逢ひたさなつかしき二人が中のかねごとも。中あだにならばや仇枕心に捨ぬ契りとは。中我身にならで白玉か末の露かや元信が。下畫ぶすまは三熊野の。焚捨てたりしせいし紙。起請の煙立去らで遠山が立姿[●]上[●]「恨も戀も残り寝の。若しや心の替りやせんと思ふ疑はらさん爲の[●]ギン昔忘れぬそのとりなりはかけろふ姿もろ共に。小づまとりく[●]打連れて[●]ナゲテ[●]君はつらしと恨むまじ[●]中[●]替らぬ笑顔につこりと。ハル川の流れも枝しだい。筋次第なる行先は。ながれく[●]てまたもとの月日を指で數ふれば。きのふけふとやあすか川ふちは瀬となるよぞつらや。鳥と鐘とは此かみさへもすてまほしさの御言葉。其戀草の種蒔捨て今の世迄もそんつきてハル地千草結びの女[●]夫[●]間[●]深[●]いなみだの種ならぬ。袖に移れば美しき花の鏡の顔と顔。あはせて見てもあひかぬ[●]地[●]口舌した夜のかみじやとて「人にめだつとかはいさに女心のくどく[●]と「泣いてみたり「笑ふてみたりわすれかねたるつたかづら「ながきいもせはかづ

此[●]上[●]ウ「紋日々々をかぞへく[●]てくるわ通ひを愴氣せまいとてそこでかね打て。かねをうちやいの。ぐはつしぐはつしと打ちやいの。鐘は曉[●]合[●]上[●]七つおきして別れを送る禿が振袖おしやかたみのふくさ落せしあたらものを中ちつくり茶巾ほど紅染にくらして。端々[●]から梅唐松から花唐草から獅子をぬはせた。花も紅葉も散らば散りぢり[●]合[●]おとせし妻の有ならばうき世は住よかるらん「サアおじや寝よふと。カ、リ手をとらずに中二階階子のたつなみばた[●]と。おりてはかこちはなさじとひかふる袂。ふり切る袖のみだれ[●]しぬしやたれ。引取たそがれ時の夕嵐ぞつとこはけも身にしみて。姿も見えぬ一聲も。手にも取られずちらく[●]。花壇の蝶のおしろいも草に残してきえ[●]と見失うてぞふしまろぶ。

一一 夫婦^{めうと}酒替^{しゆかへ}ぬ中^{なか}仲^{なかつ} (鞍馬獅子)

富本豊前太夫直傳 作者 中村 重助

二上[●]ウ「風の誘ふ花の雪ちれば狂[●]じて柳髪。合上[●]「雪はとんで散亂[●]羽[●]風[●]に似たる。白妙も。長くるふ狂女の姿かや[●]詞[●]コレ其人に物とおふ。わらはが尋ぬる公達[●]の[●]▲

「ウ綾の狩衣たをやかに十六七の細眉にウかね黒々と粧し。ウお兒の旅におふ事の。もしやちらりと三ヶ月ならば教へてたべの里人と。うつゝスエルなみだにわけもなき詞ヤ、なんじや我君様はくらまにじや▼▲三下り長鞍馬の里はやせ小原。おはらぎかはいくゝ合おッはらめがひく牛に合戀しき人を打のせて。引て行ましよ我故郷へ。合小原木かはいくゝなウかはいくゝとなく鳥ににくやそいねをおこした。詞ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、おかし。いち足はやう。にけていたか。ホ、ホ、ホ、ホ、わらへくゝ▼▲ナホル下ハルわらはも人が笑はなん合さもしはづかし此姿。ウ小春へ残る亂菊とりなりうつす水鏡。御裳濯川や八十瀬川。合所は伊勢のかみ。二人神風に。つれてきこゆる神樂うた。詞惡魔をはらつて。そつこでせいウノル合方諸國めぐりに合あまてらす合ウ神をあきなふ合すぎはひに合襟にかけたる曲太鼓合詞ノルかしらに獅子のふたりま合一つよせて合詞打つたり舞ふたり月月の朔日十五日。中大つごもりも元日も文藝股引がけの旅神樂。ノルウわれとうかれる道草に獅子のまねしてカハリ來りける。菊之丞コレくゝ

て太神樂。逃る拍子に狂ふ獅子。こなたは戀のもの狂ひ合狂ふは獅子の冬牡丹獅子とらでんの合どふくともあはで果なん「我妻の鞍馬の方ときく物を。ウ鞍馬の方は。何處ぞとそこはかとなく▼▲走れば走るうつつなさ。とどむる男をふり袖に。拂ふ羽袖や翻る。ウしづのおだまきくりかへし。ウ昔を今に戀しさの合ウ▲戀には翹もある物をそふて行たや逢せてとアハツくどいつ泣つ正體なく▼▲ウッ取すがられて太神樂。乗かゝつたるなだの船よるべつきにし風情なり。●菊サアサア鞍馬へつれていてたもくゝ□仲「サア鞍馬へつれて参りませうくらまの道は東の方から西の方ヤア向ふから二人商人あれにたよつて道をとふべしとやこふ云ふ内商人が来るはくゝ▼▲二上ッ「そのやおも荷をナ。さもかるくゝと日永の村を賣ありく餅と酒とはふたばしらいせの伊の字はいとしい伊の字色に出そよかほもみち。西へちろり合東へちろりアレ明星が茶屋過て●イロこゝらでさらば杖つき坂▼▲袖を引れるたてば酒酔ふたよふた酔ふたとな▲「ア、あぶないくゝア、是はきつゝいゑひやうの▼▲宵からおじやれが赤前

詞里人々々こゝへ來てたもや 仲職太神樂はそばへ寄り。詞見ればお若い女中の唯一人。お前方のやうな美しいお方のおそばへよつたならどんな太鼓のばちがあたりうか知れぬ菊ヤこれくゝそなたのつむりのは。そりやなんじや 仲エこれかへ是は獅子さ菊フウその獅子わしにかしてたも 仲エ、是をかしてくれい是をお前にあけては。わだしが鼻の下がひあがる 菊「そんなら我身舞ふて見や 仲合點々々。お望に任せつゝさらば神樂をはやそふか▼▲二上リ「抑神樂の其初天の岩戸の屏風のうちの 合ウ天の鈿女のこんたんに神の心を合とりはやし合申てれんてくだの眞實に合ナホル正木のかづらよりかけてしなだれかづら玉かづら。長啼鳥のとこやみにしつほり汗を角べ獅子。詞獅子はお家のでれつくでん。つくく見れば●詞クルてんとたまらぬしなものめ▼▲ウ「たれと寝て來た亂髪とこの岩戸のむつごとを。とはまほしやと寄せへば▲ウ「もとより狂氣のうろくゝと合▼▲長刀とつて打かくる●詞イロ「チツトあぶないはなのさき。▼▲中「受る曲ばち三尺の。劍にひやうすわざ物はこれぞちまきの玉はこに。追立られ

垂でせきや雲津の合門の暖簾に豆屋とかいて業平さんならはいらしやんせなア ▲詞「エ、エ、きついくらひどれそれ商ひ物のまんぢうの白子が砂に鳴海。それで人が桑名。四日市よふづの市にあらねども合ずんと濁らぬ酒賣の。ノル酒はうれども生れつき下戸でか、アが餅を喰ふ。フシそれで名代の夫婦まんぢう妹脊ざけ●「こちらはさゝがゑものにて。御亭が酒を香次第りうはくりんも底ぬけの酔たたいをおこそ村又してもくゝ庄野わるいとつめられて ▲詞「アタ、ア、ア、ア、久しぶりのつめり餅や又外の女とはつめり心が格別。てんとくゝ有難いイヨコ、ナさかくさの観音さまめ●「ホ、ホ、ホ、ホ、ア、そふいふて下さんすりやわしも嬉しうござんすよイカエ酔はぬぞへモ、ホ、ホ、ホ、ホ、ずんとよはぬによつて。わしや餅やサヨイカエナそれじやによつて。お前の酒をわしがのむヨイカエのんだによつてよはぬぞへ。よふたといはんすと又其さゝをついとこほしてのけたらば。そりやこそ深い。川はかも川あかす川小づまからけて詞アぞんぶりこぞんぶりこくゝ合ぞんぶりくゝこ詞オ、つめたオ、さ

む。ひへる朝霜あさられそれをいとふが酒のとく。詞ど
 れそのさゝをとひよろ／＼荷箱へこけかゝる。▲詞「ア、
 あぶないと起す手に▼鳥がおしへたしめ心いかないつ
 かな合 石薬師でも合るりの壺より酒の壺。とけて流れて
 泉川合ノルと、とか、とのなか／＼も合下戸と上戸の二道
 をかけて商なふ女夫どし。大谷小谷打過てねぎが五十鈴
 の聲につれ御社近く歩み来る。□仲「太神樂は聲をかけ
 詞コレ／＼二人あきんどさつきにから待兼たこつちへ來
 やれ／＼サテ貴様たちは夫婦じやの。○富十郎「夫婦とも
 夫婦とも亭主はいせ屋酒賣なり。○富十郎「女房は日向屋ま
 んじうりなり。□仲「ヤアまんじうり酒賣其酒とまん
 ぢうの効能此所で聞たい／＼。○羽「まづ酒の効能といつ
 ばもろこしにては。○富「ア、是々まんがちな其酒の効能
 もわしがいふはいなア。詞「サテサテ扱々々東西々々▼三
 下。酒は百味のおや玉にてまづ春旦のとその酒桃のひな
 酒曲水のながるゝ霞とよみ歌や合夕し御けんの日二酔紀
 の貫之が酒がめの。合かめはやしほのたむ酒に。やまた
 のおろちおのが身を酒にのまるゝ身の果を。御代の神棚

ぬ。こなんのやうな悪性がめつたむやみに磯せせり。知
 らぬと思ふてゐくさるか。よふ。知つてゐるはいなア。
 ●ノル詞「是は迷惑そなたならでかましの。長堀カ、リ枕二
 つが。詞おれがむねノルしつて居るではないかいやい。長
 カ、リ「枕が物をいふならば。ノル詞とふて聞たいサア爰へ
 出してくだんせ出さしやんせ。●ノル詞「ハテそれがどふし
 ていはるゝ物。フシ枕は木枕ひぢ枕。じたい合おのれに合
 ほれてゐるギン男心のてんしやうを合くゝり枕でいゝおり
 枕りんきするなら手枕で合ノル詞顔はり枕ふみ枕。■「是は
 短氣な酒屋殿。餅屋もあんまりつよすぎるわしにめんじ
 て此喧嘩酒にせふではあるまいか。▲舞カ、リ「酒はもとよ
 りすきびたい。悪性男にかまはずとわしにのませて下さ
 んせ。●餅屋のくせにくらひどれわれに呑せた酒のかけ。
 三萬合三千合三百三十二文もかされぬサアよこせ。▲「よ
 こにねるのが女房の役。ノル詞何のそれをやる物で酒屋の
 くせに餅喰殿こちらが掛か三萬合三千合三百三十二文も
 貸されぬサアおこしやおこしや／＼とせり立つる。●中
 に狂女のわけもなくすんど立て太神樂が胸倉とつて。詞こ

酒どくり。ふたつはなれぬ女夫酒。それで伊勢路の詞名
 物じや。○羽「またこつちもそんなら饅頭のいはれをいふ
 べし東西々々。▲イ「昔々大和路にしみ／＼ひつこい夫婦
 あり▼歌ガ、リ「あが佛とて守り詰合雨の降る日も。ひの六
 月もひつたりべつたり抱付て顔と顔とに肌と肌袖と袖と
 にものははせ。ふたりが中の子のやうにせいし染たる名
 によせて。ふうふ饅頭まんまるいおなかにやゝのうまし
 國▲「こんとんむるい。●「こんけんない。▲上々諸白。●上
 上饅頭とびきり合▲とび入すつし。●つみ込み▲く
 み込むめつためた。▼「口から出次第さ、きけんあとは
 たはいでしまいいける。狂女は又もかけ出しサア／＼／＼
 鞍馬へいかふ／＼我君様にあはせてくれいや。○「ア、申
 し申しアお前はお若いがコリヤ狂氣なされましたなこれ
 これそのやうにとり上げてはなりませんぬ心をしづめてど
 れ／＼わたくしがしやくをおしてあげませうとうしろよ
 りだきつくを饅頭賣はむつとして。○「是々こちの人お前
 はマア若い娘の子をとらへ何をさしやんすぞいのふわし
 や腹が立つ／＼。「イヤ／＼イヤ／＼きかぬ／＼きませ

れ男。ウなぜにおなかをカン此やう入にいたづらしやつた
 傷つけた。こふした身そらに成る上は爰をとつとつれ
 てのきやつれて走りやとせがまれて。■「やぶからぬつと
 棒が出て愕氣に枝がさくはいの。●ノル「枝どころか角まで
 がはへる女房はさつてのけ。▲「さつてやるならきり／＼
 と夫狀おこしやとなけちらす。▼腹立まぎれのなけ打や
 のほりつめたる紅葉ばの酔てくびふるすゝか山おにころ
 しとぞしられけり。○「おりに酒の荷の内にて幼きものゝ
 泣聲す。○仲「太神樂は聞咎めあの聲はと立あがる。○羽「兩
 人は中を隔てア、コレ／＼此荷の内には人には見せぬ袖
 笠雪のかさ。○仲「そこをばらつてひらくかさ。■とむるた
 もと。□「ひかふる袖。夫は乙女のきぬがさや。○ソレ／＼
 ソレ／＼。そつこでせい。▼三下。カさをさそなら合時雨の
 合里を合上ル思ひかねては行入千鳥合おもひかねては合行千
 鳥さりととは／＼うつり氣な合方。カさをさそなら合雪ふる
 合里へ合上おもひかねては行入千鳥合おもひかねてはゆく
 千鳥合さりととは／＼うはのそらそらふ手笠入もくらべご
 し。○「サア／＼我君様にあはせてくれい／＼やい。○「サ

アあはせませふくからとつくりと心をしづめてナコレ
 是こふとあたりのながれに静のかほ神鏡うつしまいらす
 ればフシふしぎや忽ち静御前心地すしき風情なり「太
 神樂はそばへより申しお心は付ましたかとへば「静は
 顔ふりあけ爰は何國ぞ」爰は伊勢路の御裳濯川。我君
 さまお果なされしと聞と其まうつとりと成ると思ふた
 が今明鏡のみづからが頭にうつらせ給ふとひとしく心の
 はつきりとなつたは「そんなら狂氣はさつぱりと」平
 癒したはいのふ「ハテ忝けない。我君さまお果てな
 されあとに残つて何とせうぞいのふ。其牛若様には秀
 衡方に御安泰。何わが君様は御無事でましますフ、
 してそふいふそなたは何者じや」ハ拙者は源氏譜代の郎
 黨お既の喜三太清次と申す者牛若の仰をうけごんけん
 うのあらかねめい鍛冶に打たせよと諸國をめぐる太神樂
 そつともお氣違ひなものはござりませぬ」ム、喜三太
 であつたかしてあれなる二人の者は「最前より明鏡にう
 つる姿はおほろかけ年しらぬ岡部の里の人とはこたへ
 ぬ先にいぬぞとがむるあくまをばらふ獅子こまいぬ」犬

カンひかれてく引とめられてまよふて。入ばかり居り
 ました▲野狐の身ぞとも白綾の錦の袖にいだき上げ。此
 年月の姥狐乳房のふへのイロそふうへは。何とぞ静様の
 やしなひ君となされそだて給はらば源家のしんは守りの
 われく夫の願ひのしんきやう賜はるものならばモ是に
 ましたるよろこびは。●「ござりませぬとひれふして。悦
 び涙の玉あられ。人間よりはあはれなり。」「ヤイ源九郎
 汝が守護の此明鏡今の功によつて下し置かるゝぞ。」「ハ
 アハア、有難やナアこの上は源家のうぢしんたとは。平
 家の大ぜいてんその山へ立籠るとも。●外記「我が通力は
 若君につきそひてたとへばひよどり一の谷險阻をよぎて
 逆落し合いさむこまどり鶯の小枝を傳ふ春の日のイロ赤旗
 合白旗錦して合陸には源氏の矢先を揃へさし詰引つめ射
 て落す。フシ赤間が關壇の浦船には合主上を始め參らせて
 合波にたゞよふうたかたのあはれ平家はかたむく運源氏
 は秀る御威勢疑ひあるな々と告る。吉じぞいちじるき
 」「オ、でかしたでかした六とうの三略も△戻れば。」「も
 ぞる。」「我が故郷。」「夫婦もろとも。」「くさがくれ。」「うれ

におそるゝ二人のかたち「サアまつすぐにあらはすまい
 か「ハア、おそろしや勿體なや其明鏡の威徳といひ「獅
 子こまいぬのおそれによつて」はづかしいわれくが「身
 の上を▼▲文七」とはれてつらき草の床。はるゝ時なき露の
 たま●かゞみの威徳に身の上をあらさまに申上げます
 そもわれくは。天津彦火の。にぎの尊に仕へ奉り。
 度會の郡。上山田の原に年へて栖めるフル末社の狐で。ウ
 ござります。詞そさのをの尊白鳥とけし。給ひ。ウ熱田の
 方へ飛び給ふ。ウみかけの鏡にうつりし故詞御名を白鳥
 の明鏡守護するはそれがし。イッばへかへさぬ其内は官位
 もけづられただの狐のあさましき。ウレヒこれなるもの
 ちぎりをこめ再びくわんに進まれず。カン戀入したふ身は
 野狐人入偷いづれ入へだてはなつびきのむねの炎入は螢
 入火の▲長澤にうつろふ影をみて我は化たと思へども。
 月の鏡にありくと形をあらはし。はづかしや。」「私は日
 向の國姥が嶽の明神につかふまつる女狐でござりまする
 源太丸さまの乳ぶさのふへにひかれておもひ設けず源九
 郎殿と二世のかたらひサなんほ畜生の身でも輪廻には●

しき中にも悲しみは其わこさましんじつの子のやうにお
 育て申し今別るゝは静様名残が惜ふござりまするはいな
 ア▼▲下ギン「千草の種の花の君。別るゝ事のかなしさと振
 返り。見かへりくゝのびより●フシ「妻が寄れば▲夫がへ
 だて●おつとがよれば▲妻隔て▼▲名残は盡じ夢野なる
 しかよりあはれ草隠れ。露も洩さぬ故郷へ別れて。こそ
 は三重「歸りけり。

一一一 其俤淺間嶽(あさま)

富本豊前太夫直傳

ウタト「あわれいにしへを。思ひ出づればなつかしや。ゆ
 くとし月に關あれば花にあらしの關守も心よひよびごと
 の白雪は。ハル地茜さす日にとけてスカスゆく。ウ妹脊の中
 のうらみ事。長垣かたくもいわにはなれをし。ギン京の小次
 郎すけとしが。タ、キなごりおじかの命毛も。中地きのふの
 露とはかなくも。ウきへて此世になきつまスカスの。ウ胸に
 思ひの煙ギンとは色香のかほりにひかれるたまはむかし
 のひとつまへありしくるはの其まゝにおうしうが上ル立
 姿。菊之丞出二上「恨も戀も残りねのもしや心のかはり下や

せんと下思ふ疑ひッはらさんためのせいしをば下なぜに合
 煙オスとなしたまふうらめしや合ッ上ルはやくもかはる飛鳥
 川中ギンきのふの誠けふのうそ。なげの情のうらみをも合
 いはでこがる、ッ胸の火のけむくらべんあさまやま可。
 四郎五郎「ヤア／＼／＼そなたはおうしうじやないか。どう
 してマアこゝへはおじやつたぞいのオ 菊之丞」たゞ忘れ
 ぬは互のこひぢ。お顔が見たい。戀しい。ゆかしい。な
 つかしいおもひこがれて。これまでまいりましたわいの
 オ四郎「オ、よふきてたもつたのふ。アノそなたは人手に
 かゝつて死にやつたときいたによつて。おりやもう大抵
 や大方あんじてるたのに。マアよふ顔見せに来て。たも
 つたのふ菊」わたしは此やうに思ふてゐれど。水くさいは
 お前のお心。ほんにあんまり四郎「ソリヤ何がいのふ菊」何
 がとはアレあの 四郎「エ、きしやうの事か」アイナア歌カ、
 「あさい心とッしらいとのそめてくやしきなれごろも。
 ヲありしながらのひとつまへ地小づま揃へて。しどけスカッ
 なく。風に。柳の 四郎「吹くまゝに。ッまかせるはずのつ
 とめじやとても。ッ」いやな客にもひよくござ合おもふ男

の山鳥の。▼「おろの鏡のかけをだに」ッみぬ目にくもる
 うす月夜。▲上カ「ねやの障子に佛もれてもれてうき名の
 流れて末は。ついのよる瀬の浪枕」かはるまいぞや▲か
 はらじと。ッ「筆にちかひの神かけて。ッすみと硯のこい中
 をたが水さしてぬれ衣の。なき名を立てむりな事。▲」ゆ
 ふべのとのこの夜すがらにせなかそむけてものいはぬ ●ッ
 「しゞまのかねのたばこほんきせるにとがのあるかいな。
 こちむかんせとよりそへばひんとふりきる。袖の香は
 ■」たれとねて来た移り香と ▼▲」しらべのいとむな
 づくし。鶏トリのなくまでッ口説して ●ッ「つめりしあとがこ
 れこゝに ▲紫武部が筆章。女のうへのしなさだめも。
 りんきは下ほん。下しやうぞや。いたらぬ／＼ 四郎「コレ
 コレおうしう。もふそなたもそのやほはぬけそふなもの
 じやぞや。ちつとすいになりやく／＼ 菊「なんほそのやう
 にはしやんしても。うつちやつて置いたなら悪性のし
 あきであらふ。ほんに油断がならぬはいなア 四郎「ソリヤ
 たれがいのふ菊」アノお前が 四郎「なんと菊」これ ●クドキ」じ
 つとひきよせ引よせて 詞ほんにまあ ▼▲「ッ」ル」につくい

おさんがあるはいな此頃のしなしぶり ■ッ「きいた夜す
 がもよしそれとても花ぞめの。カンうつろひやすきくせ
 じや物。合露のかごのたのしみならば。ッだんない／＼
 せきやせぬとたしなんでみてもおちつかぬ ●「心のこま
 のみだれがみゆふにい
 はれすいへばゑに。か
 ける合／＼と口くせに
 いふたおまへにかけら
 れて。ッのほりつめた
 る戀の山。うき名いと
 ふもしよての事 ▲「い
 ひたてられて ●「うた
 はれて ▼「わざくれ
 ばしの名にたどる。三
 下り しゆびのあいづの

まぶのひるじやと短夜を。夢も結ばぬむつごとに。ッ
 らみいふたりわらふたりわかれにたてしせいもんは。一
 中千も二千も三千も。ッ世界にひとりの男じやとたのし
 む中を。ッむらくもの。合にくやおもはぬうたがひに。
 あかぬ別れの浮世の
 なごり。鴛鴦のつる
 ぎ羽われからとつら
 ぬきとめし玉の緒の
 ■「くるしい。▲「かな
 しい ●ッ「口惜しい。
 カンだまさされた身
 は。何がなるしかも
 其日のめぐり来て。
 ヲきやうとしらでや
 わすれてや。ッせめ



はこばしご合ギン手くだになれしうちかけのしたにながる
 る引合いさや川。ナホルわが名もらすな。つけわたる。カ、リ地
 八聲のとりのとりに／＼に。合長よそはきぬ／＼是からが

て未来はちがひなくハルはすのうてなに。ふたりねの合▼▲
 「ちかひをたのむきせうをば。上カ「けむりとなしてのちの
 よは。●「そはぬ心かどうよくや。なさけフシないぞと身を

もだへ。なげけばともに。なみだぐみ▲カ、リ「やがて此身も葉末の露と。ウきへてゆく身中ぞ。二世かけて。ウ誓いし起請はこれ。合 此むねにあり明の。月はくもらぬ西のそら。とをいくに添おうぞや。まつて居やいと手をとれば▼▲「うらみもはれて身のうへを。ウかたるもはづかしあさましや。未來のつみは現在の果によるものをさなきだに。おもきがうへの色さよごも。上變るまくらのかずく▼▲ウ「ゆびきり。●「かみきり▼▲「いつはりの。きせうのちしほはぐれんのなみ。うそのなみだのみづまさる。さんづの川のからくれなる。ウノルつるぎの山は此世からわれとウつらぬくやいばのくるしみ合。ひとのおもひにあこがれてこの身をこがすコハル「しやうねつの。合ギンほのふのせめももろともに。ならくのそこのそこまでも合。はなれはせじとつきまとひノルくるりくるくくくるくと。おひめぐりおひめぐり合ウ輪廻のくるま。ほんのうの。ウきづなにひかる、わがたまを。ウむすびとめよしだがひの合。ウつまよくと呼かはすこゑもみだる、おほろかけ見へず見へずみ。合ウまほろしのノルすがたはき

えてかけろふの。くわだんに飛こふ秋のてふ合手にもとられずちらくくく合ウ風にみだる、おしろいもはねに残して草がくれ。

一三 歌枕戀初旅 (薄雪) 富本豊前太夫直傳

江戸戀衣。きつ、なれにし都路を下離れて爰に薄雪姫。ウ女夫が世話になりふりもウあゆむ入とすれど跡へひく引細心は元の京入にある。ウタ、キ父の別れに母上のなげきもしらぬたまほこに右よ。合ひだりよ色つま平が。長はんちや合羽もくろふせし。ウ在所のいもふと妹智にか入かる身の上頼まんに。ウいなはいはじや去りながらギン三とせ餘りは音信もたへまを引合さして行く道のウ名所古入跡も姫君は。ウ屏風襖の合入繪そらごとウ初めて三輪のヒロヒおだ巻に長いとし殿御はどこにやらしらぬ思ひのうき旅路。ウツキエリカ、リまがきを竹の杖よりも忍ぶ姿のかさぎ寺小妻からけて引入上て取なりかろきかへ合帯引結ぶとすれどしやら解やせめて一夜の天の川。ウかはす契りも薄雪姫。ウならばぬ旅のあらけなく歩行なやむぞ哀れなる 菊之丞「ほんにマア浮世とは申しながらお家の騒動よ

り互にお預けのお身と成りしを兵衛様のお情にてわたしら二人がおともとは申しながらはぬ旅にお氣のむすほれおいとしう存じます 金太郎「さいのふ思ひがけなきさい難も預けの身をばのがれ出でそなた衆二人の世話故に爰までは来たれども都の事も案じられ戀し床しの園部様どこにどふしてお出あそばすやら早ふお目にかゝりたいはいのふ 四郎五郎「御尤でござりまするもお氣遣ひなされまするな おつ付け御對面致させまする程に必ずきなきな思召しまするな 菊「これからモウ一せい出してたへまとやらへ行き妻平殿の妹御をたのみ逗留のうちに左衛門様の御行衛を尋ねまするはいナア 金「お別れ申して片時も忘れもやらぬ園部様由縁をうけし妻平殿左衛門様におめにかゝらばコレ此やうに取付て 菊「恨のたけをおつしやる氣か、いはいではいのふ 四郎「コレハちかごろめいわくな 金「迷惑などは園部様あいとふござりましたはいナア ●カンドキカ、リ「戀しいはいのとすがり付きカ、リ夫れ覺へてか過し頃合下地主の櫻の花盛りほんに。結ぶの神ならぬ観音様の引合せ。忍ぶまがきはし渡し。合▲其かさ

さぎのたんざくも合結ぶとい入へる名にほれて●ウとけても▲とけぬ入戀の湊の懸りウ舟。ウふきも定めぬ浦風に●入逢ふは別れの妹山合 ▲背山合▼▲中を流る、吉野川涙の水やまさるらん▲思ひをさせじと妻平がすねて合口舌をしたり顔行んとすれば●ノルこなたなるいはぬまがきが引とどめ 詞「お姫様のお恨は左衛門様とイロ「たゞかりそめに。クドキカ、リいふぐれの兼て二人がなかくは。ウちびきの石のひかへづなきれぬ縁こそ縁ならね。ウギン今の昔を忘れてか合見初めて惚て合寐られぬまゝに ▲長「目でなぞかけりや●ウ「こゝろでとい合▲ウクク、キ「かふした袖入を●ウス「夫ぞと悟り嬉しの森のむら鳥合▲ウ「な入どかはなかね ●ウク「などかはあけぬ 合■カンあけて櫛けを取あへウすウクカンギン忍ぶ机はね入まの内帯をもしめしり、▲ウ「女子ながらも合●さしでの磯の小夜千鳥 合▲長「夢見し入文をそれなりにウクいく鹽竈入の濡衣ウかはくまもなき入我袖の●ウ「涙の露の玉の緒の。合入たゆる哀をせめてものウ入思ひあれ野にこりもせで ●▲ハシル「笹の小笹の節のまに▲ウ「逢ふも情の新まぐら引上ハル●合▲あはすばなんの身も▲

ウ「捨入鐘の▲ウ」鳴戸の浪の打おふも。三年四年の胸は
 れてハルオトシ雲間にもるゝさたもなしカ、リとけかゝりに
 し薄雪の。ウ恨いふのものはるゝも引ひよく連理のふた
 面ウ我は尋ぬる殿御にも鮑の貝の片思ひ。我名をうら
 む契りぞとノルかこちなげけば▲イロノル妻平まがきギンいさ
 めたてたる笑顔とゑがほ。心とけおふ絲薄二上り歌萩や
 紅葉の鹿よりも澤の螢のついでとこといはずいはずか
 たらぬ心のうちはア、しんきへいつもこがれてゝゝいる
 はいなほんにすいしてゐるはいな二上り歌「袖や袂の内よ
 りもよその人めをついひとこといはずゝいはれぬ心
 の内はア、しんきへいつもこがれてゝゝいるはいなほん
 にすいしてゐるはいな露をいとふも浮世なりカ、リ」うた
 ふしやうがも身のッ上にかゝらざりせば何として。ウい
 つかは爰に小泉や日はくるれども町なれば。イロウ一夜な
 がらもとまられずウギン宿かろふよりは幸ひの辻ギン堂と下
 アミド地藏がウギンしを押あけて引合ワッソ見ればしゆせふな
 佛様宿をばかして給はれと。ウそこにそのまゝかりぶし
 の▲しとねは是と妻平が。合羽を敷かせまいらすれば。合

▼▲タ、キウ夜の物には合まがきが上着金コレゝゝみればそ
 なたは肌うすな風はしひいてたもんや 菊「イヤモウ其
 お訶があつい故はだも薄ふはござりませぬ ●」ひらにめ
 せとて打着せゝゝ女夫が左右にとのゐるして。寐まいと思
 へど氣くたびれハルオトシ夢や人めを守るらん ハッル「神な
 らぬ身の是非もなや。長園部ノ左衛門かくぞとも地しらで
 思ひは大和路に。中ハル出る月さへおほろにてウ入身入の言
 譯もハルはれや入らぬ。かつら男の妻平がしるべを求め寄
 るならば。ウ都の入つても尋んとおもふおもひはますら男
 が。やたけ心も恩愛にひかされて。▲ウ中我館へは到れど
 も。ウ母にも姫にもあひもせず。父の最期もなほ知ら
 ず。長あとはいかゞと▼▲あんじくらせし夜の道カ、リみち
 はかゆかずやうやうと小泉に来て見れば。ノル夜は明けち
 かくなる鐘の 宗十郎旅はみちづれ世はなさけとなさけも
 つれもなく鶏の聲もみだれて東雲の鐘ヤア程なふ見ゆる
 は里の森あれは草の庵かはなれ家かさらばたよつてとは
 まほし何んじや辻堂よし神にもせよ佛にもせよ我が一心
 の頼むべし 長カ、リ「七つ何事なき旅ギンのかゝる難儀にあ

ふ事ギンもしらぬ佛と下いひながら 宗「曇りなき身は疑ひ
 もはれ再び出世なさしめ給へ南無阿彌陀佛 下「南無阿彌
 陀佛とふし拜み。ウ暫しは爰に居ながらも。戀しき人の
 辻堂に。在りとも知らずで行過る 田「ハッル」姫は夢さめ走り
 出で入なふ左衛門様我つまと、呼べど入さカンけ入べど行
 すぎて夫れと答もなく聲に▼▲夫婦はおどろき抱留め。
 せな撫でさすりいたヌエルはれば ●やうゝに心付き金
 「扱は今は夢であつたか所はいづくとおほへねど左衛
 門様にお目にかゝり物いふまもなく引わかれあすは逢ふ
 とのたまひしを夢ともなくうつゝのやうに思ひしが夢に
 偽りなきならば早ふお目にかゝりたいはいのふ 四郎「御
 尤でござりまする押付めでたふ御對面させまするあれ
 あれとやかふ言ふ内夜明けの鳥人目にかゝらぬ其内に▲
 「サアゝお出とすゝめられ。▼▲すゝまぬ道を急げども。
 ウ跡に心の引るゝはれんほのわくの片絲も長カ、リよつて
 はもつれもつれて後に入吹分けて。合ッ今の袂の露時雨入
 そもちて通ふ戀さへあるにあら。合よしなやあぢきなや
 ねざめの橋の霜だにもッ月のにほひの移り香は忘れもや

らぬこれまでもウ貴船の神の守るなら入あはせてたべよ
 あはせてとウむねでおがせの解やらぬ長かはい殿御にあ
 いたいおもひ合ッいと入姫にいたい思ひ合おもひは同
 じ道筋をウ一里へだて、ウ先へゆくこそ園 中部の左衛門
 宗「此憂き旅を世に出て大和巡りといふならば舊き名所
 も尋ねたかろふ今は都につてもがな ●イロ」姫はいかゞ暮
 すぞと中ウア、尋ねたや聞たやと立とまりては跡入見返ッ
 り▼▲足もしどろに行なやむ ▲クドキ「うすゆき涙にくれな
 がらウ只忘れられぬは忍ぶ夜に枕ならべて寐た時の其言の
 葉も恥しけれどおまへとわたしが此中は合ウ二世や三世
 はいふまでもないすつとこんどのさきのヒロヒ世までも必
 ずやいのといふたればうそじやないかやほんにかとのた
 まふときの嬉しさをウよろこぶまもなくこのさいなん▲イ
 ロ「お道理さまやとなきたさを▼▲なかで夫婦がためなみ
 だ龍田の川は。合トリかちわたり。すそをからけてきりき
 りしやんと。合ゑもんりゝしくぬぎかけしかつたをか山
 のかたゝにッリ上跡や引さきなるうきおもひ。暫しも袖
 にひるめなく涙につゞく町も過ぎやがて當入麻に 三重引た

どりに行く。

一四 燈籠になき玉菊くりくが来る夜かなよるよりの 操返廊文月うしろの(玉菊)

富本豊前太夫直傳



字。ハル花野の合にしき織はえて合草の市たつ合中合の町合
きみが手もとのギンさかづきを合ちよとかるかやとあいの
花。うは氣な風にほれヌエルはぎ合長おぎの下着につい

上みちのくギンの錦木た
てずかしまなる。ハル
うらなき戀の常陸帯。
ウか入けてたのまん合花
燈籠ギンむかしのかけ
ゑうつろひて。長名に
立つ秋の江戸ゆふまぐ
れ友右衛門出大勢出オン「歌
舞のほさつのいとたけ
も合下廿五けんのかかず
そへし。ウそのあかつ
き玉菊がおくり姿の。合しろがさね
ちぎれの雲見れば江戸ゆふべぬぬ身の二日ゑひギン雨もつ
空をるつゞけの合ウタ、キくせにしぐれのながへ傘さしか
けゆりかけ合ゆりかけ合さしかけ合こづまとりぐ八文

菊之丞
乙女出ナゲシ「ちぎれ
羽左衛門

くす啼て明せし合床の内引長ノル「はや明の鐘衣々に立
まふ市は下戀草の合難波の蘆をかりもちて合おあしそへて
めされ候へギンあなたへさらり合ウこなたへさらりさら
さらさつとあくるびやうぶのくらぶ山稻荷山長「遣ては

鬼のしこ草やカンまがきにつけてあさがほのつるよりか
らむつたかづら合ウ尾花に桔梗色そへてかぜツキユこひし
けるうちわぐさ千種も露に濡れたへオンド戀のやみ合戀
のやみ軒の燈籠を待合の辻占オンドといほざきとギンくぜ
つにとりしゑもん坂よいくくよいよいやさ合オンド
「天の川合天の川ユリ星の女夫も鶉のゑにしのはし場みや
こ鳥下ギンあらふ硯のすみだ川よいくくよいよいやさ
カ、リ「宵よりつきぬ睦言のウもれて姿を三ッ瀬川玉菊て
ふのかへ紋日クリ上すへの契の誓ぞとなぎは鏡に残るらん
里に江戸鏡や残るらん。

一五 梅川道行戀飛脚みづのちのこ 富本豊前太夫直傳

中オン落人の。地ためかや今は冬がれて。長地す、き尾花は
なければども世を忍ぶ身の跡や先人目をつゝむ頼破り。か
くせど色香梅川がなれぬ旅路を地忠兵衛がウいたはる身
さへ雪風に長地こゑるウ手さきふところへ。ウあたまめ
られつあたまめつ石原道をあし曳の地大和路さして行そ
らや合ウ木々の梢も紅葉して色で逢しははや昔今日はし
んみの女夫合。ウ頼まば願ひかのへさる。ウギン庚申堂や

せうまんの廿六夜もかけくらきウ「身のくりごとはぐち
なれど。大恩受けし養子親妙閑様へ一日も孝行らしき事
もなく御苦勞かけし其上に。あすのなけきのかずくは
とくととかれぬ三度荷の重き不孝の罪とがとかち涙に
目もうるむウ「顔つれくと打まもり。それ其様にい
はんす程此梅川が身のつらさ。ウほれた女子のせうがに
はあだな勤めを實にして。ウお前とねた夜は合あかつきの
鳥の啼くまで繰返し、同じ咄の其中に。ウするは女夫
と言ひかはし。長枕わすれて引寄せてギンじつとしめたる
肌と肌つねの女子と現なく取亂したる眞實が合なまなか
下届いて木津川のほんにわたしがある故に。ウ今のお前
のうき難儀堪忍してとばかりにて跡は涙のカハリオトシむら
時雨ノ下野邊のみづおりしほるにも。裾にやつる、小笹
原行惱みてはカハリ立止り菊之丞「申し忠兵衛さんよしな
い私故お前の心遣ひ何かの事を思ふて見れば此梅川に愛
想がつきやうかと思ふてそれが悲しうござんすはいな必
ずく死ぬる共私も一緒にお前の手にかけて殺して下さん
せへ幸四郎夫程迄思ひつめたるそなたの事どふして愛想

がつきやうぞ道々もいふ通り二の口村の忠三郎といふ者は百姓でこそあれ頼母しい男頼んで一夜逗留してハテ梅川も此忠兵衛も死るとも故郷の土ッレヒ生みの母の墓所へ一緒に埋まれ嫁姑の

トシおつる雨やさめカ、リ富田林のむら鴉。せめて一夜の心なくとがむる聲の高間山あの葛城の神ならでカ、リ夢の通路つゝましく。ッわれからせまき世の中や竹の内峠い



四六八
はや越野こえ山こえさとくを。急けば早き故郷の二の口村にぞオトシ着きにける幸「コレ〜此處が此忠兵衛が生れ在所向ふに見ゆるはさつきに咄した忠三郎の居宅ヤ、アレアレ〜あれへ見ゆるはこれ〜此忠兵衛

事はあるまいかと我身の上より案じられ今一度。せめて京の兩親に一目遇ふて死にたいとオスフシ又も涙に咽びる。カ、リ「我もそなたの兩親に。聲じやといふてあひ度いと人目なければ抱付き涙のあらればらく〜と袖よりハルオ

が實の親の孫右衛門様じやわいの此世の御別れお暇乞せめてよそながらおがまふとはる〜と爰まで来た念願が届いたかエ、有難い〜菊「もし〜あのもじの肩衣がお前のと〜さん孫右衛門様かいなほんにまあ親子はあら

そはれぬもの目元なら鼻筋ならお前によふ似た事はいなア幸「サアそれ程よふ似た親と子が言葉さへも得交さぬはマなんとした此身の因果お年もよる足元もいかうお弱りなされた若し是が今生のお暇乞でござりまする菊「ほんに今がお顔の見はじめの見おさめもし私は嫁の梅川でござんすはいなア夫婦は今をも知れぬ命百年の御壽命すぎて後未來で孝行いたしませふ。あなたへ御苦勞かけまするもみんな私故此梅川ゆへ幸「ア、これ〜ひよつと人目にかゝつては二人が身の上あの辻堂に隠れてるてよそながら親父様への御暇乞梅川おじや。

○下の巻

ウタガ、リ「大坂の地義理と故郷の恩愛の道はふたつにわかれども血筋ばかりは一筋に道場参りの歸り足キヤリ身を知る雨のおやみなくレイセイ野風に送るはたけ道ギンウしろしぶきのギンしぶきには中かたけて急ぐあみだがさ。長孫古衛門は老足歩むとすれど合とほ〜と。ウ野口の溝の薄氷。イロすべるをとまる高足駄。鼻緒は切れてよこさまに。どうどまろべば。ノル忠兵衛これは南無三ともがけ共

出られぬ身梅川あはて走り出で抱き起してすそしほり菊「若し〜どこも痛みはいたしませぬかお年寄のあぶない事お足もあらひ鼻緒もすけて上げませうやれ〜あぶ〜ヤレ〜どなたか知らぬが忝けなふござるおかけで怪我也致しませなんだ若い女中のおやさしい年寄めと思召し嫁ごもならぬ御介抱もふ〜手を洗はしやつて下さりませ幸ひ爰に葉は澤山鼻緒はわしがすけますもふ〜構はしやつて下さりますな〜菊「ア、もし〜こゝによい紙がござんすこよりひねつて上げませうとのべとり出す其手元友「孫右衛門ふしぎそふにフウこ〜らあたりには見なれぬ女中マアこな様はどなたなれば此やうにねんごろにして下さると顔つれ〜と詠れば菊「梅川いと〜かなしくて涙は胸にあまれどもわざと色には出さずしハイわたしたは夫々旅の者わたしがしうとの親父様も丁度お前のとしばへでかつこ〜も生き寫し外の人にする奉公とはモさら〜もつてぞんじませぬお年寄つたしうとご様の伏し悩みの抱きか、へ孝行は嫁の役御用にたつ

てなんほつか嬉しうござんす。嘸連合は飛立つやうにも思はれませう申し其紙と此紙かへて私をもふしうけウレヒててごに似たる親父様のかたみにさせたふござんすとちり紙袖に押包む涙にそれとカハリスエ知られけりイヨ言葉のはしに孫右衛門。さてはそうかと恩愛のつきぬ涙を押し隠し詞フウこなたの身しんに此親父が似たといふて孝行か嬉しうござんが腹が立ちますはいのくわしも年たけた悴めな様子あつてきうり切り大坂へ養子にやつたが傾城といふまがさして人の金を盗んだとやら揚句に所を駈落したとの噂此大和は生國なれば十七軒の飛脚屋仲間御上からはかくし目付或は巡禮古手買季節候にまで身をやつし此在所は詮議最中誰故なれば其傾城の嫁ごゆるハリマカ、リヤ近頃ぐちな事ながら世のたとへにいふ通りウ盗する子にはくうなうて繩かける人が恨めしいとは此事きうりきつた親子なればよかるふがわるからふがべして構ふ事はなければどもウ大坂へ養子にいて利發で器入用で身を持つて。詞身代もよふ仕上げた。あのような子を勘當した。親は大きなたわけものと指差しせられ笑はれたら何ほうか

牢へ入れおめく〜と逃げ隠れ末世末代不孝の悪名とらふよりは所詮しよせん運れぬ命なら一日なりと妙閑殿を早ふ牢から出すが孝行覺悟極めて名乗つて出いたが夫もどふぞ親の目にかゝらぬ所で繩かゝつてくれい現在血を分けた我子に早う死ねといふのも浮世の義理なぞ又まへ方に内證でかうくした傾城にかうしたわけの金があるとびんぎでもしおつたらハテきうり切つても親子じやもの隠居の田地を賣立ても首に繩はかけまいにみんな己れが心からソレ其身もせまい苦をしおつてアレいとしほなけに嫁ごに迄思ひもよらぬ憂き目を見せちるん近付親に迄かくれるやうに身みを持なし疎な死もせぬやうに此親は生み付けぬはやいエ、憎いやつとは思へども「かはゆふござると泣沈みわけたる血筋ぞ哀れなるイロ涙の隙に巾着より金一包取出し友「これ〜コレハ京の御本寺様へ上ふと思ふた金なれど嫁子と思ふて遣るではないた〜今のお禮の爲是を路銀にちつとたと違ひ所へサア〜早ふ〜」
「ア、有難ふござりまするお心づかれし此お金さか様ながら頂きます 中カン「大阪を立退ても カンウク私わたくしが姿目に立

嬉しうござろうにウキ今にもさがし出され繩かゝつて引る。時。詞孫右衛門は目水晶よふ勘當したでかしたと褒めらるゝのが悲しうござるはいのく。ア、それを思へば一日も早う往生お救ひウレヒカ、リなされて下されと拜み願ふは今參る如來様御かいさん。佛にうそがつかれませうかいのく〜ウ佛にうそがつかれふかとどうど伏せばウハシル梅川もわつと聲を上げ「忠兵衛は辻堂より手先を出して伏拜み〜身をもみウドキスエなけくぞ道理なる友イロ「孫右衛門涙を抑へ詞様子聞いたか聞かぬかしらぬが子をつり出さうと御上からのばかりひ養ひ親の妙閑殿をおと〜い牢へ入れたけなウエ、友サそれでつく〜思ふには實の親を便りにして若しも忍んで來はせまいか來たらば何ほう不愆でも養子親への義理あればかくまふ事はさて置いて親が繩かけ出さねばならぬア、どうぞ來て呉れねばよいが又こゝらあたりをまい〜〜〜とまいつきはせまいかと四年この方逢ひもせずなつかしいと思ふ子の顔見ぬよふに〜と神佛を拜むもあいつが不憫さからア、とは言ふものゝ若死する人の一生義理ある親を

ば。ウかりかごに日を送り合ハル奈良のはたごやみわの茶屋合長五日三日夜をあかし廿日餘りに四十兩つかい果して二歩残る合金ゆる大事の忠兵衛様とが人にしたも私から。さぞ憎からふお腹も立とが因果づくじやとあきらめて。合おゆるしなされて下さりませ。ウ親子は一世の縁とやら此世の別れにせめて一目。ウあふてしんせて下さんとせと立つ梅川をイヨ押止め友ア、コレ〜やくたいもない〜たつた今もいふ通りたとへ言葉をかはいでも顔見合ふたりや繩かけるかおれが口から訴人せにや養親への義理が立たぬ何んほう義理が立てたいとて現在親の手づからどふ繩がかけれうぞいの 菊「御尤でござりまするそんなら顔を見ぬよふに勿體ない事ながら此頬被りでお前のお目をこふさへすればたとへおそばにるやんしても何とかまいはござりまするまいがな 友「チ、かたじけなふござるものいはすと顔見すと手さきへなとさはつたらそれが本望あふた心親子一世のいとまごひ必ず〜こなたのつれやいにもいはせて下さるなよ 菊「アイ中キン「親子手に手をとりはかせど「互に親とも「我子ともい

はずいはいせぬカン「世の義理は「なみだわきづるみなかみと身もうくばかりに」ドキオトシなきかこつ 友「アレ〜あの人聲はたしかに追手此うら道の小川をわたり藪をぬければごせ街道はやう〜」菊「段々の御志有難うござりまするともこの事に親父様のお顔をちよつと友「ア、これこれちよつとも顔見ては妙閑殿へ孫右衛門が立ぬわいの未練な事言はずとも此所をはやう〜」菊「サアそれは友「兩人さらば下」子故の暗の目なし鳥。平沙のうたふ血のなみだ永き親子の別れにはやすかたならでやすからぬこゝろのこしてわかれ行く心残してウレヒ三重わかれ行く。

一六 おなつ 道行比翼の菊蝶

富本豊前椽直傳 作者 櫻田 治助

中ハシル紡績のやど。ウならねどもしら菅をギン縫ふてふわさのひめぢがさ。ウお夏清十郎が戀中スカスに。ウ立つや浮名の風見ぐさ合柳は雨の姿ぞと。長あだに心やウタヒ狂ふらん スエル鼓歌戀よこひよわれなからになすな戀ウこひ風が来ては閨の戸ほと〜た〜た〜くは水鶏かあらしかのきの玉水か。いやそれならで入戀しき人のおとづ

つくどんがらりうつや太鼓のねもよし音もよしある人ぞこひしき。カヲルおどり狂ふも菜種ばた。ウ野中の蝶のひら〜〜合方そこよこ〜よとおいめぐり。かつぱと倒れ伏し芝をむすびカハリオトシすてたる草枕出上ルふたりつれぬをウうらみてや翼かはしてかへる雁。長われ〜とでも今の身は。ウはかなき里へゆく身ぞとうきが中にも清十郎しよんほりとしたウ旅姿。ウかくなり果て〜も夫婦の中。そはる〜事もあらばこそ人を殺せしとがといひ。ウ死なねばならぬこの命合ギン霜のわかれにまだ消えぬ我かけろふやみづのくま。こ〜もスエルシよるべと立とまる門之助 イロ詞それとも知らず清十郎ふしまろびたる人かゆを。提灯あけてよく〜見ればたづぬるお夏。あはておどろき引おこし。これ〜お夏正氣になつてくれ。こりやわしじや清十郎じやわいの。お夏〜とだきかかへ。これ正氣になつたか 菊之丞「エ、お前は清十郎さんか門之助「清十郎じや 菊お前は無事でいやしやんすかまあこ〜は何といふ所でござんすへ 門「こ〜は向島隅田村じやはいの 菊「わたしやお前が死なしやんしたと聞いて。はつと

れ。長カ、リ無理な口舌にわしやしかられて合ウクギンねがひかけたるあさくさは合ゑんがあさいと合氣にかゝり。長地硯引寄せ書く文も涙に薄きすみ田川たづぬる人をギンみやこ鳥。ギンありやなしやと事問へば。ウ何といはねの待乳山ゆふこへくれれば五百崎や。三下りむかふとをるは清十郎じやないか笠がよふにた菅笠が合よふ似た〜菅笠がよふ似た合清十郎じやないか合ありや梅のかゝ笠梅のかか笠。合ぬしぞ戀しかりけるあふ夜は君が花がさ合 ナラ来ぬ夜はしほるそで笠。ウもしやすがたも見ゆるかと跡ふり返り見返り返りて待身につらきうきね鳥合ねぐらのつゆに合ウぬれそめてウかはかぬ袖も瓦がま合。ウつり香ふかくかさねたるつまの行衛もしらいとの スエルフシ又も亂る、其風情。詞あれ〜〜それ〜〜それ〜〜これこへ。二上ッギンづう〜孫三が出立は。下には白きウちんちりのめん小袖上にはあや織引ちがへ合ウしやクルんとうちのり合ウ手綱かいくりしやぎりきちやしかう〜合ウ茶屋が二階でちぎりきちやしかう〜ウゑいとうちあがつててんつるてんと三味をひく合よねは手につくつくてん

思ふてこ〜まで来たも夢うつ〜。マよふまめでゐてくださったの門、チ、もつともじや〜。そなたに逢ふも此身の本望。此清十郎は是非なく忠太を手にかけたはいの菊「エ、門、生きながらへて繩目の恥にかゝらんより。いづそ此所にて生害なさん。そなたはあとにながらへて清十郎があとねんごろに弔ふてたも。南無阿彌陀佛 菊これまつた門、いやはなせ菊「イヤ〜まつた。またしやんせ。これ清十郎さんクドキギンお夏はそばによりそいて。長そんな水くさい事言はしやんす。ウそもやわたしが身の上は。ざしきばかりをい、立て下つとめするはづの藝子の身なさけしらぬをだてにして。ウほんにかたいが手柄ぞとウク思ふて居たるそのうちにウふつと見そめし四つもみぢ長わたしが紋にそめさせて合ウこゝろで拜入んで合つけてゐた。ウねんが届いていひかはし合死んでたもれや死にましよと二人来たのはうそかいな。ウハシルながらへ居よとはどうよくな。ウつれないむごい心やと。その身をひざにすりよせて。ウわけも涙のはなのあめハルオトシぬれていとほぬ風情なり。詞それほどまでに思ひつめ。我身

を慕ふふびんさに。カ、リなんの見捨て、ゆくべきと。ッ
シノルなだめられてもとけかぬる。心のおびのあや瀬川ふ
かき思ひの中々に合申ハシル 小船つくりてお夏をのせて花
の清十郎に船を押さしよ〜とでもこがる、心より。ッ
のかじはなれじかはらじとかはらづ、みのかりまくらッ
清十郎とねたる裾模様戀といふ字や残らん戀といふ字
ぞ残りける。

一七 道行垣根の結綿

富本豊前太夫直傳
作者 櫻田 治助

三下、卯の花の。雪は垣根に消えもせて。五日のウ宵の月
かけは。ナヲル地ふけてあとなき夢心。ウうつゝのやみに合
すみなれし。ウクうつほを出しほと〜ぎす引。出上ウ「郭公。
なくねやうきにかづそふる。ハル地夜もはや七ツ半兵衛が。
長かたにかけたる毛氈はウいのちの露入のおき所。長つま
のおちよもおもやせて。申ハシル目もとしほよる合ちりめ
んのふたへまはりのウ抱へ帯。ツキニカ、リ終のかたみと
なりふりも若葉にくらきカハリハキハズミ 夏木立。むぎふく
風も追手かとのきなやみては立止り。上あれ〜〜ウク

ウ 菊之丞 申し半兵衛さん。世の中にわたしがよふな因果
な者がまたと二人ござんせうか。思ひ思ふた女夫じやと
樂しんで暮らすまもなふ。しうとご様の御心にたがふて
添ふにはそれはれいでかふなる身の上。わたし故じやと思
へば半兵衛さん。お前さんがいと〜してこれが未來の迷
ひじやはいな 三津五郎「そなたもぐちな事をいやるはいの。
此半兵衛が身の上は。義理のあるふた親へ不孝といひ。
とても生きて居られぬ身。ごうんけわごふとは佛の教。
此世こそかりの契りなれ未來は必ず半座をわけたる眞實
の夫婦じやと思ふてそれを樂しみに。覺悟極めてたもい
の 菊之丞「覺悟はかねての事じやはいな。さりながらかふ
なる二人が身の上なら。あの嘉十郎さんによそながら暇
乞などせいで。さぞ聞へぬ者じやとあとでうらんでいさ
んせうわいな 三津五郎「義理にせまりし二人が因果。うら
みられてもせんない事。ウレ思へば〜〜われ〜は養ひ
親に育てられ。子で子にならずふり捨て、合ッ死にゆく
身は是非もなや合ッ、キ死出のたをさや驚の。ウふるすも
もはやとふ〜み親合兄弟にもなけきをかけ。ウひとか

あれは飛脚の提灯か又は 中ウギン見なれぬ狐火か。ウ迷ふ
が上に。迷はする今死ぬ身さへ夜露をいとひ。文セカ、リ相
合傘の影法師合津村の土手をあだし野の。カン煙はいづれ
鳥邊山ウ花野のあきの船岡にきゆるあしたのうきなく
さ。露にも結ぶ珠數のたま煩惱菩提と聞く時は合佛の誓
ひぞたのもしき。カン 西へ行くゑも星明されども破軍の
けんさきにか入るもつらき身の上と。見かはす顔のギン
スエル目もうるむ。クドキおちよはいと〜うちしほれ。今更
いふには五月帯かたい思ひのかたまりは。養子あはせも
縁のはし。わたしやお前をおまへともほんにしらねば戀
もせず。ウ親々たちの指圖にて祝言の夜の新枕。ウ殿御
の肌といふ事を覺へそめたるいとしさは。ウ三千世界を
あつめてもあまる思ひのはづかしさこれその顔によふ似
た子を。合生んでわたしが添乳して二人ながめて居よう
ぞと。ウたのしむ甲斐もなさけなや。身の因果にて月と
日をあだにくらして死出のたび。此世の縁は薄くとも未
來もかたき夫婦ぞとフシツナギ手に手をとりつひき寄せて。
ウいだきしめつゝゆく、ハルオトシ道のすがたをかくす雨もや

たならぬ不孝の罪。ウそらおそろしき身の上とくやめば
おちよもウしやくり上げウお前ばかりか此身まで。カンお
年寄られし母様の手しほにかけてそだてられ。てうどこ
としが廿四の。ウ中としかさなれど今日が日まで。これぞ
と思ふ事もなくついに双に身をはたし。ウなけきをか
けてなきあとまで。ウ身にさかさまな御回向うけ。不孝
の罪のかす〜をゆるしてたべや母様と。手を合してぞ
なくなみだ。ウ門田に水やカハリオトシまさるらん 三津五郎「サ
アお千代。ねがひのとをりこ〜が大佛の勸進所。そなた
は覺悟はよいかや 菊之丞「ながらへて居てせんない命。は
やう殺して下さんせいな 三津五郎「チ、でかしやつた〜。
西の方へ手を合しや。りけんそくぜみだがう。一ッせう
しやうねんざいかいしよ。南無阿彌陀佛々々々々々々々々
上り地獄キヤウ 歸命頂禮地藏尊なまいだ〜なまいだ合
かのふぞくをウおくねんし上カンなまいだ〜なまいだ合
ウク 惡趣に出現し給ひて衆生のくけんをみちびけりなま
いだ〜ナルしぬるにきはめし身の上も。合 上ハシルそい
ろになつ短夜や〜こそ一念十願寺。ノル 利劍即是の教

にて心やすく極樂に。いたりいたらんこなたへと。たがひにいさめすむ身のくわん江戸じん所にこそつきにけり。

一八 長右衛門道行瀬川の仇浪

富本豊前太夫直傳 作者 櫻田 治助

ギンハシ入るかたを。上ル西と定めん。江戸なつの霜。長消えてゆく身を何ぞと問はゞ。ウ露と答へて珠数のたま。ウそれはふりにし芥川。カンこれは桂の川水にウウき名ウを流す二人入づれ幸四郎 菊之丞出上ルフシお半をせなに長右衛門長あふせそぐはウぬ合下あだ夢を長ギン結ぶウ帯屋の軒もはやウこよひ限りに月かけのながれて合つれて合ウ沈む身は合ウつまにもなごりおし小路合入なけきはあとに遠ざかる。長町をはなれて下やうくと。中ウせなをよろしてウとりどりに姿つくらふころねは合ウまだむ入すめ氣のあとやさき合ウあゆみならはぬ道もせに。ウ身にしむ風に。下さそはれてアレ壬生寺みぶでらのかねのかづ合ルフシ九つこゝにウきたみなみ引。東寺の塔やしゆじやか野の下ギン火かけかすかに三筋町合しきみはたかき戀のせき。ウウきが中にも

さん。こんさん。中のりさん。ノル詞やてかんせ。ほうらんせ。つゆのなさけのかりまくら。ウタカ、リあひのつち山雨よりも引。ウぬれた同士と世の人の。ウ皆口々にいふやくし鈴鹿もハルオトシむねもくもるなり。幸四郎コレお半。こゝは三條あたご道。露の命のおき所。みちくもいふ通り長右衛門こそ死なねばならぬ身の上。殊に又色の戀のといふは似たかよつたかのとしばい。いはゞ十四やそこらのそなたと一緒に死んだら義理知らずと世間の人の笑ひの種は厭はねど。親御のうらみおきぬが思はく。兎に角そなたはながらへてなきわがあとをとふてたもるが此上の事。思ひ直してこゝから早う戻つてくりやコレおはんかへりやく。菊之丞キクノ丞トキ下ギン「お半は涙のつゆウちりほども長お前の無理じやあるまいけれどわたしやいやイナ。そんなそのよナ合どうよくな。合ウとのごをさき合合わしやながらへて合身二つになり。大膽な。長いたづら者じや悪性な合ウ不心中なと人さんが笑はんしても大事ないかそりや。そりやかはいのじやないにくいのじやウちいさい時からお前を慕ひ。長祇園参りや北のさんぢしゆ

かづくの。ウほんに入昨日や今日までも。長わたの稽古や手習の。お師匠様のおつしやつたは。ホンニ女子は一生に夫といふはたゞ一人。ウ二人と肌をふれるのは女子でないとい、おしる女今川庭訓を。長かいて覚えし筆のあや。ウはづかしながら此二月ウはじめてウ月のさはりとなりつきのさはりの程もなく。ウ長地カ、リたびから歸りきさらぎをギンすぎでどふやらおなかの様子。ウそでにかくすも三月か四月入梅に實のいるさつき闇ころの闇も隠さる。ただけはとつらい辛抱も。ウもとはといへば。わたしからハシルお伊勢参りの戻道合カンかたい石部のおまへをばあじな心に合しな屋のウ内外の手まへ神さんへ無理がかなふて明星が。ウ茶屋のギンせうぎにすい付けさせて下けむる雲津の末かけて。とをいねがひのギン津のまちつづき。三下りウさても見事なおつら馬よ。ふとんかさねて合あと付つけて合ウみやこのほりのナ。三度かさナアエしまさんこんさん中のりさんノル詞やてかんせ。ほうらんせ合ウ夜さの契りとだきとめられて。おじやれ女と合名はいやなれど合ウ梅のなにはのナ。香もしらぬナアエ。しま

の櫻や伏見の桃や。ウ物見けんぶつあとおふて地手を引かれたり負はれたり裸人形役者繪を。買ふて貰ふたかんざしの。ウタすかしたらしてあまやかし。ウかはゆがられた親達よりも長人がたづねりや。長さんが。ウたんといとしといふた時やんがて女夫にならんしよとばや女になぶられて。ウただうつむいて。何にも言はず心の内引は。ウほかに殿御を持まいと縁を結ぶの神さんの。よもやそさうじや有るまいし。定まり事とあきらめて。ウ一緒に死んで下さんせと。戀をたてぬく娘氣のいだきつくづく顔と顔。トドキカ、リ長右衛門も戀のふち。共に沈まん覺悟とは。あかさぬ胸の今更によしなわかれぬぢぢらしい。今のかうした此世の因果。未來で添ふのを楽しみに思ひ直して死んでくれ。かはいや不憫と男泣涙に涙そへにける。向ふに見ゆる提灯はギンあやしの、めの空の色ノル追手の者に合ぬ内。ノルかくごはよいかと夕かけの手に手をとり合合へ告て。ウ石を袂にいとほりウ襦子の帯屋と信濃屋の引。ウ娘々と呼ぶこゑに見つけられじと足許も亂る、月の桂川水上へとぞ引いそぎ行く。

一九 連理の橋(蟲賣)

富本豊前太夫直傳

長地カ、リ「色かへぬ常磐の里に住なれて合 中カン琴の音に聞
く松の風ほたと雪の窓の前。月によむなる文月に若衆
盛りを三津五郎 ッ「錦の絲をかけまくも星祭る夜はッか
ぢの葉に。言の葉ぐさを書添へて深き願としら露も奥床
しくぞ見えにける合ッ「粹な浮世のなんくく中を。合ッ
やほにくらして合町スカシ々の長地得意をまはる影燈籠なれ
も。ウ戀路に身をやつし事廿四日は愛宕様。長地ノル月の八
日は茅場町大師参りや合不動様はなれぬ中の御縁日。ッ
色には仇な八つ橋を江戸紫の所縁とて。引手あまたの花
あやめ。長地家橋に似たる荷ひ賣合共とりなりも拍子よく
合きてんも菊の上手者打連れオトシ立て歩み來る イロ詞「二
人の商人しをりにかゝり 羽左右衛門詞「ハイ私はこんどした
しの燈籠賣でござります。燈籠の御用はござりませぬか
菊之丞「ハイ私は秋を音に鳴く蟲賣でござります。蟲の御用
はござりませぬか。羽燈籠の御用はござりませぬか。菊
の御用はござりませぬか。兩人「お求めなされて下さりませ

る、螢かご合ッぬれなん物と松蟲の。合仇に日ぐらし鳴き
あかすッながき其夜にあきつ蟲あふせも合有らば天の川
帯さへくものあやしき合きりはたりてふ合くはたお
り蟲や合賤のわざつらねし露の玉蟲に詞の花や結ぶら
ん。三津詞「うきくさに。うかれあそぶや女七夕。今の蟲盡
しを聞ては。めつたに此屋敷の内へは置かれぬ。サアサ
ア早うそつちへ出てたも 菊「そりや又。なぜでござりま
すへ 三津「サア其仔細は。今日は大切な乞巧奠の星祭。
家内を清淨潔白にせねばならぬ。早うかへりや。ウ。
菊「そんなら何とおつしやります。今宵は七月七日の夜。
七夕祭をなされますゆゑ。御尤でござります。とても
事に鶴の。渡せるはしの二つ星其お咄しをどふぞお聞か
せなされて下さりませい三津「ア、七夕の星祭を菊「アイナ
ア三津「サアそれは 菊「お願ひ申しますはいな 昔々唐土
に。ゆうし合はくやうといふ夫婦あり。あけくれ。上ル月
を念じつゝ合遂に天上に果をうけて。ノル牽牛織女の合二
星とあらはれ合ッ 銀河をわたる鳥鶉の橋わかれの涙つば
さをそめもみぢの橋ともいひつたふ。ウそのかさゝぎの

三津五郎詞「七夕の祈る手向や受けつらん。上てかぞへる梶
の言の葉。物數ならぬ白井權八。室町殿より下し置れし
吉岡一文字の刀。武士の冥加と有難く。たゞ家の長久を
願ふが第一と。星へ手向の色紙短冊。たゞ一心に認める
るに。表の方に物音するは。何者じや。羽「ハイ私共は此お
屋敷をお見かけ申しまして参りました。商人でござりま
す。菊「チ、それく。色を音に鳴く蟲賣と。暮れて花咲
く燈籠賣と。思ひ思ふて。参りましたはいな 三津「二星た
またまあふて。別緒に恨をのべず。たまぐこととふ二
人の商人。ハテ珍らしいとなみじやなア。どれく身
共が求めてくれうか。マこつちへはいれく。ハテ見る
程奥ゆかしい女子あきんど。そなたの商ふ蟲のかずく。
其名が一々聞たいわいの 菊「そんなら私が商ひます蟲の
かずくおはづかしながら。とうざい 三津「商ふ蟲
のかずくは。千草にすだく武藏野の合あぶみにあらぬ。
響蟲いなご鈴蟲黄金蟲合馬追蟲のやるせなや。ウわれは及
ばぬみの蟲なれど合ッ父よと鳴かで合戀に身を合ッやつれ
果たるきりくす合 蚊帳も思ひのかた釣りにひとりこが

假寐にも。合上カン「水ももらさぬ天の川それも及ばぬ事な
がらたゞの女子の心からつゝみ合ッかねたる胸の内是こ
の合ふくさにもお前の手跡。ウやうじさしにももしほぐ
さ。二世といはれてうれしさに秋の扇とすてやらす合ッひ
とめといふも知らばこそじつと身にそへ抱きしめて。ッ
はかなき戀のちからぐさどふで女房にや持ちやさんすま
い合ッわたしばかりが惚れてるてうその合返事合を誠と思
ひ。長地ねぐら定めぬやもめ鳥長き月日をうかくと。ウ
中だまされたさの身のねがひッ笑はしやんすな合しからし
やんすな合ッせめて一夜の。おなさけにアハッ露の命も捨
小舟。ウかぢをたへたるなみだ川行衛もオトシしらぬ風情
なり。中「われもまかする。ウみなれざぼしたゆく水と心
には。ウ思へどさすが前髪の亂れもやらぬ武士氣質合ッい
ろに立つ名をおしまづきよりしほもなくオトシ見えにける
詞ノル「これくくくそこを我等が商賣がら。て
らすところを取持て。ちよつと拍子にのりざいく。長地は
なしはせじとおしやりてすいた女のとうろびんぼつれか
かりし色 御けんもじ。ウにくからぬとの挨拶がきかまは

ほしと星合に。ウソルいもせのはしのわたりぞめ。詞ノルサ
ア〜〜と手を引けば心はとけし顔と顔。ノル三
つ大の字に結綿の。其中々に橘や。二上り「今の浮世の名取
ぐさ合牡丹燈籠の軒のつま合こがれて通ふ船燈籠合 上ルま
へわたりする舞どうろ。長地 ふみのもじばりゆびかみを
切子どうろの眞實は。ウかはらぬ中の花どうろ。カナルす
だれの内を戀ぐさの。つまこもれりと夕日かけ。あせや
思ひのたねならん。夢や枕に残るらん〜。

二〇 新曲高尾懺悔(高尾懺悔)

富本豊前太夫直傳
作者 櫻田 治助

「ひとたび清容を見てそもんにかない。ウ又或時は聲を聞
き。あいギンじうの心いとふかしぞつとすがほのながし
めも。なれしくるわの八ギン文字ツナフシ松の位に柳の姿。
ウ梅が香と上めしきぬ〜もまださめやらぬぬくめ鳥雪
のあしたの白無垢はきゆる思ひとなぞかけし。ウ心のた
けをいふならく。ならくの。スそこにいる時はるんぶの
むかしなつかしくこれ迄あギンらはれウさむらふなり菊之丞
詞申し〜御出家さま團十郎ハテ合點の行かぬ。申し申

し御出家様と呼んだは誰じや菊こ〜じやわいな團ヤ、
、そなたは三浦の高尾じやないか 菊「アイ高尾じやわ
いな團南無阿彌陀〜〜〜 菊六だう四しやうの
ちまたに迷ひ。うかみもやらぬ此身の上。頼兼様がなつ
かしいわいな 團「ふびんや〜。喜怒哀樂は人情の常。
つとめの内のうさつらさを。なんと話して聞かせまいか
菊「サアわらはもおはなし申度く。これまで参りました
はいな 團「サそのはなしは菊サそれは 三下り「はづかしな
がら川竹の合うきふししけき中々にウ年があいてのたの
しみはやがて。おの字の名をついて。二日酔せぬ身とな
らば素足もやほな。足袋になり。つめるを常の合此指に。
ウ絲針持ちて物縫ひ習ひ。合肌着仕立て。着せて見て。合サ
殿御のたけに眞實がア、入届かばほんにウ入れしかる。ウ
そしてかふしてどふしてとま〜になる身かなんぞ入のや
うに。中思ひくらしせしその内に頼兼様とおけなき。ウ二
世のゑにしを結びしがア、あだな契りか情なや。合カン
わかれのふちのうたかたもあ入はれはかなき身の上と。
涙は袖にまきの葉のつゆおもけカハリなる風情なり 團十郎詞

セリ「南無阿彌陀佛々々々々々々。とても事に懺悔には
重罪も滅するといへば。ありしくるわの事共を愚僧に咄
しめされぬか 菊「さなきだに女は五しやう三じうの重き
罪。それさへあるにさよ衣。わがつまならぬかさねづま。
いつはりかざりし身のつみを。そんなら懺悔致しませう
か團罪障消滅のために。詳しう咄して聞かせ候へ。なむ
あみだ佛〜、キ懺悔に罪もきへぬべし懺悔に罪もき
へなんと露の此身を草枕。長地夜毎々々にかはり行く昨日
のあふせ。ス今日のふちぬれてぬる夜のさ〜ごとに。笑
ふて。合つウらき日もあれば。泣いて嬉しき夜半もあれ
ば。蚊帳よりそとに。かみひとへ任せぬ身とて胸の苦を
いふにいはいれざくる〜まきのヲ、それ。其ス文のかず。
ウといてあすの中の町客を松蟲あきつ蟲合ウぬしをま
つ夜は人こそしらね夜着を枕に。長地鈴蟲なれや。わしも
蟲にはウあらねども殿御こひしと。草葉にすだくあはれ
ともふ入びんとも。いふべき人は面影も見えみ見えすみ
筈ノル木の 長むざんや高尾は世の人の ギン思ひをかけし
報ひにて。罪障の雲ウたちおほひ。めい〜もふ〜ら

ふ〜たり修羅の太鼓をうつ、なくはや。ウ時來ぬとい
ふまぐれ。ウこは口惜しや入淺間しやと立のけばまた。ゆ
く先に。ハル炎々と合コハリ焔に苦しむ身の業苦獄卒。悪鬼
のしもとにうたれ山に登れば劔につらぬき合アタル谷に沈
めばウぐれんのこらほりに。白むくかへつて唐紅。合血は
たきつ瀬や酒の浪。ノルウその涙は焦熱地獄。あだにちか
いしノルせいしの烏くろがねの。はしをならし兩眼めが
け飛かゝる合ノル道へど拂へど立去らすふるひわな〜きた
ぢ〜。おいめぐりてくる〜。くるしき思ひ
に玉きはる。道哲こ〜ぞと念珠をもみ。合なむくわうだ
い觀世音あみりたていぜいきやらうんそわかと。朝日の
みだをとふれば。野分夜あらし目前に。忽ち紫雲あい
たいし〜花ふりかゝるのりの庭もみちのつかと夕ばへ
も代々に其名やてらすらん。

二一 睦月戀手取(春駒)

富本豊前太夫直傳
作者 櫻田 治助

ウにくからぬ。風の聞ゆる松飾。ハル地扇々々今朝の春霞
も早く太刀は鞘。カン弓は袋に千代こめて。中納御代の
源や門之助 團上ル「氏も系圖も。ウ義家の合まんざいはやす風

じやいなおしやればそれもそふじやへ合「心かけ鯛合懸
想文合封目きりて藏びらき祝ふ鏡のたつ春はおもひく
のちらしがき合おしやればそれもそうじやいなおしやれ
ばそれもそうじやへ顔と手と手のくらべこし「ふりわけ
がたき春駒のおもひは二人兩たづなつながらぬ身には片手
綱おもひきるせと合きらぬせとのこるふたりにゆくふた
り太郎義家景政を伴ひ奥へぞ入りにける。「かゝる所へお
に門は大黒舞のまへわたり當年の恵方よりふく大黒がご
ざつたつちで庭はくことわざをたどりく「てきたりしが
二人を見るよりどつちやうごゑまでく合點ゆかぬ二人
の春駒わいらは何しにこゝへ來た「ハイわたしら二人は
な何やらでござりましたヲ、それく放下僧でござんす
わいな「なんだ放下僧だといふかかくいふ越後の入道鬼
門は安部の頼時が身寄の者を詮議の役人放下僧なら放下
僧のやうにたつた今こゝで舞うて見せろ「サアそれは
「きりく舞つて見せぬか所望々々と望まれて「扇取る
手もしとやかに夫と二人は立上り 詞月のためにはうき
雲の「種と心やなりぬらん「面白や花の都の東には八雲

二二 柳 絲戀芋環 (おみわ)

富本豊前大夫直傳

立つ名の祇園町合 出雲八重垣かい間見に赤前垂の花紅葉
合夜も仲居の駒下駄の音羽あらしの通ふらし合西は島原
あいの花合松の位に緑の禿戀の中戸に立つくしほかへも
らさぬ水車廻らば廻れ女子氣のもしやくと疑も深き思
ひの川柳合水や花田の帯のたけ合とけてねぬ夜は顔そむ
け無理な口舌にもまるふくら雀の雪催ひいなせともな
くひきとめてあため酒のさゝごとちよつと手許にも
んまる、すいは紙子の名にしおふ實と仇とにこきりこの
二つの竹に打納むかつと鞆鼓打つて見せふぞもとより鞆
鼓は波の音波の流れや鹽の花渚の砂さつくくさし引
音にひちりきの高音ひどかせどふくくと合方 三下り「花の
黄菊はナ合見紛ふ姿よの夜半には嘸と思はれて顔の合白
菊うつりぎならばわしやしらぬこちやしらぬ合ごけん
と文かきつばたやり水浅きゑにしとはさいなしんきな顔よ
花石と左の梅櫻千代に八千代のさゞれ石岩井の水やはや
瀬川ながれはつきぬ君が代とかなで壽き舞ひ納む。

二上り「戀をする身は若葉の楓合そまぬゑんならしやうこ
ともないがいろになる間にちる思ひ合上つめどかほり
橘姫。おもかけかくす薄衣を。ウそれと求女が慕ひ來て。
互にはたと行合のほしのひかりに顔と顔。松詞「求女さん
か三連「コレ「ウ「ヤアこひ人か何故に。こゝまであとをお
ひとり。長地もしやねぐらのちぎりをも叶へてやるとの
お心かと。ウ胸には言へど詞にはおもはゆけなる袖きヌエ
てう。合方「ウ「お三輪はあとに。おくれざき長地茶種にて
ふのせかれ行くすがたあいらし合かはゆらし合嬉しき中
にくり事も中カンいとしくををだまきにたへぬ思ひを亂
れ合ひ合中カン柳のかみもかけうつるハルカゞみか池やかは
ら町。長地ほくとの辻も名のみして地ひるのひなたをうか
うかと。道もせきもせ合心さへ合おのがはかせに。おどさ
る、雀の。森かみやが辻人目なければオトシ立とまり。松
詞「コレ申し求女様。こゝ迄一緒に來て下さりましたは。
妾が戀ぢを。叶へてやるとのお心かいなア。三連「サア其
心ざし仇には思はねど。二人一緒に伴ふては行先の妨。
こゝから二人かへつてたも然すりやどふあつても三連目

立たぬ内に合「そりやどうよくなちとめ様 三下り「姫は思
ひにたへ兼ねて。館を出し其日より。ウ君故ならばつゆ
ときえ。花と散りなんわが命。合ッおしからぬとは思へど
も。とけぬあなたのお心はカンあんまりむすぶのかみさ
んをいのりすごしたとがめかと。ウうらみつないつ寄そ
へば 中ノル「お三輪は中をおし隔てエ、きこへませぬ求
女様。そりや氣の多い。ウ悪性な。ウそもやわたしが初戀
は思はで三輪のすぎし夜に。長地葉ごしの月のおもかけは
お公家さんやら合侍さんやら合ギン知れぬなりふりすつき
りと。水ぎはの立つ 合よい殿御 合ほんに女子のめうもん
におはだあらして合うれしさに袖を油のにいまくら。其
うつりがの身に添て合「カン「外の女子は禁制としてか
ためし縁結び。ウ主ある殿御を大膽な斷りなしにほれる
とはどんな合本にも合ありやせまい合「ウ「女庭訓しつけ方
よふ見やしやんせコレナアエ、たしなみなされ合女中さ
ん。はなればせじとすがり付 三下り「イヤそもじとてたら
ちねのゆるせし中でもないからはッ戀はしがちよ我殿御
●ウ「イ、ヤ私が「イヤわしがとこなたが引ば ●色あな

たが止め、そちよ、こちよと、互に顔もあけうばふ。是も浮世のならいかや合、二上、月雪花を名所になぞらへ云へばうれしかろ合、何れの月がきに入らしやんす何れの花が合氣に入らしやんす合、ゆきに合戀ぢをしぎ立澤の夕べの文をまき立山にのほるもこひの合ならひじや物を合うらの苦屋と思はんせ。名におふ三つの名所かや。ウカ、リ「つれるもえんのつなでなは、ウ」こひのしがらみつたかづらつきまとわれてくる、合まはるや三つの小ぐるまの。われからさきとせぐり来るギンえんのおだまき。ウいとしごにあまるお三輪が怪氣のはり。男のすそにつけるとも。知らずしるしのいとすじを慕ひしたふて三重尋ね行く。

二三 花川戸身替の段 (身替りお俊)

富本豊前條直傳 作者 櫻田 治助

ウツカ、リ雨のふる夜はひとしほゆかし合、中カンさへては。月になほゆかし合、お俊はひとり湯がへりに合、ゆかたをちよつと合かへ帯。ウもみぢぶくろにうつろひて。長堀しがらみならぬ横櫛に。ついたほあけのひらもとい合か

とはおしゆん。此傳兵衛はお主が心を聞きたのじや。昨日秋葉であの様なあいそづかし。どふもがつてんが行ぬわい。どふいふことじや夫が聞たい。牛もし私が心聞たくば傳兵衛さんおまへの心から先へ云ふたがよいわいな。八耳ソリヤ何を牛傳兵衛さん。おまへはほんに。アノそのをの前さまとやらを。尋出して。お首をうたしやんす心でござんすかへハチ、ソリヤしれた事じや。アノ駿州清見が關をこへたる。そのをのまへは關破の科人。こよい中に尋出し。首うつてださねば。此の傳兵衛が身の上の願が叶はぬ。じやによつて。草をわけてもせんぎするのじや。牛、それさへ聞ば何にも聞事はござんせぬ。サア、早ふ歸つて下さんせハ、コレおしゆん。今思出したやうに此傳兵衛にかへれもどれとはエ、聞へた。きのふ秋葉のそぶりとひ。わりや心がはりだな、アイしれたこといなハ、エ、おのれはなく、ウツカ、リかはる心に傳兵衛はせき色立胸を。おししづめ。思ひ直してもたれより。合おなご心はうたがいの深い中にもなを深い二人が中に水さして。官長地たとへのかして有ともいひかはしたを

ほにか、れば合、ハルあだなスカスぐさ。申よるは嵐の花川戸なれにしくり合、おしあけてうちにカハリいるさへものスエあんじ。調、きのふ傳兵衛さんのいはしやんした事を思へば。關破りといふは。此お俊がためには大事の、お主さま。どこにどふしてお出なさる、事じややら。其お主さまの御難儀を。我身にかへてお救ひ申したい心のへ。アノ傳兵衛さんに。モ心に思はぬ愛想づかし。さぞ腹が立つたでござんせう。傳兵衛さん。堪忍して下さんせへ。イヤ、此やうな事いふて。ひよつと人に聞えては一大事。ドリヤ身じまいしてしまはふか、中ギン、きのふより。ウけふは思ひの合、レイゼイカ、リますか、ウくもるとならば花の空。ウ上野のかねか淺草か。無常を中カンつぐるかぜのあや引。八百羅出中、うき名が中に傳兵衛はお俊が。心うたがひて下忍ぶすがたのほうかぶり。ウた、すむ軒は目覺へたしかに、ごどと門の戸を。たく内にも心せき。八百調、こ、あけてもらひませう、牛、そふいふこへは傳兵衛さんかいな。八耳、チ、傳兵衛じや、マアこつちへござんせ。おまへはマア何しにござんしたへ。八百、何しにきた

ほぐにしてそなたはそはぬ心かと。むりに引よせ、色うらどへば。牛、傳兵衛さん。きれて下さんせハ、何がどうした。牛、傳兵衛さん。いつ迄いふて居やふより。おまへにあいそがつきたといふせうこは。おまへのものついたわたしが小袖。おまへの見るまへですん、に引さいてしまふ程に。心の残らぬやうに。それから見ていやしやんせと。ウおし入の戸を引あくれば。いぜん忍しそのをのまへ。顔見合せて悔りし。調、ヤあなたはいふさま戸棚の戸を引たて、調、ほんにわたしたとした事が。みれんらしい小袖を引さかふの何のといふ事もないかいな。傳兵衛様。たつた今。きれ文かいてもらいませう。ハ、何だどうした。牛、今の戸棚の小袖のかはりに。わたしが身を。切ぶみ。サ私へきれ文かいて下さんせ。ハ、ハテ心有けな詞のはし。今のはたしかに染もやう。小袖がはりのきれ文を、牛「はやうかいて下さんせ。ハ、そんなら切文。今かくぞよ、牛、アノマア仰山な顔はいな。ウツカ、リ、世の中を何にたとへんあすか川合、ウきのふの淵はけふの瀬とウかはりやすさよ人心。「硯引よせ傳兵衛はすみさへ薄きるにしぞ

と。ウ思ひあきらめかく文のりも後や先そばにおしゆんは見ぬふりも。合風につれなきつゆのてふ。今はこの身にあいそもこそも。上ルカン月夜の。ウそらやとり鐘を恨し事も仇枕。ハソレ望の切文かいたぞ。受とれ。半「これで心が。さつぱりとしたわいなハ「おしゆん。もふ此世では。逢ぬぞよ。ウタカ、リ「ふけて硝のおとさへゆかし中「おしゆんは後を見おくりかかはる心のつれなさ。ウ無や恨てふがない。ウおなご心と思はんしよがいふにいはれぬ身の願。あいそづかしの有じやうも合胸に涙をおし入のそばへそろく。色立寄て。半「おまへ様のお行衛を。ほうぐととお尋申ましたに。よふこそお出下りました。そのをの前様。人丸「申しおこへがたかい壁に耳。イロ「人や聞共しらふじが。のれんの内より。門之助「おしゆんほう半「エ、門「ハテきついきものつづしやふの。イヤきもがつぶれるといへば。ア、よく見れば見る程美しいものだ。此あいきやうで傳兵衛殿と色事だ物。有がたいわへく。半「白藤さんやつぱりおまへはじやけんかへ。「ナニサたとへじやけんてなければとて。たれ

もかまいてはねへのさ半「其やうにいはいしやんすな。かまいてが有まいものでもござんせぬぞへ。申し白藤様。アノきのふ秋葉でちよつといふたこと。マどふして下さんすへ。門「コレサくそんな事をいつておれにこまらせる事はねへはな。お前はアノ傳兵衛さんと二世迄もといふ中じやアごんせぬか半「サ其傳兵衛さんときれてしまふたわいな門「ナニ傳兵衛さんと。きれてしまふたとは半「きれてしまふたといふ。たしかなせうこは此きれ文。これ見て下さんせ門「アウなる程こりや傳兵衛の切文。そんならとふにきれたのかへ半「どふしてマアうそに切文が。とられる物で。ござんすぞいなア門「これでよめた。アノ傳兵衛殿とゑんを切ても。アノおし入の内の命が。助けたいとこの事か半「エ、サアそれは門「ハテ。かはつた色事でござんすの。傳兵衛殿になりかはり。戸だなのうちを半「ア、コレまたしやんせ門「ナゼとめる半「オ、にく門「ソリヤだれが半「しらふじさんが門「にくいと半「わたしやおまへに門「ナニがどふした半「まつてゐたはいいなアウタガ、リ「まつになりたやありまのま

つにウねて見てわけもしら藤にはひまつわる、うれしきは合長地なねの花も山吹もいはぬ色なるしなしぶり。ル「それと人目に關取は。おしゆんをつきのけきる物を。かへながらに立上り。色行んとするを引すへて。中見

て見ぬふりのせなとせな。おとこのかみをかんざしでかき撫ながら聲くもり。ウそりやすけないぞへ白藤様源太様合ウいかに關取様じやて、ギン力計か。心迄そのよに強い合物かいな。ほんに角力の噂にも手取々々と聞なれて思い初たる其日より。中カン「きにくせ付てわすられず心のたけを打明ていふて島田のもつれがみ。取上なれぬ仇ほれに。おなごの道が立物か憎からうともわたり合なけの情と一よさの。ウ枕かはして下さんせ。やいのく顔かくす深き思ひはおの川に。ぬれてオトス戀増すふせい也。門「それ程迄に此白藤を。思ふてくれる志忝ない。そなたの願叶へてやらう半「そんなら。ねて下さんすか門「イヤそりやならぬ半「シテ又何の願をへ門「傳兵衛殿の切文。そなたを切文叶へてやらふ半「エ、うれしうござんす。目と目のうちに心解けざりとうぎのかり枕合。

ウ思ひは二つ二すじの合帯こそ戀の命ぞといふ内すいな風吹て合消る燈火くらきより。心のやみの屏風山。うち

二四 春夜障子梅(夕霧) 富本豊前権直傳

地冬あみ笠の赤ばりで。紙子のひうちひざのさら笠ふきのぐしのぶ草しのぶとすれどいにしるの中地花は合風の

り。歌のせうがに合の手や合。歌かわい男にあふさかのせ
 きより。つらい世のならひ。詞ア、まことにそれよあの
 歌で思ひ出す。こぞの月見に太夫とおれがつれびき。ひ
 いたときのおもしろさ。ひくそのぬしはかはらねど。か
 はつたはおれが身の上。あいつがしんていあのやうにあ
 らふとは 歌「おもはぬ人にせきとめられて今は野澤の一
 つ水合 詞ア、いかさまそふじやなア。戀もまこと世に
 あるとき。人のところはあすか川、かはるつとめのなら
 ひじやもの。あはずといつそいでくりやうか。アイヤ
 く、あはずにいんでは。此胸が 歌「すまぬ合心の中にも
 しばしすむはゆかりの月のかげ。中地、むざんやな夕ぎり
 はッながれの昔なつかしき。ッおつとのねじめ身にこた
 へ。とびたつ心おくのまのしゆびがくちせぬるとゑん
 合むねと心の相の山あいの襖の工合よく。上ア「あけくれ戀
 しいつまのかほ。見るにうれしく走り寄り。いだきつい
 たるきりくす泣くより外の事スエルぞなき。詞「伊左衛門
 は夕ぎりをつきのけて立上り。コリヤモウその涙にこり
 たもの。けいせい心のそこねこの鼻はつめたいと。

る手も。心せきくぜつのとこの合よしあしも。ウうれし
 いにつけ。悲しいにつれて忘れた合事は無い。合ッそれに
 お前の悪性をッわしがあんじはうつり氣のほかにもしや
 といひかゝり。合ッしまひつかねば小夜ふけてせなかあ
 はせて寐て見てもつい。合それなりにはりよはく。中直
 りすりや。あけの鐘にくふてならぬ合鳥の聲。ッなんの
 鳥が意地わるで合カン啼くじやなければどきぬくのいなせ
 とむない心から。合ッままにならぬがいろの意地そこを
 樂しむすいな中。合ッそれがこふじて内方の首尾は不首
 尾とむすほふれ。ッ勘當の身とならのはやこのて柏のふ
 たりが中暇乞さへ合なく計り。ッ去年のくれから丸一年
 二年ごしにおとづれなく。ッそれはいくせの物あんじそ
 れ故に此病やせ。ッ衰入へたが目に見えぬかせん薬とね
 り薬と。鍼治と按摩でやうくと。ッ命つないでたまさ
 かにあふてこなさんにあまよふと。ッ思ふ所をさかさま
 なこりやむごらしいどふぞいの。ッ心つよやどふよくな
 にくやと膝に引よせて。さすりつないつこゑを上げ。わ
 けもしやうねもウレヒエなかりける。詞「伊左衛門涙をおさ

世間のたとへにちがいは無い。イヤこゝなまんざい傾城
 め。萬歳ならば春おじや通りや通りや。通りやといひけ
 れば。詞「ムウ此夕ぎりをまんざいと。一チ、まんざいけ
 いせいのるんゑんを知らずか。アノ侍の足にかけて蹴ら
 るゝを。まんざいけいせいといふぞや。下誠に目出度う
 さむらひける。詞しかも。足駄はいてけるやら。合中ノルと
 したちかへるあしだにて誠に目出度ふさむらひける。詞
 ナントきこゑたか。さりながらにも身すぎ。あのやう
 なよいしゆに蹴られては損はいかぬ。慾を知らねば身が
 立たぬ。ウノルよくわか。御まんざいとや。合中ノルとし
 立ちかへるあしだにて誠にめでたうさむらひける。詞町
 人もける。伊左衛門もける。ヤ、けるくくくとけちら
 かし。ウたばこ引よせふくきせるさらぬていオトシにて居
 たりける。合タドキ夕霧涙もろともウギンうらみられたり
 かこつのは。色のならひと合いひながら。合ッそれはうは氣
 な水浅黄合ッあいそめたその日から。歌こんなるにしがか
 らにもあろか。合ウッはでなうき名がうれしうて人のそし
 りも世の義理も。合ギンしら紙にかく文のつてウ返事合と

へけふ來たはかの里の悴。是をつぎ立て母人へ訴訟して
 藤屋の家を取立てだんご最中。其悴とりかへす思案が
 したいといふ色所へ。喜左衛門は立出詞申し、伊左衛
 門様。お前の御勘當もゆるまります。里の御子息さま
 もおも家へおひきとり。夕霧様の身うけもさらりと埒あ
 けました。サア、おめでたいはくくと「家内がいさむ
 勢につれて浮立つ伊左衛門悦びの眉をひらくや扇屋夕霧
 名を。萬代の春の花見る人。袖をぞつらねける。

二五 紙屋治兵衛道行野邊の書置

富本豊前太夫直傳 作者 櫻田 治助

ウギン「思ふ人。ハシルあればこそねぬ江戸ほとゝぎすウ枕にの
 こるうらみには。長地紙屋治兵衛が身の行衛 出カン家名も
 ついの紀の國屋 ウッ、キこよひ小春が名残ぞと合ひばりは
 うきをなきツスカスくし。長ッ雁はかたみのふみばかりほ
 ぐにもならずすてられ合ず合。ッ十九と廿八年の合年をか
 ぎりとくりはたす合。いのち合ふたつを珠數二れん合なま
 いだく合上るなまいだくく合ッなむあみじまもはる

かなるねがひのきしの土手づたいギンおほろくりに。う
つろいてつぐむハネズミあしも心からやいばをあゆむギ
ンおもひ川。ウふかゝれとこそちぎりしに丸三年もなじ
まいで此災難に大江ばし合あれウ見かへればカンギンすみな
れしわが家のこのす妻や子の。ウあすのなけきを思ひや
り胸は板間か樋の上へ急ぐ心も行なやむ命。長カ、リ「ぐち
な女子に未練な男よくあいほれのじつくらべ。合ッよひ
はひぞりて夜中のくぜつ合カンないてしのぎのかうがい
も中ッおれてわかれのきぬぐにほどけしかみを結ぶ手
の合。ウそでよりおくの入れほくろ。治兵衛命をウツ鏡に
うつし合。長地心のうちのたのしみは肌身につけて未來ま
で。合カンきえぬ思ひのほしあかりこれこの入みちがめい
どかと。ウ見かはす顔も見えぬ程落つる涙に堀川のはし
も水にやギンひたすらんニより淀と大和のふた川をひとつ
ながれの太川や。水と魚とはつれて行く。ナナルウわれも
小はると二人づれ合長地こんどのくさきの世までも夫婦
ぞとツナギ手に手をととりし戀のやみ。若葉が中に。かう。
かうとはや大長寺のあけの鐘身にこたへたるむじやうお

ん。最期を急がんこなたへと露の命も草の上。ウナルころ
しも月の十五日うき名の日にやのこるらん。

二六 おつま 八郎兵衛坂町宵四辻 (坂町おつま)

富本豊前太夫直傳

ウウき事によるもひくなり。ウはるがすみはれぬ思ひを
行燈の地ほかけもともに女子氣の。ウほそきあかりをか
きたつるそのかんざしのあしさへも。二心とやさぞやさ
ぞッ身のいひわけのそれぞとはあからさまにもいははし
のよそになりたるわれが名もつまとはいへどつまならぬ
ニより「結ぶの神もすぎれにかきあたりてはのちの世の
ゑんもちぎりもうすがみと心にかゝるもしほカンぐさ筆
の命毛はかなくも涙にうすきすみのいろ「ホンニ思へば
此身ほど因果なものが世にあらふかと、さんやか、さん
には小さい時に死別れ十四の年に伴左衛門さんのお屋敷へ
住んでから間もなふ八郎兵衛さんと言ひ交はし一生添は
うと思ふたにその甲斐もない今度の難儀彌兵衛さんの親
切にのつびきならぬ愛想つかしさぞ腹が立つたでござん
しやう言はうと思ふ心のせつなすすめではゆかぬと茶碗

酒無理に飲んだその時はまだうの熱湯をのむより苦しか
つたはいなアとてもお前に別れては死ぬる心は初めから
只樂しみは未來の縁とはいふもの、機嫌のよいお顔がま
一度見て死に度いはいなア「鐘諸共に忍び出でウツ春風
寒く身にしむもいまのうらみはながほりの。地人目をつ
つむ頬被り、にくやつれなや其人を今宵の中に。やきり
きり殺し。浮世の夢もさめざやのこひぐちくつろけおと
しざし。ウはや四つの鐘指折りてひとつ。ふたつや三つ
四つ四つばし四すじ。四つ辻を濱邊傳ひに上りつ下りつ。
幾度か戀の奴につかはれてかしくれば身の上をひく
かかたるかネみて内の様子ヌエを伺へり。「人の心と飛鳥
川かはるが女のならひといへどあのお妻に限つてはと思
つて居たのもおれがたわけ百兩の金がなければ世之助様
の命の際八郎兵衛とてもあなたがお果てなされては生き
ては居ぬ心面目ないは女房ども入聲してからこのかた相
應の身代も傾く程のおれが不身持お妻が所へ通ふのもけ
がに一度の悵氣もせず男を思ふ女の鏡よしないおれにつ
れそふて思はぬ歎きをかけると思へば今更詭る言葉もな

い只前生の因果じやとあきらめてくれ女房ども金が敵の
世の中じやナア「そのあだびとをまつごと。うちはし
らさぎしよんほりと。ぬれた中じやと世の人に。うらや
まれたもはや昔。思はれどしの入れほくろ命といふ字書
いたのも。長地筆にかはりは夏毛の鹿。ウ慕ふわたしが心
をば夢にも知らず今頃は恨いふたり腹立て。縁も切る
氣であろけれどぐちな事じやが未來では必ず添ふて下さ
んせ。待つて居るぞと思ふ事。ウ人目忍べば聲立てて云
はずこの暇乞それと知らねばつかのまもこころゆる
さぬめぐぎだけしめたる夜露に更けて行く星かあらぬか
提灯の。ひかけにしばし立忍ぶ「ヤアノカネハ九つ心の
亂れやきのがさじやらじあひたやと尻ひとつからけ身繕ひ
伺ふあしもさしつめし戸口によるの物思ひ幾重の垣をや
越えぬらん。

二七 一節草齋宮が船 (富本齋宮太夫直傳)

作者 櫻田 治助

みへそめしも昨日今日忘れぬ花のさとつばめつまこふ
きじやほろくの合姿をはるのながめぞとゆふ紫の筑波
山「は山しけ山めせきがさふかくよそめを忍びねは一節

の竹をふきすさむはでな修行のれんほながし合カン主ゆか
 してのぞかる、水にもかけのかほよ花けに鴛鴦は水鏡
 を愛すとかやわれはむろじの馬ひじり月を枕にすがごも
 の身となる澤の川淀やさらくさつと風に流る、柳かけ
 しばしはこゝに休ひぬセラフそれぞと戀に小紫人目もかね
 す走り寄り詞ヤアお前は權八さんかいなよふ來て下さん
 したなあ奥に長兵衛さんも來てござんすほどにはよふ
 こつちへござんせと取付く袂を振りはなし鐵婦城を破る
 とは聖賢のいましめ女にほだされこの身を忘る、權八な
 らずとてもない縁とあきらめそなたも親右内殿のかたき
 赤堀源吾を討てきやうよふに手向くるがよいさらばモシ
 モシ待つて下さんせア、どうぞわたしが心に思ふ事をど
 うしていふたがよかるふぞそれく幸ひアノ船にござん
 すおすみさんわたしがお前に日頃話して置いた事をよい
 やうにお頼み申しんすはいなアたもとを顔に小紫ほんに
 しみくうちあけて言はねばすまます言へばまた屋敷ぞだ
 ちの此野暮にまだやゑ梅の香がのこりすかんらしいと神
 がくれ秋が來よとは氣もつかず色にからまるつたかづら

金吾さんよふ來て下さんした逢ひ度かつたなつかしかつ
 たはいなア「アノすけつね殿とわりなき中となつて此左
 金吾が事は思切つたといふしるしにかたみのきやらの下
 駄まで煙となすとはエ、そなたはなふ「サアあの下駄を
 煙となしたはお前の未來のくけんを助けふばかりじやは
 いなア「今は祐經殿にうけ出され座敷のていもくるわ同
 然大磯小磯化粧坂名ある太夫を呼集め全盛の身の上まで
 よふ知つてゐるぞや「モたとへどのよふな身の上になろ
 ふとも何の心に従ひませふぞ「此左金吾が事は思切つた
 か「なんのいなアどふして思切られませふ「スリヤ今に
 於て祐經殿と「帯紐解いては寐ぬはいなア「でも座敷の
 様子「きゝたいかへ「話す心か「聞かしやんすかマアこ
 ふじやはいなア「座敷の調度手道具の合ギンかすく「多
 き其中に合「ウ「いかうへ小袖かけ香も合勤の内のかざり
 夜具合いきぢ合立琴三味線のいと殿御にうちつけて合
 ■ウ「いふも碁盤のだめなれど香にもきやらの一たきはき
 かねばならぬ床かざり合「ウ「何とせうぎの詞づめあふて
 ウわかれし合其日より合「カン上ル「酒で命をながらへて身

かべと見られて知らされて投げたきせるのきへしだいひ
 ぞるにかいも情なやお前の身にも此身にも苦になる事の
 かすく「がつもれば庭の雪見ぐさ消えぬばかりぞうらみ
 なるよしそれとてもなけくまじ前世の縁のしゆく河原敵
 のために此命捨つるもなにか惜しからずさはさりながら
 身のくもりくらき若葉にほとゝぎすなのらで出ぬはづか
 しさとまた顔かくすあみ笠の目にやうき名をもらすら
 ん。

二八

土佐節儀梅段 在姿淨瑠璃世界(新高尾)
 富本豊前太夫直傳

作者 櫻田 治助

二上りツマミツタ「たつや淺間の夕けむり▼▲消えて跡なき身
 ながらも合上ルふみはわすれすみちのくの緒絶の橋のわた
 り川合名のみ浮田の左金吾が戀に迷ふぞたゞならぬナナル
 地「袖笠ふかく通ひ路もウ人目の關や都烏ッ色ある波の花
 川戸こ、淺草の觀世音三社權現明王院ギンあさ露結ぶい
 ほならで君がいほりにもつこうのハル 紋日ゆかしくした
 はしくこれまで來りスエル候ぞや「あふ事のなきをうきた
 の森に住む「呼子鳥こそ「我身なりけり「ヤアお前は左

をしる雨の合袖の梅合●ウ「ほんにめれんとなりふりもつ
 い合夫なり合にるどころね合▲ギン「其とこやみの三つづ
 とん一寸屏風をおりはんギンたばこ盆さへ合のせられて
 煙も空のウ上草履合はしごのたつなみばたくと合長おろ
 しあゆみも庭櫻雪にはあらでふりかゝるハッッ「素足高
 づま八文字顔見らるゝも合はづかしく合●ウ「これ此わけ
 も三浦風長いつ丸まけに結び直しノルすいたお前とそふた
 時わたしたもたゞの名を付てかもじといふが嬉しさに合髪
 結はぬ日は玉くしけ ▲カン上ル「うらみらるゝもかこつ
 もあへば言譯たとふ紙木スぐしもしらでひざりごとほん
 にくいと身をそむけた、けどとがもながぎせる ▼通
 らぬもまた オッすいぞかし「あかぬ別れとはいひなが
 ら今はどふした身の上かとあんじぬ日とはなかつたは
 いの「そんならお前も思ふて居て下さんしたかへ「思は
 いでは「そりや眞實かへ「けふが日までの物思ひカ、ッ「物
 思ふ身はわれのみか柳に雨の物思ひ水にも月の物思ひ合
 すまぬ心が戀のくせ今もかはかぬ袖の露合 中日本堤にお
 きそめてウ通ひなれたる道のべや長雪をもちとはずッ雨も

なにくれッ戀にや夜も日もわかぬと思や急ぐ船さへ一挺
だち合おせやれおのこ合からろの音がやつとんく合ノル
はつとたつなみはまちどり合ゆられてもまれてはつとた
ち候び、びつくりくしよんがへな合千鳥にあらぬ合呼
子鳥こゑのみありてかけろふの合たち別れんと身づくろ
い ▲クドキ「高尾はそばへよりそひて袖から袖へ手をいれ
てじつととめきの移り香もコレッなつかしうはないかい
なふたりねたふはないかいな中カンつらいくがいは夢の内
年があいてのたのしみは ●ウ申「文の封じのかよふ神けふ
しとかいた其筆で合長やがて且那へやどよりと書いて見
たいと思ふから飽くまで私がじやう立て、待つに甲斐な
き身の上は ■カン「わかれのふちも瀬とかはりあすかも知
れぬ世のならひ目をくり事も二世かけてかはらしやんす
な合わすれさんすなすてさんすな合今今思ひはうき中に
お前合ばかりが命ぞとひざひき寄せて抱き付き ▲ウ「か
かる涙が傾城の誠の ハルオトシ 涙なりけらしカ、リ左金吾と
てもあらぬ身のおきわかれにし其日より合ギン紅涙に身は
合ひたせどもウもみぢにあかで胸の火のはやきえがての

るたる 徳次詞「わが思ふ人に見せばや諸共に。隅田川原の夕
ぐれのそら。とはよふやりおつたはへ。コウ毎日見てる
るに。屋根船で藝者まじりにてんてつとん。てんとたま
らぬ色の世の中。イヤどふもいへたものではない。イヤ
それはそふと。あに貴の所から頼んでよこされた二人の
衆。もふござりそふなものだが。コウまち合せてるるう
ち。どりや一服いたそふか。再戀に心をやつせといふた
合その言の葉を。ウしのぶにまかせ ッかちやはだして人
目の關をしのぶくと賣りスカス歩く。長ック八瀬や小原や
合芹生の里合ウしのぶ賣る身は合こうも合あるかとウ小づま
を合ッしやんととりく合ギンさまく。しのぶめさんか
川千鳥。ちどりかもめの名所なる隅田川原に。江戸つき
スエにけり喜代詞「急ぎ候程に。隅田川の渡しに着きて候。
のふくく其船に便船たのみませふ 徳次色」と聲かけられて
船長が。詞ヤアお前がたは。お染様久松様ではござりま
せぬか 喜代「フウそふいふそなたは徳次ハイ喜三太めでご
さります。兄貴の方より知らせて参り。大抵お待ち申し
た事ではござりませぬ。サアく此船へ早うお乗りなさ

うき思ひ上りその名合高尾の合朝がへりびんとばかりに
合ちぎりこしたき残したるうすぐものきやらのかほりの
合下くゆるはしんぞおもわくくハリカ、リおりから吹來る
風につれッふたりねよとのかねのこゑあふせ嬉しくその
まに合ウ水と氷のとけやすきウ夜の間の帯や手枕に春の
夢をや結ぶらんく。

二九 棲蓑嵐振袖(急賣)

富本豊前 大夫直傳
作者 瀬川 如阜述

ウ「名入にしあふ。長地武藏の國とウ下總の中を流る、隅田
川。合申「瀬々の白波たちそめし。合ウタ、キ霞をわたる春の
日にウよしなき人の事とは。上ハルありの合まにく都鳥
ウ「それはむかしになりひらの。ウそのふる事に引かへて
うき世を渡る水ギン馴棹 徳次田 中カン「さし合くらぬきさん
じは餘寒しのぎに篝着せて合ウノル火桶にあたる渡守江戸ね
むけをさます大火ざらくはへぎせるは合ウ花の雲ッ鐘は上
野か淺草か合腹のかけんも喜三太が。ギン用意の辨當取
出し。長地ふねをきまのきけんじやう一樹の蔭もわが
スエルやどり。縁は他生の船つぎやウ目あてもスエルこしと

れませい「成程々々。お染殿も此久松も。喜次郎が教に
任せ。このように菴賣と身をやつし。こゝまできことは
來たれども。どふも其船へは乗られませぬ 徳次「それは又
なぜでござります喜代「そのわけは。此お染殿ゆる 喜三「あ
じいな事いはしやんす。なんでわたしゆる。船に乗る事
はならぬと。いはしやんすぞいなア 喜代「今そなたがこゝ
へ來る道すがらいやるには。若草がかたみのふくさを持
てるる。水くさい心のお方に添はうより。いつそ淵川へ
身を沈め。死ぬる覺悟といやつたではないかナそれじや
によつて。どふも其船へはのられぬはいの「イロ」といふ
を船長引取つて 詞イヤこれはお二人ともに御尤さりなが
ら。そのふくさがあるによつてやかましようござります。
いつその事にそのふくさを火にくべて仕舞つたら。若草
様も。お染さんも。おもひがなくなつてよふござりませぬ。
まづくくふくさをお渡しなされませい。何じやまたとだ
に。思はぬ中の別れぢを。ことばのこさで名をやうらみ
ん 喜代「アふびんな事をしたはいの 徳次詞「所詮此よふなも
のが有るから面倒でござります。申しお染さん。コレ此

ふくさは私が此火鉢へこれ。この通りとうちへいれば。中煙がくれにあやしの心火あらはれ出ると見えけるが。船長はじめ久松おそめたゞ茫然とふしるたる。門之助出「娘盛りのかいしよけに合小づまほらく合とりスカスなりも。ウふりの袂に風ふくむるがほにあいのこほれ梅合末はてりはにゆふぜんのウしのぶもぢずりたれ故に。長地迷ふ心は白波の雲のあらぬか妄執のかけるふもゆるつらきナガス身を。長地しのぶのみだれかぎりなき恨みの刃になさけなやうかみもやらで其スカス人の。長つれそふ事のうらめしとうつらくと迷ひ来て小船まぢかくたち ヌエよれば「久松ふつと心づき。ヤアそなたはお染じやないか 富場 声アイお染じやはいな「ハテ心得ぬ。今思はずも悶絶なせしと思ひしが。心付いてよく見れば。ハテ合點の行かぬとイロかしこの二人をゆり起し。詞ヤアそなたはお染じやないか 富三「久松さん恐ろしい事でござんしたはいなア 喜代「いやもう恐ろしいとはそなたの事じやはいの。コレく五郎藏あれ。あれや見や。徳次「エ、お前はお染さん。こちらにもお染さん。こりやどぶじや 富三「エ、モ何のこ

さとはほんにさりとはかはゆらし戀にしのは人目のせき合しのぶくも。上ル我つまのためしのぶはへ合しのぶいらんせんかいにやかはんせんかいにやア 徳詞「テモこのよふにもなる物か。チ、それくよい事がある。お染様と久松様とのなれそのむつごとを喜代「此久松が相手になつて 富場「話そふはいなア。クドキ文七ガ、リ「過ぎし彌生の櫻時。長地花の姿のあいらしい合ウタ、キめ見えはじめを合中二人のゑん合ふつと見そめてはづかしい合長心のたけの筆すさみ合ウ一筆しめし文章も習ふた通りウかきくもる硯の海のそこいなき眞實見えしかへり事。中カン見た其時のうれしさはノル少い時にうつくしい色ノル 内裡雛さんもらふた心合ウノルまた合それからのあふせをば。 中「ひいな祭を待つよふに合 上ルカン指折り數へよふくと。あふ夜うれしき合新枕。中カンならべていつか下紐のとけぬ思ひに互のちかひ。ウ 日本國の神さんをひとつによせた誓紙にも合ウ書いたは合うそか偽りか。ウむごいつれないお心と。▲ウ「あなたへひけば ■イロ「こなたへも ▼▲「もつれ合もつるいと柳風にカハリオトシもまるゝ風情なり ▲ラシノル「そ

つちやぞいな。私を退て又外に。お染があつてよいものかいな 増吉「エ、モ何のこつちやぞいな。私を退て又外に。お染があつてよい物かいな 徳三「コリヤもふどちらがお染さんか。とんと合點がいかぬはいの 喜代「いかにもどちらか一人は變化のわざ。こりやまあ。どふしたらよからふぞいの 舞「よふござりまする。私が思付がござります。何であらふと私にお任せなされませと。イロこなたのお染が顔ばせをつくぐと眺め。あなたのお染がそばへ立寄つて。詞コレお前の名は何といふへ 増吉「アイわたしや染といふはいな 舞「してお前はこゝへ何しに來なかつた 舞「私がここへ來たのはな。觀音様のねりもの。しのぶうりじやはいな 舞「そんなら何といひなさる。葱賣のねりこなら。其踊を覚えてゐなさるか 舞「夫を知らいでよい物かいな。きつと覚えてゐるはいなア 徳「サア其ふりはどぶじやどぶじや 舞「サアちよつと小づまを。こふ取つて 三下「わしが在所は京の田舎のかたほとり八瀬や小原や芹生の里 合ギン世を忍ぶ故合姫ごぜの身でつまからけ合しのぶいらんせんかいにやアかはんせんかいなア世を忍ぶ合しのぶく

れと見るよりイロ船長が。中ノル中をへだて、顔と顔 詞ノルこちら合くつほみの花。ウ梅の若木の香にめで、見とれていさんす其中へ合。中ノル地うちの子がいの久松が。合中ノルおさな遊びをかこつけに子をとろくかくれんほきてんきかしてウめんない千鳥。増詞「申し久松さん 喜代「何と門之助「おそめ殿増「エ、うらめしい門「うらめしいウタとうらめしの心や人のうらみの。クドキガ、リ「ふかくしてウ「やいばに合かゝりし身の因果。ウ生きて此世に入在るならばいとしの殿御と添ひもせう 詞「エ、かはい、女子とねんものをウレヒガ、リなまなか出家をとけし身はくけんにさへられほつしんの。ウ中立を忘れしも。詞エ、皆たれ故ぞお染ゆへ。長地カ、リ「わたしが迷ひはつね若さん幼なじみのいひなづけ。中カンすへをたのみの甲斐もなく思はぬうき目三つ瀬川ウ上ル「むねにノルみなぎる思ひのふらウ「浅いはえにし 詞「深いはうらみ ▼▲ノル「うらみは人をも世をも思ひ思はじたゞ其人こそ。詞「につくしウ「つらし情ないぞとかこちなきかつばとウレヒエふして居たりける。徳詞「聞けば聞く程がてんがゆかぬはいの。オ、まだあるく。

それ去年の秋。明神様のまつりの時のおどりを。こゝで見度い〜。二人サアそのおどりは徳「それ 四人」それそれ〜そつこでせい ▼▲上り「いつしかに合中きみをまつちの山々こえて合かよふいほさき駒形や合上ル 千鳥かもめも心があらば白髭さんへ願かけて合ちよつとお顔をみめぐりならばそれこそほんに首尾の松。それウク〜それ〜それこそふかいなウ」ゑもん坂こよい廓のあふせの首尾も合 橋場の雨に合しつほりと合上ル君は山谷の三ヶ月さんへしんじつしんから願かけて合二つ枕でたのしむならばうれしのもりであろぞいなそれウク〜それ〜それこそふかいな。▲ふかいゑにしの中じやもの。徳詞「此よふに不思議な事がある物か。オ、幸ひ〜淺草寺へ納めてくれと。庄屋殿よりのたのまれた此観音經此經の功力をもつて。化生の姿をあらはしたびたまへ。南無觀世音。歸命頂禮〜 ●上ル」あゝら。おそろしやくるしやなイロ詞 娑婆の業因深き故 ▼▲外記「思はぬ此身にくけんのうけ共に合 奈落の底までも引立合行かんとせしかども。ノルフシ観音薩埵の誓ひにおそれ我と我身をせめにせめくる冥土

ル「扱。舟靈の御鎮座は合千石船や親船にノルあやかしけがれをいみたまひ上 水神龍女を遠ざけて悪風悪魔をよけたまふは誠に命の合親玉なり 長「これから跡は川竹の。二上り新造おろしに初會から合させうのものはお定期神は梵天大船の合天とう丸や日よし丸合ノル高尾吉野に合川一まで。その外あらゆる大やかた合中ノル茶ぶねやねぶねちよきにたり。ウ神をいさめのまんどろはぎをんばやしむかひぶね ▲舟歌「やら〜めでたいな御代はめでたいのんゑん ▼▲下「そりや▲ウ「若枝もゑん〜 ▼▲ギン「さかゆるのんこへ合 ▲詞「最前よりとやかくと。見せともななるこのつきがね 徳「コリヤなにのうらみかありあけの。つきがねこそノルフシすは〜うごくぞいのれた。合とりての大勢つきがねを。程なく梢に引上ぐれば。二人にあらでけしたる姿。詞そもまあうぬは何やつだやい ▲二上り鼓歌「凡ニ輪廻は小車の。ウりくしゆ四生をいでやらで ▼▲長「人間ふじやうばせうばのあはれはかなき身のはてを 徳ヲヲル「ふなをさ以前の観音經。かうべにさしつけ〜て。ノル此世を去りし執着心大悲のおうごに恨をはれ。成佛あれ

のつかい。合ノルかけもよしなやはづかしのもりてよそにやしら露に見えつかくれつおもかけの。ありとは見えてはる風に引とり姿は消えて失せにけり。徳詞「二葉の前様經若様お心がつきましたか喜甚「テモ恐ろしい事であつたなア 徳「まさしく今のはくはいりやうといふ坊主と。若草様の靈魂。其おうなんをのがれしも。此観音經のおかけお二人様。エ、有難やなア。アレ〜〜あの太鼓は。われ〜が身の上をとくけどり知つたかお二人様。しばしの中あのつきがねのうしろへと。イロいふま程なくとりての大勢うちつれ〜はせ來り ▲詞「たしかに見つけし經若丸。平家の落人二葉の前。いづくへかくした渡し守。有よふにぬかすまいかなんと 徳「オ、仰山な。私は御覽の通りの渡し守。そのような者は存じませぬ ▲「ヤア知らぬといふてすまそふか。白狀ひろけ 徳「これはまた迷惑な。モ商賣の船靈かけて。せいごんだて、も存じませぬ ▲「面白いは其船靈への誓言は 徳「サ其誓言は大勢「どうだッ舞ガ、リ「住吉四社の御神は合津々浦々の海上にかいの合船のわうなんを救はん爲との御せいぐわん合長ノ

と聲を上げ ▼▲ノル「謹請。東方。青龍。清淨。合謹請西方白體白龍。フシノル一大ウ三千大千世界の恆砂の龍王合ノル哀愍納受哀愍りきんの。砌なれば。ギン色いづくに大蛇のあるべきぞと。ウノルいのりのいられまた。立向つてつくいきは。ノル猛火と成つて身をこがす合ウノル日高にあらぬ隅田川。ウ「鐘が淵とも今の世に傳へて其名を残しける。

三〇 新曲神樂獅子(神樂獅子)

富本豊前太夫直傳

ウ「神樂はやして大磯合大門合化粧坂。ウ女郎さんがたのひるみせに文の半切合十二銅。たがいひそめてかくべ獅子合出中カン「かしらにふける鳥の毛も合いやなきやくをばふりみだし。すいたてふ〜合中もよき地 相生つれて道もせを。ウ招いてよんでくれ竹のすゝめの聲やしのばしくさゝやきあふてぞオトシ來りける 富三郎詞「これやこなたへ御免なさんせ。これは大磯小磯化粧坂。くるわをまはる獅子舞でござんす。富三郎「おのぞみならば十二銅。十二神樂のふたりづれ。まいもふて見せ申すが。一年の悪魔ばらひ 富三郎「めうとそろいの獅子舞を。まはせてごらん

なさんせんかいなア徳次「ヤアこりやよかろ。ほたんの花をながめてゐる所へ。獅子舞とはどふもいへぬ。サアサアはやふ舞つて見せい。所望だく」さて獅子と申すは合これ外記西天さいてんのいつじうにして。かの石橋のうきはしや。おのこことけて色ごのみ合ま妻を慕ふて峯を越え合まあふてもどるが洞ほらがへりま花にたはむれ合ま岩に隠れ合ま細くるひくるく枝にころく風にひらく合まおのが毛衣身をあらふ籠の糸もてうつなぎつなわれ合ませなかに子獅子をのせてわたるぞ文殊のちゑのわ合まぬけるか合ま。くぐるかなろふたらもどろふ合ま申まル 宙にひよつくりはねかへる合ま申ま一つもぬけめは内證なか申まの間。下から上までどんどとはやせやつみたいこの合ま音おともよしはら牡丹の花房にほひみちく合ま長なが地ぢおいらんおいらが姿くらべや仇くらべ。けに獅子王のいきはりになびかぬ客も中の町禿しんぞう引つれてウくれないとふ毛氈の獅子の。座にこそ直りける 徳次「イヤどふもいへぬ。サアく茶でも飲んでゆきやれく。ヤどふか見たよふなふり袖。たしか化粧坂の少將ではないか 眞まことほんにお前はきついで見通し。

るゝまた合ま三下りかみ切りのはじまりは。九郎助いなりにつまゝれて合まウこんななりになられた。元より福德自在の身なれば合ま申まふんぶく茶釜に毛がはえた合まはえたが大事かいふてたものふ。吉祥きしやう天女てんじよと寄りそふて抱いて巳待みまちとはオトおとむるゝ「エ、見ともないおきやがれ。此時宗は福の神はきらいだ。おれがしんずる福德は「其福德は」それよ「寶の山にいればとて何かゑきなし名を萬天まんでんに上るこそ人の福とはいふべけれ我わが竹馬たけうまの頃よりも小弓こゆみに小矢こやをとりそへて。障子襖のやれ次第。ウたゝみのわらまとめあては色工藤 眞まこと何工藤とは「サア工藤これクドキウ」くどふいふのがお前のくせかなんほそのよにせかしやんしても。あふにあはれぬあだ中をどふがなしゆびをこしらへて合ま逢あはしましたら合まコハ恨うらみのたけをカンかんいふてみたなら氣もほどけ結ぶえんじやのすへかけて合ま長いこちらも女夫事にょぶじ樂らみにする合まウき勤きんめ。ウ年ねんのあくのをかならずスエまちがへまいと言ひかはし無理約束むりやくそくにいやともいはれずついで合まこふなつたふかみぐさ。ウ主ぬしの心は末なし川の薄氷。カンそふとは知れど私が胸は。なちのお山のこけし

わたしがけふこゝへ來たのはな。三日三夜あけづめのお客があつて。身まゝにぬしとつれだつて來たのじやはいな。まあお前さんは。どなたさんじやへま「なにおれか。忝かたじけなくなくも當時とうじ一藤別當いちとうべつたう。工藤左衛門祐經が近臣。近江八幡やわた之助のすけだは。ことに此八幡之助は大福神だぞ。其會我まのよふな貧乏神とは違ふ。ア、ちと福神仲間へいれてやりたい。コレ少將せうしやうそもじは入てやる。まづこふ見た所が。さしづめそちはべんざいてんによ。此八幡之助は大福神コレ大盡舞を見さいな 申ま申ま名もけいせいやらうんそわか。我等は古風なまん丸頭巾で出かけやす。長なが申ま一に依よやふみまへて。合ま二上りひくは二丁目の。てうじ車にまはされて。三枚肩でおさせたり合ま申ま申ますでにその夜の大きて合ま申まかよふ神のふうじめとひつたりのり付け百福百壽ひやくふくひやくじゆの屏風山。きせふ書いたりいれほくろ 申ま扱あゆびきりのはじまりは。ウかたばみやのかた岡が高安彦太におくら

みづ。ウもらさぬ二人が申じやもの。せいしかゝすと指切らずと色何の互あひに心がすまぬ。ウあかし合まふのが誠と誠こんな女夫がよそにもあるか合ま。ウ忘れ給ふな忘るゝなど。言はしやんしたを覺へがあるふあのしらゝしい顔をしてゑゝにくらしいウさりととはつれない心やとかぶり合まふることわりオトおとなけれ。ウそばで見てるる八幡之助。申まぢたいそさまのちごの舞おほへあるやと色取付けば「はなせ」「留た」「はなせ」「留たく」とめたはいなアウうとめて見たさよ「時雨ふるくあられふるふりの袖ふり袖合まいつそとしまがウうらやましようておはぐるじしの合まかねごとや。まつたりまつたりあやまつた。合まはりがつよても君にはもろい。まつたりくあやまつた。合ま色と上うまぶとはどちらにほれるいろにほれるかうはきな色で合ましばくこれが樂しみに舞つたりくあやまつたうそと手くだの二瀬川 申ま三人しけみのさんどの松。鐘かけ松かねかけまつからかけ松の枝をたれ。ウ葉を重ねたる年々の幾代の春をやかぞふらん。

三一 お菊名酒盛色の中汲

富本豊前太夫直傳
作者 瀬川 如臈

二上り「咲花の。ウちるとはかねて知りながら。合中も中の中
で。心なくおとすは風かや春雨の合上りギンガハリはれぬ思
ひをしよんほりと、ウ袖うちかはす籠の鳥。ウ雲を戀路の
身ひとつに定めかねギンたる胸のやみ 門之助 思ひまはせ
ばわれながら。悪いと知つてうかくと。大恩のお主様。
そのお娘御をそゝのかし。今更何んと言譯もないせう知
つたおさく殿。今日の手づめを身にかへて救ふて下さる
心ざし。何とあだには思ひませぬ。迎もおいとま受けし
身で。國へとても歸られず。旦那様への申譯。お菊さま
へお詫ながらに此身のとがを書殘し。今宵中にこゝを立
退き。人知れず淵川を身へ沈めるがせめてもの申わけ。
幸ひ床に見えるは硯箱。そふじやく。三下り「墨と硯のい
ろこい中も。ウ水の出ばなの墨にこり。ナヲル合ウツガ、」其
水ぐきのかづレイセイは。ウ筆の命毛おしからぬ合心の
たけを合かきナガスくもり。中カン跡や先なる文の綾。此世

らとつくりと思案を極めて置きましたれば。もふこの上
はふつつりとわたしが事は思ひ切。無い昔じやと思召し。
許嫁のむこ様と。お添ひなさるが御身のおため。思ひま
はせば、ウ「世上の戀路にひきかへて道にそむきし恩知ら
ず。ウ中朋輩衆の情さへいふにいはいれぬ身のおちど門詞、そ
の申譯はこまんと。認め置きしを御覽なされ。只何事
も今迄は夢の浮世とあきらめて。お許しなされて下さり
ませ。ウハシル「拜みますると手を合せ顔も得上げぬオトシ
ぢらしさ。ウ「お菊は始終伏沈み。ウ心をあせり身をもだ
え。ウこけし岩間のはぬけ鳥こゑを袂にウレヒオトシかくし
なきンシ「言ひ度い事のかづくの。あれども胸につかへ
のてい 中色「幸助大いに驚きて。手水鉢なる水をくみ。色
抱き起して口うつし。詞申しお心がつきましたかと。「い
へばお菊はないじやくり クドキ「うらみ顔さへはづかしい
合色といふ字はいろはよの合外にはぬ筆はじめ。長堀
もとはといへばと、さんが合わしにウかくして世の人のウ
結納とやらの約束は。ウほんにせいもんしらゆふの神
と合親とが合結ばぬ縁と。合いひわけなからせめてもの合

を夢のかへすがき。菊之丞出「同じ思ひにめもあはで。ウお
菊は鬮を忍び路の合ウかつておほへしうらづたひ合ウ 深
にも薄氷戀のすあしに 中ウつまからけナガスハル堀ふりの。
袂に手とほし入の合。長堀 かけさへふるふ夜半の風下木々
にも合宵の一時雨合ウ染手拭につゆいとふ中娘心のしどけ
なき。我かけにさへ合 おどろかれウ火かけを袖にやうや
うと臧をめあてにギンヌエ立寄れば。イロノルはつとばかり
にうは書も。そのまゝかしこへ ハシルかくすうち色「お菊
はしをり戸押開き合 菊之丞 幸助そこにか門之助ヤそふお
つしやるはお菊様か菊、幸助。あいたかつた。あいた
かつたはいのふ門「モシくお聲が高うござります。ど
ふしてこゝへはお出なされました 菊「わしやそなたの事
が案じられ。ちよつとなりと逢ひたいと思ふ程。なほ意
地の悪いと、さんまで。今宵にかぎりわしがそばにおよ
ると言ひ。奥座敷には傳三様が。寐てるやしやんすゆへ
に門「それではお前はかつてから。庭をまはつてお出なさ
れましたか。それ程迄にわたしが事をお案じなされて下
されますお志。何の忘れは致しませぬが。さいぜんか

ウ白山様へ願かけて茶だちするのウわたしやそなたに
添ひ度いばかりウ「立山様へ願かけて煙草たつのもウわ
たしやお前に添ひ度いばかり合。中カン「誠をいは、此道は
親のまゝにもならぬがならひ。ウ女子のすいた女夫事。
ウそれさへけふの。今迄も。中人めまがきにへだてられ心
ばかりを亂菊の。合露の玉さかあふたびに合長堀、わしが黄
菊を打あかし岩にせかる、菊水の合ウ中わかれても末に相生
の契りはつきぬおきな草ウ「ともしら菊の千代迄もかは
らぬ中を何じややら。ウいかに殿御のくせじやとてやや
ともすれば中御主人のお主様のとにくて口。ウいたづら
ぎくと振捨て、合故郷の花のよめが萩合カンハシルいとしら
しさに見かへられかへる羽音のとりかね言も。いつか丸
ねのきくがさね。一重はおろか百夜菊りんゑはつきじわ
すれ霜ウ「消えなば共に消えもせでつれない事とより
そいてウ胸のほむらは紅菊の。花の霞すふまきな事。短
き春の夜半の上かね中なるかならぬかうぶ神の。ウあは
れを結ばせ玉の絲つなぐめうとのゑんめい酒合 中情にふ
たりが中汲分けて色親の心をほん直し。ウ末は夫婦とき

く酒ならばそれこそ家の寶命酒ほうめいしゅッルやんがてやゝをうめ酒とつもる咄しは色々の。きくのはもりをゑがいたる屏風の。ウうちによしのぶらん。

三二 小いなこいな半兵衛 俠容形近江八景

富本豊前大夫直傳 作者 松井 由輔

ウ「さよふけて。中カン八つか七つかあけ六つのかねが敵の世の中に半兵衛が身の落度。ウ今さら惜むやうなれど命ひとつをすてぐさの。合ッつゆのなさけにひかされて。ともに冥土の道づれと戀に小いなが心ねを。ふびんとうるむ目は涙しばしウレヒスエ言葉もなかりしが。▲宗十郎調「よくよく思ひまはして見れば。女房お才が誠といひ。兄の手前。世間の聞え。死ねばならぬ此半兵衛。ゑんにひかれてそなた迄。どふも手にかけてころされぬ。あとにこのつて一ぺんの回向を頼む。コレ小いな。●クドキ「いふ顔じつと打ながめ。ウそりやなにいはず半兵衛さん。そもやふたりがなれそめは思ひ大津の合柴屋町。合ウこがれよるべの矢橋船岸に合はなれて合ちからなき。▲合ウ「うきが中にもたのしみは初會にほれて合うらみわびほさぬ袖だに

あるものを合。●カン「かたい約束石山のカハリギンそのつき出しのはじめから合しつほりあめの合るつゞけに。合ウぬれて色ますからさきのまつ夜はつらい合下床の内ほんに思へばかた思ひ堅田に落つる合かりがねの。●中カン「ふみのたよりですましてもあはずにるれば氣にかゝり。合あうてうれしきよなくに。▲カン「むつごとつもるひらのゆき下紐とけて合はだとはだ。はやきぬぐは合三井のかねいつか苦界をはなれてほんに世帯を瀬田の女夫橋。▼▲ウ「まことは里のおとにきく琵琶のうみにやカハリオトシひたすらん。▲此上は死なば一緒。人目にたゝぬ其内にサアおじや。▼カ、リ「互に覺悟の身づくろい。手に手をとつて。行かゝる。むかふのかたの人音にしばし小かけの袖屏風合戀といふ。長その水上をたづぬればギンこしより下の名にしおふ加田合あわ島は紀の路なる。神をまもりの修業者がウおしよほからけに布づきんウ我身世にふる合鈴をチガスふる。うきよわたりといふしでの道をはやめて合オトシ來りけり。●八百藏「おつとまつたり。うまいなくこふ見た所が大津柴屋町あたりのおやまふう。男をつれて

ハア、心中じやなく、ア、これめつそふな。心中ではない。連れて走つて夫婦になる氣舞きまい、それく。苦界くがいはなれて女夫にならば。ぬひはりする身はまもる神さん。▲「ひなをおさめるゑんあればいもせを結ぶぎえんもよし菊「どうぞめうとになられるやうに御祈禱を頼むはいなア。●八百、ム、いもせをむすぶ神籬かみひなとは。そりや大きな了簡ちがひ。あは島のかみびなは。夫婦にあらぬ親子のかたしろ。菊「そりや又なぜにへ。●八百袖ふりあふも他生の縁。其神籬の古事來歴。さらば語つてきかそふか。▲菊「こりやよかろふはいなア。●イロ「そもく紀州名草の郡ウ加田のあは島明神の由來を尋ね來るに。▼▲中昔々そのむかし。中神功皇后筑紫にて皇子を誕生ましますばウみやこにはむほんのやから。是を討たんと待受る。▲ウ「武内がはからひにて皇子を小ぶねにまいらせて合。●ひそかに紀の路へ送らるゝ。なみのあはれやあは島の。本社といふはこれなりと。あらくかくとうやまつて申す。▲菜「いはれを聞けば有難い。とはいひながら折角ぎゑんをいはふたに。菊「夫婦でないとはいはしやんすからはエ、モ腹

の立つあは島さん。此よふな事きかふより。ちつとも早やうサアござんせ。●八百ア、これくさりとては氣の短い。正直にやつてのけたは野暮のはじまり。ぎゑん直しの神いさめ。どりや敬つて申さうか。●二上「さればくるわの色くらべ縁を結ぶの紙びなははだ淡島の。御利生に合。▲ウ「無理なくぜつもおれやすきはりを合おさめて女氣の。●合ウ「君にもぬけのうつほ船。ながれのさとにひく三味の。藝者さんがた旦那衆。あるいは神樂のたいこ持。▲ギン「あやの巻紙かきくどく。●カル「あはれの首尾も淡島が女子のすくなひこなとはうそでござらぬ本社の神の。ちかひにもれぬ女夫中。なぐさの氷とけ易き水の出花の若いどし。戀のぬれ手で淡島は。足をはやめていそぎ行く。▼▲「見送る野邊にてうくの比翼のつばさこれもまたつがひはなれぬ女夫中花の小さいな半兵衛がうき名をこゝに書留む。

三三 小ざく半兵衛 達模様吾妻八景

富本豊前大夫直傳 作者 松井 由輔

上「戀ギン風の。ハルウいと入身にしむ雨もよひギン。下き

りにまぎれてやうく〜と。ハル地しづきをはらふ袖袂ぬ
 れてッうれしき二人づれ。三下り歌^ウあれ春雨が降るはい
 な。あぜにからすが下ぬればどり。ウこひにぬる〜といふ
 事が合かはいとなくはひさしいものよのさりながら合か
 はいといふもほんにうき世であるわいな。ナタル中^ウ歌の
 しゃうかも身の上と長地 思ひつゞけてながなはて。中カン
 わが名は花にはるがすみッ野にも山にもハルたちススミち
 て。文七一足づゝに消えて行く合。長地小ぎく半兵衛があひ
 合のギン傘に比翼の中ぬれつ ナガスばさ。長地 中よし原とい
 はれしもむかしとなるも因果ぞと。道路にしばし休スエ
 らひぬ 菊之丞^ウ半兵衛さん道々もいふとをり。心に思はぬ
 愛想づかしさぞはらが立つたでござんせふ。堪忍して下
 さんせへ 八百殿^ウそふいふ深い心と知らず。いちづに色に
 迷ふたるわが氣のあやまり。ひとりならず二人まで殺し
 た此身はこゝろがら。たとへ折紙手に入つても。所詮の
 がれぬわが命。そなたはどふも殺されぬ。思案しかへて
 くるわへ歸り。わがなきあとはながらへて。思ひ出す日
 は一遍の。必ず回向を頼むぞよ 菊^ウエ、モなせにそのよ

いてねじめの中たんほ ▼^ウ最期の場所とかくごして。
 つれだつ向ふへ拍子とり合 出ッ^ウめだたや〜ウ春のは
 じめの春駒なんぞは。夢に見てさへよいとのごぶり。●
 詞ノドウ〜あさの出がけにや小ギン室ぶし。ウうき
 世わたりはさまスカス〜に。太鼓たゝいてさるまはし來
 かゝる向ふへ二人づれ。行かんとするを引とめる。猿に
 恐れて飛びのくオトス小ぎく 宗十郎^ウア、なんにもこはい事
 はごんせぬ。こはいといふはお前がた。まだ夜のあける
 かあけぬうちがてんの行かぬなりそぶり。色じやなく。
 心中と見た目は違はぬ。菊^ウイ、エどふしてまあ 茲^ウハテ
 さりとは〜「二上^ウ」のほよさんなく〜又あろかいな合 宗
 「お前がたは未來で女夫にならうと思はつしやろうが。さ
 き世のびんぎは知れぬ。死んで花みはさくまいし。さりと
 は〜●二上^ウ」のほよさんなく〜又あろかいな。合ッ
 むこ入姿ののつしりと。のつしりと。よめごの機嫌が直
 つたぞ。くるりとかへつて立たりなコレ〜。〜
 く〜もどらんせ。かへつたか。ノルッのほよさんなく〜
 又あろかいな合ッ^ウついでに日和を見てたもれ。日和を見

ふな事いふて下さんす。藝者となりしはじめから。色に
 も戀にもお前ひとり。死なば一緒の約束を。今更そんな
 水くさい。そりや聞ゑませぬ。半兵衛さん ●歌ガ、リ同じ
 勤めと合いひながら。ウ中座敷ばかりのつきあひにその。
 ウお姿をみめぐりのよるのあめよりぬれ合か〜り。合中
 カン「わがつま橋と夕日さすかほにてりはの合ッ新^ウまくら
 合うれしいあふせ合まつざぎの後のギン月見のよも合すが
 ら。▲ウ中なれそめてよります戀に。上ルカン 思ひのたけを
 ウい入をささのばんに忍ば〜かね四つふとしらせ文。ウ
 首尾を小やどに合待乳山暮雪とつもる言の葉も。ウ中人目
 のせぎやかりがねの。わたるはし場の合青あらし合ッはれ
 ぬ心も隅出川むごひきはんととりついではなれがたなき
 カハリオトシその風情。▲中半兵衛小ぎくが顔を見て長地それ
 程までに思ひつめ下二世を合かけたる三さがり。けいこッ
 けいこで内證は合三味線枕の合むつごともでんじゆにあ
 らばひよくの鳥合またちぶくらばれんりの枝合ちかひは
 なにとてかいろうび 長地 せいしに書きしかみ駒の。ハル
 ばちがあたろとなんのその。合まゝの川竹どうするてだ

たならおちてたも。〜八百だん〜の御意見きつと
 聞届けました 菊^ウうれしうござんす 茲^ウオ、そふじや〜
 ●「おさるはお目出たや。▼▲ナタル心の駒に引とむる。小
 ぎく半兵衛が戀中のうき名を。こゝに書留む。

三四 松風 徒髮戀曲者(松風)

富本豊前太夫直傳

ウ「松しまや。おじまのあまの月にだに。かけをくむこそ
 こゝろあれ〜 地運ぶは遠き陸奥の。中カン千賀のしほが
 ま。松のむらだち霞む日に。ハル地しほぢや遠くなるみが
 た。こゝは鳴尾の。松かけに月こそさわわれあしの家。合
 中カン「袖をむすんでかたにかけ長汐くむ 申爲と思へども。
 はなれがたなや合ッ行平の中納言合ッ三年はこゝに須磨の
 浦合歸洛のよそほひ御立烏帽子。上ルカン かりぎぬのもと
 の雲井にかへりざき花のお姿見るうれしさもまた悲しさ
 も。長地きみとれんりの松風がかたへはあとに思ひ草。合
 ウその戀ぐさの葉すゑにむすぶ露の間も。わすれねばこ
 そあじきカハリスエなや。合つ〜めどそらにありあけの月は
 一つ 合影はふたりがなれそめは汐波むうき身合見つ。見

られ合ついにはよるべなきささぐおなさけのほどたなな
 し小ぶね合ッとまをしきねやかぢまくら一夜合二夜とかさ
 なりて。もはやふたとせ今宵まで。ウ人にはたれもつけ
 のくしさしくる涙合ッ 汲分け給ふ中納言。ありあふ硯引
 寄せて筆にはするオトシ御名ごり 菊之丞立わかれいなば
 の山のみねにおふる。まつとしきかば今かへりこん。そん
 ならこれが 紫十郎かたみの一首。迎ひの輿を待つてるや
 中色「さらばといふもみれんのくりごと。」いへいへく
 殿御の心は飛鳥川。ウふちが合瀬となりてりふり知れぬ
 たとへ事ノル詞中ハテ村雨ときこへしも引寄せて見れば合
 やつぱり色松風合ッ「かはるまいぞやウ」かはらじとウ「お
 ふせうれしくいらへさへどふいふてよかるふやら合ッお
 もひなをせどかこつ身をいのれどさらに神さんも。カンほ
 れたどふしはぜひがないたゞ世の中は誠と誠。ウそれを
 たのしむわたしが心かならずやいのと寄り添ふて。ギン
 ルしほなれぎぬのぬれそめて。わりなき中やカ、リつきせ
 ぬ名残の折しもあれ。ウ 歸浴を急ぐかねのつけ。ノルいと
 ど別れのいまさらに。ゑにしも花のあだあらしちやのう

上戸の色松兵衛さ合ニ上リ「さつとよるなみがつてんじや合
 詞ノルコレハサひよいとせいウアノ浪越えてこの浪越えて
 あしは。ひよろ合くちろくく目もとウけんぢよ見る目
 の色よりかはい酒のやつことうかれくる 彦三郎ヤア松風
 かいやい 菊之丞「フウそなたは誰ぢや彦三郎船頭の松兵衛じ
 や。菊」そなたの持つたは。そりやなんじや。彦「これか。
 これはな。長ノル」これがことしの手づくりざけ合中ノル飲ん
 だるだるまの合ッゑんでがなさまにほの字の帆が見えた
 合帆かけて走るとオトシ慕ひ寄る 菊「フウこの狩衣がほし
 いかほしか夜さりのほしまもりや 彦「ハア、かはひやそ
 なたは。氣ちがひじやの。菊」オ、氣違ひじや。わ
 が身は氣ちがいか長カ、リ「我身も戀に迷ふたか。あたらし
 船の合色船頭殿合ッノルやれくくやつとよいおとこ。彦フウ
 さては行平様にすてられて。そなたは氣が違ふたの 菊「ヤ
 なに行平様は。あれくくあそこに彦どれく。フウあり
 や松じやはやい ウノル「おろかの人のいひ事やあの松こそ
 はわがつまよ。ウたとへしは別るゝともかたみは今
 もありはらのウッそのおもかけは行平の合ギンノルひと木の

らハルオトシみやこもるらん。▲上ル「波こももや。ウすま
 の浦長堀つらやかくれんそで笠を合ッタ、キかたしくすへは
 たまくらに一人ぬるには。中カンウきぬくくしらぬッし
 れしられぬ中ならば。合ッこふはなるまいすてぐさのヨ
 イサヨそふづの身とや笑はれん合長堀いろにくるふがおか
 しいとて 中ギンノルうない子が合下く石をつぶてのからか
 らと●「フウ笑ふく。ほんに何がおかしいぞウノル」笑は
 ば笑へ。ちつともそつとも大事なないへ、エ、大事な
 のをウぬれてそいねの戀ごろも。ウそも此ほどの御なさ
 けまたいつの世におとづれを。長堀 松風が身に及びなき
 戀に心もこりすまの。ハネハヅミ▲泣いてさわたる合浦ち
 どりア、うらやまし●「あのとりさへも女夫合々々のもろ
 つばさ。ウ二世とちかひしわがつまをなど合情なの沖の
 なみ▼ウノルしづめはやらじうらめしとあなたへ走り合こ
 なたへ狂ひ合思ひ亂るゝもしを草。ねにこそたてめわれ
 からとあこがれこがれ合ふしオトシまろぶ合道真屋カ、リ「こ
 こに此頃こひ知りのひなたじみたるしほなれ男合ッノル酒
 もなるくちいそせせり吞ねばすまのまつによる。長機嫌

まつに合きぬきせて烏帽子まいらせひもしめて。かりの
 殿御とかしづけば。ノルこなたはあきれてにけみづのい
 なしはせじと引止めてにけなき戀のちくさぞめふせいお
 かしく見えにオトシける 彦おれにこのよふな物を着せて
 行平様にして。こゝろのたけをいふのかそんなら行平じ
 やく。エヘンく御臺所の松風々々。菊「そのような
 事。おつしやつた事もあつたはいなア●クドキ」ほんに思へ
 ばかたみこそ今は仇なれッ忘られぬ三とせのむかし此里
 へ。▲ウ中雲井に近き御方の合●上ルカンさすらへとやらうき
 月日お茶の通ひやさ、事のあひにめされておふけなく。
 ▲合ッ引手あまたのその中にあひなれ合そめしはづかしさ
 ウおほろ月夜もにくからぬ ●中カン「言葉とがめや胸づく
 し。とりがうたへばわかれがいやで 長はなれともない中
 直りウそれが戀ぢのつねかない合ウタガ、リ「戀にやうたよ
 むお定り。ウしかもその時このおれが色ッア、なにとやら
 わくらはに。合ギンノルもしほたれつゝわびごともしかぬ
 かんしやく合下羽織もそこにッ扇。ウおつとり。刀さいとい
 のふよ ギンもどろふよといふては小こしにだきついた。

長いつそかりねのこのまゝこゝで。ノル詞われらもなさけ
にあひたいなア。菊そりやたれに彦松風さんに「それで

ときはのふかみどり松を太夫といふはいな彦「太夫とは
けいせい菊いや〜此烏帽子狩衣で。萬歳の太夫じや
〜彦そんならわれらも才若の。菊さいさきよしの兩人
「ことぶきは二上り」とくわかにかに御まんざいと御代もさ
かへてまします。ウ愛嬌ありけるほつとりもの合いろの
きくてふゆひわたや比翼にそめたつるの丸。上ル寶むすぶ
の神さんへ戀のねがひのせいもん立て、合ウクさらばこれ
からわれらがおもはくそろ〜合やれ〜合ノル詞かやう
申す才藏なんぞは夜もひるも合おつつきやつて合くつ付
きやつて合くつ付きやつて。おつつきやつてナル長ふた
りそひねの床のうち。ウ千夜を一夜のむつことも。長つき
ぬいもせの戀中を。カンアハフシふりすてられしノル捨小舟。
ウ共に亂るゝしづへの風のうつしづゝろやオトシはてしな
き。ウノル」さきつれて合長色にまじへしとかへりのウ花
のかんばせ花吹雪。ギン松に吹きくる風もさやうじて合ノル
すまのうら波どう〜〜合ウノルいは根をあらふむらさ

ベギン五月雨に地蚊やりふすぶる軒のつま。カン秋風そよ
と音つれて田のにも落つる雁の聲。合ウ實に月ならば十三
夜合ウ菊の下露ぬれそめて。つま戀かぬる合さを鹿やをし
のふすまの薄氷これ皆戀の色と香に。ハキハズミカ、リうつる
や四季のおりごとに。ウ君と比翼の床の内語り明入かさ
ぬ夜半もなしウ別れをしめと曉の鐘はや鳴りて鳥の聲。合
中ノルたゝわれをのみ追來るか科なき鐘を怨みにしウ此
罪科の數々は讀むとも盡きぬ眞砂路を。一人かこちて行
道もいそぐ心も法の道。供養の庭にぞつきにけり供養の
庭にぞつきけり。

二六 道菜種裳(新夕霧) 富本豊前太夫直傳 作者 並木 五瓶

三下りウ「何九年くがひ十年花ごろもうき名なにはの戀風
やナル地その扇屋の松合の色なれそめてこい紫のゆかり
藤屋の伊左衛門。中よし田屋のかねごと入むかしにし
のふふたりづれ菊十郎出地「花さく合さとの春ならばかぶる
中居におくられてはでな他所行き合身あがりにギンすみよ
し行のかごの内。中心覺への塀筋長町うらを西南合き入の
ふけふまで今宮の合廣田の森も合あとに見て。ウあべのと

めも。ウあとなくはれてすまのうら松風ばかりやのこる
らん。

三五 道成寺行咲初花振袖 富本豊前太夫直傳

中「月は程なく江戸入しほの〜スカス。カンけぶりみちくる
小松原地いそぐとすれど戀風の。ウウ、キ振袖重くふきたま
りびらりほうしのふは〜ウと合ウしどけなりふりオ、
はづかしや。ウゑんをいのりの神ならでかねの供養へ物
ずき参り合長ノルあじな娘と人ごとに中ギンわらは〜笑へ百
スカス千鳥。ハル君と合ねし夜のきぬ〜の。ウあかねわか
れのかなしさを思へばにくや世の中のウかねもひ〜けよ
しゆもくも折れよ。さりとして入は。さりとしては。ウ戀を知
らざるかねつきの情ないぞやうらめしと忘るゝひまも涙
川。合ギン戀のこほりにとぢられて身をきりくだくうき思
ひ二上り「戀をする身は濱邊の千鳥合上ル夜毎々々に袖しほ
るしよんがへ合ウ君にあふ夜は梢の烏合上ルかはい〜と
引寄せてしよんがへかはず枕のかねごと合ナル又の御
けんはいつかはと長心づくしの年月は門に松たつあした
より合ウ梅が香にほふ窓の内長櫻も散りて早苗とる螢の夕

聞けば思ひ出す合ウわしも信田の妻や子にかゝるうき身
のうきわかれ。ウかはひやあとにわけしらぬ。長ひとり小
菊かと、様とウしたふて泣くか。ウか、様と尋ね迷ふて
くらきより。くらき闇路に幾度か思ひ直せど恩愛の。こ
れぞほだしとウ菜種ばたわけもなみだのながなはて捨て
に行く身のやぶかけも。富田乞妻の村つ〜きつきぬ名残
ぞカハスエあはれなる菊十郎嬉しやこ、までは來たが。天
命とは言ひながら。わるもの共が思はぬ最期。死恥かく
す伊左衛門 菊之丞「そのつきつめたお前の心。一しよに死
ねば私わたしが本望 菊十郎「イヤとても此身は放埒の言譯。そな
たはあとに残り。アレ娘こぎくが生先を 菊「エ、又そん
な事いふのかいなア。そりやもう娘の小菊はかはい、は
かはい、けれど。お前に別れてなんとせう。一緒に死な
うと連立つて來て。今更そんな水くさい胴慾なエ、その
胴慾なが。なぜにかはゆひぞ申あふは。別れのはじめと
はきくもうるさい合世のたとへ。ウはでやうはきはつき
だしの合初めてあふたその夜からすて、合誠の立よふを。
合中カンきせうせいしに神かけて二世の夫婦の女夫のと書

いたばかりが色じやない。主はおほへてるさんすか。上ルカ心ルカに誠あるものは必ず愚癡ぐでいの合あるものと。合あ嬉うれしい文にお前の手合長わたしがはだに合かけ守。ウ心で心の帯しめてとかぬくがいの合わけしらぬ。十が九つお客のくせは合あ器量きりやう自慢じまんや藝ぎ自慢じまん合あ我身われみにほれて女郎ぢやうらうにはほれぬふりしていきすぎたおもはせぶりのやほらしさ。合あウそれが手のあるうかしはだ。長ながうらやくそくのしこなしに。船ふねやけい子こに合あだつきも。中なかとこのくぜつくぜつのたねまいてふられて歸かへるにはか雨あめ長ながあかつきがさのそらなみだならべたてたる合中あちゆうよくわかにかイヤけいせいせいのまんだいどの。長ながノル 紋もん日々々の合色あしきはしら立。七百貫目ななひゃくくわんめが紙花かみはなも合地あちぜいときこんの一ひとさかり。ウいまはやうくやうくなぎなたのそのあはぬは氣きでくふて。しまひのつかぬ戀こひのはて合あはてはかふした身のなんぎ合あ廣ひろい。世界せかいに住すみながらせまふ樂たのしみしむ下誠げまことと誠まこと。合あるんがほれたか。ほれたがゑんか。長戀ながこひにふたつはないけれど思おもひはたつた一筋ひとすぢにわたしがすいた小ざしきつき物ものかすいはすかうとうで合底あちに情なさけのある男おとこか入いはゆふなふて何なにとせう。こればつ

思おもひ出せば昔むかしじやなア。二世にせいと誓ちかひし三浦屋さんぷらやの。高尾たかおが苦くる患うれ助すけけんと。かたみの小袖こそで此こゝ黒髪くろかみ。切きつても切きれぬ凡夫ぼんぷ心しん。ア、不憫ふみんな最期さいごであつたなア 菊きく之の派は出で「扇子あふぎ召まひませく合あノル」粹すいな浮世うきよのいとなみを。ウ仇あだに暮くせし戀風こひかぜの。長地ながぢまぶにあふぎと謎めいかけてうはきな風かぜに招まねかれて。色いろに要かなめの手取者てとりもの合あめぐりくるく合あ舞扇まひあふぎ男おとこ扇あふぎもまよふなる女扇おんなあふぎとみゑいどう。高懸たかか懸か出で長地ながぢノル「これも跡あとから月つきにゑをさすがにかろき合あ團扇うちはオトス賣う。我われも昔むかしは色いろづか握にぎつた腰こしの辨當べんたうも。しめねば邪魔じまに色いろなら團扇うちは。心こゝろも有頂うてん天地てんち金きんカノ文ぶんさへも今ははや反古ほんこ團扇うちはとも深草ふかぐさのなびきやすさよ。風かぜと風かぜ。ウ時ときにあふぎとうちは賣うギン輕かろい商賣かひ氣きもかゝるく頭かぶにやどる紙細かみこ工く色いろノルはつて見るきかのりが來きてなんと結締ゆわ久ひさしぶり合あ色いろわり花はなびしとは合詞あひことばノルどでござんと色いろしなだれか、れば。其手そのてをばらひ 菊きく之の派は出で「何なにの事ことでござんすぞいな。最前さいぜんから跡あとになり先まへになりかんじんの商賣かひ物のうちには賣うらしやんせいで。お前まへもよつ程ほどなまぐら者ものじやはいなこま」なまぐら者ものとは情なさけない。隨分ずいぶんわしも精せいを出だそふと思おもふ所ところへ。うつつい姉あねさん。お前はまアどこ

かりは世よの義理ぎりも我子われこの事ことも思おもやせぬ死しなば二人ふたりが手てをひいて。三途さんずの川がはや死出ししでの山やま合あウよくなことじやが極樂ごくらくのはちすとやらのあらざたいさだまりごと、あきらめて。ウ一緒に死しんで下くださんせ。ウのかぬはなれぬ戻かへりやせぬ。願ねがひははいのととりすがる顔かほも涙なみだのおほろオトシかけ。カ、リ男おとこもとかう今更いまさらに。ウつきぬ思おもひをしらくもの。あけがたちかきかねのこゑ死しにおくれては恥はぢの恥はぢいざと覺悟かくごは諸共しよごに合あウ口くちに稱名目しょうなめくに涙なみだノル最期さいごを松まつのウ朝あさあらし。風かぜがもてくる人音ひとねに。のがれた野のの夜よるの鶴子つるこ故こゝろのやみや辿たどららん。

三七

もろ共に名なをあげ 茂たけなほ懺悔ざんげ睦言むつごん(扇賣高尾)

富本豊前太夫直傳

上うへ「流れは常に溶々とろとろと。ハルつきぬながめの宮戸川みやとがわつかの間またへぬウ 三谷さんや船ふね誰たれを待まち乳ちの山やまそびへ。日本堤にっぽんづつみを通とほふかご長地ながぢうきを悟さとりし左金吾さきんごが。世よを遁にれたる草くさの庵いほ八百懸出やっぴやくで「以前の姿引すがひかへて高尾たかおが中菩提なかぼだいのギン 關せき伽がの水身みづみも住す詫わびしウ墨染すみぞめの袖そでのかほりぞギンヌエ奥おくゆかし 八百懸出やっぴやくであふことことのなきを浮田うきたの森もりに住すむ。呼子鳥よこどりこそ我身われみなりけり。

から出でなざる。扇賣あふぎうだへ扇あふぎとはれて何なにといほざきの。ほとりに一人角田川ひととしかがわ。しづといふ扇あふぎうりじやはいなア。こま「したり。しづ心こゝろなくとは奥床おくどましい。わしはみのわの四季しきの庄兵衛しやべゑといふ團扇うちはうり。うちわをおめしなされませ 菊きく「イエく扇あふぎをおめしなされませこま「イヤ團扇うちはをめしませ菊きく「いへく扇あふぎをおめしなされませこま「どぶぞ扇あふぎを買かふて下くださりませ菊きく「いへくうちわをこま「これさあんまりかつかめくゆへソレ賣物うりものが間違まちがふた。菊きくほんにこれはそさうな。しかしうちわも扇あふぎものがれぬ物もの。これから中なかよふ一緒に商あひひしよふじやないかへこま「それく。そんならこふ荷にを一ひと緒いっしょにして。ほうず持ににせうではないか菊きく「ほんさんもちはよからうわいなこま「先づこふ荷にを一つにした所ところが。扇あふぎやく。うちはやうちとはと。いふてはあんまりよこつたをしないでないか 菊きく「ハテどふなといはんせいなアウノル「心こゝろもあひし荷に賣打うかたけてぞ歩あみオトシ來きる。色庄兵衛庵いろしやべゑいほの内うちを見て こま「サアサアかはりませうく 菊きく「そりや又またなぜにへ こま「なぜといふ事ことがあるものか。あのいほりの内に坊主ぼくしゆが居ゐるから。こなたの番ばんじや 菊きく「い

へく行遇はぬ内は。ほうず持ちやござんせぬイヤく
 こま「なんでも坊主を見たからは。こなたの番じや 尊そ
 りやお前無理でござんす 色」と争ふ二人がその中へ。道
 哲内より立出て 八百「ア、これく」最前から聞いてるれ
 ば。坊主々と愚僧にあてつけた二人の商人。何をその
 よふに争ふのじや 尊ホ、こりやなんでござります。
 あなたへ扇を。めさせませうと存じまして 八百成程扇も
 うちも時分の物なれば買ふてやらう。色「サアく」こち
 へとまねかれて二人はうちへいるよりも こま「サア團扇
 を先へお召しなされませ 菊「いへ扇から先へ召して下さ
 りませ 八百「ア、これく」そのよふに争はふよりはまア。
 此世で扇子が先へ始まつたか。團扇が先か。何でも先へ
 はじまつた方から買ふてやらうどちらが先じや こま「サ
 アこれはむつかしくなつて来たコレおしづとやら。何が
 先か知るまいがの菊「サアそれはなこま」知つているならい
 ふて見やれ。どうじやのく 菊「とうざいく」三下り「扇
 子は漢士がはじめにて夫婦の約も合歡扇 合ッ源氏にさく
 らの三重がさね。斑女がねやにも扇の風合ッノル 月重山に

入りぬればこれを。あけて月にたとへ角はあれどもまん
 丸に合見えてひらけば初霞たてるや門に禮扇 戀にかけ
 ては目せきがさ ナヲルウ「うはきく」であいなれそめて合ッ
 色で扇のちんくちぎりは合それが誠であるぞいの。い
 つかうき名が立つやしらぢか淺黄地か。ざつと墨繪の一
 筆烏戀の地紙じやないかいな上ノル「イヤく」おしや
 ますな。中ノルそも團扇は天竺に白月といふ美人あり。清
 秋の三五夜に心もすみし月を見て始めてうちわを合製し
 つ、三伏の暑をはらふ便とて。長堀 法界のくうりを悟る
 合もろこしにてはしゆんのりほつ日の本にては信濃な
 る。小柴の翁がしわくちやにしづい顔して張つた故澁團
 扇とは申すなり 色「話し、入る道哲にしづ心なく寄添ふ
 を合點行かずと振切つて 八百「こりやく」女寄るまいぞ。
 かりにも三衣を身に纏ひし此道哲。とは言へど見れば見
 る程はてよふ似たは 菊「エ、あの私が誰に似ましたへ八百
 「二世と誓ひし三浦屋の高尾太夫に生寫しじや こま」似た
 こそ幸ひあの女中を相手にして。高尾太夫の馴初のお咄
 しが。承りたふござります 八百「成程懺悔に罪も消る道

理。かたみに残るうちかけを見るにつけても思ひの種
 こま「シテ其なれ初は 受給ふしもは合下しだいの天王な
 り合いで其頃は正月二日の事なりしが廓はあと着のきそ
 始め合船乗初ともやいとさ柳橋よりおし出し。北へく
 といそがる、イロ合中「抑其日の出立は羽織は羽二重三所
 の。ウ紋日物日のきらいなく通ひなれても衣紋坂。どつ
 といふてはやされたウもしも夫れかと思かへり柳まだう
 ら若き レイゼイ「中の町。茶屋が見付けて手を取て打つれ
 立し揚屋入 八百「其大寄はくるわの名とり。はしからはし
 へ橋立の 菊「かすも千山引つれて。茶屋のせうぎに立な
 らび こま「たれを鶴町 八百「まぶをひな松ウ」松山に若紫を
 染之助。打かけ九重綾こしのこま「小づまをしやんとこう
 とつて 合「ナゲブシ」袖にかほりを瀧姫やわたりにてうど瀧
 はしわたしてんと合玉菊たをやぎ姿 八百「其鶴の尾につら
 れぬ内さらばお暇いたそふか こま「是待つた クドキウ」わし
 が心を合歌川さんすか 色おわるかろ 合中カン此みちのくは
 戀ゆへにほそくやつれし絲瀧や。ふかくぞ思ひ染川の。
 上ルカン いつか氣儘に花扇あはぬ夜たゞは一夜も千春。あ

ふた其夜はいそ山合せ山合たんと咄しもありはらなれど
 あれみさ山の明けわたり。合ッそらに一筋小紫口舌しの
 はらついに住の江又の合御けんを松の戸を。明るは茶屋
 の合朝むかひ長堀ねざめのかほどりきけんとりおし付け。
 あなたの花妻と瀬川たいて詞のやしはハネズミつれて
 す立のひなづるやしづはたならでばたくと。廓下をつ
 たふ瀧川の流ればふかき山谷船 合ノル色おせやれおのこ合
 二てう立合三てう立合 椎の木じや。合點じや合 拍子とり
 どの合ッさがり船合「見れば見渡す棹さしやとくなぜに
 とくかぬ我思ひほんにサア 長ノル「さすてもしほにぬれそ
 めて。君の心をとるかぢや。きのおもかぢをわつさりと。
 さつとさばいて奥座敷茶屋船宿に合わかい者。遣手禿を
 とりこみせうぶ。色ノルまあくくくこへと合ノルむ
 りやりばなしの取持顔「二枚屏風のかぜしのぎいかなる
 夢をや結 オトシぶらん。中「冥土の道を教へ鳥。合しでのた
 をさと聞時はけにあぢきなき短夜や。別れの鳥は里ばか
 り。ウ泣いてぞ人に告げ渡る去りし高尾が。ウ立姿 出二上り
 「消えずきへすみ水の月うつり心はあるなれと思ひ。切

るせときづよふも岩間にとんとくだかれて流れよるせの
合波枕合過しかねごとわすれてか花はねもとへかへりき
てうつしにまみえ侍ふぞや詞「申しく左金吾さん八百
「ヤアそなたは菊高尾じやはいなあ八百まだそなたは迷
ふてゐるか菊迷ふてゐるとはへ八百頼兼公のはからひと
て。うきよ戸平が手にかへり。此世を去つたじやないか
菊此世を去ても去りやらぬ輪廻のきづな。かたみの小袖
もろともに。お前に預けし山鳥の印迄。なぜに川へ沈め
て下さんした。うらみを言ひに來たはいなア八百ヤ、何
と菊コレウあはれ此身は。うき川竹の。ウしづみもやら
ず浮きもせず。ウかはり果てたる三つ瀬川きのふけふ迄
はだとはだ合中おしのふすまの羽をならべねぐらはなれ
ぬ一つ夜着。ウ中かさねばうとし二人ねて。未來ははちす
の臺ぞとウかたみに残す合から衣合つきつなれにしかひ
もなく此あら川の藻屑とは。ウこはれぬ心か情なや。ウき
づよいお方と身をそむけうらみかこつぞウレヒエ「まこ
となり。カ、ウ「よしわれとてもいつ迄か。ウうきをうき世
にながらへんあの世はじやうほんじやうせうの二人くら

すが極樂と引よせられてクドキ「心でわらひ。ウたとへう
そでも其よふにいはいはんす人を残し置き。何んの此身は浮
かもぞへ合それゆゑ水にさそはれて合色のせかいにすみ
田川。合深いあさいはよふくみわけていほ崎の合いつか
くるわを花川戸。合中カンまつちに残す里詞三浦兵庫も合
なけ島田ゆふて見たいが山のしゆく無理な願ひも金杉の
毘沙門さんへ朝参り。ウうはき心にだまされた女子心は
そふじやないわいな。かた時はねばくよくくと涙をか
くす薄化粧なけばこそ長向ふ鏡のかけくもりおふとはす
れど物いはす。見ずや知らずやあじきなき心ぞ心カハリオ
トシ迷はすれ。色「思ひがけなき後より兼て忍びし國つら
が。左金吾やらぬと隙間なく。ひらりと見せし電光石火。
みやまおろしに吹送る冥土の使のせめつゝみ。合上ノルも
だへくるしむ有様は恐ろしなんどもおろオトシかなり。菊
「左金吾さんお身の上に凶事ある時は。此高尾が付添う
て。冥土へつれ行く覺悟しやこま「事おかしや罪人め。山
鳥の印を渡せばよし妨なさは目に物見するぞ菊「こしや
くな來れ 兩人どつこいウノル「煩惱業火苛責の杖。劍の山

も今眼前ありと見ゆれば合水の月雲を色どる稻妻の手に
もとられず合見れば又きのふけふ迄作りなす合牛王せい
しのちのからすウかはいくくと鳴もせず吸付たばこは焦
熱の炎となつて身をこがし別れの酒は三途の流白粉たち
まち紅蓮の水合へには則ち阿鼻地獄。うてば飛のき合は
らへばひらき合くるりくくるくと合まとい付いたる
輪廻のきづな離れがたなき妄執の冥土の罪障西方寺。み
だの光りにはれわたり印に一樹ぞ残りけり。

三八 三重霞嬉敷顔鳥(三重霞傀儡師)

作者 櫻田左交
富本齋宮太夫直傳

滑稽「さるほどに時致十八年の天津風そうくとしてお
のづからあめにきくなる少將が素顔も雪か化粧坂富三郎出
長眼「見へそめにしその日よりいはで思ひの十寸鏡くしけ
の露にうつろはぬ心が心のかほよどり 此間三郎富三郎 淨るり
郎せりふありて
「かゝるところへ朝比奈が修業の足らぬ傀儡師合方三津五郎
出淨るり「おはもじやまた紅筆も初霞未申ぐま巳午の間む
かへばよろづよし盛がすねつかぶりの大ざはひこゝまで
のたくり木偶まはしおゆるしうけてやつてくりよ合方長眼

「すいてふゑいちやくすいやくいんちやんおてき
やんそふはらぎやんそふ花が見たくばお江戸へござれ上
野飛鳥の花ざかりこゝろばかりで拍子さへ阿波の鳴戸も
何くれと小歌をこめて箱つゝみ手ごしの里へとうかれく
此間狂言あつて三津五郎エヘンく 淨るり「かけまくも日本堤
を天照かよふ神代のそのむかし合方三津「いはくす舟につ
き出しのまだおいらんはわかゑびんごんすやんすもしら
にぎてまぶのおとこにあをにぎて正月三日の揚屋入り 淨
るり「第三會目の事かよ 榮三郎「しかも其日は全盛なこと
しろぬし總じまひ神も色にはふかみ草廿日ながしてゑび
すかう 長眼「夜も蛭子の床の内三とせあしたち給はねば富
三「天の岩戸のむかひ酒西の身あがりつゝけはすいな
おさんじや「ないかいな。三津「二階もとんく内證もど
んぐりの辻子宮川町 榮三「ゑびすの辻子へぎをんから富三
「かけてぞたのむ 三津「夕だすき「結んで解いてつりざほ
の絲よりながきねんの内うらやましさにせきれいもかた
い顔して浪枕船のりぞめも吉原や 此間す 長眼「見附箱崎く
すればし 此間拍子ごと 三津「権の木じやはららつほ「半分じやし

つちやつほ合ゆたのためたにこがれゆく戀は曲者く三津「三人持ちし子實の總領息子は太磯へかよふちどりの初紋日（番り）「まだとけかぬる乙の雪もどかしらしいじやないかいな箱の内外の目をしのびふたりから子にさゝやいてまわし座敷を戀のやみ（長唄）「小倉の野邊のひともこすゝきいつか穂に出て尾花とならば露がねたまんア、なんとしよ（番り）「おぐらの野邊のゑびす紙文にうれしきさままいるおな子心をくもせでほんにいらへも茶たねさへいはぬ色香のにくらしや（兼三郎）ゑびす三郎左衛門祐經「いつか神樂をうつゝにも我ねんりきの通れとて三つ羽の征矢がつる柏かたきいはほに手束弓（三津）「これあにさんばからしいぞよ（兼三）心の内をいはぬが花（長唄）十日ゑびすのお宮には鍵玉にたばねのしはぜぶくろにさい穂立ゑほし入り枳たはら大はん小ばん笹をかついで千鳥あし（番り）「見れば見る程よい花よめ御心よさそなかみさまじや心よさそにひかされてこよひくるわのしきぞめや（長唄）「綾千反錦が千反金襴緞子紗綾（さや）やちりめんめんくちんちりめん目出たい綱を此髭が釣たる綱を見さいなモサ

モサく（番り）「あれあかつきの明星がちらりくくと西の宮（長唄）月もなさに傾きて（番り）「はやしのよめのあさむかひ（此間せり）富三とめたく（三津）とめたはいなア（長唄）とめて留木のナアきぬぐに君がかむろの袖たもと合とめて梢の朝の雪清見が關に三保の月ちよつと添へかゝりぶね（合方）草子（あつて）面白や（番り）折からにけ來るはだせ馬時致得たりと引寄せて乗しづめたる馬上の術手ごろの大根千里の鞭曾我中村へと急ぎしはゆゝしかりける次第なり。

三九

全盛操花車（木やり） 富本豊前太夫直傳

ウ（さ）ても見事へ。合秋ウの錦のウはですがた今を盛りの花車合中カン引やさきづなよいなかのつな合（長唄）色にや手頃の合きおいオホスはだ。文七ガ、リ十七八や十六のしゝのきやりに引かへて（兼三下り）ウ上「ヤアしめろやれウよいさよいこれはのサよいさよいこれはのサよいやナ（甲）よいくヤレわつざりとしめかけやれこれにはなこいへをしよ。ウと言ちやアなんぐりかけなんでもこつちの方く。ウやんれうてくうつたるものにはなにく。▲ウ（つゞみ）ウ「ヤレ太鼓にかんこに手拍子が碁雙六が御百しやう。う

しろばたでんばたナウ與三郎が中おこめがちきねナウきぬたかるたにはなんりやうりんがこつくいか。中あぶみの三味線舎人のぶちがナウ鹿のつしよくく打のがけんびき。ウまだも打のがナカウぢやが▲ウ「ヤレてウつこのしゆ（ウ）コレちんくからりがつちの音打たる狸の腹鼓。中正月がせつぶんのまめとてナぶりくにはかきだま七ウ種▲ウ「ヤレなじよく（ウ）「おしよせ▲かきよせ（ウ）「ほつとりくいたいたナにくちやうちやせぬいとしけりやこそおいどをちつくりたい。どつこいやれこれ手がそれたかたまるがもんではないによよいくよいやな▲ウ「よいくよいやな（ウ）「そふよがしめかけ中つなア▲ウ「ゑんやアゑんやこれはあれはさのへ（ウ）ゑんやるよ合▲ウ「はつ雁の。ウつれてきつれてそめてこき合ウちぢさののべのウ花道を。ウウきにうかオトシれて勇みくる引（ウ）クドキ「手

いけの花をどこの山（長唄）梅に鶯またせて置いて合ウささゝに一夜の仇心。▲ウ中「松に小ふじもうち紫のたれにひウぞりし合かほよ鳥合▲上ルカン「いつかもみぢのもみうつろいて合はかなき戀はあさがほの。ウ其日ぐらしのめうと

中。長唄すいなウ水仙むろにねてつばきとかはす合ウ手枕はウかはいらしいじやウないかいな。▲ウ（三上り）「四季上ルのながめとなる花にさへ合じつとうはきなウ八重一重合戀のしよわけもさまぐに有るが中にも中の町ナナルカ（カ）リウ「くるわの▲ウ「櫻ねびきして。長唄戀のあふ瀬もウ我ながらめぐりくるくくるく合と。ウ松にうれしきさとの花ながめにあかぬウ風情なり。

四〇 道行念玉蔓（長作）

富本豊前太夫直傳 作者 櫻田 治助

ウ（般特）が。ぐちにはウあらでおろかなる中ギン身は木津川のわたしもり。ナガスいびきのハル地聲もとまもれて中カン笑ふひばりにぬれつばめ長姫と園部の左衛門は合（兼三郎）出中ノル「心せかれて旅立にウ日（た）のよし合あしも夏衣（なつころも）。合長唄うらなき戀の誠と誠。いつかウ（めうと）女夫とならざかや。合長唄あれくあれになつかしき。ウはくそのもりのレイセイかけろふもウたへまを出てきのふけふ合ウあすかもあとにおくれ咲椿も合やぶのわたりよりウこまのふなばに下着にけり（兼）コ

レ申し左衛門様。こゝはマア何といふ所でござりまするぞ。此こゝは山城。大和の境。木津川といふ所じやわいの。眞そんなら早ふ渡しをわたりましてあの妻平を待ませふかいな。成程それがよからふと。色二人はふなばへ立よりて。詞ふねよのふ▲「ふ色ねよく」と起されて。イロ「寐耳へ水のふなおさが。とまおしあけてどつちやう聲三津五郎どいつだへ。どのべらほふめだ。渡錢なら五文か十文出すといつて。あたやかましい。せつかく面白く見て居た夢の。どうぶくらをおこしやアがつた。見かけた夢をかへしやアがれ。色あたふがわるいと佛頂頰。眞それは何とも氣の毒千萬。腹は立たうがコレ舟人。早ふ渡してたもひの色頼む二人がなりそぶり。三津イロ「ためつすがめつじろじろ見て。外記詞ノル「長作はたと手を打て。それよ。合それよ。ヲ、それよ。中ノル大膳様からおたづねの中園部薄雪。ござんなれ。ゲキからめ。詞とらんと身ごしらへ。ゲキノル鉢巻しめて。權おつとり。振上ながら。色思案顔。詞イヤ合までノルしばし。わが心。つくづく見ればなりそぶり。ウならのはたごやみわの茶屋。長梅川もどきで目を送り。

ウノル親とたのみしなかうども。ウ沙汰なでほれたほかけぶね。合色ノルおりや。かけおちと見てとつた。ウちんくもへモウ一里色サア梅谷へまはるがよい船にはのせぬわたしやせぬ。ノルならぬくと枕箱。ウノルさせるでた。き立たるは。思ひの外のりんきぼう▲「ウ二人はかへす詞なくウ人の情をまオトスつばかり▼▲「すみなれし。ウタ、キすがはら村に夏の來てほすてふ布の女子わざ。半四 二上リ「いろけないとて苦にせまいもの見やれ合ばらにも花がさくこのゑいこのゑい合せどやかはらで袖つまひきやるウ引田生れのきさんじは。ナラハル地般若寺合あたりでウ一くちはなりそに見えて色ぶつきらほう。さらしだらひを色ひつかへ。ヘギン笑顔つくりて。カハリオトシ走り來る。三津五郎色「長作それと見るよりも。詞これくおよしほうく。金儲けが出来たく。褒美は二人が山分けと。半四郎色「いへどおよしは合點ゆかず。詞そりやマア何の事じやぞいな。三津サア何の事やら知らねども。園部の左衛門薄雪姫たばねて出せば褒美の金。濡手ではあはれや二人づれ。たしかにそれにはまつた。繩かけふではあるまいかと。色船のもや

上ルギン廿日あまりに四十兩つかひはたして二歩のこる。色ノルなぞと二人がやりかけて。すつほらほんどにけるきか。ウノルたゞしア、ふねにて合あたいやらしい道行と色出て死ぬる氣で中ノルこゝまでござれであらふがの。詞ヲ、ヲ、くくくそりやならぬ。そりやならぬといきせい引ぱり。ウ權を構へて立つたりしは日もおもながに見えにける。色「わが身の上と左衛門は。はつと思ひて詞アアこれく。そのやうな者ではない。こちら二人は。ヲヲそれく。札所をまはる順禮じやはいの。三津「何じや順禮じや。順禮ならば報謝渡し。御詠歌となへて乗らしやれと。色「律義一遍正直に。色「はやくくとおだてられ▲「せんかたもなく▼▲「御ゑいかもあとやさきなる。ウ父母の合めウぐみもウふかき粉河寺不孝ものよとわれく。を。合▲「さぞ未來からみ熊野のたぎつ思ひに胸せまり。長梅川「ゆふべのまゝで帯さへも結びすてたる藤井寺。南園堂かゆくさきも合あんじ下すこして。たのもしき佛のぢだらくやの二人づれ。色ノルがてんの行かぬみの。國。

いとときかかる。半四郎「およしは驚き押し止め。詞これはしたりわつけもない。此木津川は伊賀の守様の御領分。其伊賀様のお姫様。うすゆき姫様をどふして其やうな事が成る物かいの。たしなましやんせと。三津色「長作はおよしにははれしよけに成り。詞いかさまそこもあるはいの。サアこれからはどうなりとすいたどうしの戀ばなし。色間かまほしやと立寄れば。半色「およしも共に身の上を。色とはれて。眞二人は。詞うき事の始思へば。それいなア▲「クドキ長梅川「あひ見し時は過しはる。合半地主の櫻の中花さかりほんに思へば清水の觀音様のおなかうど。互に人目つつましく合。文七忍ぶまがきが橋渡し合。上ルカン「とけてねよとのウはんじ物。書た此手が我ながらいたづら者じやないかいな。合▲「ウ申「そのうき事も今ははや。ウ我身の合くもりはれわたり。中ギン家の寶も手に入れば。ウ小枝の笛を尋ね出し二つそろは。幸咲の家をも立たき身のねがひ合。上ルカン「其お心の嬉しさにはなれがたの。きすぞと。▲「つまこひわぶる風。ギン情。スエなり。ノルウ「あれ聞かしやんせ長作さん。ウうら山しうは合ないかいな。ウわたしやお

江戸の氣おいはだ。中きけば地まはりぶしとやら。手ぬぐひ取つて色ぼうかぶり。合中カン、ッ、リッシかはい男のこへがすりやてうくのかんざしヤとんで出る合詞ノルこりや又何のこつた。何のこつた中下駄で長屋のまへ渡り。長ノルこないさみが色たゞし又合ッやほでりちぎでッ御ひるきの今たんとある役者なら三津五郎に似たものあらばのろくならないねがひとはッチトはね物じやないかいな
 ▲詞ノル「チャク〜どふせふそりや嬉し。ウノルちよつときい
 ても初松魚。合ウノルよく時鳥と氣があふて合ッこがれし舟のかぢ枕ウ横から見ても半四郎。ノルこちらから見ても半四郎。ウそんなかかしゆがもちたさに待てばかん酒色茶碗酒。色ぐつとノル一杯色やりかけて合。▼▲二上リウ「おつとまかしよと一日をよこにくらして渡守ッ「そんならそなたは 詞ノル「ヤツシツシ合上ルこがいどうしやうお前は合ウノル「さらしてふりを見せまいらせう〜。ヨイ「女夫さらしの水仕事。合ウ「たつなみが〜。合ッせゞのあじろにさへられて合流る、水をせきとめよ〜。合「所がらとてなく〜シル中ぬの手ごとにもまきのさとへと打つれ立て

かぜ。若葉のやみのめい〜といと物すごく見へにける。色あやしき物と左衛門は姫をかこふて伺ひるる 鼓歌上ルリ「われはおみつがなきたまの。合ッ浮みもやらで詞ほうほつと合。中有にまよふも。合ッあさましや。ウレヒ 邪姪の罪に。犯されてノルつのぐむあしはつるぎの山▼▲ウノル「はだへの卯の花べにつ〜じ合ノルとりもやしほの血の涙合ウノルわれとわが身をせめくる鬼ゆりノルおつるつばきもノルまつさかさま合ッ此世からなるくるしみを思ひしらせん思ひしれ合うらみのしもと打よする。ギン紅蓮のふじなみどろ〜はけしおそろし色いつのまにかは妻平が。ふたりをかこひ立ふさがり。色 怨敵退散〜とおみつにいへのかざしぐさウノル「たからそろへば上ル雲はれて。クリ上みなむらさきのかきつばた。ウノル今こそけだつたの花ごろも。けじやうゆほんのおしへの道有難。ウかりける次第なり。

四〇 母育雪間鶯 (山姥)

富本豊前太夫直傳

上ル「四面峨々たる足柄山。麓に通ふ松のもと。ハル地岩ほ

もどらふやれしづが家へ。しづが手わざも面白やと。見やるあいだもなさけなや。ウノルおよしは忽ち物ぐるはしくアツトたをれて伏轉ぶ。色ヤア〜是はとおどろく長作。薬よ水よもたゞおろ〜。うろたへさはぐ其内に正氣付しも物のけのわざとも知らず左衛門は。詞どうじや心が付しかと色尋ぬる園部が顔つれ〜。じつと見やりてながしめに忘らる、身は何がなる 上ルリウタガ、リ「京内参りせしときに。アノ清水で手枕を合中ギンかはせしあとののはづかしさ又其おりの嬉しさを忘れぬ物をさりとては
 ●合ッ「薄雪姫にッ見かへられそはれぬのみかあまつさへウ邪慳の刃にかゝりしぞや。▲長カ、リ「それほどまでに此はなを思ひ給ふか詞ノルこりや。有難い。ウそもじ故ならふな靈様かけて中カン水も汲みましよ手なべさぎよッさんやれ〜。合●「せめてわたしが心なと思ひやつて下さんせウ上ル「しゆらの奴となり果てしも合長「みな殿御ゆる。合
 コハル「ねたましや▼▲ギンノル「うらみはつきじと寄添へば。おどろく二人長作は。色ノルサア〜ふねですいたどし。ウかはゆがらふと手をとれば。ギンコハル俄に吹來るはやち

に染るつたかづら。長地「君命うけてますらをの體も氣儘の山賤が「曲たる脰の高枕實に一瓢の樂みの眠をさます山おろし 出詞「君命うけて此日頃かく山賤と姿をかへ深山幽谷きらひなく行きなり次第の一ト寐入どりやめざましに一杯やらかさふか「酒はかりなき盃につけばうつろふ星のかげや、打ながめて 詞「ハテ怪しや客星こゝにたんだくして我盃中にかけてひたすはチ、そふだ先年我君頼光公此足柄の山中に力量勝れし者ある事しろしめされて貞光が仰を受けし東國下向今の客星何んにもせよ心にくきはいつもの小僧一服呑んでどりや待ふか「くもの行衛にさそはれて歸る山路の初時雨。出ウタと「よし足曳の山ぎはもしらがと見ゆる雪ふ〜きつもれば老の鶯も今日ぞ初音と花に來てウタと「一とふむなしき谷の聲 ギン 風かこだまか呼子鳥夜さむの月にうづもれて鬼女が有様山姥と見る目いぶせき山もみち昔の道の枝折ぞとおほつかなくもたどり來る「山がつ見るより詞チ、怪童がお袋か。今日はまだ逢ひませぬ詞チ、峯藏殿かいの見て下され。わやくなあの子がまた道ぐさコレ〜怪童。怪童やア「チ、

イ「こだまにひやくやんちや聲 出ツテ」神樂月とて片山里も笛や太鼓でにぎはしや長地足のつめたいに草履買ふてもれ雪やこんくあられやこんくつもれお寺の茶の木枝におほさむこさむ山がらがらちらつくはいのくわいくぜらうづらも驚づかみわやくざかりの笑顔よき
 「か、ちやんこんな花折て来た」花うちせふとふり立つて餘念なきこそ愛らしき「山賤これよと立て 詞「チ、怪童戻つたか」 詞「サア、ちやつとおじぎしやく、詞「そんならか、さん何ぞくだされ 詞「チ、やろともく、そなたにやりたさ着せたらに五百機立るまでの内、二上」枝の鶯繰くるわたくる織りて着せたる母のほんそ子里へさがれば里の土産にでんく太鼓にふりつゝみ打やうつせみのから衣せんせいばんせいのきぬたにあはせ鼓の拍子面白や 詞「サア、怪童お馬事して遊びやいのふ 詞「チ、そりや嬉しいハイ」 上ル「月毛にあらぬ斧の馬取るや手綱もり、しけにお馬が参る先のけく、先のけろお月様いくつ十三七ッほんにそりや若いな」ふり出す大力大鳥毛響の音がらんからく、りんく、から母の胎内けやぶつて

願ひ月十夜参りに孫子をつれてウツヒいたらぬ寺のおくもなし「おらが在所はなア鼻をつかむよふな晩にやかならず背戸や小納戸で互ひちがひのお手枕今は十五夜の晩もはなぐれ枕の一人寐色氣はなれて老木の柳雪持枝はなきものを我も子故に室咲の梅を尋ねて山めぐり 詞「成程親の丹誠は有難いものしかし話しのそのうちに流れの身との物語さつする所先帝の北面坂田の藏人時行その身非力をくやみ無念の最期をとけたる故その妻これを深く歎き何とぞ勇士を生まんずと懷妊の身にて伊豆の深山にこもり山神に誓を立しと聞きつるが扱はおことは時行が妻萩野屋の八重桐にてはあらざるや「問ふにこなたも詞を改め 詞「察しの上は何をか包まん我は賤しき流れの身なれど坂田の家を起さんため山神に誓をたて産落せしは此怪童頼光公へのお宮仕ひ何とぞたのみ上ます 詞「得心あれば先づてう、イデ貞光が相手になり力の程をためし見んサア来い怪童 詞「合點だ神變不思議の怪童丸こなたはあしらふ勇力士怪童いらつてかたへなる松を根こぎに引抜てにつこと笑ふて立つたるは人も恐る、ばかりなり

産所も道具やうぶやも山なれば取りあけおば、に事をかき産湯の代りに四方のあかゑいが廻つて北山の中ギン踊にあらでどどりくどきは何といふた二上、おらが在所はナ奥山のて、打のでんぐりでんぐり栗の木の根を枕にござれだいて轉び寐コナ小女郎が戀するやま家の品物で帯といてござれだいてころび寐 詞「か、ちやん乳のまふ」乳のみたいと足摺は頑はない子の習ひか 詞「チ、此子はいのわやくいやるとつめく、せふか「おどすも母の仕付とは知ぬ稚子泣顔を見兼て共に山賤が 詞「チ、かはいそふに泣なく、「これさぞしんきに其様に人目には見ゆれども長地ガ、リ「あいだてなさに親心老を忘れて山遊び四季折々はまのあたり三下、春は梢に咲く花見事エ折りておまそか手折りてやろか合桃や櫻の花色衣誰にきせふとて山姫おろぞ合ゑもんそろへて和子に着しよとて三重八重一重霞をわけて山めぐり ナラ、ル「はや立秋の盆踊たはむれ遊べよんやさ 音頭人の心の花の露濡にぞぬれしびん水もどふで流の身じやものと櫛の齒にまでかけられて ギン 頑はない子の手をひいて月にうかれて山めぐり 二上、冬は後生の

勝負々と打かゝるをすかさぬごふぎの力瘤幹より腕のふしくれてじつとつかめばめりく、互に劣らぬ大丈夫えいやえいやとねぢ切つて左右へ別れて立たりしは目覺しかりける次第なり「貞光につこと勇みをなし 詞「ハ、ツ名將の眼力たがはず君に仕ふる時を得し心をもつて今より坂田の金時と名乗れよ怪童 詞「そんならおれは侍か嬉しいく、 詞「チ、嬉しいはづ去りながら今別るればモウ此母には逢れぬぞよ是が名残かコレ怪童 ウレヒガ、リ「夫のかたみと見るにつけ。そなたの大事さ大切さ今日別れば今宵より母一人寝の閨の内嚙おもかけがなつかしからふ頼光公へ御奉公勤る内の明暮も武藝をはけみ立身せよ 詞「必ず、人様に山姥の子と笑はれな 長地カ、リ「今別るゝとも此母がそなたの影身に付添ふてなを行末をまもるべしとはいふもの、これがマア名残おしやいとしゃと抱上げ抱付き思はずわつと一聲は梢にひ、きいぢらしき「かくては果てじと怪童丸 詞「御頼み申すは貞光殿名残はつきじはやさらば ウレヒ、いとま申して歸る山 舞カ、リたづねし花の春過ぎて姿はなつの雲の峯はれて源氏を守らん

と山また山に山めぐりして行衛もしれず失せにけり「け
にや勇士の二葉より名はかんばしき四天王手がらも家の
ゆづりものかぶきにのこりて有難き。

四二 夕粧星逢夜(夕化粧)

富本豊前太夫直傳
作者 福森 久助

ウ「からうたに。ウつゆはわかれのなみだとは。長あまりそ
らなる合かねナガス」とを。ウタガ、リふみの。ウたくみとし
らつゆのたまにあふ夜の。江戸くもの色合。申中」としごと
に。ウけふのこよひととのごまつ。長ゆびおりひめに合ひ
こほしのつなでにむすぶ合戀のなご合ウとけて枕も二つ文
字ウ其つのもじのギンウしと見し。代々ウ歌人の合言のスカ
ス葉に。ウいくあきかけてほしあいの合上ルン」そらも思ひ
の入あればにや 申「ほにあらはるゝウいろがみにあるふす
ずりのすみのいろさてもいつくし。ウよめとをめウ」月の
めしたる傘のうちギンびんのほつれのウ雲となりウちよを
ひとよとかきつくすウぐちはかはらぬさままいる 上ルカン
「かはらぬ中にかさゝぎのはしたないほど合はれすぎて合
中カンなゝこがいけのかけにだにいつりぎをウいさめ

かねウすねてみれんのさゝめごと。ウそも人間の娘氣に
かはゆらしさやオトシまさるらん 申「秋のにしきをたなば
たの合ウ五百はたたてゝ合織る布の ノル」いそ打つ波の松
風の。ノルきりはたりてふ合きりはたりてふ合ウノルしきり
にひまなき織物のとるやくればのギンてぐりのいと。長
「いとしかはいとよらんすとすればクルへだてられたる
涙の雨に合上ル銀河たちまち漕りてあいぢやく戀慕のな
かをたつ。せんかたなみのたまかづら。ウ色ある花もし
ほくゝと合中天人の五衰まのあたり。ウめいごをしめす文
月の天の川原のギンゆぶぐれに。申「ノル」いざや合ウかへて
立君の合丁度口あけ供まスカスちの。合 申あいだにゑてが合
まへわたり 詞ノル」もんしくコレナウもんしく「聲をしほ
りのあさがほも。葉に置く露が合ながれの身。長瑩ならね
どごがれよる 申ギン地まはりぶしの竹みつもつい合横町に
おり助と。色かんばんうつたきいたふうウラフシ中カン」歌の
上手と長屋のうはさうたを力に色かせぐ。申おもはせぶ
りの。肩で風。行くを引止めつかみ止め「これ。おりさ
ん。あすんで行きな」イヤおらア。亭主持はきらいだ」お

やばからしい。しつたかよクドキ申夜かぜ。申カン身にしむ
つとめにも。ウほれた女子のしやうかにはあはぬそのよ
のじんざけも合 申「やみくもまゆく合ウほしあかり待人か
けし手拭と新内ウ」あひそめてより一日も。ウからすのなか
ぬ日はあれどお顔見る日は三月月の。ウ中宵にちらりと
草枕。つゆに合ふするのわりどこはふざけた中じや合な
いかいな「色にもよるのウすぎはひはにたか。ウよたかに
合 二上り「あんまけんびきくゝ合ウノルひねりくゝひねりか
け合とかく我等は好色者こうしやくもので合さまにあをとて合ノルがつく
り合そつくり合ウノルけつまづいちや詞ノルあいたしこ合杖を
月夜もウこゝろのやみ夜ウいろにや目のないウうかれざつ
との坊ナヲル長夜もはや五ツ半四郎。ウたしかぞめきと三
津五郎詞ノルそりにかゝつてウいさみはだ。ウかはい男が色
ノルいまごころは待つていたこの詞ノルはなうたも。合ウ「ぬし

はつりざほわしや上野のいけの鯉耐すつほんかめこの鱈
なますウつられながらも合詞うつかりひよんとウかゝりや
す合フシノルかゝりしだいのウやまけたや。色ころりじやう
ずにヲクリオトシのせてゆく。色あとへひとむれ中つばら。

これもとをくをぶんぬきの。よこにかゝるをたてこかし。
三下りウ「幸ひほどもよしだ町かよふにうそはつきがね堂。
合ウごんときめてはよいのまや合 色ノルまはつてくんな合ウ
つなうちば合申引かなほうの合おとはまち合上ルそれでそひ
ねの夢さめがはしウよいこのくゝどつとほめてそらたナヲ
ル長ノル」そふはならぬとまたたつあきのノルきりの一葉か
さらくゝさつと。水もながれの夕化粧星の。ウあふ夜を
しゆくしける。

四三 小女郎こにやうらう櫻草對さくらくさたいの歌

富本豊前太夫直傳
作者 瀬川 如阜

「梅におくれてウさくらにはやきそらもおほろの花心。申
名さへうれしき合ウ我つまのもりをめての二人づれ。合
歌右衛門 申「つゆの玉屋の新兵衛と合ウ小女郎が中のうき
路 考出 申「つゆの玉屋の新兵衛と合ウ小女郎が中のうき
スカスふしを。合ウウ、キ仇くちのはにはやり歌ゑもん坂行か
よふ神。申カンわけ吉原にいろかへぬ。ウ松のみさほはハル
おのづから文七江戸紫に路考ちやの。合長似合ふた縁えんとよ
そめさへ。合ウみつのはにはの便りまつ合中ギン其はてしな
さもどかしさ。ギン今は誠が行あふて。合ウ導かしやんす

ごくらくの。長佛さんより神さんより合いのるはあつき御ひのきを。ウウけぢの村にとまりたるおむらはちかき堀中堺橋人のづゝみをたどりオトシくる。色詞新兵衛涙のこゑくもり。歌コレ小女郎。ゆふべは姉のなさけにしてしるべの方へと心ざし。來ごとは來たが。つくづくと思ひ廻せば廻す程。人をあやめた其上に。印子のそん像失ふては。半次郎殿の身のおさまり路「サア其お前に苦勞かけた。もとの頼は皆わたし。出村様の情おゑんさんへどふも。言譯がないはいナア歌ハテ色戀といふ中に。そなたの元はお主の娘御。おれと一緒に殺しては。此身の不忠世の取沙汰賢モシ又其事を言てかいなクドキウ昔は昔今さらに合お主あしらい。わたしやいや合ウそもつき出しの其日から無理な意氣地を立とふし合客もおとさず帯ギンとかす。ウ酒でまぎらす座敷つきふつと合ウお前に初會の夜心の内で。ウ盃を。合拜んで受た心いき。中カン朋輩衆に笑はれて儘よおせ、が合はりになり。合果はやり手や内證へ忍び廊下のかげ事にそしられるのもノル嬉しうて合長待夜ふけ行く床の内合ウ明し合ふたる胸とむね合上ルカン起

請誓紙はまだな事ほんに枕がもの言ばかたい證據じやないかいなア。ウ中「夫も思へばあだ夢のさめてはかなき今の身にウかゝる歎きも心にはかくこのうへと言ひながら。ウ中おゑんがうらみ義理ある姉の。情思へば今しばし。下忍ぶよすがのかくれ家も。ウいづくの程と見へわかぬ。ウかこち涙の玉なへにはるの水ますハルオトシばかりなり。上カ、リ折しも向ふへ賤の女が。ウ紺の前だれ玉だすきつむりにたらひ手に薬罐提てあぜ道いそくと 仙女出 二上り「東山のナア東山のエお月出やるく中でつかりしよしよけた。しよくけたよの合お月かくすやつはろくなやつはかくさねでは合月を便りの合野ら戻り野こへ山こへあぜ道こへて。色ノルがつくり。そつくりくがつくり合ウ其儘の在所ちと見えにけり。ナホル色詞二人はそばへ立寄りて歌モシく女中。ちよつと物が尋ねたい。小村井とやらいふ在所は。此あたりではござらぬかと。イロ詞とふに不思議とふうぞくを。うろく見まはし曲ア、そりやこちのとなりなら。お前がたを見れば江戸衆じやな。かくしなさるなよ。びらしやらと。ぢよなめきどのは。

おけんせんか鳥イエくなんの。けいせいであらう。わたしはな。オ、それく。ぬしの妹でござんすわいな仙「イヤくそちらな男どの。けんせんつれてかけおちか。お内儀さんが笑止やなふ。こちの男にその様な氣づかいは。ないと思へば。これもまた。ウ夜さりくの口癖にウくもらぬわしを疑ひて。詞ノルいろじやのく合中ノルとなりのせなアの五郎八茶碗でにござけ合ウわざくれないのその顔がウいやさのすいせうで氣はざんざんざんざんしにてまぎらかしちよく歩みて通りユリオトシける。ハリマカ、リ「又も向ふへ人かけは。若しや我身のおつ手かと。しばしたゝすむいなむらかけ。ウ短き夜半もあけほのの越路の櫻うつしゑや姿に。ウのこす物がたり。

四四 幾菊蝶初音道行 (忠信)

富本豊前太夫直傳

▼▲上ル戀と忠義は。ウいづれが重い。長地かけて思ひははかりなや。靜に忍ぶ都をば跡に見捨て、旅立てやまどぢさして合行く野路も 路書出合ハル地なれぬしけみのまがひ道。弓手も馬手も若草をわけつゝ行けばあさるきとす

ばつと立つては合ほろ、けんく合ギンほろ、うつ。合長「なれば子ゆるに身をこがす▲ウ我は戀路に迷ふ身の合ア浦山しねたましや。合ウ初かり金の。めうとづれウ妻持顔の合はね袴。中人よりましのましばさす▼▲ウ宇賀のみたまのみ社はいと尊くもかうくと。ウ霞の中にみかの原。合上カン「わきてかたみのつゞみのかはい入く。かはいのむつごとも。長カ、リ人にはつゝむふくさも▼▲ウ「それをたよりにウつくつゑの心ほそ野を打過ぎて。合谷の合驚ハル初音のつゞみ合く合ギンしらべあやなす音につれてつれて招くさ音につれて。ウおくればせなる忠信が吾妻からけの旅姿合歌右衛門出ウせなにふるしき色しかとせたら負ふて合ノル野道あぜ道ゆらり合く。ギンかるとりなりいそくと合目だたぬやうに道スエルへだて ● 哥詞「イヤもふし靜様テモ早いおあし。さぞお待兼ねなされましてござりませう。▲ 路詞「忠信殿。道すがらの心づかひ。我君様の御隠れ家。よし野の里へも今しばしと。聞いて心はせかるれど。道はかどらぬ女子の足。● 哥「ハテ其やうにきなくと思召さぬがようござります。やがため

たふお二人の。系にしはつきぬ妹脊川。▲路「かはらぬは
るをみよしの。山もかすみて今朝は見ゆらん▼▲中フシ
「見渡せば四方の梢も。ほころびてツ梅がへうたふ。うた
姫の里の男がこゑく」に合長「我つまが。上ル天じやうぬ
けて。すへる膳ひるの枕はつがもなや。合上ル天じやうぬ
けて。すへる膳ひるの枕はつがもなや。おかしがらすの
スエ一ふしに。▲中「われも初音の此つゞみ▼▲君のさかへ
を壽きて二上ル「徳若に御萬歳とは君もさかへてましんま
す合上ルあいきやうありけるやなぎスごしよい中村のやぐ
らまく。櫓太鼓の合にぎく」とあきない神の若るびす繁
昌まします其徳に。おん田の稻にはほにほをさかへ。合ウ
たからみふねへ萬石船色の實入りにことしわた誠に目出
度ふさむらひける合やしよめく京の町のやしよめうつ
たる物は何々はまぐりく合はまぐりく合く合ウはま
ぐり見さいなとうつたる物はなにく。蛤早き貝合せ。
合三下り「彌生は雛のいもせ中合ナヲル「女雛男雛と並べて置
て合詠にあかぬ三日月の。ウ「宵にねよとはきぬく」に。
ウせかれまいとの戀の慾。櫻はさくがすぎたやら。上ルカン

「桃にひぞりて後向き。浦山しうはないかいな。▲長「ま
して女子のはかなさは男のうそと露しらす ▲中カン「誠あ
かしのうらみなく合そしてあかすが實の實。其眞實も知
らずして仇ほれらしい何じやいな合▼▲長ノル「はやしの、
めの時鳥けふぞさつきの花あやめ賀茂のあをいに藤の森
よ、のためしのくらべ馬。ハルはいくくくくく合ウ
ノル「抑馬に七ヶの祕所。三ヶの手綱五ヶの鞍。眞先かけ
て合乗出す。合はこべ小足にちんどり早に合ウ木の根岩か
どりのこへてあつばれ見事やはでオトシらしや ●歌詞「せめ
てはうさを。オ、幸ひく ●中「姓名そへて給はりしか、リ
御きせ長を取出し。君とうやまひ。スエ奉る ▲イロ「静は鼓
をおん顔と。よそへて上に。おきギンのいし▼▲カ、ル「人こ
そ知らね西國へ御下向の御海上波風あらく御ふねを住吉
浦に吹上られ。夫より吉野にましますよし合やがてぞ参
り候はんと。互にかたみを取おさめけに此鎧を給はりし
も兄次信が忠勤なり ▲路詞「何に次信が忠勤とや ▲哥誠に
それよこしかたをウタヒ「思ひぞ出る。上ル浦波にひらり
合ひらりく合▼▲ひらめく太刀先三保の谷がノル行くを

やらじと景清は合長刀小わきにかいこんで兜のしころ引
ちぎり合わかつて左右へ合別れ行く 合いづれもはたらき
元。次信が合ウノル八島の戦我君の御馬の矢表に駒をかけ
すへ●色立ふさがる合。▲路詞ハル「オ、聞及ぶ其時に。平家
の方にも。名高きつよ弓。合上ノル「能登守教經と合名乗も
あへずよつびいて。●放つ矢先はうらめしや兄。次信が
胸板にたまりもあへず合。ウ眞逆様あへなきアハシ最期は
ものゝふの。忠臣義士の名をのこす。思ひ出るも涙にて
袖はかはかぬキンつ、井筒 合▼▲中ノル「いつか御身も伸や
かにはるの柳生の絲長く合枝をつらぬるおんちぎりなど
かはくちしかるべきと合ノル互にいさみいさめられ。いそ
ぐと。すれどはかどらぬあしはら峠かうの里。雲と見ま
がふみよしの、麓のさと三重にぞつきにける。

四五 歌川風の 艶容錦 畫姿 (新お七)

富本豊前太夫直傳 作者 瀬川 如臈

ウ昔男ありけり。合中カンかの伊勢の御が筆の跡三河のさ
はのかきナガスつばた。ハル地くもでに結ぶ八ッ橋の。中カン
夫れにはあらぬかほよ花色もゆかりのかよひぢや。長こ

こにも通ふギンまほろしの合ウこがれあこがれしたいくる
夢の浮橋是ギンヌならん 路詞 女考出ウ「小姓吉三に浮名立
つウ八百屋お七が戀ばなし長其世がたりをうつしゑのウ江
戸紫に合染てナガスこき。ウタ、キいろも盛りのウ若衆ぶり娘
ざかりを一對の鬨の鬨取ウ花相撲長杉が行司に合ウならう
ちは。長似顔うちのはウあいきやうも合ウ祇園守りに封じ
文菊蝶つけて二つもんウかはゆらしいと結綿の合ウクル色や
つちややたらに中ほめ詞。ウお二人さんをウ月と雪中たと
へのふしの合ウ花に風ちりても残る移り香の色現心ぞカハリ
オトシわりなけれ色詞「杉はふしぎの袖引とめ 仙詞「あれお七
様見なさんせ。かのお方によふ似たお若衆さん。モシそ
つじながらお前さんは成程戸倉吉三郎。お七どの。よ
ふ逢に來て下されたのふ 路「オ、ほんにやつぱり吉三さ
ん。エ、お前はなア●クドキ中ウ「よふも色氣づよいなぜとふ
からウお顔見せて合下さんせぬ合ウわたしやあんまり逢た
さに衫をせがんで物まふで合ウ物見遊山や寺参りウタ、キ若
い女子の誠は女今川庭訓を合お師匠さんの朝夕にしから
しやんしたッ入筆の跡。ウ中十一の書初めに戀といふ字を

書きならひ。ッ早や十三の正月は始めて月のさはりとな
りこしやく娘と浮名立つ。ッ中浮名の立つはいとねど
合。カン思はぬ夢の仇枕枕にとがはなけれども。ッ勿體な
いお寺の内長色で穢した身の因果中佛の御ばつ今日の前。
合ッ若い盛りの娘御様が身の上よい手本合ッかぶき芝居
の色事の合ッ咄しかふじてちわとなり合。中カンてんがう書
がつい中誠合ッソいたづら事の橋渡しと合ッ御異見なさる
る合ッ其つらさ合よしなさんせエ、合なんじやいなア ●長
「譯もお杉が氣あつかい合殿御大事とッお二人が合ッ互に
心みがき合せてソさつても〜」詞ソよふ〜合お七様合
吉三様合おかしらし合ッせめて一言口でなと合ッたんなふ
させてあけなさつたがよいと合ッソこんな事言たら親御
さんにならまれう。詞ソおゆるしへ。なんのいな。よふ
よふ。合且那さん合どふで合ッざります。中ッ梅もつづくし
櫻もおしし。中ひとつ合ッ詠めに二人をならべ。杉がきてん
の袖屏風。まねかぬ袖に招かれて。すみの袂の辨長が。
合方三十郎出ッ「戀の關とは氣がきかねどもわしも合かたせへ
道連に合ッ南無や妙法蓮華經色ソほうやらほうと合ッはや

されて ●詞ソ「エ、なんじやいな辨長様」ッ此面白い道
草に道をたてぬく合詞ソかたほつけ。ッほう〜ざいと
呵つてか。合詞ソ「イ、ヤ我等が宗旨にも」ッ中色は妙
音辨才天合ばんの泊はお杉女郎合ッ抱れてねはんの法文を
こ〜で岩本橋本町。合 ●中歸命頂禮ねじやかさん 三十郎詞
「ヤレ〜聞ねいわつちが生ればすいと甘い梅の難波
に。しかも新町九軒の揚屋にほさつらいごう。けいこ
の音楽。どんな太鼓のぶしやれがいやてな去年の春から
御江戸へ下つて水道のおちや漬。あぢを覺へた田町の通
ひ路やれ〜」ス「おつくりかへつてちよつくり
かへつて。ひつくりかへつて。そつくりかへつた合大門
口迄四手のねごゝろ。有つた物ではないけせう〜」合
詞ソぞつこんしんから吉原りくつにと〜はまつたど
らがにようらい三十「うるさいこんだにホ、イ長カハ」佛
ももとは凡夫にていづれ浮世のわざくれや合 ●マヒカ、リッ
「くらべこし。ふり分髪もかた過ぬ。ッ井筒にかけしう
ない子が合種遊びのいにしへは合ッソ手まり合やり羽子合

色ソ殿様事や合ッ裸人形身にそへてッわたしやこんなく〜
なんとよい子であらふがのギンそのくせにかしこい者で
な七つで絲をとり初め八つでぬのはた合ギン織初めてさら
しのやッおさの手拍子色ソソつこでせい合 三下りッ「はねを
やすむるナアそでならばねならん合いざさらばねよもの
合ッそれをこそ思へばさてもこがれますつれなやてうの合
中なぜにつれなふ。ふるははいろか櫻か雪かとびめぐり
合〜合ッはなのさかりの若い同士「せきとめらるゝめい
どのつかひ合修羅の太鼓のむくひ來て合カン二人がすがた
雲霞合ッあるかなきかのたまよばひ合ッむすぶあとなきつ
ま重ねうきは夢とごさめにける。

四五 四季詠寄三大字 富本豊前太夫直傳

〇三月 雛人形業平

エルフシ「千早振。中紙ひいなとて其むかし。人形天皇の合
御宇ナガスとかや合ハル地まつり初めし立ひいな。次郎左衛
門は世にふりて。中今舟月と名にしおふ合ふりもやさし
き古今ソエル雛合 出ッ「むかし男とッ岩本の神のちかひも在
原や合誠見せたるいろこのみ合い入つはりならぬかねご

とを豆男とも名にナガス立ちし。合中京にはあらじ合ッあづ
まの方にはる〜きぬるたび衣合 ●ッ「それも戀ゆるこひ
せすば合 ▲カン「たまの盃そことなく物のあはればよもし
らじ合長」つたの細道合ゆんでもめても中カン「ねよけに見ゆ
る若草のつまもこもれり我ながら。 ●中「まよへば戀も。ッ
はてしなき ▲上カン「うき世の中に合すみだ川いざこと問
はんみやこ鳥合 ▼▲「彌生のわたしさくらがり中あめはふ
りくるぬる〜とも。ッ花のこかけにしばしと袖がさし
のぐ箱やかた長木の丸殿にあらなくに雛の御殿へ入りに
ける。

〇四月 松魚うり勇商人

中ソ「目に青葉合ッ山時鳥合てつぺんかけて合かつをか
つをと賣る聲も勇み肌なるソちうつばら合ッソ五十五く
わんもなんのその。中河岸のそうばは下ソルきなかでも合色
ソルまけぬ江戸ッ子合ッすい道の水に合ッあらひ合あけたる
いけだこの ●生ていでもの見世さきの。ッそろばんづく
なら合ッよしなし合中カンソふりばんどうさんそんなそ
のはちまきさせるじやごんしない。合▲ソ「しらのきお

ひの兄さんを見ぞくなつたか色やみくもに合ッ高くとまつ
た合おみ堂のからす ●合新内「見えもかざりもひやうたん
も色ノルねぎつちやいけなひノルさげせにで合ッこれでも晩
にやアお客さんひやかしノルかづのこのころがすりや長
家のあねイがとんで出る合中カンてふくのかんざし三つ
大に打替へさせた。合ノルぐいきまり。ウすいたきおいじ
や合ないかい合な。▼ノル」なんの男は百くわんだ。色ノルせ
いだせ。そこだぞ。あきなひ大事。ノル 得意旦那は八百
八町。八千八聲時鳥はつといふ字をいさみにてウ輕鯉と
走り行く。

○十月 爐開使やとひ奴

ウノル「神おくる。風のさむさに合ノルひつかけた。こながら
四もん。ウ湯豆腐で爐開きつかいの合もどりスカスあし。
長カン門は六つぎり長酒屋はぢぎりウ誰に遠慮も合 新内節合
●シンナイフシ「おくつて出やる肌うすな。合 姿を見れば胸
せまり ▼中「せたい大道ノルけつまづいたあんま合長ノルよ
ふたゆるしやれそのかはりウ字あまりいたこを。色ノルお
ごるべい合 ●ウ「南無妙法蓮華經高祖日蓮大ほさつとおが

かにはなしやな中じめんつく。合ウなんのいやきじやある
まいし合むすめ子どもか合なんぞのよふに。合ウノルおつに
ひねつて合をすけた物のいひぶりもたせノルぶりあきれ
たもんだウたながしら中ノルほうくくやいて色ノルおつつけ
ねへ合ウむだも野がけの合わざくれや合。長ぬしの前だが
色ノルききなんし 合サイモン「こゝにあはれを止めしはお稻
荷さんのしのだづま合ウこひしくとつまこひを合ウたづ
ぬるころのたかいなり。ウ高い山から谷底見ればの中ノル
あれはどんどとさ。これはどんどとさ。詞ノルすてきにあ
かるい合ノルきつね火も長きえてびつしより合よめいりの
あめに合詞ノルはだかでかけ出すおとこは百くわん。寒の
冬でも。詞ノル「トウきたりやトウきなせへ合色ノルなんでも
うけこむ江戸ツ子の。ノルだいさんまいりのさ中かきけん
ウかたでいさみのはる風やきおふてこそは走り行く。

○紙きぬた 十二支の内 未

ウツガ、リ「さこにもものいふはなもりのうばをとなりに申す
さまじきウ月もさんやの裏住居。上ルシ「もろこしびと
の。仙術にはギンいはほを打ちてひつじとなす合ウこれも

みなんしめうでござんす合ウどんなノルひねつた戀路で
も。合ちよつくらちよつと合ウきまりやす合 ▼中ギン「きめ
たウ竹みつよこすじかひ柳原ゆけば。合こてまぬき▲ウノル
「よつてゆきな合ツイだまされて合カンためたわらじの
ぜに廻り身のまはりさへふゆのきで合 ▼ウ「辻番ごたつ
合色あノルたつて碎ける男は氣で持て合酒のさの字は酒屋
のさの字合 ●ウノル「のんでゆるる、ナ由良之助ナ、エ、詞
のせたか三吉▼「長持やかるい。ノル海道の姉イの合ウしや
うわるめ命とりめと合ちよろく、めもと小歌合淨瑠璃で
たらめぶしにひとりしやべつて合急ぎ行く。

四七 それくのがたに 寄三津再十二支

○王子参 十二支の内 午

ウ「月ごとの 中カンむまもか、さぬ合王子ナホス道。ウけしき
ととのふ梅が香や。合ウノル「はなののきばのみてのぞかる
る長乞食の家も合チャウまんざらでギンないぎたちあとへ
おくれナガスたか合ウみちく、ちわか合長とかくたほめは合
あだざくら合ウあさぎざくらにやきもちやよしやれしづ

りやうしにギンなれよとて合うつは月下のウからころもま
だねぬ人をそ入らにナガスしる合ウノル土手のつぢか合ウ
かりの聲合 中カンくぜつの名ごりのせてゆくみせず、き
の合ウいとせめて合上カンゆめのうきよに何思出の中カンよく
にやかせがぬよめ子のかたを合ウノルたすけ給へや南無阿
彌陀合ウつみあさくさのみほとけへまいるじゆすのみた
てじやのほまち合申ほしおしさに長よひからあけまで合
うてばこしひざいとござる。二上「うちやれおうちやれ合
中まいの鼓合ウおどりのたい合ウノル庭でわらうつ合座敷
で暮うつ合長花に露うついさめる駒に。ノル鞭うつ合ウくら
うつ合きぬたうつ。ウノルやたらひやうしにかんころ。合
ちんころてんころりん合ウノルかんらんころりん。ちんてん
ころり。わかやぐのきのつまごと、ナヲルノルフシ笑ひ興じ
て中いほがくれおいの江戸手わざぞ床しけれ。

四八 蜘蛛のいとし殿御荒 魏鬼宿直 嘶

豊本豊前椽直傳 作者 瀬川如草

「さるほどに源家のいさほし世に高く下し給はる古御所
を今宵とのるの兩勇士しゆみの四天にたとへたるいかも

の造りたゞならぬ多聞持國もかくばかり降魔のねむりぞ
 ゆたかなる源十郎 幸四郎「絲セリによるものならなくに我戀は
 心細くも俯の庭にしよんほり夜の雨菊之丞出「ぬれはくが
 いの道芝やせかれてあひにきた時雨惚れた殿御はまるき
 の弓よ強い自慢の武士も心のほかの仇まくらうらみなが
 らも又いとしさに勇ましい氣を慕ひ来ておほつか涙わく
 かせももつれて三輪の苧環おたまきをいろの中立こひの畏かはい
 男に身上りもぬけてくるわの習ひかや「さとの便がうる
 さうて物いへぬのが今更に文のつてさへもどかしく氣強
 い男のいがい顔見たいがやまひ逢ひ度いが身まゝになら
 ぬあら武者もうぢかは腕の力こぶ撫で、つぶやくつは者
 の玉の盃そこなき風情見るめおかしくへ、へ、ハ、ハ、
 、、、碁盤のこめもあけはまののびたいる目をおさへて
 はねてくぜつのだめもおかめからじよごんする氣じやな
 いけれど四つめごろしの初心さに斯様申す才藏なんぞは
 お客様の赤い顔おん女郎さまの白い手でしめたらほんに
 おめいこう小春のもちじやと興じける「やはんまはりと
 たはむれてめつたに深みへ濱村屋酒なら相手に成田屋の

いろの用心身の用心ちよつとまはつて高麗屋氣の通り筋
 わり竹のおとにまぎらし走り行く「あふてうれし心の
 願ひうそがまことになまなさけ夫が實やらうは氣やら知
 らで迷ひのあけくれに女夫に成田の不動さんそつと頼ん
 でしほだち茶だちぐちの有りたけしつくした願ひもすぐ
 な心から神のりしやうであろかいなアけに傾城とてさと
 に住む女は常の女やら元より藝者女郎にはちつともくひ
 合中の町「胸ぐらとつてコレ申しなんじやいなアのむつ
 ごととはア、つがもないではないかいな「春は揚屋の櫻が
 りるながら花にうかれ酒夏の短夜ねもやらで曉方の時鳥
 ないて手くだのわかれ酒秋は月見の大もん日客あるかた
 へとむかひ酒土手の霜ふむちよきでおす四ツ手で走る大
 門口邪正一如と見る時は色即是空そのままだに煩惱あれば
 菩提ありかむろはみどり花は紅やりてがよくも酒にうか
 る、いろの世の中「まよははじと思ふ心のせきかねて千筋
 百筋みだれそのいと亂る、胸ぐるしさにいとしなつか
 しさよ衣しがらみかくる物思ひ「わがせこが來べき宵な
 りさ、がにの蜘蛛のふるまひかねて知るかつらぎ山に年

を經し世にも名をしる女郎蜘蛛「起きよ金時無明のねむ
 り「あらうつゝなの若者や目さませ起きよと千筋の絲に
 からまきひくやあをち風屏風だをしにしんどうしてゐるぎ
 やうの姿けんせんたり源十郎 幸四郎「一ツとうむなしくたにの
 こゑそれにはあらぬ山御所の山また山や山姥が恩愛千筋
 にひかれくるゑほしたからよほんそ子の男なりしてます
 鏡見かはす親子ゑみの眉昔の乳房したふらん「うれし昔
 の顔見れば岩根枕にいとく、だいて添乳したこと思出す
 さつてもさてもわごりよは誰人の子なればよふ似たく、
 在所のいちやにあかいく、花紅葉おりてかざして谷峯こ
 へて獸相手にかち角力「鬼ならござれやしやござれ天狗
 はもとより寐酒の肴うぶ毛むしつてぐいぐい、か、さ
 んあからも一トむかし今はきんくきつとした萬ばいち
 ぎやうのおさむらひ行儀がよいではないかいなア「夫の
 形見と見るにつけそなたの大事さ大切さわけてお主は清
 和のながれ源きよき御大將頼光公へ御奉公つとむる内の
 あけくれも武藝をはけみ立身せよ「山姥の子と笑はれな
 「そなたのかけ身につき添うて猶行末を守るべし今ぞ名

残のかへる山わかれの袖もいぢらしき「むくひは目前蟲
 けらすらつまのうらみを晴さんため「神變自在の通力に
 御殿しきりに鳴動しうらたへ逃るうしろ髪政盛やらぬと
 土蜘蛛の又も千筋のいとすごきおほろの姿怪しけれ「お
 ろかやかよはき蜘蛛の身に及ばぬつまのあだがたきくも
 手にもものは思へども力なみだのむら時雨山めぐりする山
 姥の業通こにかびなしてのがれがたまくくものゐるにか
 けまく武勇の力にて今ぞ本望嬉しやなア「一陽開く智勇
 の花歌舞伎の春こそめでたけれ。

四九 登庸の御最負にじりかき拙筆力なつてい以呂波

富本豊前太夫直傳 作者 瀬川 如皐

〇乙 姫

上「日の本は合。長歌にやはらく國の風合ウツ、きたつの都
 に。ふきつたへ。合ハル地神四代に。當らせ給ふ合。中彦
 火々出見の長尊よりウなさけかはせし妹とせスカスの合中カン
 ゑにしはふかき豊あしはら。地豊玉姫のうみナガス給ふ合長
 産家に。鷓鴣羽草不合ギン合の尊の。御末中とこしへにお
 さまる御代こそ中スカシかしこけヌエれ。芝蔭出上「其うまし

國。ウ古さとの合文七ガカリ丹波の國の水の江を。長しのびかねつゝ出行きし。人の行衛のおほつかな。合上カン「そなたの空も合雲きりスカスもなみも合ひとつに見渡せば合雲路のかりの女夫づれ合クドキ「ア、うらやましたゞひとり。中カンすてられし身の。ウ何を花何をたよりにつけやらん合上カン心ひとつに沖の石かはく間もなき袖の露合ウちぎりははらぬしるしには。わかれに送る合玉手箱合ウ中又あふ迄は必ずや中カン明るなあけそ恨わびにし夜半の鳥鐘おほつかな合カンかたい心にいつ迄もはなの。都の姫御寮合長君のむつごと聞馴れしわけしる里もたくさんな 三下。ウ「京に島原なにはがた合新町とやら。いろツキ所合ウあづまにふじのギン姿よき。花の吉原合よし。それとても合上ルよもや悪性はあるまいと。思ひ捨てても合男の心合。ぐちよ未練よはづかしや 合佛のざいせイロこくうゑに。上八歳の龍女成佛の。さすれば玉の合みやこへいざとゆふ風に。ウさしくるしほのどうくく。なみをけたてゝ入にけり。

聞だねへわたしやア亭主どころかたよりのないものでござんす「そんなら物は相談だがおいらが女房になつてくれる氣はねへか「アノマア引手あまたなお前様が「お前さへ承知ならば今から直に「ノヲアレせわしない。ウ暫時しばらく静まり給へ 合中カン「そふ性急にウいはんしては二上りどころか氣上りが合新内ガカリ「重井筒じやなければども。ウ必ず妻子のある人に。ウ中一夜五兩でもウノウッ恐ろしやイロノル「イヤイエくわつちやアひとりもの。しかも神田の八町堀合裏屋住居の合火打ば「合三疊じきに合く「らしても 長カ、リ「主と二人で居るならばからすかアく合なつととうり合晝は仕事に中日がくれりや合ノルおでんかんだげ「こんにやくのあまいとからき 長ノル 世渡りもウ何の。中いとはふ長ノル王子のおいなり様へ合神かけて合よしでもおくれ中であらめな合その口車に乗せられて合どこ迄行くのじやわたしやいや合上カン「眞實しんの事ならばウだまされたさとうはきもの合ウどふらく肌じやノルあるまいか 長スエ「いやこいつはどふか相談の出来そふな事だわへ幸ひこゝにおれが持て來た面があるから是をかぶつて

五〇 鈍菊定紋所 観世水子持筋 染幟菖蒲の彩色

富本豊前太夫直傳 作者 濱村 助

○花見

「ウきのふより。長けふはウにぎはふ飛鳥山。スカス合中カン目千本。ウ千金の合はるのあたいの。よしの入ぐさ。ウ今をさかりのウ春けしき 合中典「ウはゞかりながら合わたくしも合ウツ櫻の中の合あすなるふ合長ハルほんの。合あつかり合つらのかは合上瀬川の流合師の恩を合笠にきてこそ合急ギンオトシぎくる 詞「ヤレくけふはお天氣のよいのでにぎやかな事じやいつものよふにドレ爰でお客を待ふかいな「ウ信心もウタ、キとくのあまりの神もふで長上た。お神酒が。ウすぎたやら。よろくも中ギンの、千鳥足ウこゝへくわんぎくきをいはだ合出「ウどこの町場や中通りでも合見貴と人に立てられる。是もウお江戸の合水の恩合ウほんに。ねた間もウ忘れぬはきどくにやではあるまいか。ウ右も左も。中ギン花道をウうかれくしてユリオトシたり來る詞「ヤア見れば美しい姉さんハ、ア此頃噂の女のちよんがればお前だの何と時に亭主がありやすか「チャおつな事をお

踊をおどるが何ぞひいてくれねへか「サアそんならわたしも「サアやらかせく「彼定朝が作ならで童すかしのウ紙の面ウ壬生のきどりの 中ギンあてぶりもウ機嫌上戸のウおどけ者「三國一の富士山玉椿の八千代までもとちぎりしに「どふでかへりはウいろはのいの字「ウだゝら大盡おしあがりや「ウ女郎衆は互にくじ取つて中ギンノル「こんなおたふくに色とり當り。いやとも言れず合ねたふりすれば合ギンノル鼻へこよりの合悪じやれに引ハ、ハツクサメくさめすれば當付て。長りんきの角文字中いつそのくされ合狐の眞似でおどしたらこりやたまらぬと合そふく「逃出す追かける「やぶの中へ逃込ば辻番親父が合大聲で合中笥盗人とイロどやされたうまらなではないかないな「うかれついでにはやりギンうた二上り「よいサ今年はよがよふてヨイセコノセノル「穂に穂がッさいて色ノルヨイサハレサツノサノルツ「枳はヨいらいでヨイへ、ソレ「箕で計るサ、ヤアトコセノヨイヤサコレハサツサハレハノサツサ、「何でもせ合ウ山がノル櫻か櫻が山かどちらもく「合花じやこな合見るめに合あきはなむれて下きつれて老いもウ若

きもウめかれせぬ 中花心「てんがふ口もよいかけんウ酔もさめぎは西山へ傾く日影に驚きてノル下しやれもそこそこ急ぎ行く。

○色法印

ウタガ、リ「まがきく」に。合た、すみて長いろとなさげの中ノルこんたい兩部色法印とウ人毎に長呼れて今日もウこ、かしこウノルカ、リ「寒の師走も。今日の六月も。ウあつさ寒さのウなき坊主。ノル中地きめうちよんがれ。どらづくしウ今は氣がるな世渡りの戀の中初山ウ約束も合互入にかたき合中 男氣にウ石尊様へ合中 おさめ太刀合中こしの錫杖ウふり立スエて、色「紀伊の國音無川の水上に。立せ給ふは船玉山ウ 船玉十二社大明神一の間天照太神宮。二の間がウ矢取の正八幡三の間春日の大明神。ウ右の小べりがノル色金剛界合左の小べりがノルイロ胎藏界合ヲシツヨクノルかぢがノル浪切不動明王にりつきじやこつ。ウ辨才天女 引中ノル 歸命頂禮。さんけく。ウおしめに八大ウ金剛童子 色敬て申す。中「神祇ハシル釋教戀無常イロすいも。あまいも。なめつくし。フシノルあま茶しんちやの合ノル長 行水をざつぷりう

むおほがねはずつしりく、合ウ向ふの小ぐらの小みぞにどぢやうがちよとによりりウおどる拍子の面白やわけもなきノル」いろけはなれたばさらものウひとりうかれて走り行く。

五一

梅柳さぞ若衆 浪葩准朝妻(朝妻)
かな女かな 富本豊前太夫直傳 作者 寶田 壽助

上ルフシ「淺からぬ中カン 契りを誰にかはすてふフシにいしへ人の中言の葉もウタ、キ色であふみの。朝づまをウこ、にうつして水スエルかゝみ出ウ「仇しあだ浪よせてはかへる。浪まくら合ほんにはづかし。中わが。床の山合長よしウ夫とても。ウ世の中は合戀のギンわたりのうきふねや合ラシ 棹の雫も。濡事師。おもひよるべにさし中オトシよする詞「急ぎ候程にはや梅津川について候君にはとうく御上り候へ御上り候へ 詞「ホンニまあもつたいたないものかはの藏人 満貞さまともあろふお身が戀なればこそ此よふに 詞「手馴れぬ業の船長も粹がこぶじた梅津川 詞「ふかき縁をあさづまとやつせばやつす「出立ばえ 中「君を初て見る時はウ千代も經ぬべしウ姫小松ひく手さす手も合せつしゆふ

ぶ湯の。合ギンおしノルやかさん。長ほぞんかけたはほと、ぎす八千八聲なくときく 中カン「森の小鴉。ウ我からと中尾羽をからすのはねばた中き。合新内モヤウ「いちもんもなし。いつけもなし。なしもつづても。ないお女郎に此ほう少しもくいやいなし長カ、リゑり袖口のほころびもわたさへ足に合かゝり人 二上り「そもく、ノル色のはじまりは合源氏の君の昔にも合ノル戀にはウやつす行平さんは 合中「あまにも三年の契りをこめて長まつとしきかば又もやこんと。ウそれをたよりにウそなれまつすいな任打じや。合あるまいか合ウノル「あかいらしいと名にたつともしたがよいぞへひぢりめん。ちらり。イロノル白い肌(はだ)にノル見ゆるのは雪の合中なる紅梅と。ウいふてたもるの。これノウ。ウゆふてたもるの合とうくきたりやとうきたりやノル鶴のけごろもけんけの毛ごろもけれんとうちかけ合ぬつくり。そつくり。こつくりく、めるくらいらすつしりく、とノルシ小ごめのなまがみこん小つぶの二分きんかきつこ、うくともひかる、おくてうや。ノルばんせい。く。ばんせい。く。ばんくく、ぜいどつかりすつしりつめこ

しやウかざすや袖のウ舞扇 ウノル「實にも卯月のウ雪見草合無ガカリ面白妙(おもしろた)に咲揃ふ中ギンノル枝ふき分る。ウ青あらしさらくくさつとふりつもる合ウ卯の花くだしウ香に匂ふとめ木ゆかしきウ拍子ふぜいつくしてかなでスエルけれ「藏人そばへさしよつて 詞「イヤもふいつも見事なそなたの舞ぶりたまつた物ではないはいのふ 詞「アレ又藏人様のてんがふばかり 詞「イヤてんがうでないコレ侍従思ひ出せば過し春女踏歌(せんなんたうか)の節會(せつかい)の夜ふつとそなたを垣間(かきま)見て待つ宵に更け行く鐘の聲きけばあかねわかれの鶏(けい)はものかはと一首の歌に某(それ)が心(こころ)のそこをつらねたる 詞「その短冊のやまと文字それから思ひしみくと 詞「かふいふ中になつたのもほんに思へば歌のとく 中カン「リ「そもく、猛きもの、ふも。三十一文ギンハル字のウ此道に合タ、キいりそむるより濡れかけて。ウかるい。六義も何のその。ウ中戀といふ字に身をうつくしのカン「花の盛りも鳥の音も。いざ。白雪の肌とはだ 中カン「しつほり君と。逢見ての後。うきなが。たのしみと合ウ「互にかはす袖ひぢて結びし井出の下紐もウとけ入しウあふせの合ウ中々はウよそに見

るさへ オトシうらやまし 「おりも詞のウ花道へ長いつもの。
 間にやら生娘が扇かざして。聲高々 詞「東西々々淨瑠璃
 なかばおじやまながらなまりだらけな言でお二人さ
 んを譽やんしよまづ玉さんは花の顔花の姿に辯舌も花の
 瀧なる客しゆぶり花の森田に花かざる御ひるきれんの花
 の宴花の舞臺におめもせず娘だてらとおしかりもかへり
 三つ大日にますく人の大和屋きの字やとホ、敬て申し
 ますわいなア 上「譽るその身も譽もの、よい子娘の。に
 こはかと合二上「笑ふ梅より柳がいとし合ッりにしだれ
 てそして風にもとどなびくものしよんがへ「杜若より合
 ウ牡丹がノルかはい合ッ色に上合心も。ツイふかみ草しのぶ
 たよりの夜白草しよんがへ引ッしよんがゑるゑるゑ、やとッ
 愛嬌をつくりてこそは來りける オトシ詞「これはマアど
 のお娘御か存じませぬがふつ、かな私どもをよふ譽めて
 下さりましたなア 詞「なんのマアわたしこそあられもな
 い淨瑠璃なればの譽詞さぞ邪魔になつたでござんせう堪
 忍して下さんせエ 玉詞「これはしたり堪忍どころか落合
 たを縁にして中睦まじう北嵯峨の 詞「おどりはそれく、

「そつこでせい二上「花もノルギンうつろふ仇人の 合上ル
 はきも戀といはしろの。結び帛砂のときほどきよいく
 く、よいとなア 合上「解けた思ひはギン二つ箱合上三つ四
 ついつか渡り船。夫が苦界の行ちがひよいく、
 よいとなア「なまめかしナホル」人のやまとや時を得し。
 ハシルそのかたばみの花檣盡せぬ芝居ぞめでたけれ。

五二 八重九重花姿繪

富本豊前太夫直傳

○九變化の内 漁師

「おらが在所はナ。あのいそまがる合片ざと合月夜にナ。
 たんくたぬきの腹鼓合ねこがてんつるてんと三味をひ
 く。おば、うかれて品やりやるなんとしやうか合どしよ
 かいな拍子とりく、合老のあし合中「腰をのしく、おら
 がば、だてナ。ノルチャなんとした。合だんぎまるりの歸
 りにはたけへはいられたテモ。ウ、こんなこと。また。ね
 へこんだ。合ッソル おらがば、だて。木竹じやあるまい
 しほんく、にひさしかぶりだんべい合ノルでんく、でれつ
 の世の中ゑいちやにナ。よの中ゑいちやであるぞいな合
 「ほんにお前とッなれそめは合あの淺草のこもりの夜ま

こものウとこのくさまくら。ウ中人に見られて。それなり
 に。男たらしといはれたがいまは昔のかたりぐさ合二上
 「わしがサ。國サで見せ度いものは昔しや谷風今だて
 模様合ゆかし。なつかし宮城野しのぶ合うかれ。まいぞ
 へ合松島ほたるしよんがへ合「君を思へばかちはだし。
 雪もみぞれもいとやせぬ。やらしやれく、詞ソルの氣で
 やらしやれッソルそのきのこんぴら大権現ありがたいで
 は。ないかいな。ハアおもしろや ナナル長ノル」かにのよこ
 ばへのびあがり。水によるべのゑんならんく。

五三 御存じの木琴 梅葉櫻草(木琴)

富本豊前太夫直傳

ウ「春はのどかに。上人心 長花にうかる、道のべの 合中「つ
 ゆにぬれ事櫻もけはい。合暮待ち顔の合あだ心上カ」松に
 カハル小ふじのうらむらさきのた入れに合ッひざりし合かほ
 よ鳥ウ「ねぐらうれしきッ假枕合二上「春の夜雨か合青葉の
 合つゆよ合音もせえずしてぬれかゝるイロエ、さりとメルと
 はさりとは我身で我身が合ッうら山しナナル」あのや名と
 りの合ちよく、らちよんならめのちよんちよるさまをめ

がけぬものは合猫か合鼠下か上ノル空とぶ鳥かノルうつイロほ
 れたばこでわすらりよものかへ 合ノルイロヤンノイヨコノ
 そこらでもてこい合君をまつむし合こがね蟲これも浮世
 のわざくれや 梅ウ「かねて手管と中ギンわしや知りながら合
 「くどき上手についほれやすく くだまされてさく 梅ッソル
 「室の梅合ウ「きれてみれんな中ギンまた立かへり 合梅ウ「こ
 んどあふのがこちや命がけノル中カン「こんど逢ふのがッソル
 「いのちがけ合ッてうしもあひて時の興。

五四 伏見常磐が朗詠 雪解松 操 織(常磐御前)

富本豊前太夫直傳 作者 藤本吉兵衛

ウタヒ「行衛定めぬ道なればく、越し方いづこ白雪のハル地
 「積る軒端の伊豫簾。ウ風のさそふてさらスカスノ」と。中
 カン「窓音づる、雪しまき。ウ常磐の松の操さへ合。長時世
 に今は遠近の山路のノル雪にくれ竹の伏見のノルしるべ尋
 ねんと。紫竹をウ出て跡や先合 中四郎出中「歩み習はぬ道芝
 も引合上降り積む雪に裳さへ。地身をけす劍紅の。長袖
 に涙のウたまみぞれ合ウ世をうし若を。懐にギン 氷る乳房
 を抱き寐の。長宿りもがなと夕顔のウ軒端まぢかた、

すめり。折も奥より玉琴が三郎出としも三五の玉箏カン「ひさハシルしの雪をかきおとし落せば襟や袖ぐちも引ッぬれて色づく窓の梅花の笑顔のなほやさし合大升出「雪やこんく。ふれく小雪合中ノルつるや手もとにいたいたげざかり合鯛子の合これく見さいな。面白たえの合雪丸引合小松出二上り「こまでござれ。あるく者には何何やろぞ合打つや太鼓に春の駒ひかれてともにウこなたへと歩みかればふりしきるナル母は二人をぬらさじと打おほひたる笠のうち「ふかき情やこもるヌエルん」こなたの庵に色聲あつて調鶴毛緑水うくまに浮み。白雪清波を撥びく。降ればまた訪ひ来る人の跡もなし。降積む雪も深草の里。長地ノルカ「塵の浮世に中弓取のウたけきをかくす中ギン矢屏風やノルギン孫吳が書の色葉さへウ常のすさみと中宗清スエルが。合九露出鶴のけさもそ驚夫ならで。浮世をわびし此身すら。ハテ風情ある景色じやなア中「心をすます折柄にノル長常磐は見るよりフシ申しく御女郎イロ半四郎調「世をしのぶ譯あつて。大和路へ下る女なるが。幼き者をつれ此大雪に道を失ひ。跡へも先へも参り難し。情とお

ほし只一夜の。宿をお頼み申します。ウわりなき頼みに玉琴は幼連れの旅の女中。此大雪に嘸かし御難儀。おやどは申したけれども此程平家の沙汰として。義朝殿のゆかりを詮議きびしく。夫に人々の様子といひ。折角のお頼みなれどお断り申します。牛詞「イヤ何も疑はしい者ではござりませぬ。自らは女子の事件ひつれしは幼き者。見ますればあれにおいでなさるゝは。定めし主のお方か。どうぞひたすらお頼みあつて。すのこのはしか軒のつま。ウ中「かりのやどりも入情ぞやサアあるじと申すは妾が父。御念ばらしにお頼みを「尋ねて長ノ見んと玉琴は父の前に手をつかへそのギン儘ノル様子打語るいなや鸚鵡のノル中かへりごと。下ノルふびんなりとは思へども。九詞「只今そちがいふ通り掟きびしく。ことには奥の客の手前といひ。峠を越えて町にゆき。やどりを求めらるゝよう。ことわりいふて早く歸しやれイロ「あいそもなけにイロいひければ。フシ玉琴しをりへ立寄りて。サアお頼みの其由を主に申しましたれども。御覽の通り賤が伏屋に劣りしいほり。ことに掟も厳しければ。此山の峠を南へ

越え。十町あまりあなたにはよき泊りも候へば。くれぬ間に一足も。ウいそがせ給へとイロ言捨てサアとりあはざりし其風情「あら。きよくもなや世の人の。ウ中かくつれなくも傾きし運の末ぞと思ひ子を。つれる二人も中雪にひえ合中歩みもつかるゝばかりなり「宗清は聲しはぶき。九詞「コリヤ娘。やどりを求めし今の女中。きすすんで歸つたか。サアハイきすすんでは歸りましたが「ふびんの事と立上る門かどに。落ちたる守まもりをとりあけサアほんにこりや守袋。九詞「ム、今の女子が取落せしものであらふ。「玉琴ノル拾ひ持来るを中手にノルとり上げてサア思案の體。しばしあつて。宗清が九詞「断りは申したれど。幼きをつれ難儀致さんサアそんなら今のお女中を。九詞「早ふ呼んで。とめてやりやれヒロヒ父のゆるしに玉琴は又も戸のものに立出てサアなふく旅の女性。お宿まいらせふのふ。あまりの雪に申す事も聞えぬか。中地いたはしのか、有様や引。ウもとふる雪に道をかくし合一つ所にイんで二人の和子に袖屏風。カン身はぬれ鷺の御風情迷ひつかれ給はんよりサア「見ぐるしくは候へ共。一夜は泊り給へやな

ふ。旅の女中イロ旅の女中と招かれて。馬聲をたよりにふりかへり合見やればこなたの庵いほりの口サア「お宿いたしまふかいなカ、リ「心嬉しく立足も雪打拂ひもどり来て「世にも嬉しき志。宿りをお貸し下さりますか九詞「いたはしく存すれば。おやど申すもちか値遇ちかの縁えん一樹のもの旅枕。御遠慮なしに御女中様。牛詞「寐ぐらに迷ふ親子鳥。とまり木得たるも主のお情。九詞「かりのふしどもつきせぬ御縁サア父のゆるしの出る上は。九詞「サ、これへく「これへとこそは招じける。九詞「折柄の此大雪。嘸かし御難儀なされつらん。娘には此和子二人。奥の別間へ伴ひて心をつけて。御介抱申てくりやれ。牛詞「これはマア。いかいお世話にあづかります。サア「和子さま。奥へお出なされませウはなか白梅の。ウはらふ袂に。留木やかほる。九詞「扱はやおとゞめは申したれども。もてなすべきものとても心に任せぬ此茅屋。牛詞「雪にこゝへし親子三人。おやさしい御介抱有難うござります。九詞「せめては寒氣をしのぐため。焚火なりとも。中ギン「法の薪にあらなくに。柴折くべて。中もてなしぬ。九詞「最前より

見うける所只人ならぬ御出立。その様子承り度い。牛詞
 「コレハマあ思ひもよらぬ。私は由ある者ではござりませぬ。此程夫を先立て大和路へ参る者。九詞「諺に申す通り。薄の穂にもおちるとやら。世を忍ぶ御身故。おかしあるも尤ながら。おことが戻りし其跡に落ちてありし此守。申とり得し守。コハル懐中より常磐が前にさし出す。シホル赤らむ顔も。紅のキャン錦の模様笹入蔓の。しがらむ此身のはかなさとウレヒ詞なければこなたスエにも。九詞お身の素性おあかしあるとも無下に致さぬ拙者が心底「つつまず仰せられよと。ウ」様子問はれて塞がる胸。つゝむにあまる涙を拂ひ。牛詞「何をおかくし申ませふ。過し保元の亂より。信頼殿のすゝめによつて是非なく一味を新院方。待賢門の軍破れ。身は尾張路にさまよふてウ申つひにはかなく世を去り給ふ義朝が妾常磐。詞「伴ひ連れしは今若乙若。これに抱きし牛若も。みなこれ君の筐ゆる。どうぞ再び世に立つて。源氏の家を興さんと。思ふに任せぬ此身の因果。ウ」推量あれと計りにて。あとは涙にウレヒ袖スエしほる。九詞「我推量に違ぬ常磐殿。昔にかはる御

身の上。牛詞「腹心の家の子さへ見かへる人のすけなきに。いたはり深き主の言葉。如何なる人と色尋ねれば。九詞「某ことは平家の御内彌平兵衛宗清と」其名を聞いて驚くを。こなたは見てとり押し止め。九詞「ア、イヤたとへ平家の御内にせよ今は浮世をわびし身で御身を害する事ござらう。御心やすく思召されよ」世にもたのもしきオトシその風情。ノル中折しもハシル一間騒がしくこは何事とうかゞふ所に。鶴懸申「義朝の小せがれうせおるふ。幼き二人をわしづかみ出で来る瀬尾に。ウレヒ娘はすがつて。九詞「これはしたり瀬尾様。まあく待て下さりませ。鶴詞「エ、いらざる女ろうめそのこのけと」行かんとするを宗清押し止め。九詞「りやうじめされな。これなる女は大和路へ下るもの。雪にこゝえて難儀を見兼ね。宿せしは我寸志。牛詞「あるじの仰せらるゝ通り旅のもの。ウギン」ゆるしてたべとわびけるを瀬尾はなをも聲振立て。鶴詞「がきが衣服の模様といひ。こかけで様子残らず聞いたうぬら二人も今若。乙若。サアきりく」とほざきおれ「夫とさしづにあらしこども」幼き二人を引するを。母はあるにもあらぬ思ひ。九詞「瀬

屋殿まあ待たれよ。鶴詞「とめるはやつぱりかばふのか。九詞「イヤかばいは致さぬ尤ながら。窮鳥懐へ入る時は。獵師もこれをとらずの本文。鶴詞「じやと申して助るは。扱は源氏へ二心か。九詞「源氏へ對して聊かも。心をはこばぬ身の潔白。清盛公へ一つの忠義を。立るしるしをお目にかけてふ。ハテ何をがな申打あなじ。コハルウ」始終を胸に宗清が地庭に下り立ちあなたなる。長若木をそれとさし色しめし。九詞「これなる若木は閑居のいとま。養ひそだてし梅櫻。あるが中にもこの梅は。花の兄にて咲そむるは。取りも直さず今若君。残る二木は御連枝。まだいとけなき乙若牛若。牛詞「心ありけな宗清殿。三人の和子にたとへし若木。鶴詞「イヤ植木よせてがきの命のせとぎは延す二心か。九詞「イヤ切るは若君三人を。牛詞「どふでも和子の命。お命を。鶴詞「いよく御へんが。九詞「イヤ和子にたとへし。九詞「この若木。鶴詞「なんと。ウタヒガカリ」切るともよしや惜しからじと「雪打拂ひ見れば面白や」いかにせん。二上り「まづ冬木よりウ」さきそむる合上ル窓の梅の北面は雪。ほうじて寒きにも。ナナル合ウ」櫻を見れば春毎に花少し合おそ

けれど合此木やわぶると。育てつるその。家櫻。いかにせん。合「扱松はさしもノルけに。枝をため葉をすかし下ルかかりあれと。植ハツム置しウ」その甲斐今はあらしふく。ハ」あらしに木の葉ノルあらしこども。左右へ一度に雪つづて。九詞「松はもとより常磐木の。常磐御前の操の枝」軍扇もつてはつしときり合フ。手早く松が枝さし出せば。牛詞「そりや操を破つて清盛公へ。九詞「いかにも。ヒロヒ」返事もなんと夕暮や。ギンはや入相の鐘の下スエ。聲。九詞「折しもひびく入相は祇園精舎の鐘のこる沙羅雙樹の花の色花さく春を待ちめされよ」しめす詞にがむしやの瀬尾ハ」抜放したる氷の刃合峯のふいきにてりさそふ。光は夜半の月しろと。見まがふうちに瀬尾が肩先。申ハシル。血しほのけがれにからくれなる合あたりかややく光明の。内にありあり黄金の蹴形。牛詞「ヤ、コリヤ御先祖經基公より源家へ傳はる驪龍の蹴形。九詞「源氏の血筋の公達へ此場の引出。牛詞「かたじけないカ、リ」いざ御供と宗清が。言葉に松の雪とけて。つい濡れまさる小夜衣たどる。夢路ぞ。三重浮世なる。

五五

古きはやりと御ひみきの眞似三柝姿八景
ア、つがもないお進めに

節季候

富本豊前太夫直傳

ウ「あみ笠の。合丹前姿ならずして。ハル地紙衣出たちで合雪
ぞらスカスのウ一日一日を。節季候や四十郎出二上り」さつさ
ざれやノルせきぞろイロそふだぞ合サ毎年まいとし。こなた
のおいへ合とびこめはねこめノルウタヒお祝ひ申せばなんほ
か目出たい 詞ノルなんほかめでたい 合「目出度い春を合松
かざり。ナヲル」一夜あくればにつこりと。中ギン笑ふおかど
へ合福來るノルイロ大黒舞を見さいな合ノル大黒と 拍子いふ詞
人は。ノルフシ一にいろあるこつちの太夫合ウわたしや死ん
でもお前より。いとし入ものが合あろかいな合ノル「海上
はるかに見渡せば中七福神の下たかノルら船合ノル色「イヤ
タイと奴がこゑも色ノル のどやかにフシ 初音またるうぐ
ひすの。おひさしぶりと且那衆の合軒場にたつた一文を。
あてに身すぎもウ 四つ竹の二上りウ「ひがし上總のるすみ
の郡合村の古名さへ金おき村よ合正田源兵衛が總入領息子
合角力取にて白入藤源太合ウノル親の源兵衛が 色はてられ
しのち五十五石の田ばた屋敷合ウノル角力仲間にも色ノル皆入

槌の夫さへなくて小夜衣合カンぬれる袂や袖の露獨りこが
れてくりかへす打つに碓の合音づれも合絶えて梢の松風
は合うき妻琴の音にたちて夜ごとしらべる合ゆかしさに
あだな浮名も調布や合二上り「てる月の浪にたゞよふ玉川
に「ほしてさらしてさらす白布合「立浪がくく瀬々の網代
木さへられて流るゝ水をせきとめよくく合「馴し手わざ
の賤の女はくくいざや歸らん賤の戸へ ナヲル「實に面白き
陸奥の野田の苦屋の波枕ちどりは歌の友なれやウツヒ「筆
のすさみを家づとに残す言葉は富本の榮え久しき里の長
目出度くこそは聞えけれ。

五七

殺生石十三怪

富本豊前太夫直傳

○鳥羽繪

ウ「春まだ寒き合中花に風引。フシ上コエ火の用心さつしやり
ませう合「どつこい來たくくしめたぞくく合よくも這入
つた中ウ此ますわなにウノルおさへ付けたる金剛力合長地カ、
リよも樊噲も我うで骨に。まけはするともかちやせまい
合中ノル「おのれ鼠のちうツばら合ないてかけふで合其手じ
やゆかぬ色で持たる女房よりわれにか、つてまつばだか

れあけて今は心も一寸先は合ウノル やみも月夜もヒロヒノルア
タウおとこだて。合ナヲル「やつとこせいだせおかぐらも合し
いたノルけさんかんびやうさん合ノルこぼりごんにやく山
椒のことつびきくくくつとつびきび長ハシル お笑草の大騒
ぎ中ノル富の落ちたる中風情なり。

五六

草枕露の玉歌和(玉川)

江戸ガ、リ「とりが鳴く東からけの草枕ウツヒ急がぬ旅も敷
島のく道をとどりて六玉川「筆につゞりて書残す景色
は歌の徳ならむ 合「足曳の合山ふみわけてはるくくと霞
棚びく遠近の詠はあかぬ七重八重花の柵かけそへて色に
は井出の山吹に合蛙の歌の風情あり合「かゝる名所に紀の
國の合高野の奥の流れをば汲やしつらん旅人のア、忘れ
ても合「二上り野路はゆかりの色ふかく合中カン錦の萩の下
葉までもれてぞおける白露に合月はやどりて夜もすがら
戀しき人は鈴蟲の合ふり拾られて機織の合夜寒を詫る鬨
の戸に合つゞれさせてふ蟋蟀合たれを松蟲合こがれてすだ
く我も思ひにたへかねて合ナヲル「いとゞ心のやるせ
なやせまるりん氣のつの國や合中カンとけてしつほりあひ

●「ハアくノルハツクシヤミ合▲「け上げてくれんとつ
つ立てヲットにけうでうまくはやらぬ。すりこ木とつて
これ見おれ此わざ物で一打と又立つ足は合ちんくちん
がらこ中「いろりへくばるむかふすねアツ、アツ、合中
物は言はれずッ肩でいきすりこ木に羽が生えて合とんで
行く▲合上ノル「ア、ラふしぎや今迄は只あんどと思ひ
しに合長地ウどういふひやうりのひやうたん畑の守人が合
はなたばはなせその矢先中ギン箒おつとりイザくくく。
鴨居まで笑ふどぶ鼠合▲「ちよつとさはつて襟元合にくつ
付くびつくり振返りクドキ「モシ。そのやうに。合かんしや
くのもととはいへばわたしから合▲中ギン「ほんに思へば
初子の夜。合ウ男ぶりなら。はりごしに合中じつと見かは
す。ウ顔とかほ猫ふす屋根もいとやせぬ 合カン「壁の破れ
のカハル通路もそつとはつたる夜着のすそ合中あだほれら
いしじや中ないかいな色ノル「鳥羽繪はもつたしゆる箒。
にぐる鼠をおつかけて跡を慕ふてかけり行く。

○大津畫

ウツガ、リ「かねに恨と合ウうたふをきけば。夜べの茶めしの

中講ナガス仲間合下ほれて抱いて寐りや合ギン鬼でもなんの
 そのウ彌陀もひかりの合かね次第中ノル」なぜにやりての。
 そら笑ひなもうだく／＼なむあみだ合▲ウツ、キ「色と慾との
 其おひわけに合長地たれに。大津のはてもなき合まつ戀あ
 ふ戀。申しのぶ戀なもふだ合く／＼なむあみだ▼▲ウツノル」雨の
 夕暮雪の朝。ウひがな一日中立ちあかすふぢノルの娘の友
 あそびおやまけいこの合手を出しながら▲ギンノルすかぬな
 りじやの合イロ目がひかるのと申いふてウさましてあだく
 ちに。●上ルカン だいてだかれてふところ一夜のたけの
 したひもと。思へばもゆる我思ひ合ア、まゝならぬうき
 世のなかじや二上リノル」はたご町のナ。はたごまちのエ
 ャ中の本ぢんの。おたけ女郎しゆば色盛り合いつそ手品
 でまねこうかチャ／＼く。たゞさへ。腹がこれじやもの
 おれこんだらば。氣にもなる合ウノルかねがナア鳴るかよ
 ナアエしゆもくがなるかエ合ノルかねとナアしゆもくのナ
 アあいがるナアエハアわけもなやナナル長地「三町先だ
 ぞ本陣はイヤシテノルこいまかしよと夕あらしかさをか
 づいで合うかれ行く。

五八 奈 須 野

次第「泉松桂の枝になきつれ。外記亂菊の花にかくる、野狐
 のふしど萩吹きおくる夜風にと物すこく更け渡る二上リ
 「野邊の狐火思ひにもゆるもゆる思ひもしら露の消えし
 玉藻が立姿「風に亂る、絲萩の花こきたれし白妙や 翠唄
 「紅深く月影に合うつし心や仇事の「早くもかはる飛鳥
 川あした面なおもぶせにかざす扇も隠れ笠。都を餘所
 に見なしつ、秋風ぞふく陸奥の關の白河知らざりき奈須
 野の原に世をぞへぬ「抑我こそは天竺に班足太子の司の
 神唐土にては幽王の側女とめでてかしづかれ扱て日の本
 へ渡りしは七十四代におはします鳥羽の帝に宮仕へトドキ
 「夜ごと君が枕づく聞のひまさへつれなしな明るるま
 おしき鴛鴦のかさねぶすまの明け暮れに「洩れぬ情もい
 つしかに秋風立し枯蘆のねにこそなめ我ながら憂の世
 の中やかはらじとカン「千歳をかけて契りつるついの寄る
 瀬も今更に流れて早き瀧河のわれてのちこそ果敢なけれ
 「過し雲井の御遊に司つらねし宮人の聲々すみてさし昇
 る。月待つ闇にあらはし、鼓ウツ」ノフ淺ましき我こそは

三千年歴にし野狐のかたちを變へて今爰に「あらぶる神
 のかしこくも祈たへぬはけしきに合俄に荒る、眼のあ
 たり手にもとられぬおそろしの雲をけたて、庭の面にき
 らめきわたる稻妻の光りをはなちて失せにしがウツと「遂
 に矢先にはかなくもかゝる此身ぞうらめしき「殺生石と
 いでや世に名のみしるくぞ下野の奈須野の原にふりみだ
 す時雨に匂ふ紅の木の葉をおろす小夜風にはらひし露の
 玉藻の前消にし跡をや残すらむ。

五九 祝 言 御代 榮 益 穂 富 種 (豊の前)

中「豊前長地豊後とはゆかりある地豊葦原やとみくナガサ
 の中カン五風十雨の時を得てめぐみぞしるき君がヌエ御代合
 ウなみも合しづかによつの海よつの民の戸地たかき家に。
 長地 にぎはふみことかしこくもこのめる文の梅が香にか
 つ色見せてものふの。ウ智仁のおしへとこしへに。い
 さみたゆまぬまつギンヌエりごと合。ハル地あふぐも合たかし
 位やま。長地やまことのはいにしへも合上ルカン雲井にき
 こへあけまきやどんどとなるは瀧の水。苗代水にたねか
 して。ウノルおゝんたからの合千町田にいとゞのどけきは

る日影ギン千代のかけそふ殿づくり中三つばハネハズミよつ
 ばに合さきくさの。カ、リたくみのわざもしな多き。ウ中
 にうりかふ合いちの聲合「ナツタ」こがねの杵にしるがねの
 合ギンはかりしられぬするの代に。とゞむるあともおほけ
 なや合「下リ」夏の鶯合ウわか竹につたなきながら合ふしノル
 こめて合ウつたへしまゝ入の合家の風。花も合ウノルみださ
 じ合ウ月は入なほながれにかけもたえやらぬ合長地くすりの
 水ときくのその合ナナル」めで、こ入てふのアレ合かはゆ
 らし合ウ二つつれたは女夫じやものを鶯がねたむか冬川
 に合中カン「こほらぬなさけとけてあふ合いつのちぎりぞ
 おもひ羽はカン「かはらぬ色のいつまでもひよくとやらの
 さゝめごと長地「枝をつらねんむつごと神の結びし合二
 世三世合縁のいとしさをだまきのくりかへしたるギンまささ
 なごと合二上リ「嬉しよすがの合あさゆふに櫛と鏡は合どふ
 した中じや合ウ千筋百筋こまくらそへてウ共に白髪しらがの松の
 雪色さへ深き合操じやへオ、さうじやかさく、合二上リウ
 「思ふ殿御に合相生の中女松男松は合どふした中じや合ウ
 千代のかすそふ小松のみどりウときはの友とならのはの

いろさへふかき合ッながめじやへ合オ、そふじやかさく
ウ「それも久しき歌の名所。ウタヒ」けに住吉や。ナナル高砂
の合ッ尾上おしに鶴の合千代八千代。汀に龜の萬代も。ノルかた
りつきせぬ筆のあや。ことぶきながく御代やすくおさま
る國こそめでたけれ。

六〇 家櫻三番叟

(一名家櫻幾齡三番叟)

「とうく／＼たらしらたりらたりあがりら／＼りどう」と
ころ千代までおはしませ我らも千秋さむらはう地鶴と龜
との齡にて幸ひ心にまかせたり「なるは瀧の水／＼日は
てるともたへずとうたりありうどう」凡そ千年の鶴は萬
歳樂とうとふたり又萬代の池の龜は甲に三曲をいたゝい
たり瀧の水れい／＼と落ちて夜の月あざやかにうかんだ
り「渚のいさ／＼ととしてあしたの日の色をろふす
天下泰平國土安穩今日の御祈禱なり千秋萬歳のよろこび
の舞なれば一トさし舞はう」萬歳樂ばんせいらく／＼「お
ふさへおふさへ喜びありや我悦びを此所より外へはやら
じと思ふ今日ぞめでたうさむらうよ」吾慶わづらの太夫殿に申

香の合長地おもひざしやらなざしやらなじみかさねて根引
のまつのみかし／＼のユリナガシかたりぐさ。地しよてにあ
ふ夜はいろはのつてよ合ッかなであかせばきみのほか合か
はらぬまつと思ひまするらせ候／＼と。ウいかなせかい
もそりやたのしみて合主あしは尾上へ柴かりにわしや洗濯に
こひの濱。合ッはまる心に誠が見えていつもかはらぬい
もせ中 二上り「子だから船も名にしおふ合 福神丸に帆をあ
けて合ッがねの入花や白銀の合雪おりそへてみつぎもの
合にまの里人むれきつ、やつさ／＼やつしつし／＼と櫓
拍子のナナルカリおもむろに吹くざんざんやクリ上ごりやう
の松の色かへぬ君が御代こそ久しけれ。

し度き事の候「何事にて候ぞ五月に賤の女が笠の端をつ
らね早苗おつとつて打上けてうたふたはおもしろふこそ
候へ「けに／＼おもしろきものにて候さらば太夫殿にう
たふてきかせ申さふ」これのお庭に池ほれば水もわき候
「黄金もわき候池の汀に寶船がつくとのともべには「惠
比壽大黒」中は毘沙門「吉祥天女辨財天」琵琶も四すじ
に「琴の音も鞆鼓笙ひちりきの拍子をそろへてろかいの
音がざはざは／＼神風追風吹きたて／＼惡魔を拂つて御
壽命ながく御子孫繁昌國も豊かに千秋萬歳の御よろこび
の治まる御代こそ目出たけれ。

六一 高砂女夫

富本豊前太夫直傳

ウタヒ高砂の。上まつのはるかぜふきくれてウ尾上のかね
やまだほかのかねにきぬ／＼おしみてし。ハルこぞのね
まきのきぬくばり。長地かほりゆかしくあけそめて。カン
深い浅いの色みどり女夫のカハリオトシ中ぞたのしけれ。中
オンそもこのゆかりのはじめといつば津の國にかくれな
き。ウタ 高砂さんといふ客衆いきのまつばらいきはりの
わけとはづみに居續けも。合すみよしなればこそその

昭和四年四月二十日 印刷
昭和四年四月二十五日 發行

(非賣品)

日本歌謠集成



著作者	高野辰之
發行者	東京市外代々木中山谷一六七 神田豐穗
印刷者	東京市麴町區內山下町一ノ一 關根慶寬 東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二

印刷所
早稻田印刷株式會社

發行所

東京市麴町區內山下町一ノ一
振替東京二四八六一

春秋社

電話銀座五六五二・五六五三



